# BXjscls パッケージ (BXJS 文書クラス集) ソースコード説明書

# 八登崇之(Takayuki YATO; aka. "ZR" v1.9i [2019/11/24]

この文書はソースコード説明書です。一般の文書作成者向けの解説については、ユーザマニュアル bxjscls-manual.pdf を参照してください。

## 目次

1	はじめに	3
2	オプション	10
3	和文フォントの変更	38
4	フォントサイズ	39
5 5.1	<b>レイアウト</b> ページレイアウト	44 45
6	改ページ(日本語 T <sub>E</sub> X 開発コミュニティ版のみ)	59
7	ページスタイル	61
8 8.1 8.2 8.3 8.4 8.5 8.6	文書のマークアップ 表題 章・節 リスト環境 パラメータの設定 フロート キャプション	64 64 69 82 89 90
Q	フォントコマンド	03

10 10.1 10.2 10.3 10.4	相互参照         目次の類          参考文献          索引          脚注	95 95 101 103 104
11	段落の頭へのグルー挿入禁止	106
12	いろいろなロゴ	110
13	amsmath との衝突の回避	111
14	初期設定	111
付録 A	和文ドライバの仕様 圏	116
付録 B B.1 B.2 B.3 B.4 B.5	和文ドライバ: minimal 密 補助マクロ	117 117 119 124 124 125
付録 C C.1 C.2 C.3 C.4 C.5	和文ドライバ:standard 圏 共通処理 (1)	128 128 136 139 141 143
付録 D D.1 D.2 D.3 D.4	和文ドライバ: modern 圏         フォント設定	148 148 149 149
付録 E E.1 E.2 E.3 E.4 E.5	和文ドライバ:pandoc 圏 dupload システム	149 150 151 153 153 154

E.6	全角空白文字	154
E.7	完了	155
付録 F	補助パッケージー覧 轡	155
付録 G	補助パッケージ:bxjscompat 圏	155
G.1	準備	155
G.2	X <sub>H</sub> T <sub>E</sub> X 部分	156
G.3	LuaT <sub>E</sub> X 部分	157
G.4	完了	158
付録 H	補助パッケージ:bxjscjkcat ⑧	158
H.1	準備	158
H.2	和文カテゴリコードの設定	159
H.3	ギリシャ・キリル文字の扱い	160
H.4	初期設定	167
H.5	完了	167
付録 I	補助パッケージ:bxjspandoc 鬱	167
I.1	準備	167
I.2	パッケージオプション	168
I.3	パッケージ読込の阻止	168
I.4	fixltx2e パッケージ	169
I.5	cmap パッケージ	169
I.6	microtype パッケージ	169
I.7	Unicode 文字変換対策	169
I.8	PandoLa モジュール	170
I.9	完了	171

### 1 はじめに

この文書は「BXJSドキュメントクラス」の DocStrip 形式のソースである。インストール時のモジュール指定は以下のようである。

```
〈article〉 bxjsarticle.cls 短いレポート (章なし)
```

⟨report⟩ bxjsreport.cls 長いレポート (章あり)

 $\langle book \rangle$  bxjsbook.cls 書籍用

 $\langle slide \rangle$  bxjsslide.cls スライド用

本ドキュメントクラスは奥村晴彦氏および日本語 TeX 開発コミュニティによる 「pIATEX  $2\varepsilon$  新ドキュメントクラス」に改変を加えたものである。本ドキュメントクラス に関する説明は全てこの形式の枠の中に記す。枠の外にあるものは原版著者による原版に対

これは IATrX3 Project の classes.dtx と株式会社アスキーの jclasses.dtx に基づい てもともと奥村晴彦により作成されたものです。現在は日本語 TFX 開発コミュニティによ り GitHub で管理されています。

https://github.com/texjporg/jsclasses

[2002-12-19] いろいろなものに収録していただく際にライセンスを明確にする必要が生じ てきました。アスキーのものが最近は modified BSD ライセンスになっていますので、私の ものもそれに準じて modified BSD とすることにします。

[2016-07-13] 日本語 TeX 開発コミュニティによる管理に移行しました。

[2009-02-22] 田中琢爾氏による upIATFX 対応パッチを取り込みました。

ここでは次のドキュメントクラス (スタイルファイル) を作ります。

[2017-02-13] forum:2121 の議論を機に、jsreport クラスを新設しました。従来のjsbook の report オプションと比べると、abstract 環境の使い方および挙動がアスキーの jreport に近づきました。

⟨article⟩ jsarticle.cls 論文・レポート用

⟨book⟩ jsbook.cls 書籍用

レポート用 ⟨report⟩ jsreport.cls

(jspf) jspf.cls 某学会誌用

(kiyou) kiyou.cls 某紀要用

以下では実際のコードに即して説明します。

1 %<\*cls>

2 %% このファイルは日本語文字を含みます.

\bxjs@clsname 文書クラスの名前です。エラーメッセージ表示などで使われます。

- 3 %<article>\def\bxjs@clsname{bxjsarticle}
- 4 % <book > \def \bx js@clsname {bx jsbook}
- 5 %<report>\def\bxjs@clsname{bxjsreport}
- 6 %<slide>\def\bxjs@clsname{bxjsslide}

\ifjsc@needsp@tch [2016-08-22] 従来 jsclasses では、plfTrX やlfTrX の不都合な点に対して、クラスファ イル内で独自に対策を施していました。しかし、2016年以降、コミュニティ版 pIATeX が次 第に対策コードをカーネル内に取り込むようになりました。そこで、新しい pIATpX カーネ ルと衝突しないように、日付が古い場合だけパッチをあてる場合があります。この処理に使 用するフラグを定義します。

- 7 \newif\ifjsc@needsp@tch
- 8 \jsc@needsp@tchfalse

#### ■BXJS クラス特有の設定 灣

長さ値の指定で式を利用可能にするため calc を読み込む。

9 \RequirePackage{calc}

クラスオプションで key-value 形式を使用するため keyval を読み込む。

10 \RequirePackage{keyval}

クラスの本体ではこの他に geometry パッケージが読み込まれる。

TODO: 依存パッケージの情報。

互換性のための補助パッケージを読み込む。

- 11 \IfFileExists{bxjscompat.sty}{%
- 12 \let\jsAtEndOfClass\@gobble
- 13 \RequirePackage{bxjscompat}%
- 14 }{}

\jsDocClass [トークン] 文書クラスの種別。以下の定値トークンの何れかと同等:\jsArticle=bxjsarticle,\jsBook=bxjsbook,\jsReport=bxjsreport,\jsSlide=bxjsslide。

- 15 \let\jsArticle=a
- 16 \let\jsBook=b
- 17 \let\jsReport=r
- 18 \let\jsSlide=s
- 19 %<article>\let\jsDocClass\jsArticle
- 20 % <book > \let \ jsDocClass \ jsBook
- 21 %<report>\let\jsDocClass\jsReport
- 22 % <slide > \let \ js Doc Class \ js Slide

\jsEngine [暗黙文字トークン] エンジン(TEX の種類)の種別: j = pTEX 系、x = XTEX、p = pdfTEX(含 DVI モード)、1 = LuaTEX、J = NTT jTEX、0 = Omega 系、n =以上の何れでもない。

- 23 \let\jsEngine=n
- 24 \def\bxjs@test@engine#1#2{%
- 25 \edef\bxjs@tmpa{\string#1}%
- 26 \edef\bxjs@tmpb{\meaning#1}%
- 27 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb #2\fi}
- $28 \test@engine\kanjiskip{\let\jsEngine=j}$
- 29 \bxjs@test@engine\jintercharskip{\let\jsEngine=J}
- 30 \bxjs@test@engine\Omegaversion{\let\jsEngine=0}
- 31 \bxjs@test@engine\XeTeXversion{\let\jsEngine=x}
- 32 \bxjs@test@engine\pdftexversion{\let\jsEngine=p}
- 33 \bxjs@test@engine\luatexversion{\let\jsEngine=1}

\ifjsWithupTeX 〔スイッチ〕エンジンが(内部漢字コードが Unicode の)upTEX であるか。

- $34 \neq 34$
- 35 \ifx\ucs\@undefined\else \ifnum\ucs"3000="3000
- 36 \jsWithupTeXtrue
- 37 \fi\fi
- 38 \let\if@jsc@uplatex\ifjsWithupTeX

\ifjsWithpTeXng [スイッチ] エンジンが pTpX-ng であるか。

```
39 \newif\ifjsWithpTeXng
```

40 \bxjs@test@engine\ngbanner{\jsWithpTeXngtrue}

\ifjsWitheTeX 〔スイッチ〕エンジンが $\varepsilon$ -T<sub>F</sub>X 拡張をもつか。

- 41 \newif\ifjsWitheTeX
- $42 \verb|\bxjs@test@engine\eTeXversion{\jsWitheTeXtrue}|$

非サポートのエンジンの場合は強制終了させる。

- ※NTT jTFX と Omega 系。
- 43 \let\bxjs@tmpa\relax
- 44 \ifx J\jsEngine \def\bxjs@tmpa{NTT-jTeX}\fi
- 45 \ifx 0 \jsEngine \def\bxjs0tmpa0 \fi
- 46 \ifx\bxjs@tmpa\relax \expandafter\@gobble
- $47 \ensuremath{\setminus} \text{else}$
- 48 \ClassError\bxjs@clsname
- {The engine in use (\bxjs@tmpa) is not supported}
- {It's a fatal error. I'll quit right now.}
- 51 \expandafter\@firstofone
- 52 \fi{\endinput\@@end}

LuaT<sub>F</sub>X の場合、本クラス用の Lua モジュールを用意する。

- 53 \ifx 1\jsEngine
- 54 \directlua{ bxjs = {} }
- 55 \fi

\bxjs@protected  $\varepsilon$ -TEX 拡張が有効な場合にのみ \protected の効果をもつ。

- 56 \ifjsWitheTeX \let\bxjs@protected\protected
- 57 \else \let\bxjs@protected\@empty
- 58\fi

\bxjs@robust@def 無引数の頑強な命令を定義する。

- 59 \ifjsWitheTeX
- 60 \def\bxjs@robust@def{\protected\def}
- 61 \else
- 62 \def\bxjs@robust@def{\DeclareRobustCommand\*}
- 63 \fi

\ifjsInPdfMode 〔スイッチ〕pdfTFX / LuaTFX が PDF モードで動作しているか。

- ※ LuaT<sub>F</sub>X 0.8x 版でのプリミティブ名変更に対応。
- 64 \newif\ifjsInPdfMode
- 65 \@nameuse{ImposeOldLuaTeXBehavior}
- 66 \let\bxjs@tmpa\PackageWarningNoLine
- $67 \ \text{PackageWarningNoLine} \ \text{Suppress warning}$
- 68 \RequirePackage{ifpdf}
- 69 \let\PackageWarningNoLine\bxjs@tmpa
- 70 \@nameuse{RevokeOldLuaTeXBehavior}
- 71 \let\ifjsInPdfMode\ifpdf

\ifbxjs@TUenc 〔スイッチ〕 LATFX の既定のフォントエンコーディングが TU であるか。

%2017 年 1 月以降の IATeX カーネルにおいて「Unicode を表す IATeX 公式のフォントエンコーディング」である "TU" が導入され、これ以降の IATeX を XeTeX または LuaTeX で動かしている場合は、既定のエンコーディングが TU になる。それ以外の場合は、既定のエンコーディングは OT1 である。

72 \newif\ifbxjs@TUenc

73 \def\bxjs@tmpa{TU}\edef\bxjs@tmpb{\f@encoding}

74 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb

75 \bxjs@TUenctrue

76 \fi

\bxjs@cond \bxjs@cond\ifXXX……\fi{〈真〉}{〈偽〉}

TFX の if-文 (\if XXX……〈真\\else(偽\\fi) を末尾呼出形式に変換するためのマクロ。

77 \@gobbletwo\if\if \def\bxjs@cond#1\fi{%

78 #1\expandafter\@firstoftwo

 $79 \quad \verb|\else| expandafter \verb|\@secondoftwo|$ 

80 \fi}

\bxjs@cslet \bxjs@cslet{ $\langle$  名前 1 $\rangle$ }\制御綴:

81 \def\bxjs@cslet#1{%

82 \expandafter\let\csname#1\endcsname}

\bxjs@csletcs \bxjs@csletcs{ $\langle$  名前 1 $\rangle$ }{ $\langle$  名前 2 $\rangle$ }:

83 \def\bxjs@csletcs#1#2{%

84 \expandafter\let\csname#1\expandafter\endcsname\csname#2\endcsname}

\bxjs@catopt \bxjs@catopt{ $\langle$ 文字列  $1\rangle$ }{ $\langle$ 文字列  $2\rangle$ } : 2つの文字列を ,で繋いだ文字列。ただし片方が空の場合は ,を入れない。完全展開可能。

85 \def\bxjs@catopt#1#2{%

86 #1\if\relax#1\relax\else\if\relax#2\relax\else,\fi\fi#2}

\bxjs@ifplus \@ifstar の + 版。

 $87 \ensuremath{\c wo{\#1}}}$ 

\bxjs@gset@tempcnta calc の整数式を用いて \@tempcnta の値を設定する。

 $88 \verb| let \c@bxjs@tempcnta \end{magnetic}$ 

89 \def\bxjs@gset@tempcnta{\setcounter{bxjs@tempcnta}}

\jsSetQHLength \jsSetQHLength\CS{〈長さ式〉}: \setlength の変種で、通常の calc の長さ式の代わりに、「Q/H/trueQ/trueH/zw/zh の単位付きの実数」が記述できる(この場合は式は使えない)。

90 \def\jsSetQHLength#1#2{%

91 \begingroup

92 \bxjs@parse@qh{#2}%

93 \ifx\bxjs@tmpb\relax

94 \setlength\@tempdima{#2}%

95 \xdef\bxjs@g@tmpa{\the\@tempdima}%

96 \else \global\let\bxjs@g@tmpa\bxjs@tmpb

```
\fi
                       97
                       98
                           \endgroup
                           #1=\bxjs@g@tmpa\relax}
                      #1 が Q/H/trueQ/trueH/zw/zh で終わる場合、単位用の寸法値マクロ \bx js@unit@XXX が
         \bxjs@parse@qh
                       定義済なら、\bxjs@tmpbに#1に等しい寸法の表現を返し、そうでないならエラーを出す。
                       それ以外では、\bxjs@tmpb は \relax になる。
                       ※ (u)pIATFX の場合はこれらの和文単位はエンジンでサポートされる。しかし和文フォント
                       の設定が完了するまでは zw/zh の値は正しくない。
                       100 \if j\jsEngine \def\bxjs@parse@qh@units{zw,zh}
                       101 \else \def\bxjs@parse@qh@units{trueQ,trueH,Q,H,zw,zh}
                      102 \fi
                      103 \def\bxjs@parse@qh#1{%
                      104
                           \let\bxjs@tmpb\relax
                           \label{lem:condition} $$\0for\bxjs0tmpa:=\bxjs0parse0qh0units\do{\%}$
                      105
                             \ifx\bxjs@tmpb\relax
                      106
                              \edef\bxjs@next{{\bxjs@tmpa}{#1}}%
                      107
                              \expandafter\bxjs@parse@qh@a\csname bxjs@unit@\bxjs@tmpa\expandafter
                      108
                                  \endcsname\bxjs@next
                      109
                             \fi}}
                      110
                      111 \def\bxjs@parse@qh@a#1#2#3{%
                           \bxjs@next#3\\@nil#2\\@nil\\@nnil\}
                      113
                      114 \def\bxjs@parse@qh@b#1#2#3{%
                           \ifx\@nnil#2\@nnil\else
                      115
                      116
                             \f x#3\relax
                      117
                              \ClassError\bxjs@clsname
                               {You cannot use '\bxjs@tmpa' here}{\@ehc}%
                      118
                              \def\bxjs@tmpb{Opt}%
                      119
                      120
                              \@tempdimb#3\relax \@tempdimb#1\@tempdimb
                      121
                      122
                              \edef\bxjs@tmpb{\the\@tempdimb}%
                             \fi
                      123
                      124
                           \fi}
                       今の段階では Q/H だけが使用可能。
                           \bxjs@begin@document@hook BXJS クラス用の文書本体開始時フック。
                       126 \@onlypreamble\bxjs@begin@document@hook
                      127 \let\bxjs@begin@document@hook\@empty
                      128 \AtBeginDocument{\bxjs@begin@document@hook}
  \bxjs@post@option@hook \ProcessOptions 直後に実行されるフック。
                      129 \@onlypreamble\bxjs@post@option@hook
                      130 \let\bxjs@post@option@hook\@empty
```

\bxjs@pre@jadriver@hook 和文ドライバ読込直前に実行されるフック。

- 131 \@onlypreamble\bxjs@pre@jadriver@hook
- 132 \let\bxjs@pre@jadriver@hook\@empty

\jsAtEndOfClass このクラスの読込終了時に対するフック。(補助パッケージ中で用いられる。)

- 133 \def\jsAtEndOfClass{%
- $134 \qquad \texttt{\expandafter\g@addto@macro\csname\bxjs@clsname.cls-hook\endcsname)}$ 
  - 一時的な手続き用の制御綴。
- 135 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo
- 136 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo@a
- 137 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo@b
- 138 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo@c
- 139 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo@d

LuaTFX の場合、原版のコード中のコントロールワード中に現れる日本語文字のカテゴリ コードを一時的に11に変更する。クラス読込終了時点で元に戻される。

※現在の Lual4TpX では、漢字のカテゴリコードは最初から 11 になっているので、この処 理は特段の意味を持たない。しかし、昔は12になっていて、この場合、日本語文字のコン トロールワードの命令を使用するには、カテゴリコードを11に変更する必要がある。

- 140 \if l\jsEngine
- 141 \def\bxjs@tmpdo#1{%
- \xdef\bxjs@pre@jadriver@hook{%
- 143 \bxjs@pre@jadriver@hook
- \catcode`#1=\the\catcode`#1\relax}% 144
- 145 \catcode`#1=11\relax}
- 146 \@tfor\bxjs@tmpa:=和西暦\do
- 147 {\expandafter\bxjs@tmpdo\bxjs@tmpa}
- 148 \fi

\jsInhibitGlue は \inhibitglue が定義されていればそれを実行し、未定義ならば何 もしない。

- 149 \bxjs@robust@def\jsInhibitGlue{%
- 150 \ifx\inhibitglue\@undefined\else \inhibitglue \fi}

万が一「2.09 互換モード」になっていた場合は、これ以上進むと危険なので強制終了さ せる。

- 151 \if@compatibility
- \ClassError\bxjs@clsname
- {Something went chaotic!\MessageBreak 153
- (How come '\string\documentstyle' is there?)\MessageBreak 154
- I cannot go a single step further...} 155
- {If the chant of '\string\documentstyle' was just a blunder of yours,\MessageBreak 156
- then there'll still be hope....} 157
- 158 \expandafter\@firstofone
- 159 \else \expandafter\@gobble
- 160 \fi{\typeout{Farewell!}\endinput\@@end}

## 2 オプション

これらのクラスは \documentclass{jsarticle} あるいは \documentclass[オプション]{jsarticle} のように呼び出します。

まず、オプションに関連するいくつかのコマンドやスイッチ(論理変数)を定義します。

\if@restonecol 段組のときに真になる論理変数です。

161 \newif\if@restonecol

\ifCtitlepage これを真にすると表題、概要を独立したページに出力します。

 $162 \neq 162$ 

\ifCopenright \chapter, \part を右ページ起こしにするかどうかです。横組の書籍では真が標準で、要するに片起こし、奇数ページ起こしになります。

163 %<book|report>\newif\if@openright

\ifCopenleft [2017-02-24] \chapter, \part を左ページ起こしにするかどうかです。

164 %<book|report>\newif\if@openleft

\if@mainmatter 真なら本文,偽なら前付け・後付けです。偽なら \chapter で章番号が出ません。

BXJS では report 系でも定義されることに注意。

\if@enablejfam 和文フォントを数式フォントとして登録するかどうかを示すスイッチです。

JS クラスと異なり、初期値は偽とする。

166 \newif\if@enablejfam \@enablejfamfalse

以下で各オプションを宣言します。

■用紙サイズ JIS や ISO の A0 判は面積  $1 \, \mathrm{m}^2$ ,縦横比  $1:\sqrt{2}$  の長方形の辺の長さを  $\mathrm{mm}$  単位に切り捨てたものです。これを基準として順に半截しては  $\mathrm{mm}$  単位に切り捨てたものが A1,A2,…です。

B 判は JIS と ISO で定義が異なります。JIS では B0 判の面積が  $1.5\,\mathrm{m}^2$  ですが,ISO では B1 判の辺の長さが A0 判と A1 判の辺の長さの幾何平均です。したがって ISO の B0 判は  $1000\,\mathrm{mm} \times 1414\,\mathrm{mm}$  です。このため,IATEX  $2_\varepsilon$  の b5paper は  $250\,\mathrm{mm} \times 176\,\mathrm{mm}$  ですが,pIATEX  $2_\varepsilon$  の b5paper は  $257\,\mathrm{mm} \times 182\,\mathrm{mm}$  になっています。ここでは pIATEX  $2_\varepsilon$  にならって JIS に従いました。

デフォルトは a4paper です。

b5var (B5 変形,  $182\text{mm} \times 230\text{mm}$ ), a4var (A4 変形,  $210\text{mm} \times 283\text{mm}$ ) を追加しました。

BXJS クラスではページレイアウト設定に geometry パッケージを用いる。用紙サイズ設定は geometry に渡すオプションの指定と扱われる。

```
167 \@onlypreamble\bxjs@setpaper
168 \def\bxjs@setpaper#1{\def\bxjs@param@paper{#1}}
169 \DeclareOption{a3paper}{\bxjs@setpaper{a3paper}}
170 \DeclareOption{a4paper}{\bxjs@setpaper{a4paper}}
171 \DeclareOption{a5paper}{\bxjs@setpaper{a5paper}}
172 \DeclareOption{a6paper}{\bxjs@setpaper{a6paper}}
173 \DeclareOption{b4paper}{\bxjs@setpaper{{257truemm}{364truemm}}}
174 \DeclareOption{b5paper}{\bxjs@setpaper{{182truemm}}257truemm}}}
175 \DeclareOption{b6paper}{\bxjs@setpaper{{128truemm}}{182truemm}}}
176 \DeclareOption{a4j}{\bxjs@setpaper{a4paper}}
177 \DeclareOption{a5j}{\bxjs@setpaper{a5paper}}
178 \ensuremath{\texttt{DeclareOption}\{b4j\}{\texttt{bxjs@setpaper}\{257truemm\}\{364truemm\}\}}}
179 \DeclareOption{b5j}{\bxjs@setpaper{{182truemm}}257truemm}}}
180 \DeclareOption{a4var}{\bxjs@setpaper{{210truemm}}{283truemm}}}
181 \DeclareOption{b5var}{\bxjs@setpaper{{182truemm}}{230truemm}}}
※...var を Pandoc で使えるように後ろに paper をつけた形を用意する。
182 \DeclareOption{a4varpaper}{\bxjs@setpaper{{210truemm}{283truemm}}}
183 \verb|\DeclareOption{b5varpaper}{\bxjs@setpaper{\{182truemm\}\{230truemm\}\}}}
184 \DeclareOption{letterpaper}{\bxjs@setpaper{letterpaper}}
185 \DeclareOption{legalpaper}{\bxjs@setpaper{legalpaper}}
186 \DeclareOption{executivepaper}{\bxjs@setpaper{executivepaper}}
```

### ■横置き 用紙の縦と横の長さを入れ換えます。

- 187 \newif\if@landscape
- 188 \@landscapefalse
- 189 \DeclareOption{landscape}{\@landscapetrue}
- ■slide オプション slide を新設しました。

[2016-10-08] slide オプションは article 以外では使い物にならなかったので、簡単のため article のみで使えるオプションとしました。

190 \newif\if@slide

BXJSではスライド用のクラス bxjsslide を用意しているので、本来はこのスイッチは不要なはずである。しかし、JS クラスの一部のコードをそのまま使うために保持している。 ※この \if@slide という制御綴は、ユニークでないにも関わらず、衝突した場合に正常動作が保たれない、という問題を抱えている。

- 191 %<!slide>\@slidefalse
- 192 %<slide>\@slidetrue

■サイズオプション 10pt, 11pt, 12pt のほかに, 8pt, 9pt, 14pt, 17pt, 21pt, 25pt, 30pt, 36pt, 43pt を追加しました。これは等比数列になるように選んだものです(従来の 20pt も残しました)。\@ptsize の定義が変だったのでご迷惑をおかけしましたが、標準的 なドキュメントクラスと同様にポイント数から10を引いたものに直しました。

[2003-03-22] 14Q オプションを追加しました。

[2003-04-18] 12Q オプションを追加しました。

[2016-07-08] \mag を使わずに各種寸法をスケールさせるためのオプション nomag を新設 しました。usemag オプションの指定で従来通りの動作となります。デフォルトは usemag です。

[2016-07-24] オプティカルサイズを調整するために NFSS ヘパッチを当てるオプション nomag\* を新設しました。

**\Optsize** は 10pt, 11pt, 12pt が指定された時のみ従来と同じ値とし、それ以外は \jsUnusualPtSize (=-20) k  $\neq$   $\delta$ .

- 193 \newcommand{\@ptsize}{0}
- 194 \def\bxjs@param@basefontsize{10pt}
- 195 \def\jsUnusualPtSize{-20}

\bxjs@setbasefontsize 基底フォントサイズを実際に変更する。

- 196 \def\bxjs@setbasefontsize#1{%
- Q単位の長さ指定をサポートするため \jsSetQHLength を使う。
- ※クラスオプションのトークン列の中に展開可能なトークンがある場合、LATeX はクラス ファイルの読込の前にそれを展開しようとする。このため、この位置で \iQ をサポートする ことは原理的に不可能である。
- \jsSetQHLength\@tempdima{#1}% 197
- \edef\bxjs@param@basefontsize{\the\@tempdima}%
- 199 \ifdim\@tempdima=10pt \long\def\@ptsize{0}%
- \else\ifdim\@tempdima=10.95pt \long\def\@ptsize{1}% 200
- \else\ifdim\@tempdima=12pt \long\def\@ptsize{2}%
- 202 \else \long\edef\@ptsize{\jsUnusualPtSize}\fi\fi\fi}

\ifjsc@mag は「\mag を使うか」を表すスイッチ。

\ifjsc@mag@xreal は「NFSS にパッチを当てるか」を表すスイッチ。

- 203 \newif\ifjsc@mag
- 204 \newif\ifjsc@mag@xreal
- 205 %\let\jsc@magscale\@undefined
- 206 \DeclareOption{8pt}{\bxjs@setbasefontsize{8pt}}
- 207 \DeclareOption{9pt}{\bxjs@setbasefontsize{9pt}}
- 208 \DeclareOption{10pt}{\bxjs@setbasefontsize{10pt}}
- 209 \DeclareOption{11pt}{\bxjs@setbasefontsize{10.95pt}}
- 210 \DeclareOption{12pt}{\bxjs@setbasefontsize{12pt}}
- 211 \DeclareOption{14pt}{\bxjs@setbasefontsize{14.4pt}}
- 212 \DeclareOption{17pt}{\bxjs@setbasefontsize{17.28pt}}

```
213 \DeclareOption{20pt}{\bxjs@setbasefontsize{20pt}}
214 \DeclareOption{21pt}{\bxjs@setbasefontsize{20.74pt}}
215 \DeclareOption{25pt}{\bxjs@setbasefontsize{24.88pt}}
216 \DeclareOption{30pt}{\bxjs@setbasefontsize{29.86pt}}
217 \DeclareOption{36pt}{\bxjs@setbasefontsize{35.83pt}}
218 \DeclareOption{43pt}{\bxjs@setbasefontsize{43pt}}
219 \DeclareOption{12Q}{\bxjs@setjbasefontsize{3mm}}
220 \DeclareOption{14Q}{\bxjs@setjbasefontsize{3.5mm}}
221 \DeclareOption{10ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{10pt}}
222 \DeclareOption{10.5ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{10.5pt}}
223 \DeclareOption{11ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{11pt}}
224 \DeclareOption{12ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{12pt}}
   JS クラス互換の magstyle 設定オプション。
225 \DeclareOption{usemag}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@usemag}
226 \DeclareOption{nomag}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@nomag}
227 \DeclareOption{nomag*}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@xreal}
```

**■トンボオプション** トンボ (crop marks) を出力します。実際の処理は pIATEX  $2_{\varepsilon}$  本体 で行います (plcore.dtx 参照)。オプション tombow で日付付きのトンボ, オプション tombo で日付なしのトンボを出力します。これらはアスキー版のままです。カウンタ \hour, \minute は pIATEX  $2_{\varepsilon}$  本体で宣言されています。

取りあえず、 $pT_EX$  系の場合に限り、JS クラスのトンボ関連のコードをそのまま活かしておく。正常に動作する保証はない。

```
228 \if j\jsEngine
229 \hour\time \divide\hour by 60\relax
230 \@tempcnta\hour \multiply\@tempcnta 60\relax
231 \minute\time \advance\minute-\@tempcnta
232 \DeclareOption{tombow}{%
233
    \tombowtrue \tombowdatetrue
     \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
234
235
     \@bannertoken{%
        \jobname\space(\number\year-\two@digits\month-\two@digits\day
236
237
        \space\two@digits\hour:\two@digits\minute)}%
     \maketombowbox}
238
239 \DeclareOption{tombo}{\%}
    \tombowtrue \tombowdatefalse
     \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
241
242
     \maketombowbox}
243 \fi
```

■面付け オプション mentuke で幅ゼロのトンボを出力します。面付けに便利です。これ もアスキー版のままです。

244 \if j\jsEngine

- 245 \DeclareOption{mentuke}{%
- 246 \tombowtrue \tombowdatefalse
- 247 \setlength{\Qtombowwidth}{\zQ}%
- 248 \maketombowbox}
- 249 \fi
- ■両面、片面オプション twoside で奇数ページ・偶数ページのレイアウトが変わります。 [2003-04-29] vartwoside でどちらのページも傍注が右側になります。
- 250 \DeclareOption{oneside}{\@twosidefalse \@mparswitchfalse}
- $251 \ensuremath{\texttt{Noside}} {\texttt{Ctwosidetrue}} \ensuremath{\texttt{Cmparswitchtrue}}$
- 252 \DeclareOption{vartwoside}{\@twosidetrue \@mparswitchfalse}
- ■二段組 twocolumn で二段組になります。
- $253 \verb|\DeclareOption{onecolumn}{\dotwocolumnfalse}|$
- 254 \DeclareOption{twocolumn}{\@twocolumntrue}
- ■表題ページ titlepage で表題・概要を独立したページに出力します。
- 255 \DeclareOption{titlepage}{\@titlepagetrue}
- 256 \DeclareOption{notitlepage}{\@titlepagefalse}
- ■右左起こし 書籍では章は通常は奇数ページ起こしになりますが、横組ではこれを openright と表すことにしてあります。 openany で偶数ページからでも始まるようになります。

[2017-02-24] openright は横組では奇数ページ起こし、縦組では偶数ページ起こしを表します。ややこしいですが、これは LATEX の標準クラスが西欧の横組事情しか考慮せずに、奇数ページ起こしと右起こしを一緒にしてしまったせいです。縦組での奇数ページ起こしと横組での偶数ページ起こしも表現したいので、jsclasses では新たに openleft も追加しました。

- 257 % <book | report > \DeclareOption { openright } { \Qopenright true \Qopenleft false }
- $258 \ \% \verb|chook| report> \verb|DeclareOption{openleft}{\copenlefttrue\\\copenrightfalse}|$
- $259 \ \% \verb|\cor| report>\DeclareOption{openany}{\Copenrightfalse} \\$
- ■eqnarray 環境と数式の位置 森本さんのご教示にしたがって前に移動しました。
- - 260 \def\eqnarray{%
  - 261 \stepcounter{equation}%
  - 262 \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%
  - 263 \global\@eqnswtrue
  - 264 \m@th
  - 265 \global\@eqcnt\z@
  - 266 \tabskip\@centering
  - 267 \let\\\@eqncr
  - 268 \$\$\everycr{}\halign to\displaywidth\bgroup
  - 269 \hskip\@centering\$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}\$\@eqnsel

```
&\global\@eqcnt\@ne \hfil\displaystyle{{}##{}}\hfil
270
271
         &\global\@eqcnt\tw@ $\displaystyle{##}$\hfil\tabskip\@centering
272
         &\global\@eqcnt\thr@@ \hb@xt@\z@\bgroup\hss##\egroup
273
            \tabskip\z@skip
274
         \cr
  leqno で数式番号が左側になります。fleqn で数式が本文左端から一定距離のところに出
力されます。森本さんにしたがって訂正しました。
275 \DeclareOption{leqno}{\input{leqno.clo}}
276 \DeclareOption{fleqn}{\input{fleqn.clo}%}
277 % fleqn 用の eqnarray 環境の再定義
     \def\eqnarray{%
278
279
       \stepcounter{equation}%
       \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%
280
281
       \global\@eqnswtrue\m@th
       \global\@eqcnt\z@
       \tabskip\mathindent
283
284
       \left| \cdot \right| = \ensuremath{\mbox{Qeqncr}}
       \setlength\abovedisplayskip{\topsep}%
285
       \ifvmode
286
         \addtolength\abovedisplayskip{\partopsep}%
287
288
       \addtolength\abovedisplayskip{\parskip}%
289
290
       \setlength\belowdisplayskip{\abovedisplayskip}%
       \setlength\belowdisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
291
292
       \setlength\abovedisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
       $$\everycr{}\halign to\linewidth% $$
293
294
       \bgroup
         \hskip\@centering$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}$\@eqnsel
295
         &\global\@eqcnt\@ne \hfil\displaystyle{{}##{}}\hfil
296
297
         &\global\@eqcnt\tw@
           $\displaystyle{##}$\hfil \tabskip\@centering
298
299
         &\global\@eqcnt\thr@@ \hb@xt@\z@\bgroup\hss##\egroup
       \tabskip\z@skip\cr
300
       }}
301
■文献リスト 文献リストを open 形式(著者名や書名の後に改行が入る)で出力します。
 これは使われることはないのでコメントアウトしてあります。
302 % \DeclareOption{openbib}{%
303 %
       \AtEndOfPackage{%
304 %
        \renewcommand\@openbib@code{%
           \advance\leftmargin\bibindent
305 %
306 %
           \itemindent -\bibindent
307 %
           \listparindent \itemindent
308 %
           \parsep \z@}%
309 %
        \renewcommand\newblock{\par}}}
```

■数式フォントとして和文フォントを登録しないオプション 数式中では 16 通りのフォン トしか使えません。AMSFonts や mathptmx パッケージを使って数式フォントをたくさん 使うと "Too many math alphabets ..." というエラーが起こってしまいます。disablejfam オプションを付ければ、明朝・ゴシックを数式用フォントとして登録するのをやめますので、 数式用フォントが二つ節約できます。いずれにしても \textmc や \mbox や amsmath パッ ケージの \text を使えば数式中で和文フォントが使えますので,この新ドキュメントクラ スでは標準で和文フォントを数式用に登録しないことにしていたのですが、従来のドキュメ ントクラスの仕様に合わせることにしました。

\bxjs@enablejfam 〔暗黙文字トークン〕enablejfam オプションの状態:

310 %\let\bxjs@enablejfam\@undefined

enablejfam オプションの処理。

- 311 \def\bxjs@kv@enablejfam@true{\let\bxjs@enablejfam=t}
- 312 \def\bxjs@kv@enablejfam@false{\let\bxjs@enablejfam=f}
- 313 \def\bxjs@kv@enablejfam@default{\let\bxjs@enablejfam\@undefined}
- 314 \define@key{bxjs}{enablejfam}[true]{%
- 315 \bxjs@set@keyval{enablejfam}{#1}{}}

JS クラスとの互換のため disable jfam オプションを定義する。

316 \DeclareOption{disablejfam}{\let\bxjs@enablejfam=f}

※実際に何らかの設定を行うのは和文ドライバである。和文ドライバとエンジンの組合せに より、enablejfam が default である場合に「数式和文ファミリ」が有効と無効の選択は 異なるし、またそもそも有効と無効の一方しか選択できない場合もある。

■ドラフト draft で overfull box の起きた行末に 5pt の罫線を引きます。 [2016-07-13] \ifdraft を定義するのをやめました。

\ifjsDraft JS クラスは \ifdraft という公開名のスイッチを用いているが、これは ifdraft パッケー ジと衝突するので、代わりに \ifjsDraft の名前を用い、本文開始時に \ifdraft が未定 義の場合に限り、\ifjsDraft を \ifdraft にコピーする処理にする。

- ※ JS クラスの \ifdraft が廃止されたので、\ifdraft は 2.0 版で廃止を予定する。
- $317 \left| ifjsDraft \right|$
- 318 \@onlypreamble\bxjs@draft
- 319 \def\bxjs@draft#1{%
- \expandafter\let\expandafter\ifjsDraft\csname if#1\endcsname}
- 321 \DeclareOption{draft}{\bxjs@draft{true}\setlength\overfullrule{5pt}}
- 323 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
- \expandafter\ifx\csname ifdraft\endcsname\relax
- \expandafter\let\csname ifdraft\expandafter\endcsname 325
- 326 \csname ifjsDraft\endcsname

■和文フォントメトリックの選択 このクラスファイルでは、和文 TFM として東京書籍印 刷の小林肇さんの作られた JIS フォントメトリック (jis, jisg) を標準で使うことにしま すが、従来の min10、goth10 などを使いたいときは mingoth というオプションを指定しま す。また、winjis オプションで winjis メトリック(OTF パッケージと同じ psitau さん 作;ソースに書かれた Windows の機種依存文字が dvips, dvipdfmx などで出力出来るよう になる)が使えます。

[2018-02-04] winjis オプションはコッソリ削除しました。代替として、同等なものをパッ ケージ化 (winjis.sty) して、GitHub にはコッソリ置いておきます。

BXJS クラスではここは和文ドライバの管轄。

■papersize スペシャルの利用 dvips や dviout で用紙設定を自動化するにはオプション papersize を与えます。

BXJS クラスでは geometry パッケージがこの処理を行う。

\ifbxjs@papersize 〔スイッチ〕papersize スペシャルを出力するか。既定で有効であるが、nopapersize オプ ションで無効にできる。

- ※ JS クラスでは \ifpapersize という制御綴だが、これは採用しない。
- 328 \newif\ifbxjs@papersize
- 329 \bxjs@papersizetrue
- $330 \verb|\DeclareOption{nopapersize}{\bxjs@papersizefalse}|$
- 331 \DeclareOption{papersize}{\bxjs@papersizetrue}
- ■英語化 オプション english を新設しました。
- ※\if@english は非ユニークで衝突耐性がない。
- 332 \newif\if@english
- 333 \@englishfalse
- 334 \DeclareOption{english}{\@englishtrue}
- ■jsbook を jsreport もどきに オプション report を新設しました。

[2017-02-13] 従来は「jsreport 相当」を jsbook の report オプションで提供していまし たが、新しくjsreport クラスも作りました。どちらでもお好きな方を使ってください。

BXJS では当初から bxjsreport クラスが用意されている。

■jslogo パッケージの読み込み IATEX 関連のロゴを再定義する jslogo パッケージを読み込まないオプション nojslogo を新設しました。jslogo オプションの指定で従来どおりの動作となります。デフォルトは jslogo で、すなわちパッケージを読み込みます。

BXJS クラスでは、nojslogo を既定とする。

```
335 \newif\if@jslogo \@jslogofalse
```

- 336 \DeclareOption{jslogo}{\@jslogotrue}
- 337 \DeclareOption{nojslogo}{\@jslogofalse}

#### ■複合設定オプション 湾

TODO: \bxjs@invscale を書く場所を決める。(JS クラスと同じにはできなそう。)

#### \bxjs@invscale

\bxjs@invscale は T<sub>E</sub>X における「長さのスケール」の逆関数を求めるもの。例えば \bxjs@invscale\dimX{1.3} は \dimX=1.3\dimX の逆の演算を行う。

※局所化の \begingroup ~ \endgroup について、以前は \group ~ \egroup を使っていたが、これだと数式モード中では空のサブ数式を生み出してしまうため修正した。

※元の長さが128 pt 以上の場合でも動作するように修正した。

```
338 \mathchardef\bxjs@isc@ll=128
```

339 \mathchardef\bxjs@isc@s1=259

340 \def\bxjs@isc@sl@h{65539 }

341 \def\bxjs@invscale#1#2{%

342 \begingroup \@tempdima=#1\relax \@tempdimb#2\p@\relax

343 \ifdim\@tempdima<\bxjs@isc@l1\p@

 $\verb| \dotalle | \dots | \dots$ 

 $\verb|\divide|@tempcnta|@tempdimb| \verb|\multiply|@tempcnta|@cclvi|$ 

346 \else

347 \@tempcnta\@tempdima \divide\@tempcnta\@tempdimb

349 \fi

350 \@tempcntb\p@ \divide\@tempcntb\@tempdimb

351 \advance\@tempcnta-\@tempcntb \advance\@tempcnta-\tw@

352 \@tempdimb\@tempcnta\@ne

353 \advance\@tempcnta\@tempcntb \advance\@tempcnta\@tempcntb

354 \advance\@tempcnta\bxjs@isc@sl \@tempdimc\@tempcnta\@ne

355 \@whiledim\@tempdimb<\@tempdimc\do{%

356 \@tempcntb\@tempdimb \advance\@tempcntb\@tempdimc

357 \advance\@tempcntb\@ne \divide\@tempcntb\tw@

358 \ifdim #2\@tempcntb>\@tempdima

359 \advance\@tempcntb\m@ne \@tempdimc=\@tempcntb\@ne

 $\label{lem:contour} $$360 \qquad \text{\ensuremath{$\backslash$}}$ else \ensuremath{$\backslash$} \ensuremath{\\backslash$} \$ 

361 \xdef\bxjs@gtmpa{\the\@tempdimb}%

362 \endgroup #1=\bxjs@gtmpa\relax}

複合設定オプションとは、「エンジンやドライバや和文ドライバの設定を含む、複数の設定

を一度に行うオプション」のことである。ある特定の設定を短く書く必要性が高いと判断される場合に用意される。

pandoc オプションは、Pandoc で IATEX 用の既定テンプレートを用いて他形式から IATEX (および PDF) 形式に変換する用途に最適化した設定を与える。

363 \DeclareOption{pandoc}{%

和文ドライバを pandoc に、エンジン指定を autodetect-engine に変更する。

- ※実際の和文ドライバ・エンジン設定より優先される。
- 364 \g@addto@macro\bxjs@post@option@hook{%
- 365 \bxjs@oldfontcommandstrue
- 366 \setkeys{bxjs}{ja=pandoc}%
- 367 \let\bxjs@engine@given=\*}%

ドライバオプションを dvi=dvipdfmx 相当に変更する。

※これは実際のドライバ設定で上書きできる(オプション宣言順に注意)。

TODO: できない気がする…。

- 368 \def\bxjs@driver@opt{dvipdfmx}%
- 369 \bxjs@dvi@opttrue}

#### ■エンジン・ドライバオプション 彎

\bxjs@engine@given オプションで明示されたエンジンの種別。

370  $\label{lem:condition} \$  let\bxjs@engine@given\@undefined

\bxjs@engine@opt 明示されたエンジンのオプション名。

 $371\ \%\let\bxjs@engine@opt\@undefined$ 

エンジン明示指定のオプションの処理。

- %0.9pre 版の暫定仕様と異なり、エンジン名は ...latex に限定する。xetex や pdftex は一般的な IATEX の慣習に従って「ドライバの指定」とみなすべきだから。
- 372 \DeclareOption{autodetect-engine}{%
- 373 \let\bxjs@engine@given=\*}
- 374 \DeclareOption{latex}{%
- 375 \def\bxjs@engine@opt{latex}%
- 376 \let\bxjs@engine@given=n}
- 377 \DeclareOption{platex}{%
- 378 \def\bxjs@engine@opt{platex}%
- 379 \let\bxjs@engine@given=j}
- $380 \label{lem:confunction} $$380 \end{suplatex} \fi$
- ${\tt 381} \qquad {\tt def\bxjs@engine@opt\{uplatex\}\%}$
- 382 \let\bxjs@engine@given=u}
- 383 \DeclareOption{xelatex}{%
- 384 \def\bxjs@engine@opt{xelatex}%
- 385 \let\bxjs@engine@given=x}
- 386 \DeclareOption{pdflatex}{%

```
\def\bxjs@engine@opt{pdflatex}%
                   387
                        \let\bxjs@engine@given=p}
                   388
                   389 \DeclareOption{lualatex}{%
                        \def\bxjs@engine@opt{lualatex}%
                   390
                        \let\bxjs@engine@given=1}
                   391
                   392 \DeclareOption{platex-ng}{%
                        \def\bxjs@engine@opt{platex-ng}%
                   393
                   394
                        \let\bxjs@engine@given=g}
                   395 \DeclareOption{platex-ng*}{%
                        \def\bxjs@engine@opt{platex-ng*}%
                   396
                        \let\bxjs@platexng@nodrv=t%
                   397
                        \let\bxjs@engine@given=g}
                   398
\bxjs@driver@given オプションで明示されたドライバの種別。
                   399 %\let\bxjs@driver@given\@undefined
                   400 \let\bxjs@driver@@dvimode=0
                   401 \let\bxjs@driver@@dvipdfmx=1
                   402 \let\bxjs@driver@@pdfmode=2
                   403 \let\bxjs@driver@@xetex=3
                   404 \let\bxjs@driver@@dvips=4
                   405 \let\bxjs@driver@@none=5
  \bxjs@driver@opt 明示された「ドライバ指定」のオプション名。
                   406 %\let\bxjs@driver@opt\@undefined
                   407 \DeclareOption{dvips}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{dvips}%
                   408
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvips}
                   410 \DeclareOption{dviout}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{dviout}%
                   411
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode}
                   413 \DeclareOption{xdvi}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{xdvi}%
                   414
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode}
                   415
                   416 \DeclareOption{dvipdfmx}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{dvipdfmx}%
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx}
                   418
                   419 \DeclareOption{nodvidriver}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{nodvidriver}%
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@none}
                   421
                   422 \DeclareOption{pdftex}{%
                   423
                        \def\bxjs@driver@opt{pdftex}%
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode}
                   424
                   425 \DeclareOption{luatex}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{luatex}%
                   426
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode}
                   427
                   428 \DeclareOption{xetex}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{xetex}%
                   429
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex}
```

「もし DVI モードであればドライバを dvipdfmx にする」というオプション。

- ※ 1.2 版で dvi オプションが新設されたが、互換性のためこのオプションも残す。
- 431 \DeclareOption{dvipdfmx-if-dvi}{%
- 432 \setkeys{bxjs}{dvi=dvipdfmx}}

#### ■その他の BXJS 独自オプション 灣

**TODO:** 互換用オプションを分離する(2.0版で?)。

#### \ifbxjs@bigcode

upT<sub>F</sub>X で有効化する ToUnicode CMap として「UTF8-UCS2」の代わりに「UTF8-UTF16」 を使うか。BMP 外の文字に対応できる「UTF8-UTF16」の方が望ましいのであるが、この ファイルが利用可能かの確実な判定が困難であるため、オプションで指定することとする。

433 \newif\ifbxjs@bigcode \bxjs@bigcodefalse

その上で、「 $T_{FX}$ 、環境がある程度新しければ利用可能であろう」と判断し bxjs@bigcode の 既定値を真とする。具体的な判断基準として、「TFX のバージョンが 3.14159265 (2014 年 1 月)以上であるか」を採用する。

- $434 \edghtys@tmpa{\expandafter\\noexpand\\csname}$
- $435 \def\bxjs@tmpb#1 #2#3\@nil{%}$
- 436 \ifx1#2\bxjs@bigcodetrue \fi}
- 437 \expandafter\bxjs@tmpb\meaning\bxjs@tmpa1 0\@nil

nobigcode / bigcode オプションの定義。

- 438 \DeclareOption{nobigcode}{%
- 439 \bxjs@bigcodefalse}
- 440 \DeclareOption{bigcode}{%
- \bxjs@bigcodetrue}

\ifbxjs@oldfontcommands \allowoldfontcommands を既定で有効にするか。

442 \newif\ifbxjs@oldfontcommands

nooldfontcommands、oldfontcommands オプションの定義。

- ※oldfontcommands オプションの名前は memoir クラスに倣った。ちなみに KOMA-Script では enabledeprecatedfontcommands であるがこれはチョットアレなので避けた。
- 443 \DeclareOption{nooldfontcommands}{%
- \bxjs@oldfontcommandsfalse}
- 445 \DeclareOption{oldfontcommands}{\%}
- 446 \bxjs@oldfontcommandstrue}

### ■keyval 型のオプション 彎

その他のオプションは keyval の機構を用いて処理する。

- 447 \DeclareOption\*{%
- 448 \def\bxjs@next{\bxjs@safe@setkeys{bxjs}}%

```
\expandafter\bxjs@next\expandafter{\CurrentOption}}
               \bxjs@safe@setkeys 未知のキーに対してエラー無しで無視する \setkeys。
                                                           ※ネスト不可。
                                                          450 \def\bxjs@safe@setkeys#1#2{%
                                                          451 \hspace{0.1in} \verb|\label{lem:lem:lem:lem:lem:kv@errx}| \textbf{V@errx} | \textbf{Let} | \textbf{KV@errx} | \textbf{Ggobble}| \\
                                                                  \setkeys{#1}{#2}%
                                                          452
                                                                   \let\KV@errx\bxjs@save@KV@errx}
\bxjs@declare@enum@option \bxjs@declare@enum@option{(オプション名)}{(enum 名)}
                                                                "〈オプション名〉=〈値〉"のオプション指定に対して、\[bxjs@(enum 名)] を \[bxjs@(enum
                                                           名〉00(値)] に等値する(後者の制御綴が未定義の場合はエラー)、という動作を規定する。
                                                          454 \@onlypreamble\bxjs@declare@enum@option
                                                          455 \def\bxjs@declare@enum@option#1#2{%
                                                                    \define@key{bxjs}{#1}{%
                                                          456
                                                          457
                                                                         \expandafter\ifx\csname bxjs@#2@@##1\endcsname\relax
                                                                              \bxjs@error@keyval{#1}{##1}%
                                                          458
                                                          459
                                                                         \else \bxjs@csletcs{bxjs@#2}{bxjs@#20@##1}%
                                                                         fi}
                                                          460
\bxjs@declare@bool@option \bxjs@declare@bool@option{(オプション名)}{(スイッチ名)}
                                                                "(オプション名)=(真偽値)"のオプション指定に対して、\if[bxjs@(スイッチ名)]を設定
                                                           する、という動作を規定する。
                                                          461 \@onlypreamble\bxjs@declare@bool@option
                                                          462 \def\bxjs@declare@bool@option#1#2{%
                                                                    \define@key{bxjs}{#1}[true]{%
                                                          464
                                                                         \expandafter\ifx\csname bxjs@#2##1\endcsname\relax
                                                          465
                                                                              \verb|\bxjs@error@keyval{#1}{##1}||
                                                                         \else \@nameuse{bxjs@#2##1}%
                                                          466
                                                          467
                                                                         fi}
                    \bxjs@set@keyval \bxjs@set@keyval\{\langle key \rangle\}\{\langle value \rangle\}\{\langle error \rangle\}
                                                                \brue \b
                                                          468 \det \text{bxjs@set@keyval#1#2#3}{\%}
                                                                   \expandafter\let\expandafter\bxjs@next\csname bxjs@kv@#1@#2\endcsname
                                                          470
                                                                   \ifx\bxjs@next\relax
                                                                         \bxjs@error@keyval{#1}{#2}%
                                                          471
                                                                         #3%
                                                          472
                                                                    \else \bxjs@next
                                                         473
                                                         475 \@onlypreamble\bxjs@error@keyval
                                                         476 \def\bxjs@error@keyval#1#2{%
                                                                    \ClassError\bxjs@clsname
                                                          478
                                                                       {Invalid value '#2' for option #1}\@ehc}
```

\jsScale 〔実数値マクロ〕和文スケール値。 479 \def\jsScale{0.924715}

```
\bxjs@base@opt 明示された base オプションの値。
                                      480 %\let\bxjs@base@opt\@undefined
                                             base オプションの処理。
                                      481 \ensuremath{\mbox{define@key{bxjs}{base}{\%}}
                                                   \edef\bxjs@base@opt{#1}%
                                                   \bxjs@setbasefontsize{#1}}
                                      484 \ensuremath{\mbox{\mbox{$4$}}} fontsize {\ensuremath{\mbox{$1$}}} base = \#1} \}
\bxjs@jbase@opt 明示された jbase オプションの値。
                                       485 %\let\bxjs@jbase@opt\@undefined
                                              jbase オプションの処理。
                                       486 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{
                                       487 \define@key{bxjs}{jafontsize}{\setkeys{bxjs}{jbase=#1}}
\bxjs@scale@opt 明示された scale オプションの値。
                                      488 %\let\bxjs@scale@opt\@undefined
                                              scale オプションの処理。
                                       489 \ensuremath{\mbox{define@key{bxjs}{scale}{\%}}}
                                      490 \edef\bxjs@scale@opt{#1}%
                                                   \let\jsScale\bxjs@scale@opt}
                                       492 \define@key{bxjs}{jafontscale}{\setkeys{bxjs}{scale=#1}}
                                              noscale オプションの処理。
                                      493 \DeclareOption{noscale}{\setkeys{bxjs}{scale=1}}
\bxjs@param@mag mag オプションの値。
                                       494 \let\bxjs@param@mag\relax
                                             mag オプションの処理。
                                       495 \define@key{bxjs}{mag}{\edef\bxjs@param@mag{#1}}
                                              paper オプションの処理。
                                       496 \ensuremath{\verb|define@key{bxjs}{paper}{\ensuremath{\verb|def|bxjs@param@paper{\#1}}}}
 \bxjs@jadriver 和文ドライバの名前。
                                       497 \let\bxjs@jadriver\relax
                                       498 %\let\bxjs@jadriver@opt\@undefined
                                              ja オプションの処理。
                                         ※jadriver は 0.9 版で用いられた旧称。
                                         ※単なる ja という指定は無視される (Pandoc 対策)。
                                       499 \define@key{bxjs}{jadriver}{\edef\bxjs@jadriver@opt{#1}}
                                       500 \ensuremath{ \mbox{define@key{bxjs}{ja}[\relax]{%} } 
                                      501 \ifx\relax#1\else\edef\bxjs@jadriver@opt{#1}\fi}
              \jsJaFont 和文フォント設定の名前。
```

502 \let\jsJaFont\@empty

```
jafont オプションの処理。
                                                         503 \end{fine@key{bxjs}{jafont}{\end{fine}}} \label{fine} \fill 
               \jsJaParam 和文ドライバパラメタの文字列。
                                                         504 \let\jsJaParam\@empty
                                                                     japaram オプションの処理。
                                                          505 \define@key{bxjs}{japaram}{\edef\jsJaParam{#1}}
\bxjs@magstyle magstyle 設定値。(古いイマイチな名前。)
                                                         506 \let\bxjs@magstyle@mag=m
                                                         507 \let\bxjs@magstyle@real=r
                                                          508 \let\bxjs@magstyle@xreal=x
                                                              (新しい素敵な名前。)
                                                             ※ただし制御綴としては、*付の名前は扱い難いので、\bxjs@magstyle@xreal の方を優先
                                                              させる。
                                                          509 \let\bxjs@magstyle@usemag\bxjs@magstyle@mag
                                                          510 \let\bxjs@magstyle@nomag\bxjs@magstyle@real
                                                          511 \expandafter\let\csname bxjs@magstyle@nomag*\endcsname\bxjs@magstyle@xreal
                                                            \bxjs@magstyle@default は既定の値を表す。
                                                         512 \let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@usemag
                                                         513 \ifx 1\jsEngine \ifnum\luatexversion>86
                                                         514 \let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@xreal
                                                         515 \fi\fi
                                                         516 \ifjsWithpTeXng
                                                                            \let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@xreal
                                                         517
                                                         519 \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default
                                                                    magstyle オプションの処理。
                                                         520 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}} \{magstyle} \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}} \{magstyle} \ensuremath{\mbox{$\sim$}} \{magstyle\} \ensuremath{\mbox{$\sim$}} \{magstyle
                                                         521
                                                                          \expandafter\let\expandafter\bxjs@magstyle\csname
                                                                                bxjs@magstyle@#1\endcsname
                                                         522
                                                                          \ifx\bxjs@magstyle\relax
                                                         523
                                                         524
                                                                                     \ClassError\bxjs@clsname
                                                                                         {Invalid value '#1' for option magstyle}\@ehc
                                                         525
                                                                                     \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default
                                                         526
                                                                            fi
                                                         527
\bxjs@geometry geometry オプションの値。
                                                         528 \let\bxjs@geometry@class=c
                                                         529 \let\bxjs@geometry@user=u
                                                         530 \let\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class
                                                                     geometry オプションの処理。
                                                         531 \define@key{bxjs}{geometry}{%
                                                         532 \expandafter\let\expandafter\bxjs@geometry\csname
```

```
533
                                                                               bxjs@geometry@#1\endcsname
                                                                 534
                                                                             \ifx\bxjs@geometry\relax
                                                                                 \ClassError\bxjs@clsname
                                                                 535
                                                                                    {Invalid value '#1' for option geometry}\@ehc
                                                                 536
                                                                                 \let\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class
                                                                 537
                                                                            fi
                                                                 538
                           \ifbxjs@fancyhdr 〔スイッチ〕fancyhdr パッケージに対する調整を行うか。
                                                                 539 \newif\ifbxjs@fancyhdr \bxjs@fancyhdrtrue
                                                                        fancyhdr オプションの処理。
                                                                 540 \verb|\label{lem:sq} let \verb|\label{lem:sq} bxjs@fancyhdrtrue| bxjs@fancyhdrtrue| let by let 
                                                                 541 \let\bxjs@kv@fancyhdr@false\bxjs@fancyhdrfalse
                                                                 542 \define@key{bxjs}{fancyhdr}[true]{%
                                                                 543 \bxjs@set@keyval{fancyhdr}{#1}{}}
                             \ifbxjs@dvi@opt dvi オプションが指定されたか。
                                                                 544 \newif\ifbxjs@dvi@opt
                                                                        DVIモードのドライバとドライバ種別との対応。
                                                                 545 \let\bxjs@dvidriver@@dvipdfmx=\bxjs@driver@@dvipdfmx
                                                                 546 \let\bxjs@dvidriver@@dvips=\bxjs@driver@@dvips
                                                                 547 \let\bxjs@dvidriver@@dviout=\bxjs@driver@@dvimode
                                                                 548 \verb|\let\bxjs@dvidriver@@xdvi=\bxjs@driver@@dvimode|
                                                                 549 \let\bxjs@dvidriver@@nodvidriver=\bxjs@driver@@none
                                                                        dvi オプションの処理。
                                                                 550 \ensuremath{\mbox{\sc bxjs}}{\mbox{\sc dvi}}{\mbox{\sc wi}}{\mbox{\sc dvi}}
                                                                            \verb|\expandafter\expandafter\bxjs@tmpa\csname| \\
                                                                 552
                                                                               bxjs@dvidriver@@#1\endcsname
                                                                             \ifx\bxjs@tmpa\relax
                                                                 553
                                                                                 \ClassError\bxjs@clsname
                                                                 554
                                                                                    {Invalid value '#1' for option dvi}\@ehc
                                                                            \else
                                                                 556
                                                                   \bxjs@driver@given を未定義にしていることに注意。
                                                                                 \def\bxjs@driver@opt{#1}%
                                                                                 \let\bxjs@driver@given\@undefined
                                                                 558
                                                                 559
                                                                                 \bxjs@dvi@opttrue
                                                                 560
  \ifbxjs@layout@buggyhmargin [スイッチ] bxjsbook の左右マージンがアレか。
                                                                   ※layout が v1 の場合はアレになる。
                                                                 561 \newif\ifbxjs@layout@buggyhmargin
                                                                  〔スイッチ〕abstract 環境を chapterabstract にするか。
\ifbxjs@force@chapterabstract
                                                                    %bxjsbook では常に真。bxjsreport では layout が v1 の場合に真になる。
                                                                 562 \newif\ifbxjs@force@chapterabstract
                                                                 563 % <book > \bxjs@force@chapterabstracttrue
```

```
layout オプションの処理。
                                                  564 \@namedef{bxjs@kv@layout@v1}{%
                                                  565 % <book > \bxjs@layout@buggyhmargintrue
                                                  566 %<report>\bxjs@force@chapterabstracttrue
                                                  568 \@namedef{bxjs@kv@layout@v2}{%
                                                  569 % <book > \bxjs@layout@buggyhmarginfalse
                                                  570 %<report>\bxjs@force@chapterabstractfalse
                                                  571 }
                                                  572 \define@key{bxjs}{layout}{%
                                                            \bxjs@set@keyval{layout}{#1}{}}
       \bxjs@textwidth@limit textwidth-limit の指定値。
                                                  574 %\let\bxjs@textwidth@limit@opt\@undefined
                                                  575 \define@key{bxjs}{textwidth-limit}{%
                                                            \edef\bxjs@textwidth@limit@opt{#1}}
           \bxjs@textwidth@opt textwidth の指定値。
                                                  577 %\let\bxjs@textwidth@opt\@undefined
                                                  578 \define@key{bxjs}{textwidth}{\edef\bxjs@textwidth@opt{#1}}
                                                  579 \define@key{bxjs}{line_length}{\setkeys{bxjs}{textwidth=#1}}
\bxjs@number@of@lines@opt number-of-lines の指定値。
                                                  580 %\let\bxjs@number@of@lines@opt\@undefined
                                                  581 \define@key{bxjs}{number-of-lines}{\edef\bxjs@number@of@lines@opt{#1}}
                                                  582 \end{fine} \end{fine} \hfill $$182 \end{fine} \h
         \bxjs@paragraph@mark paragraph-mark の指定値。パラグラフのマーク。
                                                  583 %\let\bxjs@paragraph@mark\@undefined
                                                  584 \define@key{bxjs}{paragraph-mark}{%
                                                            \edef\bxjs@paragraph@mark{#1}}
     \ifbxjs@whole@zw@lines 〔スイッチ〕whole-zw-lines の指定値。
                                                  586 \verb|\newif\ifbxjs@whole@zw@lines \bxjs@whole@zw@linestrue|\\
                                                  587 \let\bxjs@kv@wholezwlines@true\bxjs@whole@zw@linestrue
                                                  588 \let\bxjs@kv@wholezwlines@false\bxjs@whole@zw@linesfalse
                                                  589 \define@key{bxjs}{whole-zw-lines}[true]{\bxjs@set@keyval{wholezwlines}{#1}{}}
           \ifbxjs@jaspace@cmd 〔スイッチ〕jaspace-cmd の指定値。
                                                  590 \newif\ifbxjs@jaspace@cmd \bxjs@jaspace@cmdtrue
                                                  591 \let\bxjs@kv@jaspacecmd@true\bxjs@jaspace@cmdtrue
                                                  592 \let\bxjs@kv@jaspacecmd@false\bxjs@jaspace@cmdfalse
                                                  593 \define@key{bxjs}{jaspace-cmd}[true]{\bxjs@set@keyval{jaspacecmd}{#1}{}}
                                                  594 \define@key{bxjs}{xkanjiskip-cmd}[true]{\bxjs@set@keyval{jaspacecmd}{#1}{}}
             \ifbxjs@fix@at@cmd 〔スイッチ〕fix-at-cmd の指定値。
                                                  595 \newif\ifbxjs@fix@at@cmd \bxjs@fix@at@cmdtrue
                                                  596 \let\bxjs@kv@fixatcmd@true\bxjs@fix@at@cmdtrue
                                                  597 \let\bxjs@kv@fixatcmd@false\bxjs@fix@at@cmdfalse
                                                  598 \end{fixed} \{fix-at-cmd\} [true] {\bxjs@set@keyval{fixatcmd}{\#1}{}} \}
```

```
\ifbxjs@hyperref@enc [スイッチ] hyperref-enc の指定値。
                     599 \newif\ifbxjs@hyperref@enc \bxjs@hyperref@enctrue
                     600 \let\bxjs@kv@hyperrefenc@true\bxjs@hyperref@enctrue
                     601 \let\bxjs@kv@hyperrefenc@false\bxjs@hyperref@encfalse
                     602 \define@key{bxjs}{hyperref-enc}[true]{\bxjs@set@keyval{hyperrefenc}{#1}{}}
  \bxjs@everyparhook everyparhook の指定値。
                     603 \chardef\bxjs@everyparhook@none=0
                     604 \chardef\bxjs@everyparhook@compat=1
                     605 \chardef\bxjs@everyparhook@modern=2
                     606 \if j\jsEngine
                     607 \let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@compat
                     608 \else
                     609
                         \let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@modern
                     610 \fi
                     611 \def\bxjs@kv@everyparhook@none{\let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@none}
                     612 \def\bxjs@kv@everyparhook@compat{\let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@compat}
                     613 \def\bxjs@kv@everyparhook@modern{\let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@modern}
                     614 \ensuremath{\ensuremath} {\bxjs@set@keyval{everyparhook}{\#1}{}}
  \bxjs@label@section label-section の指定値。
                     615 \chardef\bxjs@label@section@none=0
                     616 \chardef\bxjs@label@section@compat=1
                     617 \chardef\bxjs@label@section@modern=2
                     618 \let\bxjs@label@section\bxjs@label@section@compat
                     619 \def\bxjs@kv@labelsection@none{\let\bxjs@label@section\bxjs@label@section@none}
                     620 \def\bxjs@kv@labelsection@compat{\let\bxjs@label@section\bxjs@label@section@compat}
                     621 \def\bxjs@kv@labelsection@modern{\let\bxjs@label@section\bxjs@label@section@modern}
                     \ifbxjs@usezw 〔スイッチ〕use-zw の指定値。
                     623 \newif\ifbxjs@usezw \bxjs@usezwtrue
                     624 \bxjs@declare@bool@option{use-zw}{usezw}
                     625 \DeclareOption{nozw}{\setkeys{bxjs}{use-zw=false}}
                     626 \DeclareOption{zw}{\setkeys{bxjs}{use-zw=true}}
  \ifbxjs@disguise@js 〔スイッチ〕disguise-js の指定値。
                     627 \newif\ifbxjs@disguise@js \bxjs@disguise@jstrue
                     628 \bxjs@declare@bool@option{disguise-js}{disguise@js}
                     629 \DeclareOption{nojs}{\setkeys{bxjs}{disguise-js=false}}
                     630 \DeclareOption{js}{\setkeys{bxjs}{disguise-js=true}}
  \ifbxjs@precisetext 〔スイッチ〕precise-text の指定値。
                     631 \newif\ifbxjs@precisetext
                     632 \bxjs@declare@bool@option{precise-text}{precisetext}
                     633 \DeclareOption{noprecisetext}{\setkeys{bxjs}{precise-text=false}}
                     634 \ensuremath{\verb| DeclareOption{precisetext}{\ensuremath{\verb| Setkeys{bxjs}{precise-text=true}}}}
\ifbxjs@simplejasetup [スイッチ] simple-ja-setup の指定値。
```

```
635 \newif\ifbxjs@simplejasetup \bxjs@simplejasetuptrue
636 \bxjs@declare@bool@option{simple-ja-setup}{simplejasetup}
637 \DeclareOption{nosimplejasetup}{\setkeys{bxjs}{simple-ja-setup=false}}
638 \DeclareOption{simplejasetup}{\setkeys{bxjs}{simple-ja-setup=true}}
```

### ■オプションの実行

IATEX の実装では、クラスやパッケージのオプションのトークン列の中に { } が含まれると正常に処理ができない。これに対処する為 \@removeelement の実装に少し手を加える (仕様は変わらない)。

※クラスに \DeclareOption\* がある場合は \@unusedoptions は常に空のままであることを利用している。

```
639 \let\bxjs@org@removeelement\@removeelement
```

```
640 \def\@removeelement#1#2#3{%
```

- 641 \def\reserved@a{#2}%
- 642 \ifx\reserved@a\@empty \let#3\@empty
- 643 \else \bxjs@org@removeelement{#1}{#2}{#3}%
- 644 \fi}

デフォルトのオプションを実行します。multicols や url を \RequirePackage するのはやめました。

```
645 %<article>\ExecuteOptions{a4paper,oneside,onecolumn,notitlepage,final}
```

- $646 \% \verb|\cook>\ExecuteOptions{a4paper,twoside,onecolumn,titlepage,openright,final}|$
- $647 \ \ \texttt{``ExecuteOptions\{a4paper,oneside,onecolumn,titlepage,openany,final\}'}$
- 648 %<slide>\ExecuteOptions{36pt,a4paper,landscape,oneside,onecolumn,titlepage,final}
- 649 \ProcessOptions\relax
- 650 \bxjs@post@option@hook

### 後処理

- $651 \footnote{off}$
- $652 $$ \def\max\left(\operatorname{\operatorname{\operatorname{Color}}}{}\right)$$
- 653 \fi
- 654 \if@landscape
- 655 \setlength\@tempdima {\paperheight}
- 656 \setlength\paperheight{\paperwidth}
- 657 \setlength\paperwidth {\@tempdima}
- 658 \fi

### ■グローバルオプションの整理 彎

グローバルオプションのトークン列に  $\{ \}$  が含まれていると、やはり後のパッケージの読込処理で不具合を起こすようである( $\ProcessOptions*$  がエラーになる)。従って、このようなオプションは除外することにする。

659 \def\bxjs@tmpdo{%

- 660 \def\bxjs@tmpa{\@gobble}%
- 661 \expandafter\bxjs@tmpdo@a\@classoptionslist,\@nil,%
- 662 \let\@classoptionslist\bxjs@tmpa}
- 663 \def\bxjs@tmpdo@a#1,{%
- 664 \ifx\@nil#1\relax\else
- 665 \bxjs@tmpdo@b#1{}\@nil
- 666 \if@tempswa \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@tmpa,#1}\fi
- 667 \expandafter\bxjs@tmpdo@a
- 668 \fi}
- 669 \def\bxjs@tmpdo@b#1#{\bxjs@tmpdo@c}
- 670 \def\bxjs@tmpdo@c#1\@nil{%
- 672 \bxjs@tmpdo

papersize、10pt、noscale の各オプションは他のパッケージと衝突を起こす可能性があるため、グローバルオプションから外す。

- 673 \@expandtwoargs\@removeelement
- 674 {papersize}\@classoptionslist\@classoptionslist
- 675 \@expandtwoargs\@removeelement
- 676 {10pt}\@classoptionslist\@classoptionslist
- 677 \@expandtwoargs\@removeelement
- 678 {noscale}\@classoptionslist\@classoptionslist

■使用エンジンの検査・自動判定 ユーザが uplatex オプションの有無により指定したエンジンが、実際に使われているものと一致しているかを検査し、一致しない場合はエラーメッセージを表示します。

[2016-11-09] pIATEX/ upIATEX を自動判別するオプション autodetect-engine を新設しました。upIATEX の場合は、グローバルオプションに uplatex を追加することで、自動判定に応じて otf パッケージにも uplatex オプションが渡るようにします。

ここのコードを削除。

[2016-11-11] pI $\stackrel{\text{LY}}{\text{LEX}}$  の場合は、オプション uplatex が指定されていれば必ずエラーを出します。autodetect-engine が有効になっていてもエラーを出しますが、これは otf パッケージにuplatex オプションが渡ってしまうのを防ぐためです。

正規化前の和文ドライバの値を \bxjs@jadriver に設定する。

- 679 \ifx\bxjs@jadriver@opt\@undefined\else
- 680 \let\bxjs@jadriver\bxjs@jadriver@opt
- 681 \fi

エンジン明示指定のオプションが与えられた場合は、それが実際のエンジンと一致するか を検査する。

- 682 \let\bxjs@tmpb\jsEngine
- 683 \ifx j\bxjs@tmpb\ifjsWithpTeXng

```
684 \let\bxjs@tmpb=g
685 \fi\fi
686 \ifx j\bxjs@tmpb\ifjsWithupTeX
687 \let\bxjs@tmpb=u
688 \fi\fi
689 \ifx p\bxjs@tmpb\ifjsInPdfMode\else
690 \let\bxjs@tmpb=n
691 \fi\fi
(この時点で \bxjs@tmpb は \bxjs@engine@given と同じ規則で分類したコードをもって
いる。)
692 \ifx *\bxjs@engine@given
693 \let\bxjs@engine@given\bxjs@tmpb
エンジン指定が autodetect-engine であり、かつ実際のエンジンが (u)pIATpX だった場
合は、本来のエンジンオプションをグローバルオプションに加える。
   \ifx j\bxjs@engine@given
694
695
      \g@addto@macro\@classoptionslist{,platex}
696
    \else\ifx u\bxjs@engine@given
      \g@addto@macro\@classoptionslist{,uplatex}
697
    \fi\fi
698
699 \fi
700 \ifx\bxjs@engine@given\@undefined\else
    \ifx\bxjs@engine@given\bxjs@tmpb\else
702
      \ClassError\bxjs@clsname
       {Option '\bxjs@engine@opt' used on wrong engine}\@ehc
703
704
   \fi
705 \fi
  エンジンが pTrX-ng の場合、グローバルオプションに uplatex を追加する。
706 \ifjsWithpTeXng
707 \g@addto@macro\@classoptionslist{,uplatex}
708 \fi
■ドライバ指定 灣 ドライバ指定のオプションが与えられた場合は、それがエンジンと整合
するかを検査する。
709 \@tempswatrue
710 \ifx \bxjs@driver@given\@undefined\else
    \ifjsInPdfMode
      \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode\else
712
713
        \@tempswafalse
714
      \fi
715
    \else\ifx x\jsEngine
      \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex\else
716
717
        \@tempswafalse
      \fi
718
719
      \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode
720
721
        \@tempswafalse
```

```
722
      \else\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex
723
        \@tempswafalse
724
      \fi\fi
      \ifjsWithpTeXng\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx\else
725
        \@tempswafalse
726
      \fi\fi
727
    \fi\fi
728
729 \fi
730 \if@tempswa\else
    \ClassError\bxjs@clsname
     {Option '\bxjs@driver@opt' used on wrong engine}\@ehc
732
733 \fi
  DVI 出力のエンジンである場合の追加処理。
734 \ifjsInPdfMode \@tempswafalse
735 \else\ifx x\jsEngine \@tempswafalse
736 \else\ifjsWithpTeXng \@tempswafalse
737 \else \@tempswatrue
738 \fi\fi\fi
739 \if@tempswa
 ドライバオプションがない場合は警告を出す。
※ただし ja 非指定の場合はスキップする(0.3 版との互換性のため)。
    \ifx\bxjs@driver@opt\@undefined \ifx\bxjs@jadriver@opt\@undefined\else
      \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
741
742
      {No driver option is given}
743
    \fi\fi
dvi=XXX が指定されていた場合は、XXX が指定された時と同じ動作にする。(グローバルオ
 プションに XXX を追加する。)
    \ifbxjs@dvi@opt
      \edef\bxjs@next{%
745
        \let\noexpand\bxjs@driver@given
746
         \csname bxjs@dvidriver@@\bxjs@driver@opt\endcsname
747
        \noexpand\g@addto@macro\noexpand\@classoptionslist
748
         {,\bxjs@driver@opt}%
749
750
      }\bxjs@next
751
752 \fi
  エンジンが pT_FX-ng の場合、グローバルオプションに dvipdfmx を追加する。ただし、
 エンジンオプションが platex-ng*(*付)の場合、および既に dvipdfmx が指定されてい
 る場合を除く。
753 \ifjsWithpTeXng
    \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx
754
      \let\bxjs@platexng@nodrv\@undefined
755
    \else\ifx t\bxjs@platexng@nodrv\else
756
757
      \g@addto@macro\@classoptionslist{,dvipdfmx}
   \fi\fi
758
```

759 \fi

ドライバが nodvidriver であった場合の処理。DVI ウェア依存の処理を全て無効化する。 760 \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@none 761 \bxjs@papersizefalse 762 \fi

■その他の BXJS 特有の後処理 圏 \bxjs@jadriver の正規化。値が未指定の場合は minimal に変える。ただしエンジンが (u)pTFX である場合は standard に変える。

763 \def\bxjs@@minimal{minimal} 764 \ifx\bxjs@jadriver\relax \ifx j\jsEngine 765 \def\bxjs@jadriver{standard} 766 767 \let\bxjs@jadriver\bxjs@@minimal 768 769 \fi 770 \fi

エンジンオプションがない場合はエラーを出す。

※ただし ja 非指定の場合はスキップする。

771 \ifx\bxjs@jadriver@opt\@undefined\else

\ifx\bxjs@engine@given\@undefined

\ClassError\bxjs@clsname 773

774 {An engine option must be explicitly given}%

{When you use a Japanese-driver you must specify a correct\MessageBreak

engine option.\MessageBreak\@ehc} 776

777 \fi\fi

新しい LuaT<sub>F</sub>X (0.87 版以降) では mag がアレなので、magstyle=usemag が指定されて いた場合はエラーを出す。(この場合の既定値は nomag\* であり、エラーの場合は既定値に 置き換えられる。)

778 \ifx\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@mag\else

\ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@mag

780 \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default

\ClassError\bxjs@clsname 781

782 {The engine does not support 'magstyle=usemag'}%

{LuaTeX v0.87 or later no longer supports the "mag" feature of TeX.\MessageBreak 783

The default value 'nomag\*' is used instead.\MessageBreak \@ehc} 784

\fi 785

786 \fi

base、jbase、scale の値を用いて和文スケール値を解決する。

※\bxjs@param@basefontsize と \jsScale へのオプション値の反映は既に実施されてい ることに注意。jbase 非指定の場合はこのままでよい。

787 \ifx\bxjs@jbase@opt\@undefined\else

788 \ifx\bxjs@base@opt\@undefined

jbase 指定済で base 未指定の場合は、\jsScale の値を採用して和文基底サイズを決定 する。

```
\jsSetQHLength\@tempdima{\bxjs@jbase@opt}%
        790
               \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
        791
               \bxjs@setbasefontsize{\@tempdima}%
             \else
        792
         jbase と base がともに指定済の場合は、それらの値から和文スケール値を決定する。
               \ifx\bxjs@scale@opt\@undefined\else
                \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
        794
                 {Redundant 'scale' option is ignored}%
        795
               \fi
        796
               \jsSetQHLength\@tempdima{\bxjs@jbase@opt}%
        797
               \@tempdimb=\bxjs@param@basefontsize\relax
        798
               \edef\jsScale{\strip@pt\@tempdimb}%
        799
               \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
        800
        801
               \edef\jsScale{\strip@pt\@tempdima}%
             \fi
        802
        803 \fi
\Cjascale 和文クラス共通仕様(※ただし ZR 氏提唱)における、和文スケール値の変数。
        804 \left| \text{Cjascale} \right|
           8bit 欧文 T<sub>F</sub>X の場合は、高位バイトをアクティブ化しておく。(和文を含むマクロ定義を
         通用させるため。)
        805\ \ \ \ \ T\ \ \ T\ \ \ \ \ T
             \@tempcnta="80 \loop \ifnum\@tempcnta<"100</pre>
               \catcode\@tempcnta\active
        807
        808
               \advance\@tempcnta\@ne
        809
             \repeat
        810 \fi
           js オプション指定時は、jsarticle (または jsbook) クラスを読込済のように振舞う。
         ※「2つのクラスを読み込んだ状態」は \LoadClass を使用した場合に出現するので、別に
         異常ではない。
        811 \ifbxjs@disguise@js
        812 % <book | report > \def \bxjs@js@clsname{jsbook}
        813 %<!book&!report>\def\bxjs@js@clsname{jsarticle}
        814 \Onamedef{ver@\bxjs@js@clsname.cls}{2001/01/01 (bxjs)}
        815 \fi
           color/graphics パッケージが持つ出力用紙サイズ設定の機能は、BXJS クラスでは余計
         なので無効にしておく。このため、グローバルで nosetpagesize を設定しておく。
        816 \g@addto@macro\@classoptionslist{,nosetpagesize}
           oldfontcommands オプション指定時は \allowoldfontcommands 命令を実行する。
        817 \ifbxjs@oldfontcommands
        818 \AtEndOfClass{\allowoldfontcommands}
```

789

819 \fi

**■papersize スペシャルの出力** dvi ファイルの先頭に dvips の papersize special を書き込むことで、出力用紙サイズを設定します。これは dvipdfmx や最近の dviout にも有効です。 どうやら papersize special には true 付の単位は許されず、かつ単位は常に true なものと扱われるようです。そこで、後で出てくる( $\Diamond$ )の部分、「\mag にあわせてスケール」よりも手前で実行しておくことになります。

トンボの付いたときの用紙サイズは無意味ですが,いわゆる「ノビ」サイズという縦横 1 インチずつ長い用紙に出力することを考えて,1 インチずつ加えました。ところが plaTeX  $2\varepsilon$  はトンボ出力幅を両側に 1 インチとっていますので,dvips 使用時に

-0.5in, -0.5in

というオプションを与えて両側 0.5 インチのトンボにするといいでしょう。

[2003-05-17] トンボをプレビューに使うことを考えて1インチを2インチにしました。

[2016-07-11] memoir クラスのマニュアルによると、トンボを含めた用紙の寸法は\stockwidth、\stockheightと呼ぶようですので、これを使うことにしました。

[2017-01-11] トンボオプションが指定されているとき「だけ」\stockwidth, \stockheight を定義するようにしました。

BXJS では出力用紙サイズ記録は geometry パッケージが行う。

また、JS クラスと異なり、\stockwidth、\stockheight は常に定義される。

- 820 \newdimen\stockwidth \newdimen\stockheight
- 821 \begingroup\expandafter\expandafter\expandafter\endgroup
- 822 \expandafter\ifx\csname iftombow\expandafter\endcsname\csname iftrue\endcsname
- 823 % \newdimen\stockwidth \newdimen\stockheight
- 824 \setlength{\stockwidth}{\paperwidth}
- 825 \setlength{\stockheight}{\paperheight}
- 826 \advance \stockwidth 2in
- 827 \advance \stockheight 2in
- 828 **\fi**

### ■基準となる行送り

\n@baseline 基準となる行送りをポイント単位で表したものです。

- 829 %  $\left| \frac{13}{\%} \right|$
- 831 %<!slide>\else \def\n@baseline{16}\fi

#### ■拡大率の設定

\bxjs@magstyle の値に応じてスイッチ jsc@mag と jsc@mag@xreal を設定する。 832 \ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@mag

- 833 \jsc@magtrue
- 834 \else\ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@xreal
- 835 \jsc@mag@xrealtrue
- 836 \fi\fi

サイズの変更は  $T_{EX}$  のプリミティブ  $\mbox{mag}$  を使って行います。9 ポイントについては行送 b も若干縮めました。サイズについては全面的に見直しました。

[2008-12-26] 1000 / \mag に相当する \inv@mag を定義しました。truein を使っていたところを \inv@mag in に直しましたので,geometry パッケージと共存できると思います。なお,新ドキュメントクラス側で 10pt 以外にする場合の注意:

- geometry 側でオプション truedimen を指定してください。
- geometry 側でオプション mag は使えません。

設定すべき \mag 値を (基底サイズ)/( $10\,\mathrm{pt}$ ) ×  $1000\,\mathrm{c}$  2算出。BXJS クラスでは、\mag を直接指定したい場合は、geometry 側ではなくクラスのオプションで行うものとする。

- 837 \ifx\bxjs@param@mag\relax
- 838 \@tempdima=\bxjs@param@basefontsize
- 839 \advance\@tempdima.001pt \multiply\@tempdima25
- 840 \divide\@tempdima16384\relax \@tempcnta\@tempdima\relax
- ${\tt 841} \qquad {\tt \edef\bxjs@param@mag\{\the\@tempcnta\}}$
- 842 \else
- 843 % mag 値が直接指定された場合
- 844 \bxjs@gset@tempcnta{\bxjs@param@mag}
- 845 \ifnum\@tempcnta<\z@ \@tempcnta=\z@ \fi
- 846 % 有効な mag 値の範囲は 1--32768
- 847 \edef\bxjs@param@mag{\the\@tempcnta}
- 848 \advance\@tempcnta100000
- 850 \expandafter\bxjs@tmpa\the\@tempcnta\@nil
- ${\tt 851} \quad \verb|\edef| bxjs@param@basefontsize{\the|@tempdima}|$
- $852 \fi$
- $853 \verb|\dtempcnta| bxjs@param@mag | advance| @tempcnta100000$
- 854 \def\bxjs@tmpa#1#2#3#4\@nil{\@tempdima=#2#3.#4\p@}
- $856 \edge{\tt trip@pt\tt @tempdima}$
- $857 \verb|\label{lem:bxjs}| \textbf{Some Size} \textbf{bxjs} \textbf{QparamQbasefontsize} \\$

[2016-07-08] \jsc@mpt および \jsc@mmm に、それぞれ 1pt および 1mm を拡大させた値を格納します。以降のレイアウト指定ではこちらを使います。

\mag する場合(現状はこれが既定)にコードの変更を低減するために、以下では必要に応じて、\jsc@mpt を \p@? と書く。その上で、\mag する場合は?を無視して \p@ と解釈させ、\mag しない場合は?を英字扱いにして \p@? という制御綴を\jsc@mpt と同値にする。

```
\% (多分 2.0 版あたりで) JS クラスに合わせるため p0? 表記を止める予定。
        858 \newdimen\jsc@mpt
        859 \newdimen\jsc@mmm
        860 \ifjsc@mag
             862
             \catcode`\?=9 % \p@? read as \p@
        863
        864 \else
             \jsc@mpt=\jsc@magscale\p@
        865
             \jsc@mmm=\jsc@magscale mm
        866
             \catcode`\?=11 \let\p@?\jsc@mpt
        868 \fi
        869 \chardef\bxjs@qmcc=\catcode`\?\relax
        870 \g@addto@macro\bxjs@pre@jadriver@hook{\catcode`\?=12\relax}
           ここで pTrX の zw に相当する単位として用いる長さ変数 \jsZw を作成する。約束によ
         り、これは \jsScale × (指定フォントサイズ) に等しい。
           nozw 非指定時は \zw を \jsZw と同義にする。
        871 \newdimen\jsZw
        872 \jsZw=10\jsc@mpt \jsZw=\jsScale\jsZw
        873 \ifbxjs@usezw
        874 \providecommand*\zw{\jsZw}
        875 \fi
\zwspace 全角幅の水平空き。
        876 \def\zwspace{\hskip\jsZw\relax}
           そして、magstyle が nomag* の場合は、NFSS にパッチを当てる。
        877 \ifjsc@mag@xreal
        878 \RequirePackage{type1cm}
            \let\jsc@invscale\bxjs@invscale
         ムニャムニャムニャ……。
             \ifbxjs@TUenc
        880
               \expandafter\let\csname TU/lmr/m/n/10\endcsname\relax
        881
             \else
        882
               \verb|\expandafter\et| csname OT1/cmr/m/n/10\endcsname\elax|
        883
        884
             \verb|\expandafter\ex| OMX/cmex/m/n/10\endcsname\end{|} relax
        885
             \let\jsc@get@external@font\get@external@font
        886
             \def\get@external@font{%
        887
               \jsc@preadjust@extract@font
        888
               \jsc@get@external@font}
        889
        890
             \def\jsc@fstrunc#1{%
               \edef\jsc@tmpa{\strip@pt#1}%
        891
               \expandafter\jsc@fstrunc@a\jsc@tmpa.***\@nil}
        892
             \def\jsc@fstrunc@a#1.#2#3#4#5#6\@nil{%
        893
               \if#5*\else
        894
```

```
900
                          \dimen@\f@size\p@ \jsc@invscale\dimen@\jsc@magscale
                   901
                          \advance\dimen@.005pt\relax \jsc@fstrunc\dimen@
                   902
                          \let\jsc@ref@size\jsc@tmpa
                          \let\f@size\jsc@ref@size}
                   903
                   904
                        \def\execute@size@function#1{%
                          \let\jsc@cref@size\f@size
                   905
                          \let\f@size\jsc@req@size
                   906
                          \csname s@fct@#1\endcsname}
                   907
                        \let\jsc@DeclareErrorFont\DeclareErrorFont
                   908
                        \def\DeclareErrorFont#1#2#3#4#5{%
                   909
                          \@tempdimc#5\p@ \@tempdimc\jsc@magscale\@tempdimc
                   910
                          911
                   912
                          \expandafter\jsc@DeclareErrorFont\jsc@tmpa}
                   913
                        \def\gen@sfcnt{%
                          \edef\mandatory@arg{\mandatory@arg\jsc@cref@size}%
                   914
                   915
                          \empty@sfcnt}
                        \def\genb@sfcnt{%
                   916
                   917
                          \edef\mandatory@arg{%
                   918
                            \mandatory@arg\expandafter\genb@x\jsc@cref@size..\@@}%
                          \empty@sfcnt}
                   919
                        \ifbxjs@TUenc\else
                   920
                          \DeclareErrorFont{OT1}{cmr}{m}{n}{10}
                   921
                   922
                        \fi
                   923 \fi
                      [2016-11-16] latex.ltx (ltspace.dtx) で定義されている \smallskip の,単位 pt を
                    \jsc@mpt に置き換えた \jsc@smallskip を定義します。これは \maketitle で用い
                     られます。\jsc@medskip と \jsc@bigskip は必要ないのでコメントアウトしています。
     \jsc@smallskip
       \jsc@medskip 924 \def\jsc@smallskip{\vspace\jsc@smallskipamount}
                   925 %\def\jsc@medskip{\vspace\jsc@medskipamount}
                   926 %\def\jsc@bigskip{\vspace\jsc@bigskipamount}
\jsc@smallskipamount
 \jsc@medskipamount 927 \newskip\jsc@smallskipamount
                   928 \jsc@smallskipamount=3\jsc@mpt plus 1\jsc@mpt minus 1\jsc@mpt
 \jsc@bigskipamount
                   929 %\newskip\jsc@medskipamount
                   930 %\jsc@medskipamount =6\jsc@mpt plus 2\jsc@mpt minus 2\jsc@mpt
                   931 %\newskip\jsc@bigskipamount
                   932 \ jsc@bigskipamoun =12\jsc@mpt plus 4\jsc@mpt minus 4\jsc@mpt
                      \paperwidth, \paperheight を\mag にあわせてスケールしておきます (☆)。
                      [2016-07-11] 新しく追加した\stockwidth, \stockheight も\mag にあわせてスケール
                                                         37
```

895

896

897

898

899

fi

\edef\jsc@tmpa{#1%

\let\jsc@req@size\f@size

\def\jsc@preadjust@extract@font{%

\ifnum#2#3>\z@ .#2\ifnum#3>\z@ #3\fi\fi}%

します。

[2017-01-11] トンボオプションが指定されているとき「だけ」\stockwidth, \stockheight が定義されています。

■pagesize スペシャルの出力 [2003-05-17] dvipdfm(x) の pagesize スペシャルを出力します。

[2004-08-08] 今の dvipdfmx は dvips 用スペシャルを理解するようなので外しました。

- 933 % \ifpapersize
- 934 % \setlength{\@tempdima}{\paperwidth}
- 935 % \setlength{\@tempdimb}{\paperheight}
- 936 % \iftombow
- 937 % \advance \@tempdima 2truein
- 938 % \advance \@tempdimb 2truein
- 939 % \fi
- 940 % \AtBeginDvi{\special{pdf: pagesize width \the\@tempdima\space height \the\@tempdimb}}
- 941 % \fi

# 3 和文フォントの変更

和文フォントの設定は和文ドライバの管轄。

\@ 欧文といえば、 $IAT_{EX}$  の \def\@{\spacefactor\@m} という定義(\@m は 1000)では I watch TV\@. と書くと V とピリオドのペアカーニングが効かなくなります。そこで、次 のような定義に直し、I watch TV.\@ と書くことにします。

[2016-07-14] 2015-01-01 の IATEX で、auxiliary files に書き出されたときにスペースが食われないようにする修正が入りました。これに合わせて {} を補いました。

#### BXJS クラスでの変更点:

- fix-at-cmd オプションが偽の場合は再定義しない。
- 固定の 3000 でなく実際のピリオドの sfcode 値を使う。
- 「防御的な \@」での不具合を防ぐため、大文字直後の \@ は標準と同等の動作にする。
- 942 \chardef\bxjs@periodchar=`\.
- 943 \bxjs@protected\def\bxjs@SE{%
- 944 \ifnum\spacefactor<\@m \spacefactor\@m
- 945 \else \spacefactor\sfcode\bxjs@periodchar
- 946 \fi}
- 947 \ifbxjs@fix@at@cmd
- 948  $\def\0{\bxjs@SE{}}$
- $949 \fi$

## 4 フォントサイズ

フォントサイズを変える命令(\normalsize,\small など)の実際の挙動の設定は,三 つの引数をとる命令 \@setfontsize を使って、たとえば

\@setfontsize{\normalsize}{10}{16}

のようにして行います。これは

\normalsize は 10 ポイントのフォントを使い, 行送りは 16 ポイントである

という意味です。ただし、処理を速くするため、以下では10と同義の LATrX の内部命令 \@xpt を使っています。この \@xpt の類は次のものがあり, IAT<sub>F</sub>X 本体で定義されてい ます。

```
\@vpt
         5
                  \@vipt
                           6
                                 \@viipt
                                         7
\@viiipt 8
                  \@ixpt
                           9
                                 \@xpt
                                         10
      10.95
                  \@xiipt 12
                                 \@xivpt 14.4
\@xipt
```

ここでは \@setfontsize の定義を少々変更して、段落の字下げ \parindent, 和文文字 間のスペース \kanjiskip, 和文・欧文間のスペース \xkanjiskip を変更しています。

\kanjiskip は pIATeX  $2_{\varepsilon}$  で Opt plus .4pt minus .5pt に設定していますが, これは そもそも文字サイズの変更に応じて変わるべきものです。それに、プラスになったりマイナ スになったりするのは、追い出しと追い込みの混在が生じ、統一性を欠きます。なるべく追 い出しになるようにプラスの値だけにしたいところですが、ごくわずかなマイナスは許すこ とにしました。

\xkanjiskip については、四分つまり全角の 1/4 を標準として、追い出すために三分あ るいは二分まで延ばすのが一般的ですが、ここでは Times や Palatino のスペースがほぼ四 分であることに着目して、これに一致させています。これなら書くときにスペースを空けて も空けなくても同じ出力になります。

\parindent については、0 (以下) でなければ全角幅 (1zw) に直します。 [2008-02-18] english  $\pi$ 

\set@fontsize \fontsize 命令(\large 等でなく) でフォントサイズ変更した場合にもフックが実行され るように、\@setfontsize ではなく \set@fontsize に対してパッチを当てるように変更。

- 950 \def\bxjs@tmpa{\def\set@fontsize##1##2##3}
- 951 \expandafter\bxjs@tmpa\expandafter{%
- 952 \set@fontsize{#1}{#2}{#3}%
- 953 % 末尾にコードを追加
- 954 \expandafter\def\expandafter\size@update\expandafter{\%}
- 955 \size@update
- \jsFontSizeChanged}% 956

957 }

\jsFontSizeChanged フォントサイズ変更時に呼ばれるフック。\jsZw を再設定している。その後でユーザ定義用のフック \jsResetDimen を実行する。

 $958 \mbox{ }\mbox{newcommand*\jsFontSizeChanged} \mbox{\foots}$ 

959 \jsZw=\f@size\p@

960 \jsZw=\jsScale \jsZw

961 \ifdim\parindent>\z@

962 \if@english \parindent=1em

963 \else \parindent=1\jsZw

964 \fi

965 \fi\relax

966 \jsResetDimen}

\jsResetDimen ユーザ定義用のフック。

967 \newcommand\*\jsResetDimen{}

\jsc@setfontsize クラスファイルの内部では、拡大率も考慮した \jsc@setfontsize を\@setfontsize の 変わりに用いることにします。

968 \ifjsc@mag

969 \let\jsc@setfontsize\@setfontsize

 $970 \ensuremath{\setminus} else$ 

971 \def\jsc@setfontsize#1#2#3{%

972 \@setfontsize#1{#2\jsc@mpt}{#3\jsc@mpt}}

973 % microtype 対策

974 \ifjsWitheTeX\if j\jsEngine\else

975 \def\jsc@setfontsize#1#2#3{%

977 \unexpanded{\@setfontsize#1}\%

978  ${\the\dimexpr\#2\jsc@mpt\relax}{\the\dimexpr\#3\jsc@mpt\relax}\%$ 

979 }\bxjs@sfs@next}

980 \fi\fi

981 \fi

これらのグルーをもってしても行分割ができない場合は、\emergencystretch に訴えます。

これはフォントサイズ非依存なので \Cwd で書くのが適当だが、\Cwd はまだ定義されていない。

982 \emergencystretch 3\jsZw

\ifnarrowbaselines

欧文用に行間を狭くする論理変数と、それを真・偽にするためのコマンドです。

\narrowbaselines \widebaselines

[2003-06-30] 数式に入るところで \narrowbaselines を実行しているので \abovedisplayskip 等が初期化されてしまうという shintok さんのご指摘に対して, しっぱ愛好家さんが次の修正を教えてくださいました。

[2008-02-18] english オプションで最初の段落のインデントをしないようにしました。

別行立て数式に入るときに \narrowbaselines が呼ばれるが、このコードでは「数式中で \normalsize などのサイズ命令(\@currsize の実体)が呼ばれた」ことになり警告が出る。JS クラスでは、\@setfontsize 中の \@nomath 実行を消して「そもそもサイズ命令で警告が出ない」ようにしている。警告が常に出ないのも望ましくないので、BXJS クラスの実装では、\narrowbaselines の時だけ警告が出ないようにする。

```
983 \newif\ifnarrowbaselines
984 \if@english
     \narrowbaselinestrue
985
986 \fi
987 \def\narrowbaselines{%
988
     \narrowbaselinestrue
     \skip0=\abovedisplayskip
     \skip2=\abovedisplayshortskip
990
     \skip4=\belowdisplayskip
992
    \skip6=\belowdisplayshortskip
993% 一時的に警告を無効化する
994 \let\bxjs@save@nomath\@nomath
    \let\@nomath\@gobble
995
996
    \@currsize\selectfont
     \let\@nomath\bxjs@save@nomath
997
     \abovedisplayskip=\skip0
998
     \abovedisplayshortskip=\skip2
     \belowdisplayskip=\skip4
1000
     \belowdisplayshortskip=\skip6\relax}
1002 \def\widebaselines{\narrowbaselinesfalse\@currsize\selectfont}
```

microtype パッケージを読み込んだ場合、\normalsize 等のフォントサイズ変更命令の 定義の中に if 文が使われていると、不可解なエラーが発生する。これは microtype が邪悪 なトリックを使用しているせいなのだが、一応こちら側で対策をとることにする。

```
1003 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox
```

\normalsize 標準のフォントサイズと行送りを選ぶコマンドです。

1007 }

本文 10 ポイントのときの行送りは、欧文の標準クラスファイルでは 12 ポイント、アスキーの和文クラスファイルでは 15 ポイントになっていますが、ここでは 16 ポイントにしました。ただし \narrowbaselines で欧文用の 12 ポイントになります。

公称 10 ポイントの和文フォントが約 9.25 ポイント (アスキーのものの 0.961 倍) である

こともあり、行送りがかなりゆったりとしたと思います。実際、 $16/9.25 \approx 1.73$  であり、和文の推奨値の一つ「二分四分」(1.75) に近づきました。

microtype 対策のため if 文を避ける。

1008 \renewcommand{\normalsize}{%

- 1009 \bxjs@if@narrowbaselines{%
- 1010 \jsc@setfontsize\normalsize\@xpt\@xiipt
- 1011 }{%else
- 1012 \jsc@setfontsize\normalsize\@xpt{\n@baseline}%
- 1013 }%

数式の上のアキ(\abovedisplayskip),短い数式の上のアキ(\abovedisplayshortskip),数式の下のアキ(\belowdisplayshortskip)の設定です。

[2003-02-16] ちょっと変えました。

[2009-08-26] T<sub>E</sub>X Q & A 52569 から始まる議論について逡巡していましたが、結局、微調節してみることにしました。

- 1014 \abovedisplayskip 11\p0? \@plus3\p0? \@minus4\p0?
- 1015 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@?
- 1016 \belowdisplayskip 9\p@? \@plus3\p@? \@minus4\p@?
- 1017 \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip

最後に、リスト環境のトップレベルのパラメータ \@listI を、\@listi にコピーしておきます。\@listI の設定は後で出てきます。

1018 \let\@listi\@listI}

ここで実際に標準フォントサイズで初期化します。

1019 \normalsize

\Cht 基準となる長さの設定をします。 $pIAT_EX\ 2\varepsilon$  カーネル(plfonts.dtx)で宣言されているパ\Cdp ラメータに実際の値を設定します。たとえば \Cwd は \normalfont の全角幅(1zw)です。

\Cwd [2017-08-31] 基準とする文字を「全角空白」(EUC コード 0xA1A1) から「漢」(JIS コー\Cvs ド 0x3441) へ変更しました。

\Chs

\Cwd 等の変数は pTpX 系以外では未定義なのでここで定義する。

- 1020 \ifx\Cht\@undefined \newdimen\Cht \fi
- $1021 \ifx\Cdp\Qundefined \newdimen\Cdp \fi$
- $1022 \ifx\Cwd\Qundefined \newdimen\Cwd \fi$
- 1023 \ifx\Cvs\Qundefined \newdimen\Cvs \fi
- 1024 \ifx\Chs\@undefined \newdimen\Chs \fi

規約上、現在の \jsZw の値が \Cwd である。BXJS では \Cht と \Cdp は単純に \Cwd の88% と 12% の値とする。

 $<sup>1025 \</sup>sline Cht{0.88\jsZw}$ 

 $<sup>1026 \</sup>stlength\Cdp{0.12\jsZw}$ 

```
1027 \setlength\Cwd{1\jsZw} $$1028 \setlength\Cvs{\baselineskip} $$1029 \setlength\Chs{1\jsZw} $$
```

\small \small も \normalsize と同様に設定します。行送りは,\normalsize が 16 ポイントなら,割合からすれば  $16 \times 0.9 = 14.4$  ポイントになりますが,\small の使われ方を考えて,ここでは和文 13 ポイント,欧文 11 ポイントとします。また,\topsep と \parsep は,元はそれぞれ  $4 \pm 2$ , $2 \pm 1$  ポイントでしたが,ここではゼロ(\ze)にしました。

```
microtype 対策のため if 文を避ける。後の \footnotesize も同様。
            1030 \mbox{ }\mbox{newcommand}\mbox{\small}{\%}
                  \bxjs@if@narrowbaselines{%
            1032 %<!kiyou>
                             \jsc@setfontsize\small\@ixpt{11}%
            1033 %<kiyou>
                            \jsc@setfontsize\small{8.8888}{11}%
            1034 }{%else
            1035 %<!kiyou>
                             \jsc@setfontsize\small\@ixpt{13}%
                            \jsc@setfontsize\small{8.8888}{13.2418}%
            1036 %<kiyou>
            1037
                  \abovedisplayskip 9\p0? \@plus3\p0? \@minus4\p0?
            1038
                  \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@?
            1039
                  \belowdisplayskip \abovedisplayskip
            1040
                  \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
                  \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
            1042
            1043
                              \topsep \z@
            1044
                              \parsep \z@
                              \itemsep \parsep}}
            1045
\footnotesize \footnotesize も同様です。\topsep と \parsep は,元はそれぞれ3\pm 1,2\pm 1 ポイン
               トでしたが、ここではゼロ(\z0)にしました。
            1046 \newcommand{\footnotesize}{%
                 \bxjs@if@narrowbaselines{%
            1048 %<!kiyou>
                             \jsc@setfontsize\footnotesize\@viiipt{9.5}%
            1049 %<kiyou>
                            \jsc@setfontsize\footnotesize{8.8888}{11}%
            1050 }{%else
            1051 %<!kiyou>
                             \jsc@setfontsize\footnotesize\@viiipt{11}%
            1052 %<kiyou>
                            \jsc@setfontsize\footnotesize{8.8888}{13.2418}%
            1053
                  \abovedisplayskip 6\p@? \@plus2\p@? \@minus3\p@?
            1054
                  \abovedisplayshortskip \z@ \@plus2\p@?
            1055
                  \belowdisplayskip \abovedisplayskip
            1056
            1057
                  \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
                  \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
            1058
            1059
                              \topsep \z@
            1060
                              \parsep \z@
            1061
                              \itemsep \parsep}}
             それ以外のサイズは、本文に使うことがないので、単にフォントサイズと行送りだけ変更し
       \tiny
```

\tiny
\large
\Large
\LARGE

\huge

ます。特に注意すべきは \large で、これは二段組のときに節見出しのフォントとして使い、 行送りを \normalsize と同じにすることによって、節見出しが複数行にわたっても段間で 行が揃うようにします。

[2004-11-03] \HUGE を追加。

```
1062 \newcommand{\scriptsize}{\jsc@setfontsize\scriptsize\@viipt\@viiipt}
1063 \newcommand{\tiny}{\jsc@setfontsize\tiny\@vpt\@vipt}
1064 \if@twocolumn
1065 %<!kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\@xiipt{\n@baseline}}
1066 %<kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\11.111}{\n@baseline}}
1067 \else
1068 %<!kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\@xiipt\17}}
1069 %<kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\11.111}\17}}
1070 \fi
1071 %<!kiyou>\newcommand{\Large}{\jsc@setfontsize\Large\@xivpt\21}}
1072 %<kiyou>\newcommand{\Large}{\jsc@setfontsize\Large\12.222\{21}}}
1073 \newcommand{\Large}{\jsc@setfontsize\LARGE\@xviipt\25}}
1074 \newcommand{\huge}{\jsc@setfontsize\huge\@xxpt\28}}
1075 \newcommand{\Huge}{\jsc@setfontsize\huge\@xxvpt\23}}
```

別行立て数式の中では \narrowbaselines にします。和文の行送りのままでは、行列や場合分けの行送り、連分数の高さなどが不釣合いに大きくなるためです。

本文中の数式の中では \narrowbaselines にしていません。本文中ではなるべく行送りが変わるような大きいものを使わず、行列は amsmath の smallmatrix 環境を使うのがいいでしょう。

1077 \everydisplay=\expandafter{\the\everydisplay \narrowbaselines}

1076 \newcommand{\HUGE}{\jsc@setfontsize\HUGE{30}{40}}

しかし、このおかげで別行数式の上下のスペースが少し違ってしまいました。とりあえず amsmath の equation 関係は okumacro のほうで逃げていますが、もっとうまい逃げ道が あればお教えください。

見出し用のフォントは \bfseries 固定ではなく、\headfont という命令で定めることにします。これは太ゴシックが使えるときは \sffamily \bfseries でいいと思いますが、通常の中ゴシックでは単に \sffamily だけのほうがよさそうです。 $\mathbb{P}IPT_EX\ 2_{\varepsilon}$  美文書作成入門』(1997年) では \sffamily \fontseries{sbc} として新ゴ M と合わせましたが、\fontseries{sbc} はちょっと幅が狭いように感じました。

```
1078 \% \newcommand{\headfont}{\begin{tikzpicture}(1079 \newcommand{\headfont}{\sffamily} \\ 1080 \% \newcommand{\headfont}{\sffamily\fontseries{sbc}\selectfont}
```

# 5 レイアウト

#### ■二段組

\columnsep \columnsep は二段組のときの左右の段間の幅です。元は 10pt でしたが、2zw にしました。 \columnseprule このスペースの中央に \columnseprule の幅の罫線が引かれます。

```
1081 \ensuremath{\columnsep{2\cwd}} $$1082 \ensuremath{\columnsep{28truebp}} $$1083 \ensuremath{\columnseprule{\cwd}} $$
```

#### ■段落

\lineskip 上下の行の文字が \lineskiplimit より接近したら, \lineskip より近づかないようにし \normallineskip ます。元は 0pt でしたが 1pt に変更しました。normal... の付いた方は保存用です。

 $\label{lineskiplimit} $1084 \end{thmar.} $1085 \end{thmar.} $1085 \end{thmar.} $1086 \end{thmar.} $1086 \end{thmar.} $1086 \end{thmar.} $1086 \end{thmar.} $1087 \e$ 

\baselinestretch 実際の行送りが \baselineskip の何倍かを表すマクロです。たとえば

\renewcommand{\baselinestretch}{2}

とすると、行送りが通常の 2 倍になります。ただし、これを設定すると、たとえ \baselineskip が伸縮するように設定しても、行送りの伸縮ができなくなります。行送りの伸縮はしないのが一般的です。

1088 \renewcommand{\baselinestretch}{}

\parskip \parskip は段落間の追加スペースです。元は 0pt plus 1pt になっていましたが,ここでは \parindent ゼロにしました。\parindent は段落の先頭の字下げ幅です。

1089 \setlength\parskip{\z0}

1090 \if@slide

1091 \setlength\parindent{0\p0}

1092 \else

1093 \setlength\parindent{1\Cwd}

1094 \fi

\@lowpenalty \nopagebreak, \nolinebreak は引数に応じて次のペナルティ値のうちどれかを選ぶよう \@medpenalty になっています。ここはオリジナル通りです。

 $\ensuremath{\verb{\coloredge}}$  \Chighpenalty  $^{1095}$  \Clowpenalty  $^{51}$ 

1096 \@medpenalty 151

1097 \@highpenalty 301

\interlinepenalty 段落中の改ページのペナルティです。デフォルトは0です。

1098 % \interlinepenalty 0

\brokenpenalty ページの最後の行がハイフンで終わる際のペナルティです。デフォルトは 100 です。
1099 % \brokenpenalty 100

## 5.1 ページレイアウト

BXJS ではページレイアウトの処理は geometry パッケージが担当している。

```
\bxjs@bd@pre@geometry@hook begin-document フックのコード内で、geometry パッケージが挿入するコードの直前で実
                                                                                                行されるフック。
                                                                                          1100 \Conlypreamble\bxjsCbdCpreCgeometryChook
                                                                                           1101 \let\bxjs@bd@pre@geometry@hook\@empty
                                                                                                       現状ではここで \mag を設定している。
                                                                                                       \topskip も指定する。
                                                                                          1102 \ifjsc@mag
                                                                                          1103 \mag=\bxjs@param@mag
                                                                                          1104\fi
                                                                                          1105 \setlength{\topskip}{10\p@?}
                                                                                                       \jsSetQHLength のための和文単位の定義。
                                                                                          1106 \def\bxjs@unit@trueQ{0.25truemm}\let\bxjs@unit@trueH\bxjs@unit@trueQ
                                                                                           1107 \ensuremath{\verb|def|bxjs@unit@zw|} \ensuremath{\verb|def|bxjs@unit@zw|} \ensuremath{\verb|def|bxjs@unit@zw|} \ensuremath{\verb|def|bxjs@unit@zw|} \ensuremath{\verb|def|bxjs@unit@zw|} \ensuremath{\verb|def|bxjs@unit@zw|} \ensuremath{\verb|def|bxjs@unit@zw|} \ensuremath{\ensuremath{def|bxjs@unit@zw|}} \ens
                                                                                                       \bxjs@param@paper が長さ指定({W}{H})の場合、geometry の形式(papersize={W,H})
                                                                                                に変換する。
                                                                                          1108 \def\bxjs@tmpdo{\futurelet\bxjs@tmpa\bxjs@tmpdo@a}
                                                                                          1109 \def\bxjs@tmpdo@a{%
                                                                                                           \ifx\bxjs@tmpa\bgroup \expandafter\bxjs@tmpdo@b
                                                                                                              \else \expandafter\bxjs@tmpdo@c \fi}
                                                                                          1112 \def\bxjs@tmpdo@b#1#2#3\@ni1{\edef\bxjs@param@paper{papersize={#1,#2}}}
                                                                                          1113 \def\bxjs@tmpdo@c#1\@nil{\bxjs@tmpdo@d#1,,\@nil}
                                                                                          1114 \def\bxjs@tmpdo@d#1,#2,#3\@nil{%
                                                                                          1115 \ifx\@nil#3\@nil\else \edef\bxjs@param@paper{papersize={#1,#2}}\fi}
                                                                                          1116 \verb|\expandafter\bxjs@tmpdo\bxjs@param@paper\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empty\empt
                           \bxjs@layout@paper geometry の用紙設定のオプション。
                                                                                          1117 \edef\bxjs@layout@paper{%
                                                                                          1118
                                                                                                            \ifjsc@mag truedimen,\fi
                                                                                                              \if@landscape landscape,\fi
                                                                                          1119
                                                                                                              \bxjs@param@paper}
                                                                                          1120
                                                \bxjs@layout geometry のページレイアウトのオプション列。文書クラス毎に異なる。
                                                                                          1121 %<*article|report>
                                                                                          1122 \def\bxjs@layout@base{%
                                                                                                              headheight=\topskip,footskip=0.03367\paperheight,%
                                                                                                               headsep=\footskip-\topskip,includeheadfoot,%
                                                                                          1124
                                                                                          1125 }
                                                                                          1126 \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout@base
                                                                                          1127 hscale=0.76,hmarginratio=1:1,%
                                                                                                              vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
                                                                                          1128
                                                                                          1129 }
```

1130 %</article|report>

```
1132 \def\bxjs@layout@base{%
                    1133 headheight=\topskip,headsep=6\jsc@mmm,nofoot,includeheadfoot,%
                    1134 }
                    1135 \ifbxjs@layout@buggyhmargin
                                                       %---
                    1136 % アレ
                    1137 \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout@base
                         hmargin=36\jsc@mmm,hmarginratio=1:1,%
                          vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
                    1139
                    1140 }
                    1141 \else
                                                       %---
                    1142% 非アレ
                    1143 \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout@base
                    1144 hmargin=18\jsc@mmm,%
                          vscale=0.83, vmarginratio=1:1,%
                    1145
                    1146 }
                    1147 \fi
                                                       %---
                    1148 %</book>
                    1149 %<*slide>
                    1150 \def\bxjs@layout@base{%
                    1151
                          noheadfoot,%
                    1152 }
                    1153 \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout@base
                    1154 hscale=0.9,hmarginratio=1:1,%
                    vscale=0.944,vmarginratio=1:1,%
                    1156 }
                    1157 %</slide>
                        textwidth オプションの設定を反映する。
                    1158 %<*!book>
                    1159 \ifx\bxjs@textwidth@opt\@undefined\else
                         \jsSetQHLength\@tempdima{\bxjs@textwidth@opt}
                          \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout width=\the\@tempdima,}
                    1161
                    1162 \fi
                    1163 %</!book>
                    1164 \ifx\bxjs@number@of@lines@opt\@undefined\else
                          \bxjs@gset@tempcnta{\bxjs@number@of@lines@opt}
                          \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout lines=\the\@tempcnta,}
                    1166
                    1167 \fi
          \fullwidth 〔寸法レジスタ〕ヘッダ・フッタ領域の横幅。
                    1168 \newdimen\fullwidth
\bxjs@textwidth@limit 〔寸法値マクロ〕bxjsbook における、\textwidth 上限の値。
   \jsTextWidthLimit 〔実数値マクロ〕\bxjs@textwidth@limit の全角(\Cwd)単位での値。
                    1169 %<*book>
                    1170 \newcommand\jsTextWidthLimit{40}
                    1171 \@tempdima=\jsTextWidthLimit\Cwd
```

1131 %<\*book>

```
1172 \ifx\bxjs@textwidth@limit@opt\@undefined\else
1173 \bxjs@gset@tempcnta{\bxjs@textwidth@limit@opt}
1174 \@tempdima=\@tempcnta\Cwd
1175 \fi
1176 \ifx\bxjs@textwidth@opt\@undefined\else
1177 \jsSetQHLength\@tempdima{\bxjs@textwidth@opt}
1178 \fi
1179 \edef\bxjs@textwidth@limit{\the\@tempdima}
1180 \ifdim\@tempdima=\jsTextWidthLimit\Cwd\else
1181 \bxjs@invscale\@tempdima{\strip@pt\Cwd}
1182 \long\edef\jsTextWidthLimit{\strip@pt\@tempdima}
1183 \fi
```

\bxjs@preproc@layout geometry の前処理。

1184 %</book>

geometry は \topskip が標準の行高(\ht\strutbox) より小さくならないようにする 自動調整を行うが、これをどうするかは未検討。今のところ、単純に回避(無効化)して いる。

1185 \def\bxjs@preproc@layout{%

1186 \edef\bxjs@save@ht@strutbox{\the\ht\strutbox}\ht\strutbox=10\jsc@mpt}

\bxjs@postproc@layout geometry の後処理。

1187 \def\bxjs@postproc@layout{%

geometry のドライバを再設定する。

- 1188 \ifx\bxjs@geometry@driver\relax\else
- 1189 \let\Gm@driver\bxjs@geometry@driver
- 1190 \fi

\ht\strutbox の値を元に戻す。

1191 \ht\strutbox=\bxjs@save@ht@strutbox\relax

\textwidth の値を補正する。

- 1192 \ifbxjs@whole@zw@lines
- 1193 \@tempdimb=\textwidth
- \lifetwocolumn \@tempdima=2\Cwd \else \@tempdima=1\Cwd \fi
- 1195 \advance\textwidth.005pt\relax
- 1196 \divide\textwidth\@tempdima \multiply\textwidth\@tempdima
- 1197 \advance\@tempdimb-\textwidth
- 1198 \advance\oddsidemargin 0.5\@tempdimb
- 1199 \advance\evensidemargin 0.5\@tempdimb
- 1200 \fi
- $1201 \quad \verb|\fullwidth=\textwidth|$

bxjsbook の場合は、geometry が設定した \textwidth は \fullwidth として扱い、その値から実際の \textwidth を導出する。

1202 %<\*book>

- 1203 \@tempdima=\bxjs@textwidth@limit\relax
- 1204 \ifbxjs@whole@zw@lines

```
\advance\@tempdima.005pt\relax
                         \divide\@tempdima\Cwd \multiply\@tempdima\Cwd
                 1206
                  1207
                       \ifdim\textwidth>\@tempdima
                 1208
                         \textwidth=\@tempdima
                  1209
                         \addtolength\evensidemargin{\fullwidth-\textwidth}
                  1210
                 1211
                       \fi
                 1212 %</book>
                   \textheight 関連の調整。
                 1213
                       \@tempdimb=\textheight
                       \advance\textheight-\topskip
                       \advance\textheight.005pt\relax
                 1215
                       \divide\textheight\baselineskip \multiply\textheight\baselineskip
                 1216
                  1217
                       \advance\textheight\topskip
                       \advance\@tempdimb-\textheight
                 1218
                 1219
                       \advance\topmargin0.5\@tempdimb
                   \headheight 関連の調整。
                       \@tempdima=\topskip
                 1220
                        \advance\headheight\@tempdima
                 1221
                 1222
                       \advance\topmargin-\@tempdima
                   marginpar 関連の調整。
                       \setlength\marginparsep{\columnsep}
                 1223
                  1224
                       \setlength\marginparpush{\baselineskip}
                       \setlength\marginparwidth{\paperwidth-\oddsidemargin-1truein%
                 1225
                  1226
                           -\textwidth-10\jsc@mmm-\marginparsep}
                       \ifbxjs@whole@zw@lines
                  1227
                         \divide\marginparwidth\Cwd \multiply\marginparwidth\Cwd
                 1228
                 1229
                       \fi
                   連動する変数。
                       \maxdepth=.5\topskip
                 1230
                       \stockwidth=\paperwidth
                       \stockheight=\paperheight
                 1232
                  1233 }
                   geometry パッケージに渡すオプションのリスト。
\jsGeometryOptions
                   ※geometry=user 指定時にユーザが利用することを想定している。
                  1234 \edf\jsGeometryOptions{%}
                 1235
                      \bxjs@layout@paper,\bxjs@layout}
                   ■geometry パッケージを読み込む 彎
```

1205

geoemtry=class の場合に、実際に geometry パッケージを読みこむ。 1236 \ifx\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class

geometry のドライバオプション指定。nopapersize 指定時は、special 命令出力を抑止 するためにドライバを none にする。そうでない場合は、クラスで指定したドライバオプ ションが引き継がれるので何もしなくてよいが、例外として、ドライバが dvipdfmx の時 は、現状の geometry は dvipdfm を指定する必要がある。

```
1237 \ifbxjs@papersize
     \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx
       \PassOptionsToPackage{dvipdfm}{geometry}
1239
     \else\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode
       \PassOptionsToPackage{dvipdfm}{geometry}
1241
1242
     \fi\fi
     \let\bxPapersizeSpecialDone=t
1243
1244 \else
     \PassOptionsToPackage{driver=none}{geometry}
1246 \fi
   ここで geometry を読み込む。
 ※geometry の begin-document フックにおいて、LuaTFX の旧版互換を有効にする。
1247 \AtBeginDocument{\bxjs@bd@pre@geometry@hook}
1248 \AtBeginDocument{\ImposeOldLuaTeXBehavior}
1249 \bxjs@preproc@layout
1250 \edef\bxjs@next{%
     \noexpand\RequirePackage[\bxjs@layout@paper,\bxjs@layout]{geometry}%
1252 }\bxjs@next
```

\bxjs@geometry@driver geometry が用いるドライバの名前。

※この値は一度決めた後は変わってほしくないので、\bxjs@postproc@layout において書 き戻す処理を入れている。

1254 \let\bxjs@geometry@driver\Gm@driver

1255 \bxjs@postproc@layout

geometry のドライバ自動判別に対する前処理。

1256 \g@addto@macro\bxjs@bd@pre@geometry@hook{%

1253 \AtBeginDocument{\RevokeOldLuaTeXBehavior}

geometry の 4.x 版に関する対策。

%geometry の 4.x 版の使用は BXJS 1.2 版より非推奨とし、2.0 版でサポートを廃止する 予定。

```
\@ifpackagelater{geometry}{2010/02/12}{}{\%else
1257
          \PackageWarningNoLine\bxjs@clsname
1258
           {The 'geometry' package installed\MessageBreak
1259
            is too old (< v5.0)}%
1260
          \if x\jsEngine \ifnum\mag=\@m\else
1261
1262
            \def\bxjs@Gm@driver{pdftex}
            \ifx\pdfhorigin\@undefined \newdimen\pdfhorigin \fi
1263
            \ifx\pdfvorigin\@undefined \newdimen\pdfvorigin \fi
1264
          fi\fi}
1265
```

エンジンが platex-ng の時は geometry のドライバを pdftex にする。

```
1266
                      \ifjsWithpTeXng
              1267
                        \ifx\Gm@driver\@empty
              1268
                          \def\Gm@driver{pdftex}%
              1269
                        \fi
                      \fi}
              1270
\setpagelayout ページレイアウト設定のためのユーザ命令。
              1271 \def\setpagelayout{%
                    \bxjs@ifplus{\bxjs@setpagelayout@a\tw@}{%else
                      \@ifstar{\bxjs@setpagelayout@a\@ne}{\bxjs@setpagelayout@a\z@}}}
              1273
              1274 \def\bxjs@setpagelayout@a#1#2{%
                    \ifcase#1% modify
              1275
                      \def\bxjs@next{\ifjsc@mag truedimen,\fi #2}%
              1276
              1277
                    \or% reset(*)
                      \def\bxjs@next{reset,\bxjs@layout@paper,#2}%
              1278
                    \or% semireset(+)
              1279
              1280
                      \def\bxjs@next{reset,\bxjs@layout@paper,\bxjs@layout@base,#2}%
                    \fi
              1281
              1282
                    \bxjs@preproc@layout
              1283
                    \edef\bxjs@next{%
                      \noexpand\geometry{\bxjs@next}%
              1284
              1285
                    }\bxjs@next
                    \bxjs@postproc@layout}
              1286
```

## ■geometry パッケージを読み込まない 彎

geometry=user の場合の処理。

 $1287 \verb|\else| ifx\bxjs@geometry\bxjs@geometry\curred{one}$ 

この場合はユーザが何らかの方法(例えば geometry を読み込む)でページレイアウトを設定する必要がある。もし、本体開始時に \textwidth がカーネル設定の値(.5\maxdimen)のままになっている場合はエラーを出す。

※\jsUseMinimalPageLayout は動作テスト用。

```
1288 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
     \ifdim\textwidth=.5\maxdimen
1289
1290
        \ClassError\bxjs@clsname
         {Page layout is not properly set}%
1291
         {\del{chd}}%
1292
1294 \def\jsUseMinimalPageLayout{%
     \setlength{\textwidth}{6.5in}%
1295
      \setlength{\textheight}{8in}}
   \setpagelayout はとりあえず無効にしておく。
1297 \let\bxjs@geometry@driver\relax
1298 \def\setpagelayout{%
     \bxjs@ifplus{\bxjs@pagelayout@a}{%else
```

```
1300
        \@ifstar{\bxjs@pagelayout@a}{\bxjs@pagelayout@a}}}
1301 \def\bxjs@pagelayout@a#1{%
     \ClassError\bxjs@clsname
       {Command '\string\setpagelayout' is not supported,\MessageBreak
1303
        because 'geometry' value is not 'class'}\@eha}
1304
1305 %
1306 \fi\fi
```

#### ■JS クラスと共通処理の開始 灣

ここからのコードは以下の点を除いて JS クラスのものを踏襲する。

- zw の代わりに \jsZw を用いる。
- article/report/book/slide の切り分けの処理が異なる。

※ diff が崩壊するのを避けるためオリジナルのコードを無効化した状態で挿入しておく。

1307 %<\*jsclasses>

#### ■縦方向のスペース

\headheight \topskip は本文領域上端と本文1行目のベースラインとの距離です。あまりぎりぎりの値 \topskip にすると、本文中に ∫ のような高い文字が入ったときに 1 行目のベースラインが他のペー ジより下がってしまいます。ここでは本文の公称フォントサイズ(10pt)にします。

> [2003-06-26] \headheight はヘッダの高さで、元は12pt でしたが、新ドキュメントクラ スでは \topskip と等しくしていました。ところが、fancyhdr パッケージで \headheight が小さいとおかしいことになるようですので、2倍に増やしました。代わりに、版面の上下 揃えの計算では \headheight ではなく \topskip を使うことにしました。

> [2016-08-17] 圏点やルビが一行目に来た場合に下がるのを防ぐため、\topskip を 10pt から 1.38zw に増やしました。\headheight は従来と同じ 20pt のままとします。

```
1308 \setlength\topskip{1.38zw}\% from 10\jsc@mpt (2016-08-17)
```

 $1309 \footnote{off}$ 

1310 \setlength\headheight{0\jsc@mpt}

1312 \setlength\headheight{20\jsc@mpt}\% from 2\topskip (2016-08-17); from \topskip (2003-06-26)

1313 \fi

\footskip \footskip は本文領域下端とフッタ下端との距離です。標準クラスファイルでは, book で 0.35in (約8.89mm), book 以外で30pt (約10.54mm) となっていましたが,ここではA4 判のときちょうど 1cm となるように、\paperheight の 0.03367 倍 (最小 \baselineskip) としました。書籍については、フッタは使わないことにして、ゼロにしました。

```
1314 %<*article|kiyou>
```

1315 \if@slide

```
1316
      \setlength\footskip{0pt}
1317 \else
1318
      \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
      \ifdim\footskip<\baselineskip
1319
        \setlength\footskip{\baselineskip}
1321
      \fi
1322 \fi
1323 %</article|kiyou>
1324 %<jspf>\setlength\footskip{9\jsc@mmm}
1325 %<*book>
1326 \if@report
      \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
1327
      \ifdim\footskip<\baselineskip
        \setlength\footskip{\baselineskip}
1329
1330
1331 \else
      \setlength\footskip{0pt}
1332
1333 \fi
1334 %</book>
1335 %<*report>
1336 \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
1337 \ifdim\footskip\baselineskip
1338
     \setlength\footskip{\baselineskip}
1339 \fi
1340 %</report>
```

\headsep \headsep はヘッダ下端と本文領域上端との距離です。元は book で 18pt (約 6.33mm), それ以外で 25pt (約 8.79mm) になっていました。ここでは article は \footskip - \topskip としました。

[2016-10-08] article の slide のとき、および book の非 report と kiyou のときに \headsep を減らしそこねていたのを修正しました(2016-08-17 での修正漏れ)。

```
1341 %<*article>
1342 \footnote{off}
1343
     \setlength\headsep{0\jsc@mpt}
     \dot{addtolength} \end{constraint} \ added (2016-10-08)
     1345
1346 \else
1347
     \setlength\headsep{\footskip}
     \addtolength\headsep{-\topskip}
1348
1349 \fi
1350 %</article>
1351 %<*book>
1352 \if@report
     \setlength\headsep{\footskip}
1353
1354
     \addtolength\headsep{-\topskip}
1355 \else
     \setlength\headsep{6\jsc@mmm}
1356
     \dot{addtolength}\end{constraint} \ added (2016-10-08)
```

```
1359 \fi
1360 %</book>
1361 %<*report>
1362 \setlength\headsep{\footskip}
1363 \addtolength\headsep{-\topskip}
1364 %</report>
1365 %<*jspf>
1366 \setlength\headsep{9\jsc@mmm}
1367 \addtolength\headsep{-\topskip}
```

 $\dot{addtolength}\$  added (2016-10-08)

1368 %</jspf>

1369 %<\*kiyou>

 $1370 \stlength\headheight{0\jsc@mpt}$ 

1371 \setlength\headsep{0\jsc@mpt}

1372 \addtolength\headsep{-\topskip}\% added (2016-10-08)

1373 \addtolength\headsep{10\jsc@mpt}\% added (2016-10-08)

1374 %</kiyou>

\maxdepth \maxdepth は本文最下行の最大の深さで、plain T<sub>E</sub>X や IAT<sub>E</sub>X 2.09 では 4pt に固定でした。IAT<sub>E</sub>X2e では \maxdepth + \topskip を本文フォントサイズの 1.5 倍にしたいのですが、\topskip は本文フォントサイズ(ここでは 10pt)に等しいので、結局 \maxdepth は \topskip の半分の値(具体的には 5pt)にします。

1375 \setlength\maxdepth{.5\topskip}

## ■本文の幅と高さ

\fullwidth 本文の幅が全角 40 文字を超えると読みにくくなります。そこで、書籍の場合に限って、紙の幅が広いときは外側のマージンを余分にとって全角 40 文字に押え、ヘッダやフッタは本文領域より広く取ることにします。このときヘッダやフッタの幅を表す \fullwidth という長さを定義します。

1376 \newdimen\fullwidth

この \fullwidth は article では紙幅 \paperwidth の 0.76 倍を超えない全角幅の整数倍(二段組では全角幅の偶数倍)にします。 0.76 倍という数値は A4 縦置きの場合に紙幅から約 2 インチを引いた値になるように選びました。 book では紙幅から 36 ミリを引いた値にしました。

\textwidth 書籍以外では本文領域の幅 \textwidth は \fullwidth と等しくします。article では A4 縦置きで 49 文字となります。某学会誌スタイルでは 50zw(25 文字  $\times 2$  段)+段間 8mm とします。

1377 %<\*article>

 $1378 \setminus if@slide$ 

1379 \setlength\fullwidth{0.9\paperwidth}

1380 \else

1381 \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}

1382 \fi

1383 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi

```
1384 \divide\fullwidth\@tempdima \multiply\fullwidth\@tempdima
1385 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1386 %</article>
1387 %<*book>
1388 \if@report
      \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}
1390 \else
      \setlength\fullwidth{\paperwidth}
      1392
1394 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi
1395 \divide\fullwidth\@tempdima \multiply\fullwidth\@tempdima
1396 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1397 \if@report \else
     \if@twocolumn \else
1398
        \ifdim \fullwidth>40zw
1399
          \setlength\textwidth{40zw}
1400
1401
1402
     \fi
1403 \fi
1404 %</book>
1405 %<*report>
1406 \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}
1407 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi
1408 \divide\fullwidth\@tempdima \multiply\fullwidth\@tempdima
1409 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1410 %</report>
1411 %<*jspf>
1412 \setlength\fullwidth{50zw}
1413 \addtolength\fullwidth{8\jsc@mmm}
1414 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1415 %</jspf>
1416 %<*kiyou>
1417 \setlength\fullwidth{48zw}
1418 \verb|\addtolength\fullwidth{\columnsep}|
1419 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1420 %</kiyou>
```

\textheight 紙の高さ \paperheight は、1 インチと \topmargin と \headheight と \headsep と \textheight と \footskip とページ下部の余白を加えたものです。

本文部分の高さ \textheight は、紙の高さ \paperheight の 0.83 倍から、ヘッダの高さ、ヘッダと本文の距離、本文とフッタ下端の距離、\topskip を引き、それを \baselineskip の倍数に切り捨て、最後に \topskip を加えます。念のため 0.1 ポイント余分に加えておきます。0.83 倍という数値は、A4 縦置きの場合に紙の高さから上下マージン各約 1 インチを引いた値になるように選びました。

某学会誌スタイルでは44行にします。

[2003-06-26] \headheight を \topskip に直しました。以前はこの二つは値が同じで

あったので,変化はないはずです。

[2016-08-26] \topskip を 10pt から 1.38zw に増やしましたので,その分 \textheight を増やします(2016-08-17 での修正漏れ)。

[2016-10-08] article の slide のときに \headheight はゼロなので、さらに修正しました  $(2016-08-17\$ での修正漏れ)。

```
1421 %<*article|book|report>
```

 $1422 \if@slide$ 

1423 \setlength{\textheight}{0.95\paperheight}

1424 \else

1425 \setlength{\textheight}{0.83\paperheight}

1426 \fi

1427 \addtolength{\textheight}{-10\jsc@mpt}\% from -\topskip (2016-10-08); from -\headheight (2003-06-26)

 $1428 \addtolength{\text{textheight}}{-\headsep}$ 

 $1429 \addtolength{\text{-\footskip}}$ 

 $1430 \addtolength{\text{textheight}}{-\topskip}$ 

 $1431 \det \text{textheight}$ 

1432 \multiply\textheight\baselineskip

1433 %</article|book|report>

1434 %<jspf>\setlength{\textheight}{51\baselineskip}

1435 %<kiyou>\setlength{\textheight}{47\baselineskip}

 $1436 \addtolength{\text{textheight}}{\text{topskip}}$ 

 $1437 \addtolength{\text{textheight}}{0.1\jsc@mpt}$ 

1438 %<jspf>\setlength{\mathindent}{10\jsc@mmm}

\flushbottom [2016-07-18] \textheight に念のため 0.1 ポイント余裕を持たせているのと同様に、 \flushbottom にも余裕を持たせます。元の  $ext{IMT}_{ ext{EX}} 2_{arepsilon}$  での完全な \flushbottom の定義は

\def\flushbottom{%

\let\@textbottom\relax \let\@texttop\relax}

ですが,次のようにします。

1439 \def\flushbottom{%

 $1440 $$ \def\@textbottom{\vskip \z@ \@plus.1\jsc@mpt}% $$$ 

1441 \let\@texttop\relax}

\marginparsep \marginparsep は欄外の書き込みと本文との間隔です。\marginparpush は欄外の書き込 \marginparpush みどうしの最小の間隔です。

1442 \setlength\marginparsep{\columnsep}

1443 \setlength\marginparpush{\baselineskip}

\oddsidemargin それぞれ奇数ページ,偶数ページの左マージンから 1 インチ引いた値です。片面印刷では \evensidemargin が使われます。 $T_EX$  は上・左マージンに 1truein を挿入しますが,トン ボ関係のオプションが指定されると  $pIAT_EX 2_{\varepsilon}$  (plcore.ltx) はトンボの内側に 1in のスペース(1truein ではなく)を挿入するので,場合分けしています。

 $1444 \verb|\codsidemargin|{\paperwidth}|$ 

```
1445 \addtolength{\oddsidemargin}{-\fullwidth}
                              1446 \setlength{\oddsidemargin}{.5\oddsidemargin}
                              1447 \iftombow
                                          \addtolength{\oddsidemargin}{-1in}
                              1448
                              1449 \else
                                         \addtolength{\oddsidemargin}{-\inv@mag in}
                              1451 \fi
                              1452 \ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath
                              1453 \if@mparswitch
                                        \addtolength{\evensidemargin}{\fullwidth}
                                          \addtolength{\evensidemargin}{-\textwidth}
                              1455
                              1456 \fi
\marginparwidth \marginparwidth は欄外の書き込みの横幅です。外側マージンの幅(\evensidemargin +
                                 1インチ) から1センチを引き, さらに \marginparsep (欄外の書き込みと本文のアキ)を
                                  引いた値にしました。最後に1zwの整数倍に切り捨てます。
                              1457 \setlength\marginparwidth{\paperwidth}
                              1458 \addtolength\marginparwidth{-\oddsidemargin}
                              1459 \addtolength\marginparwidth{-\inv@mag in}
                              1460 \verb| \addtolength\marginparwidth{-\textwidth}|
                              1461 \addtolength\marginparwidth{-10\jsc@mmm}
                              1462 \addtolength\marginparwidth{-\marginparsep}
                              1463 \@tempdima=1zw
                              1464 \divide\marginparwidth\@tempdima
                              1465 \mbox{ multiply}\mbox{marginparwidth}\
         \topmargin 上マージン(紙の上端とヘッダ上端の距離)から1インチ引いた値です。
                                      [2003-06-26] \headheight を \topskip に直しました。以前はこの二つは値が同じで
                                  あったので,変化はないはずです。
                                     [2016-08-17] \topskip を 10pt から 1.38zw に直しましたが、\topmargin は従来の値か
                                  ら変わらないように調節しました。…のつもりでしたが、\textheight を増やし忘れてい
                                  たので変わってしまっていました(2016-08-26 修正済み)。
                              1466 \setlength\topmargin{\paperheight}
                              1467 \addtolength\topmargin{-\textheight}
                              1468 \if@slide
                              1469 \addtolength\topmargin{-\headheight}
                              1470 \else
                                        \addtolength\topmargin{-10\jsc@mpt}\% from -\topskip (2016-10-08); from -
                                      \headheight (2003-06-26)
                              1472 \fi
                              1473 \addtolength \topmargin {-\headsep}
                              1474 \addtolength \topmargin{-\footskip}
                              1475 \setlength\topmargin{0.5\topmargin}
                              1476 %<kiyou>\setlength\topmargin{81truebp}
                              1477 \iftombow
                              1478 \addtolength\topmargin{-1in}
```

1479 \else

1480 \addtolength\topmargin{-\inv@mag in}

1481 \fi

1482 %</jsclasses>

#### ■脚注

\footnotesep 各脚注の頭に入る支柱(strut)の高さです。脚注間に余分のアキが入らないように, **\footnotesize** の支柱の高さ(行送りの 0.7 倍)に等しくします。

ここは元々は

 ${\c tootnotesize \global \setlength \footnotesep \hase lineskip}\}$ 

としていたが、そもそも \global\setlength~ は calc 使用時には有意義な動作をしない。 \global\footnotesep だと所望の値が得られるが、同時に \footnotesize のフォントを 固定させてしまうという副作用をもつ。なので、実際の設定値を直接使うことにする。

1483 \footnotesep=11\p@? \footnotesep=0.7\footnotesep

\footins \skip\footins は本文の最終行と最初の脚注との間の距離です。標準の 10 ポイントクラス では 9 plus 4 minus 2 ポイントになっていますが、和文の行送りを考えてもうちょっと大 きくします。

1484 \setlength{\skip\footins}{16\p0? \@plus 5\p0? \@minus 2\p0?}

■フロート関連 フロート(図,表)関連のパラメータは IATeX 2 本体で定義されています が、ここで設定変更します。本文ページ(本文とフロートが共存するページ)とフロートだ けのページで設定が異なります。ちなみに、カウンタは内部では \co を名前に冠したマクロ になっています。

\c@topnumber topnumber カウンタは本文ページ上部のフロートの最大数です。

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

1485 \setcounter{topnumber}{9}

\topfraction 本文ページ上部のフロートが占有できる最大の割合です。フロートが入りやすいように、元 の値 0.7 を 0.8 [2003-08-23: 0.85] に変えてあります。

 $1486 \mbox{ } \mbox{renewcommand{\topfraction}{.85}}$ 

\c@bottomnumber bottomnumber カウンタは本文ページ下部のフロートの最大数です。

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

1487 \setcounter{bottomnumber}{9}

\bottomfraction 本文ページ下部のフロートが占有できる最大の割合です。元は 0.3 でした。

1488 \renewcommand{\bottomfraction}{.8}

\c@totalnumber totalnumber カウンタは本文ページに入りうるフロートの最大数です。

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

1489 \setcounter{totalnumber}{20}

\textfraction 本文ページに最低限入らなければならない本文の割合です。フロートが入りやすいように元の 0.2 を 0.1 に変えました。

1490 \renewcommand{\textfraction}{.1}

\floatpagefraction フロートだけのページでのフロートの最小割合です。これも 0.5 を 0.8 に変えてあります。  $1491 \renewcommand{floatpagefraction}{.8}$ 

\c@dbltopnumber 二段組のとき本文ページ上部に出力できる段抜きフロートの最大数です。 [2003-08-23] ちょっと増やしました。

1492 \setcounter{dbltopnumber}{9}

\dbltopfraction 二段組のとき本文ページ上部に出力できる段抜きフロートが占めうる最大の割合です。0.7 を 0.8 に変えてあります。

1493 \renewcommand{\dbltopfraction}{.8}

\dblfloatpagefraction 二段組のときフロートだけのページに入るべき段抜きフロートの最小割合です。0.5 を 0.8 に変えてあります。

1494 \renewcommand{\dblfloatpagefraction}{.8}

\floatsep \floatsep はページ上部・下部のフロート間の距離です。\textfloatsep はページ上部・\textfloatsep 下部のフロートと本文との距離です。\intextsep は本文の途中に出力されるフロートと本\intextsep 文との距離です。

\dblfloatsep 二段組のときの段抜きのフロートについての値です。

 $\label{thm:continuous} $$ \dbltextfloatsep 1498 \etlength dblfloatsep {12\p0? \quare 2\p0? \quare 2\p0? \quare 4\p0?} $$ 1499 \etlength dbltextfloatsep {20\p0? \quare 2\p0? \quare 4\p0?} $$$ 

\@fptop フロートだけのページに入るグルーです。\@fptop はページ上部, \@fpbot はページ下部,

\@fpsep \@fpsep はフロート間に入ります。 \@fpbot 1500 \setlength\@fptop{0\p@? \@plus 1fil}

 $1501 \ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath$ 

1502 \setlength\@fpbot{0\p@? \@plus 1fil}

\@dblfptop 段抜きフロートについての値です。

1505 \setlength\@dblfpbot{0\p@? \@plus 1fil}

# 6 改ページ(日本語 TFX 開発コミュニティ版のみ)

\pltx@cleartorightpage [2017-02-24] コミュニティ版 pLFTEX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて,同じ命令を追\pltx@cleartoleftpage 加しました。

\pltx@cleartooddpage

\pltx@cleartoevenpage

```
1. \pltx@cleartorightpage:右ページになるまでページを繰る命令
    2. \pltx@cleartoleftpage: 左ページになるまでページを繰る命令
    3. \pltx@cleartooddpage: 奇数ページになるまでページを繰る命令
    4. \pltx@cleartoevenpage: 偶数ページになるまでページを繰る命令
  となっています。
1506 %\def\pltx@cleartorightpage{\clearpage\if@twoside
1507 % \ifodd\c@page
1508 %
        \iftdir
1509 %
          \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1510 %
          \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1511 %
        \fi
1512 % \else
1513 %
        \ifydir
1514 %
          \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1515 %
          \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1516 %
        \fi
1517 % \fi\fi}
1518 %\def\pltx@cleartoleftpage{\clearpage\if@twoside
1519 % \ifodd\c@page
        \ifydir
1520 %
1521 %
          \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1522 %
          \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1523 %
        \fi
1524 % \else
        \iftdir
1525 %
          \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1526 %
1527 %
          \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1528 %
        \fi
1529 % \fi\fi}
1530 \def\pltx@cleartooddpage{\clearpage\if@twoside
     \ifodd\c@page\else
1531
1532
       \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
       \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1533
1534
     \fi\fi}
1535 \def\pltx@cleartoevenpage{\clearpage\if@twoside
     \ifodd\c@page
1536
1537
       \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
       \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1538
1539
     \fi\fi}
```

BXJS クラスでは \iftdir 等が使えないので、横組を仮定した定義を用いる。

```
1540 \let\pltx@cleartorightpage\pltx@cleartooddpage
1541 \let\pltx@cleartoleftpage\pltx@cleartoevenpage
```

\cleardoublepage [2017-02-24] コミュニティ版 pIATFX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて, report と book

クラスの場合に\cleardoublepage を再定義します。

1542 %<\*book|report>

1543 \if@openleft

1544 \let\cleardoublepage\pltx@cleartoleftpage

1545 \else\if@openright

1547 \fi\fi

1548 %</book|report>

## 7 ページスタイル

ページスタイルとして、IFTEX  $2_{\varepsilon}$ (欧文版)の標準クラスでは empty, plain, headings, myheadings があります。このうち empty, plain スタイルは IFTEX  $2_{\varepsilon}$  本体で定義されています。

アスキーのクラスファイルでは headnombre, footnombre, bothstyle, jpl@in が追加 されていますが, ここでは欧文標準のものだけにしました。

ページスタイルは \ps0... の形のマクロで定義されています。

\@evenhead \@oddhead, \@oddfoot, \@evenhead, \@evenfoot は偶数・奇数ページの柱(ヘッダ, \@oddhead フッタ)を出力する命令です。これらは \fullwidth 幅の \hbox の中で呼び出されます。 \@evenfoot \ps@... の中で定義しておきます。

\@oddfoot

柱の内容は、\chapter が呼び出す \chaptermark{何々}、\section が呼び出す \sectionmark{何々} で設定します。柱を扱う命令には次のものがあります。

\markboth{左}{右} 両方の柱を設定します。

\markright{右}右の柱を設定します。\leftmark左の柱を出力します。\rightmark右の柱を出力します。

柱を設定する命令は、右の柱が左の柱の下位にある場合は十分まともに動作します。たとえば左マークを \chapter、右マークを \section で変更する場合がこれにあたります。しかし、同一ページに複数の \markboth があると、おかしな結果になることがあります。

\tableofcontents のような命令で使われる \@mkboth は, \ps@... コマンド中で \markboth か \@gobbletwo (何もしない) に \let されます。

\ps@empty empty ページスタイルの定義です。 $\LaTeX$  本体で定義されているものをコメントアウトした形で載せておきます。

 $1549\,\%\ \ensuremath{\mbox{\sc def\ps@empty}}\$ 

1550 % \let\@mkboth\@gobbletwo

1551 % \let\@oddhead\@empty

1552 % \let\@oddfoot\@empty

1553 % \let\@evenhead\@empty

1554 % \let\@evenfoot\@empty}

```
\ps@plainhead plainhead はシンプルなヘッダだけのページスタイルです。
               plainfoot はシンプルなフッタだけのページスタイルです。
\ps@plainfoot
               plain は book では plainhead, それ以外では plainfoot になります。
   \ps@plain
           1555 \def\ps@plainfoot{%
                \let\@mkboth\@gobbletwo
           1556
                 \let\@oddhead\@empty
           1557
                 \def\@oddfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}%
           1558
                \let\@evenhead\@empty
                \let\@evenfoot\@oddfoot}
           1560
           1561 \def\ps@plainhead{%
                \let\@mkboth\@gobbletwo
                 \let\@oddfoot\@empty
           1563
                 \let\@evenfoot\@empty
           1564
           1565
                \def\@evenhead{%
                  \if@mparswitch \hss \fi
           1566
           1567
                   \hbox to \fullwidth{\textbf{\thepage}\hfil}%
                  \if@mparswitch\else \hss \fi}%
           1568
           1569
                 \def\@oddhead{%
                   \hbox to \fullwidth{\hfil\textbf{\thepage}}\hss}}
           1570
           1571 %<book>\let\ps@plain\ps@plainhead
           1572 %<!book>\let\ps@plain\ps@plainfoot
\ps@headings headings スタイルはヘッダに見出しとページ番号を出力します。ここではヘッダにアン
             ダーラインを引くようにしてみました。
               まず article の場合です。
           1573 %<*article|slide>
           1574 \if@twoside
                \def\ps@headings{%
           1575
                  \let\@oddfoot\@empty
           1576
                  \let\@evenfoot\@empty
           1577
           1578
                  \def\@evenhead{\if@mparswitch \hss \fi
                    \underline{\hbox to \fullwidth{\textbf{\thepage}\hfil\leftmark}}%
           1579
                    \if@mparswitch\else \hss \fi}%
                  \def\@oddhead{%
           1581
           1582
                    \underline{%
                      \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
           1583
                   \let\@mkboth\markboth
           1584
                   \def\sectionmark##1{\markboth{%
           1585
                     1586
           1587
                     ##1}{}}%
           1588
                   \def\subsectionmark##1{\markright{%
                     1589
                     ##1}}%
           1590
           1591
           1592 \text{ } \text{lse } \text{\%} if not twoside
                \def\ps@headings{%
           1593
                  \let\@oddfoot\@empty
           1594
                   \def\@oddhead{%
           1595
```

```
1596 \underline{%
1597 \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
1598 \let\@mkboth\markboth
1599 \def\sectionmark##1{\markright{%}
1600 \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \bxjs@label@sect{section}\hskip1\jsZw\fi
1601 ##1}}
1602 \fi
1603 %</article|slide>
```

次は book および report の場合です。[2011-05-10] しっぽ愛好家さん [qa:6370] のパッチを取り込ませていただきました(北見さん [qa:55896] のご指摘ありがとうございます)。

\autoxspacing は未定義の可能性があるため、「\autoxspacing が定義済なら実行する」マクロ \bxjs@maybe@autoxspacing を代わりに用いる。

```
1604 %<*book|report>
1605 \def\bxjs@maybe@autoxspacing{%
     \ifx\autoxspacing\@undefined\else \autoxspacing \fi}
1607 \neq 1607
1608 \def\ps@headings{%
     \let\@oddfoot\@empty
     \let\@evenfoot\@empty
1610
     \def\@evenhead{%
1611
       \if@mparswitch \hss \fi
1612
       \underline{\hbox to \fullwidth{\bxjs@maybe@autoxspacing}
1613
1614
            \textbf{\thepage}\hfil\leftmark}}%
       \if@mparswitch\else \hss \fi}%
1615
      \def\@oddhead{\underline{\hbox to \fullwidth{\bxjs@maybe@autoxspacing}
1616
1617
            \label{leftmark} $$ \left( \frac{\pi \kappa}{\pi \kappa}\right) \ fil\textbf{\theta}}\) $$
1618
      \let\@mkboth\markboth
      \def\chaptermark##1{\markboth{%
1620
       \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1621
         \if@mainmatter
1622
            \if@omit@number\else
             \verb|\chappos\hskip1\jsZw| \\
1623
           \fi
1624
         \fi
1625
        \fi
1626
       ##1}{}}%
      \def\sectionmark##1{\markright{%
1628
        1629
       ##1}}}%
1630
1631 %</book|report>
   最後は学会誌の場合です。
1632 %<*jspf>
1633 \ensuremath{\mbox{\mbox{def}\ps@headings}}\%
     \def\@oddfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
```

```
1635 \def\@evenfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
1636 \def\@oddhead{\normalfont\hfil \@title \hfil}
1637 \def\@evenhead{\normalfont\hfil プラズマ・核融合学会誌\hfil}}
1638 %</jspf>
```

\ps@myheadings myheadings ページスタイルではユーザが \markboth や \markright で柱を設定するため, ここでの定義は非常に簡単です。

[2004-01-17] 渡辺徹さんのパッチを適用しました。

```
1639 \def\ps@myheadings{%
     \let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty
    \def\@evenhead{%
1641
1642
        \if@mparswitch \hss \fi%
        \hbox to \fullwidth{\thepage\hfil\leftmark}%
1643
1644
        \if@mparswitch\else \hss \fi}%
     \def\@oddhead{%
1645
       \hbox to \fullwidth{\rightmark\hfil\thepage}\hss}%
1646
1647 \let\@mkboth\@gobbletwo
1648 % <book | report > \let\chaptermark \ 0 gobble
1649 \let\sectionmark\@gobble
1650 %<!book&!report> \let\subsectionmark\@gobble
1651 }
```

# 8 文書のマークアップ

## 8.1 表題

\title これらは  $\LaTeX$  本体で次のように定義されています。ここではコメントアウトした形で示し\author ます。

\subtitle 副題を設定する。

\jsSubtitle ※プレアンブルにおいて \newcommand\*{\subtitle}{...} が行われることへの対策として、\subtitle の定義を \title の実行まで遅延させることにする。もしどうしても主題より前に副題を設定したい場合は、\jsSubtitle 命令を直接用いればよい。

本体を \jsSubtitle として定義する。

```
1656 \mbox{\scale=} [1] {\gdef\bxjs@subtitle{#1}} \\ 1657 \mbox{\scale=} [1] {\gdef\bxjs@subtitle{$1$}} \\ 1657 \mbox{\scale=} [1] {\gdef\bxjs@sub
```

\title にフックを入れる。

```
1658 \verb| renewcommand*{ \{ title \} [1] { \{ bxjs@decl@subtitle \} } }
```

1659 \AtBeginDocument{\bxjs@decl@subtitle}

1660 \def\bxjs@decl@subtitle{%

```
\global\let\bxjs@decl@subtitle\relax
                                                  1662
                                                              \ifx\subtitle\@undefined
                                                  1663
                                                                 \global\let\subtitle\jsSubtitle
                                                  1664
                                                             \fi}
\bxjs@annihilate@subtitle \subtitle 命令を無効化する。
                                                     ※独自の\subtitle が使われている場合は無効化しない。
                                                  1665 \def\bxjs@annihilate@subtitle{%
                                                              \ifx\subtitle\jsSubtitle \global\let\subtitle\relax \fi
                                                  1667
                                                              \global\let\jsSubtitle\relax}
                                   \etitle 某学会誌スタイルで使う英語のタイトル,英語の著者名,キーワード,メールアドレスです。
                                 \eauthor 1668 %<*jspf>
                               \label{eq:local_local_local_local_local_local} $$ \end{area} $$ 1669 \end{area} $$ \operatorname{local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_loc
                                                  1670 \mbox{newcommand} {\mbox{\label{locality} [1] {\gdef}@eauthor{#1}}}
                                                  1671 \newcommand*{\keywords}[1]{\gdef\@keywords{#1}}
                                                  1672 \newcommand*{\email}[1]{\gdef\authors@mail{#1}}
                                                  1673 \newcommand*{\AuthorsEmail}[1]{\gdef\authors@mail{author's e-mail:\ #1}}
                                                  1674 %</jspf>
                  \plainifnotempty 従来の標準クラスでは、文書全体のページスタイルを empty にしても表題のあるページだけ
                                                     plain になってしまうことがありました。これは \maketitle の定義中に \thispagestyle
                                                     {plain} が入っているためです。この問題を解決するために、「全体のページスタイルが
                                                     empty でないならこのページのスタイルを plain にする」という次の命令を作ることにし
                                                      ます。
                                                  1675 \verb|\def\plainifnotempty{%|}
                                                             \ifx \@oddhead \@empty
                                                                 \ifx \@oddfoot \@empty
                                                  1677
                                                                 \else
                                                  1678
                                                                      \thispagestyle{plainfoot}%
                                                  1679
                                                                 \fi
                                                  1680
                                                  1681
                                                  1682
                                                                 \thispagestyle{plainhead}%
                                                  1683
                                                             \fi}
                             \maketitle 表題を出力します。著者名を出力する部分は、欧文の標準クラスファイルでは \large, 和
                                                     文のものでは \Large になっていましたが、ここでは \large にしました。
                                                         [2016-11-16] 新設された nomag および nomag* オプションの場合をデフォルト (usemag
                                                     相当) に合わせるため、\smallskip を\jsc@smallskip に置き換えました。\smallskip
                                                     のままでは nomag(*) の場合にスケールしなくなり、レイアウトが変わってしまいます。
                                                  1684 %<*article|book|report|slide>
                                                  1685 \if@titlepage
                                                             \newcommand{\maketitle}{%
                                                  1686
                                                  1687
                                                                 \begin{titlepage}%
```

\let\footnotesize\small

1688

1661

```
\let\footnoterule\relax
1689
1690
          \let\footnote\thanks
1691
          \left\langle \mathbf{null} \right\rangle
          \if@slide
1692
            {\footnotesize \@date}%
1693
            \begin{center}
1694
               \mbox{} \[1\jsZw]
1695
1696
               \large
               {\maybeblue\hrule height0\p@? depth2\p@?\relax}\par
1697
               \jsc@smallskip
1698
               \@title
1699
               \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
1700
1701
                 \par\vskip\z@
                 {\small \bxjs@subtitle\par}
1702
1703
1704
               \jsc@smallskip
               \mbox{\mbox{\mbox{$\sim$}}\par} \
1705
               \vfill
1706
               {\small \@author}%
1707
            \end{center}
1708
1709
          \else
          \wedge 60\p0?
1710
          \begin{center}%
1711
             {\LARGE \@title \par}%
1712
            \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
1713
1714
               \vskip5\p@?
               {\normalsize \bxjs@subtitle\par}
1715
1716
            \fi
1717
            \vskip 3em%
1718
            {\large
               \lineskip .75em
1719
1720
               \begin{tabular}[t]{c}%
                 \@author
1721
1722
               \end{tabular}\par}%
            \vskip 1.5em
1723
            {\large \@date \par}%
1724
          \end{center}%
1725
          \fi
1726
1727
          \par
          \ \
1728
1729
        \end{titlepage}%
1730
        \setcounter{footnote}{0}%
        \global\let\thanks\relax
1731
        \global\let\maketitle\relax
1732
1733
        \global\let\@thanks\@empty
1734
        \global\let\@author\@empty
1735
        \global\let\@date\@empty
        \global\let\@title\@empty
1736
        \global\let\title\relax
1737
```

```
1739
                    \global\let\date\relax
            1740
                    \global\let\and\relax
                    \bxjs@annihilate@subtitle
           1741
           1742
           1743 \ensuremath{\setminus} \texttt{else}
                  \newcommand{\maketitle}{\par
           1744
           1745
                    \begingroup
                      \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
           1746
                      \def\@makefnmark{\rlap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}}%
           1747
                      \label{longdef} $$  \omega = 1_{\advance} 3\jsZw $$
            1748
                        \parindent 1\jsZw\noindent
           1749
                        \llap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}\hskip0.3\jsZw}##1}%
           1750
                      \if@twocolumn
           1751
           1752
                        \ifnum \col@number=\@ne
           1753
                          \@maketitle
                        \else
           1754
                          \twocolumn[\@maketitle]%
           1755
                        \fi
           1756
                      \else
           1757
           1758
                        \newpage
                        \global\@topnum\z@ % Prevents figures from going at top of page.
           1759
           1760
                        \@maketitle
           1761
                      \plainifnotempty
           1762
                      \@thanks
           1763
                    \endgroup
           1764
           1765
                    \setcounter{footnote}{0}%
            1766
                    \global\let\thanks\relax
           1767
                    \global\let\maketitle\relax
                    \global\let\@thanks\@empty
           1768
            1769
                    \global\let\@author\@empty
                    \global\let\@date\@empty
           1770
           1771
                    \global\let\@title\@empty
                    \global\let\title\relax
           1772
           1773
                    \global\let\author\relax
                    \global\let\date\relax
           1774
                    \verb|\global| let \\| and \\| relax|
           1775
                    \bxjs@annihilate@subtitle
           1776
           1777
                 }
\@maketitle 独立した表題ページを作らない場合の表題の出力形式です。
           1778
                  \newpage\null
           1779
           1780
                    \vskip 2em
                    \begin{center}%
           1781
            1782
                      \let\footnote\thanks
                      {\LARGE \@title \par}%
           1783
                      \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
           1784
```

1738

\global\let\author\relax

```
\space{2.5cm} 
1785
1786
                                                                                  {\normalsize \bxjs@subtitle\par}
1787
                                                                    \fi
                                                                    \vskip 1.5em
1788
                                                                    {\large
1789
                                                                                  \lineskip .5em
1790
                                                                                  \begin{tabular}[t]{c}%
1791
 1792
                                                                                                \@author
                                                                                  \end{tabular}\par}%
1793
                                                                    \vskip 1em
1794
                                                                    {\large \@date}%
 1795
                                                       \end{center}%
1796
                                                       \par\vskip 1.5em
1798 %<article|slide>
                                                                                                                                                                   \ifvoid\@abstractbox\else\centerline{\box\@abstractbox}\vskip1.5em\fi
1799
1800 \fi
1801 %</article|book|report|slide>
 1802 %<*jspf>
 1803 \mbox{ \mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{}\box{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mb
                                        \begingroup
1804
 1805
                                                       \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
                                                       \def\@makefnmark{\rlap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}}%
 1806
                                                       \long\def\@makefntext##1{\advance\leftskip 3\jsZw
1807
                                                                    \parindent 1\jsZw\noindent
  1808
                                                                    \label{lap(dextsuperscript{\normalfont\dthefnmark}\hskip0.3\jsZw)##1}% $$ \cite{Constraints} $$ \cite{Constr
 1809
                                                                    \twocolumn[\@maketitle]%
 1810
                                                       \plainifnotempty
1811
1812
                                                       \@thanks
 1813
                                        \endgroup
                                         \setcounter{footnote}{0}%
1814
                                         \global\let\thanks\relax
  1816
                                         \global\let\maketitle\relax
                                         \global\let\@thanks\@empty
1817
                                         \global\let\@author\@empty
                                         \global\let\@date\@empty
1819
 1820 % \global\let\@title\@empty % \@title は柱に使う
 1821
                                         \global\let\title\relax
                                         \global\let\author\relax
1822
                                         \global\let\date\relax
                                         \global\let\and\relax
 1824
1825
                                         \ifx\authors@mail\@undefined\else{%
                                                      \label{leftskip 3\jsZw \parindent -3\jsZw}% % $$ \end{substitute} % $$ \columnwidth{\columnwidth} $$ \columnwidth, \
 1826
1827
                                                      \footnotetext[0]{\itshape\authors@mail}%
 1828
 1829
                                         \global\let\authors@mail\@undefined}
1830 \def\@maketitle{%
                                         \newpage\null
                                         \vskip 6em % used to be 2em
 1832
                                        \begin{center}
1833
```

```
\let\footnote\thanks
1834
        1835
1836
        \lineskip .5em
        \ifx\@author\@undefined\else
1837
           \vskip 1em
1838
           \begin{tabular}[t]{c}%
1839
             \@author
1840
1841
           \end{tabular}\par
1842
        \ifx\@etitle\@undefined\else
1843
1844
           \vskip 1em
           {\large \@etitle \par}%
1845
1846
        \fi
        \ifx\@eauthor\@undefined\else
1847
1848
           \vskip 1em
1849
           \begin{tabular}[t]{c}%
             \@eauthor
1850
           \end{tabular}\par
1851
1852
        \fi
        \vskip 1em
1853
1854
        \@date
      \end{center}
1855
      \vskip 1.5em
1856
      \centerline{\box\@abstractbox}
1857
      \ifx\@keywords\@undefined\else
1858
        \vskip 1.5em
1859
        \centerline{\parbox{157\jsc@mmm}{\texttextsf{Keywords:}}\ \scine{\parbox{157\jsc@mmm}}{\centerline{\parbox{157\jsc@mmm}}} \label{textsf{Keywords:}}
1860
1861
1862
      \vskip 1.5em}
1863 %</jspf>
```

## 8.2 章・節

ムニャムニャ……。

\bxjs@label@sect 節付 #1 の番号を出力する。節付 XXX に対して、\labelXXX が定義済ならそれが出力書式を表す。未定義ならばカウンタの出力書式 \theXXX が使われる。

```
1864 \def\bxjs@label@sect#1{%

1865 \expandafter\ifx\csname label#1\endcsname\relax

1866 \csname the#1\endcsname

1867 \else \csname label#1\endcsname

1868 \fi}

1869 \def\@seccntformat#1{\bxjs@label@sect{#1}\quad}
```

\@secapp 節番号の接頭辞。

\@secpos 節番号の接尾辞。

 $1870 \verb|\finum\bxjs@label@section=\bxjs@label@section@compat\else| \\$ 

1871 \def\@secapp{\presectionname}

1872 \def\@secpos{\postsectionname}

1873 \fi

\labelsection 節番号の出力書式。

 $1874 \verb|\ifnum\bxjs@label@section=\bxjs@label@section@modern| \\$ 

1875 \def\labelsection{\@secapp\thesection\@secpos}

1876 **\fi** 

■構成要素 \@startsection マクロは 6 個の必須引数と、オプションとして \* と 1 個のオプション引数と 1 個の必須引数をとります。

\@startsection{名}{レベル}{字下げ}{前アキ}{後アキ}{スタイル} \* [別見出し] {見出し}

それぞれの引数の意味は次の通りです。

名 ユーザレベルコマンドの名前です(例: section)。

レベル 見出しの深さを示す数値です (chapter=1, section=2, ...)。この数値が secnumdepth 以下のとき見出し番号を出力します。

字下げ 見出しの字下げ量です。

**前アキ** この値の絶対値が見出し上側の空きです。負の場合は、見出し直後の段落をインデントしません。

**後アキ** 正の場合は、見出しの下の空きです。負の場合は、絶対値が見出しの右の空きです (見出しと同じ行から本文を始めます)。

スタイル 見出しの文字スタイルの設定です。

\* この \* 印がないと、見出し番号を付け、見出し番号のカウンタに1を加算します。

別見出し 目次や柱に出力する見出しです。

見出し 見出しです。

見出しの命令は通常 \@startsection とその最初の 6 個の引数として定義されます。

次は \@startsection の定義です。情報処理学会論文誌スタイルファイル (ipsjcommon.sty) を参考にさせていただきましたが、完全に行送りが \baselineskip の整数倍にならなくてもいいから前の行と重ならないようにしました。

1877 \def\@startsection#1#2#3#4#5#6{%

1878 \if@noskipsec \leavevmode \fi

1879 \par

1880% 見出し上の空きを \@tempskipa にセットする

1881 \@tempskipa #4\relax

1882 % \Cafterindent は見出し直後の段落を字下げするかどうかを表すスイッチ

1883 \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi

1884 % 見出し上の空きが負なら見出し直後の段落を字下げしない

1885 \ifdim \@tempskipa <\z@

```
1886
                   \@tempskipa -\@tempskipa \@afterindentfalse
            1887
            1888
                 \if@nobreak
                   \everypar{\everyparhook}% これは間違い
            1889 %
            1890
                   \everypar{}%
                 \else
            1891
                   \addpenalty\@secpenalty
            1892
            1893%次の行は削除
                   \addvspace\@tempskipa
            1894 %
            1895 % 次の \noindent まで追加
                   \ifdim \@tempskipa >\z@
            1896
                     \if@slide\else
            1897
                       \null
            1898
                       \vspace*{-\baselineskip}%
            1899
            1900
            1901
                     \vskip\@tempskipa
                   \fi
            1902
            1903
                 \noindent
            1904
            1905 % 追加終わり
            1906
                 \@ifstar
                   {\c {\c 43}{\#4}{\#5}{\#6}}%
            1907
                   1908
               \Osect と \Oxsect は、前のアキがちょうどゼロの場合にもうまくいくように、多少変え
             てあります。\everyparhook も挿入しています。
               \everyparhook の挿入は everyparhook=compat の時のみ行う。
\bxjs@if@ceph everyparhook=compat である場合にのみ直後のトークンを実行する。
            1909 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat
            1910 \let\bxjs@if@ceph\@firstofone
            1911 \else \let\bxjs@if@ceph\@gobble
            1912 \fi
            1913 \def\@sect#1#2#3#4#5#6[#7]#8{%
                 \ifnum #2>\c@secnumdepth
            1914
                   \let\@svsec\@empty
            1915
                 \else
            1916
            1917
                   \refstepcounter{#1}%
                   \protected@edef\@svsec{\@seccntformat{#1}\relax}%
            1918
            1919
            1920 % 見出し後の空きを \@tempskipa にセット
                 \@tempskipa #5\relax
            1922 % 条件判断の順序を入れ換えました
            1923
                \ifdim \@tempskipa<\z@
                   \def\@svsechd{%
            1924
                     #6{\hskip #3\relax
            1925
```

```
\@svsec #8}%
1926
         \csname #1mark\endcsname{#7}%
1927
1928
         \verb|\addcontentsline{toc}{#1}{%}|
           \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
1929
             \protect\numberline{\bxjs@label@sect{#1}}%
1930
           \fi
1931
           #7}}% 目次にフルネームを載せるなら #8
1932
1933
     \else
1934
       \begingroup
         \interlinepenalty \@M % 下から移動
1935
         #6{%
1936
           \@hangfrom{\hskip #3\relax\@svsec}%
1937
1938 %
           \interlinepenalty \@M % 上に移動
           #8\@@par}%
1939
1940
       \endgroup
1941
       \csname #1mark\endcsname{#7}%
       \addcontentsline{toc}{#1}{%
1942
         \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
1943
1944
           \protect\numberline{\bxjs@label@sect{#1}}%
1945
         #7}% 目次にフルネームを載せるならここは #8
1946
     \fi
1947
     \c \c \fi
1948
   二つ挿入した \everyparhook のうち後者が \paragraph 類の後で2回実行され,それ
 以降は前者が実行されます。
   [2016-07-28] slide オプションと twocolumn オプションを同時に指定した場合の罫線の
 位置を微調整しました。
1949 \def\@xsect#1{%
1950% 見出しの後ろの空きを \@tempskipa にセット
     \@tempskipa #1\relax
1952 % 条件判断の順序を変えました
     \ifdim \@tempskipa<\z@
1953
       \@nobreakfalse
1954
       \global\@noskipsectrue
1955
       \everypar{%
1956
         \if@noskipsec
1957
           \global\@noskipsecfalse
1958
          {\setbox\z@\lastbox}%
1959
           \clubpenalty\@M
1960
           \begingroup \@svsechd \endgroup
1961
           \unskip
1962
1963
           \@tempskipa #1\relax
1964
           \hskip -\@tempskipa
         \else
1965
           \clubpenalty \@clubpenalty
1966
           \everypar\expandafter{\bxjs@if@ceph\everyparhook}%
1967
         \fi\bxjs@if@ceph\everyparhook}%
1968
```

```
\else
                 1969
                        \par \nobreak
                 1970
                 1971
                        \vskip \@tempskipa
                        \@afterheading
                 1972
                 1973
                      \if@slide
                 1974
                        {\vskip\if@twocolumn-5\jsc@mpt\else-6\jsc@mpt\fi
                 1975
                 1976
                         \maybeblue\hrule height0\jsc@mpt depth1\jsc@mpt
                         \vskip\if@twocolumn 4\jsc@mpt\else 7\jsc@mpt\fi\relax}%
                 1977
                 1978
                 1979
                       \par % 2000-12-18
                      \ignorespaces}
                 1980
                 1981 \def\@ssect#1#2#3#4#5{%
                      \@tempskipa #3\relax
                 1982
                      \ifdim \@tempskipa<\z@
                 1983
                        \def\0svsechd{#4{\hskip #1\relax #5}}%
                 1984
                 1985
                      \else
                 1986
                        \begingroup
                 1987
                          #4{%
                            \@hangfrom{\hskip #1}%
                 1988
                 1989
                              \interlinepenalty \@M #5\@@par}%
                 1990
                        \endgroup
                 1991
                      \fi
                      \0xsect{#3}}
                 1992
                  ■柱関係の命令
     \chaptermark \...mark の形の命令を初期化します(第7節参照)。\chaptermark 以外は LATEX 本体で
     \sectionmark 定義済みです。
   \subsectionmark 1993 \newcommand*\chaptermark[1]{}
\subsubsectionmark \\ \newcommand*{\sectionmark}[1]{}
                 1995 % \newcommand*{\subsectionmark}[1]{}
   \verb|\subparagraphmark| 1997 % \verb|\newcommand*{\paragraphmark}| [1] {} |
                 1998 % \newcommand*{\subparagraphmark}[1]{}
                   ■カウンタの定義
   \c@secnumdepth secnumdepth は第何レベルの見出しまで番号を付けるかを決めるカウンタです。
                 1999 %<!book&!report>\setcounter{secnumdepth}{3}
                 2000 % <book | report > \setcounter { secnumdepth } {2}
       \c@chapter 見出し番号のカウンタです。\newcounter の第1引数が新たに作るカウンタです。これは
       \cosection 第2引数が増加するたびに0に戻されます。第2引数は定義済みのカウンタです。
    \c@subsection 2001 \newcounter{part}
 \c@subsubsection 2002 %<book|report>\newcounter{chapter}
                 2003 % <book | report > \newcounter { section } [ chapter ]
     \verb|\c@paragraph|_{2004} \%<!book\&!report>\\newcounter\{section\}|
```

\c@subparagraph

```
2005 \newcounter{subsection}[section]
                                                                            2006 \newcounter{subsubsection}[subsection]
                                                                            2007 \newcounter{paragraph}[subsubsection]
                                                                            2008 \newcounter{subparagraph}[paragraph]
                                        \thepart カウンタの値を出力する命令 \the 何々 を定義します。
                                                                                            カウンタを出力するコマンドには次のものがあります。
                          \thechapter
                          \thesection
                                                                                                                                                                                                            1, 2, 3, ...
                                                                                                             \arabic{COUNTER}
              \thesubsection
                                                                                                              \roman{COUNTER}
                                                                                                                                                                                                         i, ii, iii, ...
\thesubsubsection
                                                                                                                                                                                                         I, II, III, ...
                                                                                                             \Roman{COUNTER}
                  \theparagraph
                                                                                                             \alph{COUNTER}
                                                                                                                                                                                                           a, b, c, ...
    \thesubparagraph
                                                                                                             \Alph{COUNTER}
                                                                                                                                                                                                            A, B, C, ...
                                                                                                                                                                                                       一, 二, 三, ...
                                                                                                              \kansuji{COUNTER}
                                                                                            以下ではスペース節約のため @ の付いた内部表現を多用しています。
                                                                            2009 \renewcommand{\thepart}{\@Roman\c@part}
                                                                            2010 %<*!book&!report>
                                                                            2011 \ifnum\bxjs@label@section=\bxjs@label@section@compat
                                                                            2013 \ \texttt{\Cosection.\Carabic\Cosubsection} \} \ \texttt{\Cosection.\Carabic\Cosubsection} \} \ \texttt{\Cosection.\Cosubsection} \} \ \texttt{\Cosubsection.\Cosubsection} \} \ \texttt{\Cosubsect
                                                                            2014 \else
                                                                            2015 \renewcommand{\thesection}{\@arabic\c@section}
                                                                            2016 \mbox{ \normand{\the subsection}{\the section.\c@subsection}}
                                                                            2017 \fi
                                                                            2018 %</!book&!report>
                                                                            2019 %<*book|report>
                                                                            2020 \renewcommand{\thechapter}{\@arabic\c@chapter}
                                                                            2021 \renewcommand{\thesection}{\thechapter.\@arabic\c@section}
                                                                            2022 \verb|\renewcommand{\the subsection}{\the section. \verb|\color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="c
                                                                            2023 %</book|report>
                                                                            2024 \renewcommand{\thesubsubsection}{\%
                                                                            2025
                                                                                                           \thesubsection.\@arabic\c@subsubsection}
                                                                            2026 \renewcommand{\theparagraph}{%
                                                                            2027
                                                                                                          \thesubsubsection.\@arabic\c@paragraph}
                                                                            2028 \renewcommand{\thesubparagraph}{%
                                                                            2029
                                                                                                          \theparagraph.\@arabic\c@subparagraph}
                                   \@chapapp
                                                                                 \Ochapapp の初期値は \prechaptername (第) です。
                                                                                            \Ochappos の初期値は \postchaptername(章)です。
                                   \@chappos
                                                                                            \appendix は \@chapapp を \appendixname に, \@chappos を空に再定義します。
                                                                                            [2003-03-02] \@secapp は外しました。
                                                                            2030 % \content = \c
                                                                            2031 % <book | report > \newcommand { \Qchappos} { \postchaptername}
```

■前付、本文、後付 本のうち章番号があるのが「本文」、それ以外が「前付」「後付」です。

\frontmatter ページ番号をローマ数字にし、章番号を付けないようにします。

[2017-03-05] \frontmatter と \mainmatter の 2 つの命令は、改丁または改ページした後で \pagenumbering{...} でノンブルを 1 にリセットします。長い間 \frontmatter は openany のときに単なる改ページとしていましたが、これではノンブルをリセットする際に偶奇逆転が起こる場合がありました。openany かどうかに依らず奇数ページまで繰るように修正することで、問題を解消しました。実は、 $\text{IAT}_{\text{EX}}$  の標準クラスでは 1998 年に修正されていた問題です(コミュニティ版  $\text{pIAT}_{\text{FX}}$  の標準クラス 2017/03/05 も参照)。

2032 %<\*book|report>

2033 \newcommand\frontmatter{%

2034 \pltx@cleartooddpage

2035 \@mainmatterfalse

2036 \pagenumbering{roman}}

\mainmatter ページ番号を算用数字にし、章番号を付けるようにします。

2037 \newcommand\mainmatter{%

2038 \pltx@cleartooddpage

2039 \@mainmattertrue

2040 \pagenumbering{arabic}}

\backmatter 章番号を付けないようにします。ページ番号の付け方は変わりません。

2041 \newcommand\backmatter{%

2042 \if@openleft

2043 \cleardoublepage

2044 \else\if@openright

2045 \cleardoublepage

2046 \else

2047 \clearpage

2048 \fi\fi

2049 \@mainmatterfalse}

2050 %</book|report>

## ■部

\part 新しい部を始めます。

\secdef を使って見出しを定義しています。このマクロは二つの引数をとります。

\secdef{星なし}{星あり}

星なし \* のない形の定義です。

星あり \* のある形の定義です。

\secdef は次のようにして使います。

\def\chapter { ... \secdef \CMDA \CMDB }

\def\CMDA [#1]#2{....} % \chapter[...]{...} の定義

\def\CMDB #1{....} % \chapter\*{...} の定義

まず book と report のクラス以外です。

```
2051 %<*!book&!report>
      2052 \newcommand\part{%
            \if@noskipsec \leavevmode \fi
            \par
      2054
            \addvspace{4ex}%
      2055
            \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
      2056
            \secdef\@part\@spart}
      2057
      2058 %</!book&!report>
          book および report クラスの場合は、少し複雑です。
      2059 %<*book|report>
      2060 \newcommand\part{%
      2061
            \if@openleft
      2062
              \cleardoublepage
      2063
            \else\if@openright
      2064
              \cleardoublepage
      2065
            \else
              \clearpage
      2066
      2067
            \thispagestyle{empty}% 欧文用標準スタイルでは plain
      2068
      2069
            \if@twocolumn
      2070
              \onecolumn
              \@restonecoltrue
      2071
      2072
              \@restonecolfalse
      2073
      2074
            \fi
      2075
            \left\langle \right\rangle 
            \secdef\@part\@spart}
      2077 %</book|report>
\@part 部の見出しを出力します。\bfseries を \headfont に変えました。
          book および report クラス以外では secnumdepth が -1 より大きいとき部番号を付け
        ます。
      2078 %<*!book&!report>
      2079 \def\@part[#1]#2{%
            \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
      2080
      2081
              \refstepcounter{part}%
              \verb|\addcontentsline{toc}{part}{%|}
      2082
                \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1\jsZw}#1}%
      2083
      2084
            \else
      2085
              \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
      2086
      2087
            \mathbb{}{}
            {\parindent\z@
      2088
      2089
              \raggedright
              \interlinepenalty \@M
      2090
      2091
              \normalfont
              \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
      2092
                \Large\headfont\prepartname\thepart\postpartname
      2093
```

```
\par\nobreak
       2094
       2095
               \huge \headfont #2%
       2096
       2097
               \markboth{}{}\par}%
              \nobreak
       2098
             \vskip 3ex
       2099
             \@afterheading}
       2100
       2101 %</!book&!report>
           book および report クラスでは secnumdepth が -2 より大きいとき部番号を付けます。
       2102 %<*book|report>
       2103 \def\@part[#1]#2{%
             \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
       2104
               \refstepcounter{part}%
       2105
       2106
               \addcontentsline{toc}{part}{%
                  \prepartname\thepart\postpartname\thepart\psize{1\jsZw}\#1\}\%
       2107
       2108
             \else
               \verb|\addcontentsline{toc}{part}{\#1}||
       2109
       2110
             \fi
       2111
             \markboth{}{}%
             {\centering
       2112
               \interlinepenalty \@M
       2113
                \normalfont
       2114
                \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
       2115
       2116
                  \huge\headfont \prepartname\thepart\postpartname
       2117
                  \par\vskip20\p@?
       2118
       2119
                \Huge \headfont #2\par}%
             \@endpart}
       2120
       2121 %</book|report>
\@spart 番号を付けない部です。
       2122 %<*!book&!report>
       2123 \def\@spart#1{{%
               \parindent \z@ \raggedright
       2124
                \interlinepenalty \@M
       2125
       2126
               \normalfont
       2127
               \huge \headfont #1\par}%
       2128
             \nobreak
             \vskip 3ex
       2129
             \@afterheading}
       2131 %</!book&!report>
       2132 %<*book|report>
       2133 \def\@spart#1{{%
       2134
               \centering
       2135
                \interlinepenalty \@M
       2136
               \normalfont
       2137
               \Huge \headfont #1\par}%
             \@endpart}
       2138
```

#### 2139 %</book|report>

'@endpart '@part と '@spart の最後で実行されるマクロです。両面印刷のときは白ページを追加します。二段組のときには、二段組に戻します。

[2016-12-13] openany のときには白ページが追加されるのは変なので、その場合は追加しないようにしました。このバグは  $\LaTeX$  では classes.dtx v1.4b (2000/05/19) で修正されています。

```
2140 %<*book|report>
```

- 2141 \def\@endpart{\vfil\newpage
- 2142 \if@twoside
- 2143 \if@openleft %% added (2017/02/24)
- 2144 \null\thispagestyle{empty}\newpage
- 2145 \else\if@openright %% added (2016/12/13)
- 2146 \null\thispagestyle{empty}\newpage
- 2147 \fi\fi \% added (2016/12/13, 2017/02/24)
- 2148 \fi
- 2149 \if@restonecol
- 2150 \twocolumn
- 2151 \fi}
- 2152 %</book|report>

#### ■章

\chapter 章の最初のページスタイルは、全体が empty でなければ plain にします。また、\@topnum を 0 にして、章見出しの上に図や表が来ないようにします。

- 2153 %<\*book|report>
- 2154 \newcommand{\chapter}{%
- 2155 \if@openleft\cleardoublepage\else
- 2156 \if@openright\cleardoublepage\else\clearpage\fi\fi
- 2157 \plainifnotempty %  $\vec{\pi}$ : \thispagestyle{plain}
- 2158 \global\@topnum\z@
- 2159 \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
- 2160 \secdef
- 2161 {\@omit@numberfalse\@chapter}%
- 2162 {\@omit@numbertrue\@schapter}}

\@chapter 章見出しを出力します。secnumdepth が 0 以上かつ \@mainmatter が真のとき章番号を出力します。

- 2163 \def\@chapter[#1]#2{%
- 2164 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
- 2165 \if@mainmatter
- 2166 \refstepcounter{chapter}%
- 2167 \typeout{\@chapapp\thechapter\@chappos}%
- 2168 \addcontentsline{toc}{chapter}%
- 2169 {\protect\numberline
- 2171 {\@chapapp\thechapter\@chappos}%

```
#1}%
                  2172
                          \else\addcontentsline{toc}{chapter}{#1}\fi
                  2173
                  2174
                          \addcontentsline{toc}{chapter}{#1}%
                  2175
                  2176
                        \chaptermark{#1}%
                  2177
                        \addtocontents{lof}{\protect\addvspace{10\jsc@mpt}}%
                  2178
                  2179
                        \addtocontents{lot}{\protect\addvspace{10\jsc@mpt}}%
                        \if@twocolumn
                  2180
                          \@topnewpage[\@makechapterhead{#2}]%
                  2181
                  2182
                        \else
                  2183
                          \@makechapterhead{#2}%
                  2184
                          \@afterheading
                  2185
                        fi
\@makechapterhead 実際に章見出しを組み立てます。\bfseries を \headfont に変えました。
                  2186 \def\@makechapterhead#1{%
                        \vspace*{2\Cvs}% 欧文は50pt
                  2187
                        {\parindent \z@ \raggedright \normalfont
                  2188
                          \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
                  2189
                  2190
                            \if@mainmatter
                              \huge\headfont \@chapapp\thechapter\@chappos
                  2191
                  2192
                              \par\nobreak
                              \vskip \Cvs % 欧文は 20pt
                  2193
                            \fi
                  2194
                  2195
                          \fi
                          \interlinepenalty\@M
                  2196
                  2197
                          \Huge \headfont #1\par\nobreak
                  2198
                          \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
       \@schapter \chapter*{...} コマンドの本体です。\chaptermark を補いました。
                  2199 \def\@schapter#1{%
                  2200
                        \chaptermark{#1}%
                  2201
                        \if@twocolumn
                          \@topnewpage[\@makeschapterhead{#1}]%
                  2202
                  2203
                          \@makeschapterhead{#1}\@afterheading
                  2204
                  2205
                        \fi}
\@makeschapterhead 番号なしの章見出しです。
                  2206 \def\@makeschapterhead#1{%
                        \vspace*{2\Cvs}% 欧文は50pt
                        {\parindent \z@ \raggedright
                  2208
                          \normalfont
                  2209
                  2210
                          \interlinepenalty\@M
                  2211
                          \Huge \headfont #1\par\nobreak
                          \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
                  2212
                  2213 %</book|report>
```

#### ■下位レベルの見出し

2250 \fi

\section 欧文版では \@startsection の第 4 引数を負にして最初の段落の字下げを禁止していますが、和文版では正にして字下げするようにしています。 段組のときはなるべく左右の段が狂わないように工夫しています。

```
2214 \if@twocolumn
             2215 \newcommand{\section}{%
             2216 %<jspf>\ifx\maketitle\relax\else\maketitle\fi
                    \@startsection{section}{1}{\z@}%
             2218 %<!kiyou>
                             \{0.6\Cvs\}\{0.4\Cvs\}\%
                            {\Cvs}{0.5\Cvs}%
             2219 %<kiyou>
             2220 %
                    {\normalfont\large\headfont\@secapp}}
             2221
                    {\normalfont\large\headfont\raggedright}}
             2222 \else
             2223 \newcommand{\section}{%
             2224
                    \if@slide\clearpage\fi
                    \ensuremath{\tt 0startsection{section}{1}{\ensuremath{\tt 1}}{\ensuremath{\tt 20}}\%
             2225
                    {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ
             2226
                    {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
             2227
             2228 %
                    {\normalfont\Large\headfont\@secapp}}
             2229
                    {\normalfont\Large\headfont\raggedright}}
             2230 \fi
  \subsection 同上です。
             2231 \if@twocolumn
                  \label{limits} $$ \{\z0\}{\in .4\cvs \leq \z0 \fi}_{\c}$
             2233
             2234
                    {\normalfont\normalsize\headfont}}
             2235 \else
                  2236
                    {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ
             2237
                    {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
             2238
             2239
                    {\normalfont\large\headfont}}
             2240 \fi
\subsubsection [2016-07-22] slide オプション指定時に \subsubsection の文字列と罫線が重なる問題に
              対処しました (forum:1982)。
             2241 \if@twocolumn
             2242 \newcommand{\subsubsection}{\@startsection{subsubsection}{3}{\z@}%
                    {\z0}{\ide .4\cvs \leq \z0 \fi}%
             2243
                    {\normalfont\normalsize\headfont}}
             2244
             2245 \else
                  \newcommand{\subsubsection}{\Qstartsection{subsubsection}{3}{\zQ}%
             2246
                    {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}%
             2247
                    2248
                    {\normalfont\normalsize\headfont}}
             2249
```

\paragraph 見出しの後ろで改行されません。

\jsParagraphMark

[2016-11-16] 従来は \paragraph の最初に出るマークを「■」に固定していましたが、このマークを変更可能にするため \jsParagraphMark というマクロに切り出しました。これで、たとえば

\renewcommand{\jsParagraphMark}{★}

とすれば「★」に変更できますし、マークを空にすることも容易です。なお、某学会クラスでは従来どおりマークは付きません。

※ BXJS クラスでは、1.1 版 [2016-02-14] から \jsParagraphMark をサポートしている。 段落のマーク ( $\blacksquare$ ) が必ず和文フォントで出力されるようにする。

\jsJaChar は standard 和文ドライバが読み込まれた場合は \jachar と同義になるが、 それ以外は何もしない。

```
2251 \newcommand\jsParagraphMark{\relax\jsJaChar{■}}
             2252 \let\bxjs@org@paragraph@mark\jsParagraphMark
             2253 \ifx\bxjs@paragraph@mark\@empty
                  \let\jsParagraphMark\@empty
             2255 \else\ifx\bxjs@paragraph@mark\@undefined\else
                  \long\edef\jsParagraphMark{\noexpand\jsJaChar{\bxjs@paragraph@mark}}
             2257 \fi\fi
             2258 \let\jsJaChar\@empty
             2259 \if@twocolumn
                  \newcommand{\paragraph}{\@startsection{paragraph}{4}{\z@}%
                     {\z@}{\if@slide .4\Cvs \else -1\jsZw\fi}% 改行せず 1\jsZw のアキ
             2262 %<jspf>
                            {\normalfont\normalsize\headfont}}
             2263 %<!jspf>
                             {\normalfont\normalsize\headfont\jsParagraphMark}}
             2264 \else
                   \newcommand{\paragraph}{\0startsection{paragraph}{4}{\z0}%
             2266
                     {0.5\cvs \ensuremath{\c Cdp \ensuremath{\c Cdp}\}\%}
                     {\if@slide .5\Cvs \@plus.3\Cdp \else -1\jsZw\fi}% 改行せず 1\jsZw のアキ
             2267
             2268 %<jspf>
                            {\normalfont\normalsize\headfont}}
             2269 %<!jspf>
                             {\normalfont\normalsize\headfont\jsParagraphMark}}
             2270 \fi
\subparagraph 見出しの後ろで改行されません。
             2271 \if@twocolumn
             {\tt 2272} $$ \end{subparagraph}{\color{command{\subparagraph}{5}{\z0}\%} $$
                     \z0}{\left(x_0\right)_{\sc -1\leq Zw\leq 1}}
             2273
                     {\normalfont\normalsize\headfont}}
             2274
             2275 \else
                  \newcommand{\subparagraph}{\@startsection{subparagraph}{5}{\z@}%
             2277
                     {\z0}{\in Cvs \Qplus.3\Cdp \else -1\jsZw\fi}%
                     {\normalfont\normalsize\headfont}}
             2278
             2279 \fi
```

## 8.3 リスト環境

第 k レベルのリストの初期化をするのが  $\$  (k = i, ii, iii, iv)。  $\$  は  $\$  は  $\$  に設定します。

**\leftmargini** 二段組であるかないかに応じてそれぞれ 2em, 2.5em でしたが, ここでは全角幅の 2 倍にしました。

[2002-05-11] 3zw に変更しました。

[2005-03-19] 二段組は 2zw に戻しました。

2280 \if@slide

2281 \setlength\leftmargini{1\jsZw}

2282 \else

2283 \if@twocolumn

2284 \setlength\leftmargini{2\jsZw}

2285 \else

2286 \setlength\leftmargini{3\jsZw}

2287 \fi

2288 \fi

\leftmarginii ii, iii, iv は \labelsep とそれぞれ '(m)', 'vii.', 'M.' の幅との和より大きくすること \leftmarginiii になっています。ここでは全角幅の整数倍に丸めました。

 $\label{eq:continuous} $$ \eftmargin v_{-}^{2290} \ \ \ \ \ \\ $ \eftmargin v_{-}^{2290} \ \ \ \ \ \\ $ \eftmargin v_{-}^{2290} \ \ \ \\ $ \eftmargin v_{-}^{2290} \ \ \ \ \\ $ \eftmargin v_{-}^{2290} \ \ \ \\ $ \eftmargi$ 

 $^{"}$  2291 \setlength\leftmarginiii{1\jsZw}

 $2293 \quad \texttt{\scalength\leftmarginv} \quad \texttt{\{1\jsZw\}}$ 

 $2294 \quad \texttt{\setlength\leftmarginvi} \ \{\texttt{1\jsZw}\}$ 

2295 \else

2296 \setlength\leftmarginii {2\jsZw}

2297 \setlength\leftmarginiii{2\jsZw}

2298 \setlength\leftmarginiv  $\{2\jsZw\}$ 

2299 \setlength\leftmarginv {1\jsZw}

2300 \setlength\leftmarginvi {1\jsZw}

2301 \fi

\labelsep \labelsep はラベルと本文の間の距離です。\labelwidth はラベルの幅です。これは二分 \labelwidth に変えました。

2302 \setlength \labelsep  $\{0.5\jsZw\} \%$  .5em

2303 \setlength \labelwidth{\leftmargini}

 $2304 \addtolength\labelwidth{-\labelsep}$ 

\partopsep リスト環境の前に空行がある場合、\parskip と \topsep に \partopsep を加えた値だけ 縦方向の空白ができます。0 に改変しました。

2305 \setlength\partopsep{\z0} % {2\p0 \@plus 1\p0 \@minus 1\p0}

\@beginparpenalty リストや段落環境の前後、リスト項目間に挿入されるペナルティです。

\@endparpenalty

\@itempenalty

```
2306 \@beginparpenalty -\@lowpenalty 2307 \@endparpenalty -\@lowpenalty 2308 \@itempenalty -\@lowpenalty 2308 \@itempenalty -\@lowpenalty \@listi は \leftmargin, \parsep, \topsep, \itemsep などのトップレベルの定義を \@listI します。この定義は、フォントサイズコマンドによって変更されます(たとえば \small の中では小さい値に設定されます)。このため、\normalsize がすべてのパラメータを戻せるように、\@listI で \@listi のコピーを保存します。元の値はかなり複雑ですが、ここでは簡素化してしまいました。特に最初と最後に行送りの半分の空きが入るようにしてありま
```

[2004-09-27] \topsep のグルー  $^{+0.2}_{-0.1}$  \baselineskip を思い切って外しました。

す。アスキーの標準スタイルではトップレベルの itemize, enumerate 環境でだけ最初と

 $2309 \ensuremath{\verb| def\margin|} = 1309 \ensuremath{\margin|} = 1309 \$ 

2310 \parsep \z@

2311 \topsep 0.5\baselineskip

2312 \itemsep \z@ \relax}

2313 \let\@listI\@listi

念のためパラメータを初期化します (実際には不要のようです)。

2314 \@listi

 $\colone{1}$  \Colone{1} 第 2~6 レベルのリスト環境のパラメータの設定です。

```
\@listiii 2315 \def\@listii{\leftmargin\leftmarginii
```

\Clistiv 2316 \labelwidth\leftmarginii \advance\labelwidth-\labelsep

最後に行送りの半分の空きが入るようになっていました。

2317 \topsep \z@

 $\verb|\clistv|_{2318} \quad \verb|\clistv|_{230} \\$ 

\@listvi 2319 \itemsep\parsep}

 $2320 \ensuremath{\mbox{\sc def}\mbox{\sc def}\mbox{\sc leftmargin}\mbox{\sc leftmarginiii}}$ 

2321 \labelwidth\leftmarginiii \advance\labelwidth-\labelsep

2322 \topsep \z@

2323 \parsep \z@

2324 \itemsep\parsep}

 $2325 \ensuremath{\mbox{\sc leftmargin}}\ensuremath{\mbox{\sc leftmarginiv}}\xspace$ 

2326 \labelwidth\leftmarginiv

 $2327 \hspace{1cm} \verb|\advance| labelwidth-\labelsep|$ 

2328 \def\@listv {\leftmargin\leftmarginv

2329 \labelwidth\leftmarginv

2330 \advance\labelwidth-\labelsep}

2331 \def\@listvi {\leftmargin\leftmarginvi

2332 \labelwidth\leftmarginvi

2333 \advance\labelwidth-\labelsep}

 $\blacksquare$ enumerate 環境 enumerate 環境はカウンタ enumi, enumii, enumii, enumii を使います。n レベルの番号です。

\theenumi 出力する番号の書式を設定します。これらは LATEX 本体(ltlists.dtx 参照)で定義済み \theenumii ですが,ここでは表し方を変えています。\@arabic, \@alph, \@roman, \@Alph はそれぞ

\theenumiii

れ算用数字,小文字アルファベット,小文字ローマ数字,大文字アルファベットで番号を出力する命令です。

- 2334 \renewcommand{\theenumi}{\@arabic\c@enumi}
- 2335 \renewcommand{\theenumii}{\@alph\c@enumii}
- 2336 \renewcommand{\theenumiii}{\@roman\c@enumiii}
- 2337 \renewcommand{\theenumiv}{\@Alph\c@enumiv}

\labelenumi enumerate 環境の番号を出力する命令です。第2レベル以外は最後に欧文のピリオドが付 \labelenumii きますが、これは好みに応じて取り払ってください。第2レベルの番号のかっこは和文用に \labelenumiii 換え、その両側に入る余分なグルーを \inhibitglue で取り除いています。

\labelenumiv

和文の括弧で囲むための補助命令 \jsInJaParen を定義して \labelenumii でそれを用いている。

※現状の zxjatype の \inhibitglue の実装には「前後のグルーを消してしまう」という不備があって、そのため enumii の出力が異常になるという不具合があった。zxjatype を修正するまでの回避策として、サイズがゼロの罫(\bxjs@dust)でガードしておく。

2338 \def\bxjs@dust{\vrule\@width\z@\@height\z@\@depth\z@}

- 2339 \newcommand\*{\jsInJaParen}[1]{%
- 2340 \bxjs@dust\jsInhibitGlue (#1) \jsInhibitGlue\bxjs@dust}
- 2341  $\newcommand{\labelenumi}{\theenumi.}$
- 2342  $\mbox{\lower.em} (\mbox{\lower.em}) \$
- 2343 \newcommand{\labelenumiii}{\theenumiii.}
- 2344  $\newcommand{\labelenumiv}{\theenumiv.}$

\p@enumii \p@enumn は\ref コマンドで enumerate 環境の第 n レベルの項目が参照されるときの書 \p@enumiii 式です。これも第 2 レベルは和文用かっこにしました。

 $\verb|\pQenumiv| 2345 \verb|\renewcommand{pQenumii}{\theenumi}|$ 

- 2346 \renewcommand{\p@enumiii}{\theenumi\jsInhibitGlue (\theenumii ) }
- 2347 \renewcommand{\p@enumiv}{\p@enumiii\theenumiii}

## ■itemize 環境

\labelitemi itemize 環境の第 n レベルのラベルを作るコマンドです。

\labelitemii 2348 \newcommand\labelitemi{\textbullet}

 $\verb|\labelitemiii|| 2349 \verb|\newcommand|| labelitemii{\normalfont\bfseries \textendash}|$ 

2350 \newcommand\labelitemiii{\textasteriskcentered}

 $\verb|\labelitemiv|_{2351} \verb|\newcommand|| labelitemiv{\textperiodcentered}|$ 

## ■description 環境

description 本来の description 環境では、項目名が短いと、説明部分の頭がそれに引きずられて左に 出てしまいます。これを解決した新しい description の実装です。

2352 \newenvironment{description}{\%

2353 \list{}{%

```
2354 \labelwidth=\leftmargin
```

- 2355 \labelsep=1\jsZw
- 2356 \advance \labelwidth by -\labelsep
- 2357 \let \makelabel=\descriptionlabel}}{\endlist}

\descriptionlabel description 環境のラベルを出力するコマンドです。好みに応じて #1 の前に適当な空き (たとえば \hspace{1\jsZw}) を入れるのもいいと思います。

2358 \newcommand\*\descriptionlabel[1]{\normalfont \headfont #1\hfil}

#### ■概要

abstract 概要(要旨,梗概)を出力する環境です。book クラスでは各章の初めにちょっとしたことを 書くのに使います。titlepage オプション付きの article クラスでは,独立したページに 出力されます。abstract 環境は元は quotation 環境で作られていましたが, quotation 環境の右マージンをゼロにしたので,list 環境で作り直しました。

JSPF スタイルでは実際の出力は \maketitle で行われます。

bxjsreport クラスの abstract 環境は:

- layout=v1 の場合は jsbook + report の動作を継承する。 つまり jsbook と同じに なる。
- layout=v2 の場合は新設の jsreport の動作を継承する。つまり jsarticle (+titlapage) と同じになる。

chapterabstract jsbook の abstract 環境 (「各章の初めにちょっとしたことを書く」ためのもの)を chapterabstract と呼ぶことにする。

```
2359 %<*book|report>
```

2360 \newenvironment{chapterabstract}{%

2361 \begin{list}{}{%

2362 \listparindent=1\jsZw

2363 \itemindent=\listparindent

2364 \rightmargin=Opt

 $\label{list} $$ \end{list}\vend{list}\$ 

2366 %</book|report>

"普通の" abstract 環境の定義。

2367 %<\*article|report|slide>

 $2368 \verb|\newbox\\| @abstractbox|$ 

 $2369 \ \text{if@titlepage}$ 

2370 \newenvironment{abstract}{\%

2371 \titlepage

2372 \null\vfil

2373 \@beginparpenalty\@lowpenalty

2374 \begin{center}%

 ${\tt 2375} \qquad {\tt \ \, headfont \ \, labstractname}$ 

2376 \@endparpenalty\@M

2377 \end{center}%

## BXJS クラスでは、概要の最初の段落に段落下げが入るようにする。

```
2378
       \par}%
2379
     {\par\vfil\null\endtitlepage}
2380 \else
     \newenvironment{abstract}{%
2381
       \if@twocolumn
2382
         \ifx\maketitle\relax
2383
2384
           \section*{\abstractname}%
         \else
2385
            \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
2386
           \begin{minipage}[b]{\textwidth}
2387
             \small\parindent1\jsZw
2388
2389
             \begin{center}%
               {\mbox{\locality} {\mbox{\locality} \mbox{\locality}} \% }
2390
2391
             \end{center}%
             \left\{ \right\} 
               \listparindent\parindent
2393
               \itemindent \listparindent
2394
               \rightmargin \leftmargin}%
2395
              \item\relax
2396
         \fi
2397
2398
        \else
         \small
2399
2400
         \begin{center}%
           2401
2402
         \end{center}%
         \left\{ \right\} 
2403
2404
           \listparindent\parindent
2405
           \itemindent \listparindent
            \rightmargin \leftmargin}%
2406
         \item\relax
2407
       \fi}{\if@twocolumn
2408
2409
         \ifx\maketitle\relax
2410
2411
           \endlist\end{minipage}\egroup
         \fi
2412
2413
        \else
         \endlist
2414
2415
        \fi}
2416 \fi
2417 %</article|report|slide>
2418 %<*jspf>
2419 \newbox\@abstractbox
2420 \newenvironment{abstract}{%
      \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
2422
     2423
       \small
       \if@english \parindent6\jsc@mmm \else \parindent1\jsZw \fi}%
2424
```

```
2425 {\end{minipage}\egroup}
2426 %</jspf>
```

bxjs@force@chapterabstract が真の場合は、abstract 環境を chapterabstract 環境と 等価にする。

```
2427 %<*book|report>
```

- $2428 \ \text{ifbxjs@force@chapterabstract}$
- 2429 \let\abstract\chapterabstract
- ${\tt 2430} \qquad \verb|\let\endabstract| endchapterabstract|$
- 2431 \fi
- 2432 %</book|report>

## ■キーワード

keywords キーワードを準備する環境です。実際の出力は \maketitle で行われます。

- 2433 %<\*jspf>
- 2434 %\newbox\@keywordsbox
- 2435  $\n$ newenvironment{keywords}{%
- 2436 % \global\setbox\@keywordsbox\hbox\bgroup
- 2437 % \begin{minipage}[b]{1570\jsc@mmm}{\sffamily Keywords:}\par
- 2438 % \small\parindent0\jsZw}%
- 2439 % {\end{minipage}\egroup}
- 2440 %</jspf>

## ■verse 環境

verse 詩のための verse 環境です。

- 2441 \newenvironment{verse}{\%
- 2442 \let \\=\@centercr
- 2443 \list{}{%
- 2444 \itemsep \z@
- 2445 \itemindent -2\jsZw % 元: -1.5em
- 2446 \listparindent\itemindent
- 2447 \rightmargin \z@
- 2448 \advance\leftmargin 2\jsZw}% 元: 1.5em
- 2449 \item\relax}{\endlist}

### ■quotation 環境

quotation 段落の頭の字下げ量を  $1.5 \mathrm{em}$  から \parindent に変えました。また、右マージンを 0 にしました。

- 2450 \newenvironment{quotation}{\%}
- 2451 \list{}{%
- 2452 \listparindent\parindent
- 2453 \itemindent\listparindent
- 2454 \rightmargin \z0}%
- 2455 \item\relax}{\endlist}

#### ■quote 環境

quote quote 環境は,段落がインデントされないことを除き,quotation 環境と同じです。 2456 \newenvironment{quote}%

2457 {\list{}{\rightmargin\z@}\item\relax}{\endlist}

■定理など ltthm.dtx 参照。たとえば次のように定義します。

\newtheorem{definition}{定義} \newtheorem{axiom}{公理} \newtheorem{theorem}{定理}

[2001-04-26] 定理の中はイタリック体になりましたが、これでは和文がゴシック体になってしまうので、 $\$  な削除しました。

[2009-08-23] \bfseries を \headfont に直し, \labelsep を  $1 \, \mathrm{zw}$  にし,括弧を全角にしました。

```
2458 \def\@begintheorem#1#2{\trivlist\labelsep=1\jsZw  
2459 \item[\hskip \labelsep{\headfont #1\ #2}]}  
2460 \def\@opargbegintheorem#1#2#3{\trivlist\labelsep=1\jsZw  
2461 \item[\hskip \labelsep{\headfont #1\ #2 (#3) }]}
```

titlepage タイトルを独立のページに出力するのに使われます。

[2017-02-24] コミュニティ版 pIATeX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて,book クラス でタイトルを必ず奇数ページに送るようにしました。といっても,横組クラスしかありませんでしたので,従来の挙動は何も変わっていません。また,book 以外の場合のページ番号の リセットもコミュニティ版 pIATeX の標準クラス 2017/02/15 に合わせましたが,こちらも 片面印刷あるいは独立のタイトルページを作らないクラスばかりでしたので,従来の挙動は 何も変わらずに済みました。

```
2462 \newenvironment{titlepage}{%
2463 %<book>
               \pltx@cleartooddpage %% 2017-02-24
2464
        \if@twocolumn
          \@restonecoltrue\onecolumn
2465
2466
        \else
          \@restonecolfalse\newpage
2467
2468
2469
        \thispagestyle{empty}%
        \ifodd\c@page\setcounter{page}\@ne\else\setcounter{page}\z@\fi %% 2017-02-
2470
   24
2471
2472
     {\if@restonecol\twocolumn \else \newpage \fi
        \if@twoside\else
2473
          \setcounter{page}\@ne
2474
```

## ■付録

\fi}

2475

# \appendix 本文と付録を分離するコマンドです。

2476 %<\*!book&!report>

 $2477 \mbox{ \newcommand{\appendix}{\par}}$ 

2478 \setcounter{section}{0}%

2479 \setcounter{subsection}{0}%

2481 \gdef\presectionname{\appendixname}%

2482 \gdef\postsectionname{}%

2483 % \gdef\thesection{\@Alph\c@section}% [2003-03-02]

 $\verb| \gdef\the section{\presection name \@Alph\c@section \postsection name}|| % \end{minipage} | % \end{mini$ 

2485 \gdef\thesubsection{\@Alph\c@section.\@arabic\c@subsection}%

2486 \else

2487 \gdef\@secapp{\appendixname}%

2488 \gdef\@secpos{}%

 $2489 \ \gdef\thesection{\QAlph\c@section}%$ 

2490 \fi}

2491 %</!book&!report>

2492 %<\*book|report>

2493  $\newcommand{\appendix}{\par}$ 

2494 \setcounter{chapter}{0}%

2495 \setcounter{section}{0}%

2496 \gdef\@chapapp{\appendixname}%

2497 \gdef\@chappos{}%

2499 %</book|report>

## 8.4 パラメータの設定

## ■array と tabular 環境

\arraycolsep array 環境の列間には \arraycolsep の 2 倍の幅の空きが入ります。 2500 \setlength\arraycolsep{5\p@?}

\tabcolsep tabular 環境の列間には \tabcolsep の 2 倍の幅の空きが入ります。
2501 \setlength\tabcolsep{6\p0?}

\arrayrulewidth array, tabular 環境内の罫線の幅です。

 $2502 \verb|\setlength| arrayrule width {\{.4\p@}}$ 

\doublerulesep array, tabular 環境での二重罫線間のアキです。 2503 \setlength\doublerulesep{2\p0}

## ■tabbing 環境

\tabbingsep \' コマンドで入るアキです。

 $2504 \verb|\setlength\tabbingsep{\labelsep}|$ 

#### ■minipage 環境

**| Compfootins minipage 環境の脚注の \skip\Compfootins は通常のページの \skip\footins と同じ働きをします。** 

 $2505 \ship\ensuremath{\texttt{Ompfootins}} = \ship\footins$ 

## ■framebox 環境

\fboxsep \fbox, \framebox で内側のテキストと枠との間の空きです。

\fboxrule \fbox, \framebox の罫線の幅です。

## ■equation と eqnarray 環境

\theequation 数式番号を出力するコマンドです。

2508 %<!book&!report>\renewcommand \theequation {\@arabic\c@equation}

2509 %<\*book|report>

2510 \@addtoreset{equation}{chapter}

 $2511 \renewcommand\theequation$ 

2512 {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@equation}

2513 % < /book|report>

\jot eqnarray の行間に余分に入るアキです。デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

2514 % \setlength\jot{3pt}

\@eqnnum 数式番号の形式です。デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

\jsInhibitGlue (\theequation ) \jsInhibitGlue のように和文かっこを使うことも可能です。

2515 % \def\@eqnnum{(\theequation)}

amsmath パッケージを使う場合は \tagform@ を次のように修正します。

2516 % \def\tagform@#1{\maketag@@00{ (\ignorespaces#1\unskip\@@italiccorr ) }}

## 8.5 フロート

タイプ TYPE のフロートオブジェクトを扱うには、次のマクロを定義します。

\fps@TYPE フロートを置く位置(float placement specifier)です。

\ftype@TYPE フロートの番号です。2の累乗(1, 2, 4, ...)でなければなりません。

\ext@TYPE フロートの目次を出力するファイルの拡張子です。

\fnum@TYPE キャプション用の番号を生成するマクロです。

\@makecaption $\langle num \rangle \langle text \rangle$  キャプションを出力するマクロです。 $\langle num \rangle$  は \fnum@... の生成する番号, $\langle text \rangle$  はキャプションのテキストです。テキストは適当な幅の \parbox に入ります。

## ■figure 環境

```
\c@figure 図番号のカウンタです。
   \thefigure 図番号を出力するコマンドです。
              2517 %<*!book&!report>
              2518 \newcounter{figure}
              2519 \renewcommand \thefigure {\@arabic\c@figure}
              2520 %</!book&!report>
              2521 %<*book|report>
              2522 \text{ } \text{newcounter{figure}[chapter]}
              2523 \renewcommand \thefigure
                        {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@figure}
              2525 %</book|report>
  \fps@figure figure のパラメータです。\figurename の直後に ~ が入っていましたが, ここでは外し
\ftype@figure ました。
  \ext@figure 2526 \def\fps@figure{tbp}
\label{lem:condition} $$ \int_{2527 \left( \frac{2527 \left( \frac{1}{1} \right)}{2528 \left( \frac{1}{1} \right)} \right)} df = 0. $$
              2529 \def\fnum@figure{\figurename\nobreak\thefigure}
       figure *形式は段抜きのフロートです。
      figure * 2530 \newenvironment{figure}%
                                   {\@float{figure}}%
              2531
                                   {\end@float}
              2533 \verb| lnewenvironment{figure*}| \%
                                   {\@dblfloat{figure}}%
              2534
              2535
                                   {\end@dblfloat}
```

#### ■table 環境

\c@table 表番号カウンタと表番号を出力するコマンドです。アスキー版では \thechapter. が \thetable \thechapter{}・になっていますが、ここではオリジナルのままにしています。

```
2536 %<*!book&!report>
2537 \newcounter{table}
2538 \renewcommand\thetable{\@arabic\c@table}
2539 %</!book&!report>
2540 %<*book|report>
2541 \newcounter{table}[chapter]
2542 \renewcommand \thetable
2543 {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@table}
2544 %</book|report>
```

```
\fps@table table のパラメータです。\tablename の直後に ~ が入っていましたが、ここでは外しま\ftype@table した。
```

 $\verb|\ext@table| 2545 \ef\fps@table{tbp}|$ 

 $\verb|\fnum@table|| 2546 \ef\ftype@table{2}|$ 

 $2547 \det \text{cxt@table{lot}}$ 

 $2548 \def\fnum@table{\tablename\nobreak\thetable}$ 

table \* は段抜きのフロートです。

table \* 2549 \newenvironment{table}%

2550 {\@float{table}}%

2551 {\end@float}

2552 \newenvironment{table\*}%

2553 {\@dblfloat{table}}%

2554 {\end@dblfloat}

## 8.6 キャプション

**\@makecaption** \caption コマンドにより呼び出され,実際にキャプションを出力するコマンドです。第 1 引数はフロートの番号,第 2 引数はテキストです。

\abovecaptionskip それぞれキャプションの前後に挿入されるスペースです。\belowcaptionskip が 0 になっ \belowcaptionskip ていましたので、キャプションを表の上につけた場合にキャプションと表がくっついてしま うのを直しました。

 $2555 \mbox{ \newlength\above captionskip}$ 

 $2556 \mbox{ newlength\belowcaptionskip}$ 

2557 \setlength\abovecaptionskip{5\p@?} % 元: 10\p@

2558 \setlength\belowcaptionskip{5\p0?} %  $\vec{\pi}$ : 0\p0

実際のキャプションを出力します。オリジナルと異なり、文字サイズを \small にし、キャプションの幅を 2 cm 狭くしました。

[2003-11-05] ロジックを少し変えてみました。

2559 %<\*!jspf>

 $2560 \% \lceil \sqrt{\frac{2560 \%}{\log \det \sqrt{\frac{2560 \%}{\log \det \sqrt{\frac{1}{2}}}}}$ 

2561 % \advance\leftskip10\jsc@mmm

2562 % \advance\rightskip10\jsc@mmm

2563 % \vskip\abovecaptionskip

2564 % \sbox\@tempboxa{#1\hskip1\jsZw\relax #2}%

2565% \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize

2566 % #1\hskip1\jsZw\relax #2\par

2567 % \else

2568 % \global \@minipagefalse

2569 % \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%

2570 % \fi

2571 % \vskip\belowcaptionskip}}

 $2572 \ensuremath{\mbox{2572}} \ensuremath{\mbox{0makecaption}\#1\#2\{{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{}}}}}} \ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{}}}}}$ 

2573 \advance\leftskip .0628\linewidth

```
\advance\rightskip .0628\linewidth
2574
2575
      \vskip\abovecaptionskip
2576
      \sbox\@tempboxa{#1\zwspace#2}%
      \ifdim \wd\@tempboxa <\hsize \centering \fi</pre>
2577
      #1\zwspace#2\par
2578
      \vskip\belowcaptionskip}}
2580 %</!jspf>
2581 %<*jspf>
2582 \long\def\@makecaption#1#2{%}
      \vskip\abovecaptionskip
      \sbox\@tempboxa{\small\sffamily #1\quad #2}%
      \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
2585
        {\small\sffamily
2586
          \left\{ 1\right\} 
2587
             \renewcommand{\makelabel}[1]{##1\hfil}
2588
2589
             \itemsep
                         \z0
             \itemindent \z@
2590
             \labelsep
2591
                         \z0
2592
             \labelwidth 11\jsc@mmm
             \listparindent\z@
2593
2594
             \leftmargin 11\jsc@mmm}\item\relax #2\endlist}
      \else
2595
2596
        \global \@minipagefalse
        \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%
2597
2598
      \vskip\belowcaptionskip}
2600 %</jspf>
```

## 9 フォントコマンド

ここでは IATEX 2.09 で使われていたコマンドを定義します。これらはテキストモードと数式モードのどちらでも動作します。これらは互換性のためのもので、できるだけ \text...と \math...を使ってください。

[2016-07-15] KOMA-Script 中の \scr@DeclareOldFontCommand に倣い、これらの命令を使うときには警告を発することにしました。

[2016-07-16] 警告を最初の一回だけ発することにしました。また、例外的に警告を出さないようにするスイッチも付けます。

\if@jsc@warnoldfontcmd

f@jsc@warnoldfontcmdexception

\if@jsc@warnoldfontcmd はBXJS クラスでは不使用。

\if@jsc@warnoldfontcmdexception は \allow/disallowoldfontcommands の状態を表す。

 $2601 \verb|\newif\if@jsc@warnoldfontcmd|$ 

 $2602 \verb|\@jsc@warnoldfontcmdtrue|$ 

```
\jsc@DeclareOldFontCommand
                          2605 \newcommand*{\jsc@DeclareOldFontCommand}[3]{%
                          2606
                                \g@addto@macro\bxjs@oldfontcmd@list{\do#1}%
                                \DeclareOldFontCommand{#1}{%
                          2607
                                  \bxjs@oldfontcmd{#1}#2%
                          2608
                                ጉና%
                          2609
                                  \bxjs@oldfontcmd{#1}#3%
                          2610
                                }%
                          2611
                          2612 }
                          2613 \DeclareRobustCommand*{\jsc@warnoldfontcmd}[1]{%
                                \ClassInfo\bxjs@clsname
                          2614
                                 {Old font command '\string#1' is used!!\MessageBreak
                                  The first occurrence is}%
                          2616
                          2617 }
                            "二文字フォント命令"の使用を許可する(警告しない)。
     \allowoldfont.commands
                            "二文字フォント命令"の使用に対して警告を出す。
  \disallowoldfontcommands
                          2618 \newcommand*{\allowoldfontcommands}{%
                                \@jsc@warnoldfontcmdexceptiontrue}
                          2620 \newcommand*{\disallowoldfontcommands}{%
                                \@jsc@warnoldfontcmdexceptionfalse}
                          2622 \let\bxjs@oldfontcmd@list\@empty
                          2623 \def\bxjs@oldfontcmd#1{%
                                \expandafter\bxjs@oldfontcmd@a\csname bxjs@ofc/\string#1\endcsname#1}
                          2625 \def\bxjs@oldfontcmd@a#1#2{%
                                \if@jsc@warnoldfontcmdexception\else
                                  \global\@jsc@warnoldfontcmdfalse
                          2627
                          2628
                                   \int x#1\relax
                                    \left| \frac{1=t}{2} \right|
                          2629
                          2630
                                    \jsc@warnoldfontcmd{#2}%
                                  \fi
                          2631
                                fi
                          2632
                          2633 \def\bxjs@warnoldfontcmd@final{%
                          2634 % \par
                          2635
                                \global\let\bxjs@warnoldfontcmd@final\@empty
                          2636
                                \let\@tempa\@empty
                                \def\do##1{%}
                          2637
                                   \expandafter\ifx\csname bxjs@ofc/\string##1\endcsname\relax\else
                          2638
                          2639
                                    \edef\@tempa{\@tempa \space\string##1}\fi}
                                \bxjs@oldfontcmd@list
                          2640
                                \ifx\@tempa\@empty\else
                          2641
                                  \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
                          2642
```

 $2603 \verb|\newif\if@jsc@warnoldfontcmdexception|\\ 2604 \verb|\disc@warnoldfontcmdexceptionfalse|$ 

{Some old font commands were used in text:\MessageBreak

2643

```
\text{\space\Qtempa\MessageBreak}}
\text{You should note, that since 1994 LaTeX2e provides a\MessageBreak} \text{2646} \text{new font selection scheme called NFSS2 with several\MessageBreak} \text{new, combinable font commands. The} \text{class provides\MessageBreak} \text{the old font commands only for compatibility}} \text{\fi}
```

単純に \AtEndDocument のフックの中で \bxjs@warnoldfontcmd@final を実行した場合、最終ページのヘッダ・フッタの中にある二文字フォント命令はそれより後に実行されるため捕捉できない。これに対処するため、\end{document} 中に実行される \clearpage の処理の直後に \bxjs....final が呼ばれるようにする。

```
2651 \def\bxjs@warnoldfontcmd@kick@final{%
```

- 2652 \g@addto@macro\clearpage{\bxjs@warnoldfontcmd@final}}
- 2653 \AtEndDocument{\bxjs@warnoldfontcmd@kick@final}

\mc フォントファミリを変更します。

```
\label{lem:command} $$ \left( \frac{2654 \jsc@DeclareOldFontCommand_{\c}{\operatorname{lnormalfont\gtfamily}_{\c}} \right) $$ \c@DeclareOldFontCommand_{\c}{\operatorname{lnormalfont\gtfamily}_{\c}} $$ \sc@DeclareOldFontCommand_{\c}{\operatorname{lnormalfont\gtfamily}_{\c}} $$ \tt 2658 \jsc@DeclareOldFontCommand_{\t}_{\c}} $$ \c@DeclareOldFontCommand_{\t}} $$ \c@DeclareOldFontCommand_{\t}} $$ \c@DeclareOldFontCommand_{\t}} $$ \c@DeclareOldFontCommand_{\t}} $$ \c@DeclareOldFontCommand_{\t}} $$ \c@DeclareOldFontCommand_{\t}} $$
```

\bf ボールドシリーズにします。通常のミーディアムシリーズに戻すコマンドは \mdseries です。

 $2659 \verb|\jsc@DeclareOldFontCommand{\bf}{\normalfont\bfseries}{\mbox{\mbox{$\backslash$}}}$ 

\it フォントシェイプを変えるコマンドです。斜体とスモールキャップスは数式中では何もしま \sl せん (警告メッセージを出力します)。通常のアップライト体に戻すコマンドは \upshape \sc です。

```
2660 \jsc@DeclareOldFontCommand \it}{\normalfont\slshape}{\normath\sl} \\ 2661 \jsc@DeclareOldFontCommand \sl}{\normalfont\slshape}{\normath\sl} \\ 2662 \jsc@DeclareOldFontCommand \sc}{\normalfont\scshape}{\normath\sc} \\ (normath\sc) \label{linear}
```

\cal 数式モード以外では何もしません(警告を出します)。

## 10 相互参照

#### 10.1 目次の類

\section コマンドは .toc ファイルに次のような行を出力します。

\contentsline{section}{タイトル}{ページ}

たとえば\section に見出し番号が付く場合、上の「タイトル」は

\numberline{番号}{見出し}

となります。この「番号」は \thesection コマンドで生成された見出し番号です。 figure 環境の \caption コマンドは .lof ファイルに次のような行を出力します。

\contentsline{figure}{\numberline{番号}{キャプション}{ページ}

この「番号」は \thefigure コマンドで生成された図番号です。 table 環境も同様です。

\contentsline{...} は \lo... というコマンドを実行するので, あらかじめ \lochapter, \location, \location などを定義しておかなければなりません。これらの多くは \cdottedtocline コマンドを使って定義します。これは

**\@dottedtocline{レベル}{インデント}{幅}{タイトル}{ページ}** 

という書式です。

レベル この値が tocdepth 以下のときだけ出力されます。\chapter はレベル 0, \section はレベル 1, 等々です。

インデント 左側の字下げ量です。

幅 「タイトル」に \numberline コマンドが含まれる場合,節番号が入る箱の幅です。

\@pnumwidth ページ番号の入る箱の幅です。

 $\land$  Ctocrmarg  $\land$  右マージンです。 $\land$  Ctocrmarg  $\land$   $\land$  Cpnumwidth とします。

**\@dotsep** 点の間隔です(単位 mu)。

\c@tocdepth 目次ページに出力する見出しレベルです。元は article で 3, その他で 2 でしたが,ここでは一つずつ減らしています。

 $2665 \verb|\newcommand@pnumwidth{\{1.55em\}}|$ 

2666 \newcommand\@tocrmarg{2.55em}

 $2667 \verb|\newcommand@dotsep{4.5}|$ 

 $2668 \ \% < !book\&!report> \ \ tocdepth \} \{2\}$ 

2669 % <book | report > \setcounter { tocdepth } { 1}

## ■目次

\tableofcontents 目次を生成します。

\jsc@tocl@width [2013-12-30] \prechaptername などから見積もった目次のラベルの長さです。(by ts)

 $2670 \mbox{ }\mbox{\colored}$ 

2671 \newcommand{\tableofcontents}{%

2672 %<\*book|report>

 $2673 \quad \texttt{\scwidth\jsc@tocl@width{\headfont\prechaptername\postchaptername}}\%$ 

2674 \settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}%

```
\ifdim\jsc@tocl@width<\@tempdima \setlength\jsc@tocl@width{\@tempdima}\fi
          2675
                \ifdim\jsc@tocl@width<2\jsZw \divide\jsc@tocl@width by 2 \advance\jsc@tocl@width 1\jsZw\fi
          2676
          2677
                \if@twocolumn
                  \@restonecoltrue\onecolumn
          2678
          2679
                  \@restonecolfalse
          2680
                \fi
          2681
          2682
                \chapter*{\contentsname}%
                \@mkboth{\contentsname}{}%
          2683
          2684 %</book|report>
          2685 %<*!book&!report>
          2686
                \settowidth\jsc@tocl@width{\headfont\presectionname\postsectionname}%
                \settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}%
                \ifdim\jsc@tocl@width<\@tempdima\relax\setlength\jsc@tocl@width{\@tempdima}\fi
          2688
          2689
                \ifdim\jsc@tocl@width<2\jsZw \divide\jsc@tocl@width by 2 \advance\jsc@tocl@width 1\jsZw\fi
                \section*{\contentsname}%
                \@mkboth{\contentsname}{\contentsname}%
          2691
          2692 %</!book&!report>
          2693 \@starttoc{toc}%
          2694 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
          2695 }
   \1@part 部の目次です。
          2696 \newcommand*{\l@part}[2]{%
                2698 %<!book&!report>
                                  \addpenalty\@secpenalty
          2699 %<book|report>
                                \addpenalty{-\@highpenalty}%
          2700
                  \addvspace{2.25em \@plus\p@?}%
          2701
                  \begingroup
          2702
                    \parindent \z@
          2703 %
                    \@pnumwidth should be \@tocrmarg
          2704 %
                    \rightskip \@pnumwidth
          2705
                    \rightskip \@tocrmarg
          2706
                    \parfillskip -\rightskip
                    {\leavevmode
          2707
          2708
                      \large \headfont
                      \setlength\@lnumwidth{4\jsZw}%
          2709
          2710
                      #1\hfil \hb@xt@\@pnumwidth{\hss #2}}\par
                    \nobreak
          2712 %<book|report>
                                \global\@nobreaktrue
          2713 %<book|report>
                                \everypar{\global\@nobreakfalse\everypar{}}%
          2714
                  \endgroup
          2715
                \fi}
\lambda l@chapter 章の目次です。\@lnumwidth を 4.683zw に増やしました。
              [2013-12-30] \@lnumwidth を \jsc@tocl@width から決めるようにしてみました。(by
           ts)
          2716 %<*book|report>
          2717 \newcommand*{\l@chapter}[2]{%
```

```
2718
                   \ifnum \c@tocdepth >\m@ne
              2719
                     \addpenalty{-\@highpenalty}%
              2720
                     \addvspace{1.0em \@plus\p@?}
              2721 %
                     \vskip 1.0em \@plus\p@ % book.cls では↑がこうなっている
              2722
                     \begingroup
                       \parindent\z@
              2723
                       \rightskip\@pnumwidth
              2724 %
              2725
                       \rightskip\@tocrmarg
                       \parfillskip-\rightskip
              2726
                       \leavevmode\headfont
              2727
                       2728 %
              2729
                       \verb|\cline{Clnumwidth{\jsc@tocl@width}\advance\@lnumwidth{\ 2.683\jsZw.}|}
                       \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
              2730
                       #1\nobreak\hfil\nobreak\hbox to\@pnumwidth{\hss#2}\par
              2731
              2732
                       \penalty\@highpenalty
              2733
                     \endgroup
              2734
                   \fi}
              2735 %</book|report>
     \l0section 節の目次です。
              2736 %<*!book&!report>
              2737 \newcommand*{\l@section}[2]{%
              2738
                   \ifnum \c@tocdepth >\z@
              2739
                     \addpenalty{\@secpenalty}%
                     \addvspace{1.0em \@plus\p@?}%
              2740
              2741
                     \begingroup
                       \parindent\z@
              2742
              2743 %
                       \rightskip\@pnumwidth
              2744
                       \rightskip\@tocrmarg
                       \parfillskip-\rightskip
              2745
                       \leavevmode\headfont
              2747 %
                       % \setlength\@lnumwidth{4\jsZw}% 元 1.5em [2003-03-02]
                       2748
              2749
                       \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
                       1\ to 0\ pnumwidth {\hss#2}\par
              2750
              2751
                     \endgroup
                   \fi}
              2752
              2753 %</!book&!report>
                 インデントと幅はそれぞれ 1.5em, 2.3em でしたが、1zw, 3.683zw に変えました。
              2754 \% \verb|chook|| report> \% \texttt{\lambda} \{ \texttt{\lambda} \{ \texttt{\lambda} \} \{ \texttt{\lambda} \} \}
                 [2013-12-30] 上のインデントは \jsc@tocl@width から決めるようにしました。(by ts)
  \l@subsection さらに下位レベルの目次項目の体裁です。あまり使ったことがありませんので,要修正かも
                しれません。
\1@subsubsection
                 [2013-12-30] ここも \jsc@tocl@width から決めるようにしてみました。(by ts)
   \1@paragraph
\verb|\location| 2755 %<*!book&!report>|
              2756 % \newcommand*{\l@subsection}
                                              {\cline{2}{1.5em}{2.3em}}
```

```
2757 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3.8em}{3.2em}}
2758 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                                       {\cline{4}{7.0em}{4.1em}}
2759 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{10em}{5em}}
2760 %
2761 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                                       {\@dottedtocline{2}{1zw}{3zw}}
2762 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{2\jsZw}{3\jsZw}}
                                                                       {\tt \{\dottedtocline{4}{3\jsZw}{3\jsZw}}}
2763 % \newcommand*{\l@paragraph}
2764 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{4\jsZw}{3\jsZw}}
2765 %
2766 \newcommand*{\l@subsection}{%
2767
                           \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima -1\jsZw
2768
                           \@dottedtocline{2}{\@tempdima}{3\jsZw}}
2769 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
                           \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 0\jsZw
2770
                           \@dottedtocline{3}{\@tempdima}{4\jsZw}}
2771
2772 \newcommand*{\l@paragraph}{%
                           \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 1\jsZw
2773
2774
                           \@dottedtocline{4}{\@tempdima}{5\jsZw}}
2775 \newcommand*{\l@subparagraph}{%
                           \verb|\delta | advance | @tempdima 2 | jsZw| \\
2776
                           \@dottedtocline{5}{\@tempdima}{6\jsZw}}
2778 %</!book&!report>
2779 %<*book|report>
2780 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                                       {\cline{2}{3.8em}{3.2em}}
2781 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{7.0em}{4.1em}}
2782 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                                       {\@dottedtocline{4}{10em}{5em}}
2783 % \newcommand*{\l0subparagraph} {\0dottedtocline{5}{12em}{6em}}
2784 \newcommand*{\l@section}{%
                           \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima -1\jsZw
2786
                           \cline{1}{\cline{3.683\jsZw}}
2787 \newcommand*{\l@subsection}{%
2788
                           \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 2.683\jsZw
                           \@dottedtocline{2}{\@tempdima}{3.5\jsZw}}
2789
2790 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
                           \verb|\delta] $$ \end{align*} $$
2791
                           \cline{3}{\cline{3}}{\cline{3}}{\cline{3}}
2792
2793 \newcommand*{\l@paragraph}{%
2794
                           \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 10.683\jsZw
                           \cline{4}{\cline{4}{5.5\jsZw}}
2796 \newcommand*{\l@subparagraph}{%
2797
                           \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 16.183\jsZw
2798
                           \cline{5}{\cline{5}}{\cline{5}}
2799 %</book|report>
```

```
2800 \newdimen\@lnumwidth
                                2801 \end{area} $$2801 \end{
\@dottedtocline IPTFX 本体(ltsect.dtx 参照)での定義と同じですが, \@tempdima を \@lnumwidth に
          \jsTocLine 変えています。
                                       [2018-06-23] デフォルトでは . . . . . . . . . . . . . のようにベースラインになります。
                                        これを変更可能にするため、\jsTocLineというマクロに切り出しました。例えば、仮想
                                    ボディの中央・・・・・・・ に変更したい場合は
                                        \renewcommand{\jsTocLine}{\leaders \hbox {\hss \hfill}
                                    とします。
                                2802 \def\jsTocLine{\leaders\hbox{%
                                            $\m@th \mkern \@dotsep mu\hbox{.}\mkern \@dotsep mu$}\hfill}
                                2804 \def\@dottedtocline#1#2#3#4#5{\ifnum #1>\c@tocdepth \else
                                            \vskip \z@ \@plus.2\p@?
                                            {\leftskip #2\relax \rightskip \@tocrmarg \parfillskip -\rightskip
                                2806
                                                 \parindent #2\relax\@afterindenttrue
                                2807
                                2808
                                              \interlinepenalty\@M
                                              \leavevmode
                                2809
                                               \@lnumwidth #3\relax
                                2810
                                2811
                                               \advance\leftskip \@lnumwidth \null\nobreak\hskip -\leftskip
                                2812
                                                {#4}\nobreak
                                2813
                                                 \jsTocLine \nobreak\hb@xt@\@pnumwidth{%
                                                            \hfil\normalfont \normalcolor #5}\par}\fi}
                                2814
                                    ■図目次と表目次
 \listoffigures 図目次を出力します。
                                2815 \newcommand{\listoffigures}{%
                                2816 %<*book|report>
                                2817 \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
                                            \else\@restonecolfalse\fi
                                2819 \quad \texttt{\listfigurename}\%
                                2820 \@mkboth{\listfigurename}{}%
                                2821 %</book|report>
                                2822 %<*!book&!report>
                                2823 \section*{\listfigurename}%
                                2824 \@mkboth{\listfigurename}{\listfigurename}%
                                2825 %</!book&!report>
                                2826 \@starttoc{lof}%
                                2827 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
                                2828 }
            \1@figure 図目次の項目を出力します。
                                2829 \newcommand*{\l0figure}{\0dottedtocline{1}{1\jsZw}{3.683\jsZw}}
```

\listoftables 表目次を出力します。

```
2830 \newcommand{\listoftables}{%
        2831 %<*book|report>
             \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
              \else\@restonecolfalse\fi
        2833
              \chapter*{\listtablename}%
             \@mkboth{\listtablename}{}%
        2835
        2836 %</book|report>
        2837 %<*!book&!report>
        2838 \section*{\listtablename}%
        2839 \@mkboth{\listtablename}{\listtablename}%
        2840 %</!book&!report>
        2841 \@starttoc{lot}%
        2842 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
        2843 }
\lotable 表目次は図目次と同じです。
        2844 \left| \text{0table} \right|
```

## 10.2 参考文献

\bibindent オープンスタイルの参考文献で使うインデント幅です。元は 1.5em でした。

 $2845 \newdimen\bibindent \\ 2846 \setlength\bibindent \{2\jsZw\}$ 

thebibliography 参考文献リストを出力します。

[2016-07-16] I $\Delta$ TEX 2.09 で使われていたフォントコマンドの警告を,文献スタイル (.bst) ではよく  $\Delta$ th がいまだに用いられることが多いため,thebibliography 環境内では例外的に出さないようにしました。

```
2847 \newenvironment{thebibliography}[1]{%
    \@jsc@warnoldfontcmdexceptiontrue
2849
     \global\let\presectionname\relax
    \global\let\postsectionname\relax
2851 %<article|slide> \section*{\refname}\@mkboth{\refname}{\refname}%
2852 %<*kiyou>
    \vspace{1.5\baselineskip}
2853
     \subsubsection*{\refname}\@mkboth{\refname}\%
2854
    \vspace{0.5\baselineskip}
2856 %</kiyou>
\list{\@biblabel{\@arabic\c@enumiv}}%
2859
          {\settowidth\labelwidth{\@biblabel{#1}}%
2860
2861
          \leftmargin\labelwidth
2862
          \advance\leftmargin\labelsep
2863
          \@openbib@code
2864
          \usecounter{enumiv}%
          \let\p@enumiv\@empty
2865
```

```
2867 %<kiyou>
                         \small
            2868
                  \sloppy
                  \clubpenalty4000
            2869
            2870
                  \@clubpenalty\clubpenalty
                  \widowpenalty4000%
            2871
                  \sfcode`\.\@m}
            2872
            2873
                {\def\@noitemerr
                  {\@latex@warning{Empty `thebibliography' environment}}%
            2874
            2875
    \newblock \newblock はデフォルトでは小さなスペースを生成します。
            2876 \newcommand{\newblock}{\hskip .11em\@plus.33em\@minus.07em}
\@openbib@code \@openbib@code はデフォルトでは何もしません。この定義は openbib オプションによっ
             て変更されます。
            2877 \let\@openbib@code\@empty
   \@biblabel \bibitem[...] のラベルを作ります。ltbibl.dtx の定義の半角 [ を全角 [ ] に変え、余
             分なスペースが入らないように \jsInhibitGlue ではさみました。とりあえずコメントア
             ウトしておきますので,必要に応じて生かしてください。
            2878 % \def\@biblabel#1{\jsInhibitGlue [#1] \jsInhibitGlue}
       \cite 文献の番号を出力する部分は ltbibl.dtx で定義されていますが、コンマとかっこを和文
      \@cite フォントにするには次のようにします。とりあえずコメントアウトしておきましたので,必
      \@citex 要に応じて生かしてください。かっこの前後に入るグルーを \jsInhibitGlue で取ってい
              ますので,オリジナル同様,Knuth~\cite{knu}」のように半角空白で囲んでください。
            2879 % \def\@citex[#1]#2{\leavevmode
            2880 %
                  \let\@citea\@empty
            2881 %
                  \@cite{\@for\@citeb:=#2\do
            2882 %
                    {\citeadef\citea{, \inhibitglue\penalty\0m\}\%}
            2883 %
                     \edef\@citeb{\expandafter\@firstofone\@citeb\@empty}%
            2884 %
                     \if@filesw\immediate\write\@auxout{\string\citation{\@citeb}}\fi
            2885 %
                     \@ifundefined{b@\@citeb}{\mbox{\normalfont\bfseries ?}%
            2886 %
                       \G@refundefinedtrue
            2887 %
                       \@latex@warning
            2888 %
                         {Citation `\@citeb' on page \thepage \space undefined}}%
            2889 %
                       {\@cite@ofmt{\csname b@\@citeb\endcsname}}}{#1}}
            2890 % \def\@cite#1#2{\jsInhibitGlue [{#1\if@tempswa , #2\fi}] \jsInhibitGlue}
               引用番号を上ツキの 1) のようなスタイルにするには次のようにします。\cite の先頭に
             \unskip を付けて先行のスペース(~も)を帳消しにしています。
            2891 % \DeclareRobustCommand\cite{\unskip
                  \@ifnextchar [{\@tempswatrue\@citex}{\@tempswafalse\@citex[]}}
            2893 % \def\@cite#1#2{^{\hbox{\scriptsize}}#1\if@tempswa
                  , \jsInhibitGlue\ #2\fi}) }}$}
            2894 %
```

\renewcommand\theenumiv{\@arabic\c@enumiv}}%

2866

## 10.3 索引

theindex  $2\sim3$  段組の索引を作成します。最後が偶数ページのときにマージンがずれる現象を直しました (Thanks: 藤村さん)。

```
2895 \newenvironment{theindex}{% 索引を3段組で出力する環境
2896
        \if@twocolumn
2897
          \onecolumn\@restonecolfalse
2898
        \else
2899
          \clearpage\@restonecoltrue
        \fi
2900
2901
        \columnseprule.4pt \columnsep 2\jsZw
2902
        \ifx\multicols\@undefined
2903 %<book|report>
                         \twocolumn[\@makeschapterhead{\indexname}%
2904 %<book|report>
                         \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
2905 %<!book&!report>
                           \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
2906 %<!book&!report>
                           \twocolumn[\section*{\indexname}]%
2907
        \else
2908
          \ifdim\textwidth<\fullwidth
2909
            \setlength{\evensidemargin}{\oddsidemargin}
2910
            \setlength{\textwidth}{\fullwidth}
2911
            \setlength{\linewidth}{\fullwidth}
2912 % < book | report >
                           \begin{multicols}{3}[\chapter*{\indexname}%
                           \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
2913 %<book|report>
2914 %<!book&!report>
                             \def\presectionname{}\def\postsectionname{}\%
2915 %<!book&!report>
                             \begin{multicols}{3}[\section*{\indexname}]%
2916
          \else
2917 % < book | report >
                           \begin{multicols}{2}[\chapter*{\indexname}%
2918 %<book|report>
                           \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
2919 %<!book&!report>
                             \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
2920 %<!book&!report>
                             \begin{multicols}{2}[\section*{\indexname}]%
2921
          \fi
2922
        \fi
2923 %<book|report>
                       \@mkboth{\indexname}{}%
2924 %<!book&!report>
                         \@mkboth{\indexname}{\indexname}%
        \plainifnotempty % \thispagestyle{plain}
2925
        \parindent\z@
2926
2927
        \parskip\z@ \@plus .3\p@?\relax
2928
        \let\item\@idxitem
        \raggedright
2929
        \footnotesize\narrowbaselines
2930
2931
2932
        \ifx\multicols\@undefined
2933
          \if@restonecol\onecolumn\fi
        \else
2934
          \end{multicols}
2935
2936
        \fi
2937
        \clearpage
```

2938 }

\@idxitem 索引項目の字下げ幅です。\@idxitem は \item の項目の字下げ幅です。

\subitem 2939 \newcommand{\@idxitem}{\par\hangindent 4\jsZw} % 元 40pt

\subsubitem  $^{2940}$  \newcommand{\subitem}{\@idxitem \hspace\*{2\jsZw}} %  $\vec{\pi}$  20pt

2941 \newcommand{\subsubitem}{\@idxitem \hspace\*{3\jsZw}} % 元 30pt

\indexspace 索引で先頭文字ごとのブロックの間に入るスペースです。

2942 \newcommand{\indexspace}{\par \vskip 10\p0? \0plus5\p0? \0minus3\p0?\relax}

\seename 索引の\see,\seealsoコマンドで出力されるものです。デフォルトはそれぞれ see, see also \alsoname という英語ですが,ここではとりあえず両方とも「 $\rightarrow$ 」に変えました。 $\Rightarrow$  (\$\Rightarrow\$) などでもいいでしょう。

2943 \newcommand\seename{\if@english see\else  $\rightarrow$ \fi}

2944 \newcommand\alsoname{\if@english see also\else  $\rightarrow$ \fi}

## 10.4 脚注

\footnote 和文の句読点・閉じかっこ類の直後で用いた際に余分なアキが入るのを防ぐため、 \footnotemark \inhibitglue を入れることにします。pIATEX の日付が 2016/09/03 より新しい場合は, このパッチが不要なのであてません。

パッチの必要性は「\pltx@foot@penalty が未定義か」で行う。\inhibitglue の代わりに \jsInhibitGlue を使う。

2945 \ifx\pltx@foot@penalty\@undefined

2946 \let\footnotes@ve=\footnote

2947 \def\footnote{\jsInhibitGlue\footnotes@ve}

2948 \let\footnotemarks@ve=\footnotemark

2949 \def\footnotemark{\jsInhibitGlue\footnotemarks@ve}

2950 \fi

**\@makefnmark** 脚注番号を付ける命令です。ここでは脚注番号の前に記号 \* を付けています。「注 1」の形式にするには \textasteriskcentered を 注\kern0.1em にしてください。\@xfootnotenextと合わせて、もし脚注番号が空なら記号も出力しないようにしてあります。

[2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。

[2013-04-23] 新しい  $pT_{EX}$  では脚注番号のまわりにスペースが入りすぎることを防ぐため、北川さんのパッチ [qa:57090] を取り込みました。

[2013-05-14] plcore.ltx に倣った形に書き直しました (Thanks: 北川さん)。

[2016-07-11] コミュニティ版 pIFTEX の変更に追随しました (Thanks: 角藤さん)。pIFTEX の日付が 2016/04/17 より新しい場合は,このパッチが不要なのであてません。

pTFX 依存のコードなので、minimal 和文ドライバ実装に移動。

\thefootnote 脚注番号に\*印が付くようにしました。ただし、番号がゼロのときは\*印も脚注番号も付きません。

[2003-08-15] \textasteriskcentered ではフォントによって下がりすぎるので変更しました。

[2016-10-08] TODO: 脚注番号が newtxtext や newpxtext の使用時におかしくなってしまいます。これらのパッケージは内部で \thefootnote を再定義していますので、気になる場合はパッケージを読み込むときに defaultsups オプションを付けてください (qa:57284, qa:57287)。

2951 \def\thefootnote\\ignum\c@footnote\\z@\leavevmode\lower.5ex\hbox{\*}\@arabic\c@footnote\fi} 「注 1」の形式にするには次のようにしてください。

2952% \def\thefootnote{\ifnum\c@footnote>\z@ 注\kern0.1\jsZw\@arabic\c@footnote\fi}

\footnoterule 本文と脚注の間の罫線です。

2953 \renewcommand{\footnoterule}{\%

2954 \kern-2.6\p@? \kern-.4\p@

2955 \hrule width .4\columnwidth

2956 \kern 2.6\p@?}

\c@footnote 脚注番号は章ごとにリセットされます。

2957 % <book | report > \@addtoreset { footnote } { chapter }

\@footnotetext 脚注で \verb が使えるように改変してあります。Jeremy Gibbons, TeX and TUG NEWS, Vol. 2, No. 4 (1993), p. 9)

[2016-08-25] コミュニティ版 pLATEX の「閉じ括弧類の直後に\footnotetext が続く場合に改行が起きることがある問題に対処」と同等のコードを追加しました。

[2016-09-08] コミュニティ版 pI $\!$ ATEX のバグ修正に追随しました。

[2016-11-29] 古い pIAT<sub>F</sub>X で使用された場合を考慮してコードを改良。

[2018-03-11] \next などいくつかの内部命令を \jsc@... 付きのユニークな名前にしました。

2958 \long\def\@footnotetext{%

2959 \insert\footins\bgroup

2960 \normalfont\footnotesize

2961 \interlinepenalty\interfootnotelinepenalty

2962 \splittopskip\footnotesep

2963 \splitmaxdepth \dp\strutbox \floatingpenalty \@MM

2964 \hsize\columnwidth \@parboxrestore

 $\tt 2965 \qquad \tt \protected@edef\tt \currentlabel{%}$ 

2966 \csname p@footnote\endcsname\@thefnmark

2967 }%

2968 \color@begingroup

2969 \@makefntext{%

2971 \futurelet\jsc@next\jsc@fo@t}

2972 \def\jsc@fo@t{\ifcat\bgroup\noexpand\jsc@next \let\jsc@next\jsc@f@@t

2973 \else \let\jsc@next\jsc@f@t\fi \jsc@next}

```
2974 \def\jsc@f@@t{\bgroup\aftergroup\jsc@@foot\let\jsc@next}
2975 \def\jsc@f@t#1{#1\jsc@@foot}
2976 \def\jsc@@foot{\@finalstrut\strutbox\color@endgroup\egroup
2977 \ifx\pltx@foot@penalty\@undefined\else
2978 \ifhmode\null\fi
2979 \ifnum\pltx@foot@penalty=\z@\else
2980 \penalty\pltx@foot@penalty
2981 \pltx@foot@penalty\z@
2982 \fi
2983 \fi}
```

**\@makefntext** 実際に脚注を出力する命令です。**\@makefnmark** は脚注の番号を出力する命令です。ここでは脚注が左端から一定距離に来るようにしてあります。

```
2984 \newcommand\@makefntext[1]{%
```

2985 \advance\leftskip 3\jsZw

2986 \parindent 1\jsZw

2987 \noindent

2988  $\label{lap{\embedding} 1} \label{lap{\embedding} 4} \label{\embedding} \label{\embedding} 4} \label{\embedding} \label{\embedding} \label{\embedding} 4} \label{\embedding} \label{\embedding} 4} \label{\embedding} \label{\embedding} \label{\embedding} \label{\embedding} 4} \label{\embedding} \lab$ 

\@xfootnotenext 最初の \footnotetext{...} は番号が付きません。著者の所属などを脚注の欄に書くとき に便利です。

すでに \footnote を使った後なら \footnotetext [0] {...} とすれば番号を付けない 脚注になります。ただし,この場合は脚注番号がリセットされてしまうので,工夫が必要です。

[2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。

```
2989 % \def\@xfootnotenext[#1]{%
```

2990 % \begingroup

2991 % \ifnum#1>\z@

2992 % \csname c@\@mpfn\endcsname #1\relax

2993 % \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%

2994 % \else

2995 % \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{}%

2996 % \fi

2997 % \endgroup

2998 % \@footnotetext}

ここまでのコードは JS クラスを踏襲する。

# 11 段落の頭へのグルー挿入禁止

段落頭のかぎかっこなどを見かけ1字半下げから全角1字下げに直します。

 $\verb|\jsInhibitGlueAtParTop| \\$ 

「段落頭の括弧の空き補正」の処理を \jsInhibitGlueAtParTop という命令にして、これを再定義可能にした。

#### 2999 \let\jsInhibitGlueAtParTop\@empty

\everyparhook 全ての段落の冒頭で実行されるフック。これの初期値を先述の \jsInhibitGlueAtParTop とする。

```
3000 \def\everyparhook{\jsInhibitGlueAtParTop}
3001 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat
3002 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{\everypar{\everyparhook}}
3003 \fi
```

[2016-07-18] \inhibitglue の発行対象を \inhibitxspcode が 2 に設定されているものすべてに拡大しました。

[2016-12-01] すぐ上の変更で  $\mathbb{Q}$  tempa を使っていたのがよくなかったので,プレフィックスを付けて  $\mathbb{Q}$  is  $\mathbb{Q}$  にしました (forum:2085)。

[2017-02-13] \jsc@tempa は実はテンポラリではなく「この処理専用のユニーク制御綴」である必要があります。間違って別の箇所で使う危険性が高いので、専用の命令 \jsc@ig@temp に置き換えました (Issue #54)。

次の \@inhibitglue は JS クラスでの \jsInhibitGlueAtParTop の実装である。エンジンが (u)platex の場合はこれを採用する。

```
3004 \if x j\jsEngine
3005 \def\@inhibitglue{\%}
                    \futurelet\@let@token\@@inhibitglue}
3007 \begingroup
3008 \let\GDEF=\gdef
3009 \let\CATCODE=\catcode
3010 \let\ENDGROUP=\endgroup
3011 \CATCODE`k=12
3012 \CATCODE`a=12
3013 \CATCODE \n=12
3014 \CATCODE^j=12
3015 \CATCODE`i=12
3016 \CATCODE`c=12
3017 \CATCODE h=12
3018 \CATCODE`r=12
3019 \CATCODE`t=12
3020 \CATCODE`e=12
3021 \GDEF\KANJI@CHARACTER{kanji character }
3022 \ENDGROUP
3023 \def\@@inhibitglue{%
                      \expandafter\expandafter\jsc@inhibitglue\expandafter\meaning\expandafter\@let@to
3025 \verb| expandafter\\ | sc@inhibitglue\\ | expandafter\\ | KANJIQCHARACTER#2#3\\ | sc@inhibitglue\\ | expandafter\\ | expandafter\\ | KANJIQCHARACTER#2#3\\ | sc@inhibitglue\\ | expandafter\\ | e
                    \def\jsc@ig@temp{#1}%
                     \ifx\jsc@ig@temp\@empty
3027
                               \ifnum\the\inhibitxspcode`#2=2\relax
3028
```

```
3029
                           \inhibitglue
3030
3031
               \fi}
3032 \fi
           ここからしばらく「(本物の) \everypar に追加した \everyparhook を保持する」ため
    のパッチ処理が続く。これは、everyparhook=compat の場合にのみ実行する。
これだけではいけないようです。あちこちに \everypar を初期化するコマンドが隠され
     ていました。
           まず、環境の直後の段落です。
          [2016-11-19] ltlists.dtx 2015/05/10 v1.0t の変更に追随して \clubpenalty のリセット
     を追加しました。
3034 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\m
3035
                \@endpetrue
3036
                \def \par{%
3037
                     \@restorepar\clubpenalty\@clubpenalty\everypar\ok}\par\@endpefalse}%
                \everypar{{\setbox\z@\lastbox}\everypar{\everyparhook}\@endpefalse\everyparhook}}
3038
          [2017-08-31] minipage 環境にも対策します。
3039 \def\@setminipage{%
                \@minipagetrue
3040
                \everypar{\@minipagefalse\everypar{\everyparhook}}%
3041
3042 }
          \item 命令の直後です。
3043 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{\mbox{\it @item[#1]}{\mbox{\it %}}}
                \if@noparitem
3044
3045
                     \@donoparitem
                \else
3046
3047
                      \if@inlabel
                           \indent \par
3048
3049
3050
                      \ifhmode
                           \unskip\unskip \par
3051
3052
                      \if@newlist
3053
                           \if@nobreak
3054
                                 \@nbitem
3055
3056
                           \else
                                 \addpenalty\@beginparpenalty
3057
3058
                                 \addvspace\@topsep
                                 \addvspace{-\parskip}%
3059
```

\fi

\addpenalty\@itempenalty

\else

3060

3061

3062

```
3063
                               \addvspace\itemsep
3064
                        \global\@inlabeltrue
3065
                  \fi
3066
                  \everypar{%
3067
                        \@minipagefalse
3068
                         \global\@newlistfalse
3069
                         \if@inlabel
3070
                               \global\@inlabelfalse
3071
3072
                               {\setbox\z@\lastbox
                                  \left\langle ifvoid\right\rangle = 0
3073
                                        \kern-\itemindent
3074
3075
                                  fi}%
                               \box\@labels
3076
3077
                               \penalty\z@
3078
                        \fi
                        \if@nobreak
3079
                               \@nobreakfalse
3080
                               \clubpenalty \@M
3081
3082
                        \else
3083
                               \clubpenalty \@clubpenalty
                               \everypar{\everyparhook}%
3084
                        \fi
3085
                         \everyparhook}%
3086
                  \if@noitemarg
3087
3088
                        \@noitemargfalse
                        \if@nmbrlist
3089
3090
                               \refstepcounter\@listctr
3091
                        \fi
                  \fi
3092
                   \sbox\@tempboxa{\makelabel{#1}}%
3093
3094
                   \global\setbox\@labels\hbox{%
                         \unhbox\@labels
3095
3096
                         \hskip \itemindent
                        \hskip -\labelwidth
3097
                        \hskip -\labelsep
3098
                         \ifdim \wd\@tempboxa >\labelwidth
3099
                               \box\@tempboxa
3100
3101
                        \else
                               \label width $$ \operatorname{\mathcal Q}$ to \a {\normal} % \a {\no
3102
3103
                         \hskip \labelsep}%
3104
3105
                  \ignorespaces}
           二つ挿入した \everyparhook のうち後者が \section 類の直後に 2回, 前者が 3回目以
    降に実行されます。
3106 \def\@afterheading{%
                  \@nobreaktrue
3107
3108
                  \everypar{%
```

```
\if@nobreak
3109
3110
          \@nobreakfalse
3111
          \clubpenalty \@M
          \if@afterindent \else
3112
             {\setbox\z@\lastbox}%
3113
          \fi
3114
3115
        \else
3116
          \clubpenalty \@clubpenalty
          \everypar{\everyparhook}%
3117
        \fi\everyparhook}}
3118
```

「\everyparhook 用のパッチ処理」はここまで。

#### 3119 \fi

\@gnewline についてはちょっと複雑な心境です。もともとの pIATEX  $2\varepsilon$  は段落の頭にグルーが入る方で統一されていました。しかし \\ の直後にはグルーが入らず,不統一でした。そこで \\ の直後にもグルーを入れるように直していただいた経緯があります。しかし,ここでは逆にグルーを入れない方で統一したいので,また元に戻してしまいました。

しかし単に戻すだけでも駄目みたいなので、ここでも最後にグルーを消しておきます。

※luatexja を読みこんだ場合に lltjcore.sty によって上書きされるのを防ぐため遅延させる。

```
3120 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@none\else
3121 \AtEndOfPackage{%
3122 \def\@gnewline #1{%}
     \ifvmode
3123
3124
        \@nolnerr
3125
        \unskip \reserved@e {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
3126
3127
        \jsInhibitGlue \ignorespaces
     \fi}
3128
3129 }
3130 \fi
```

## 12 いろいろなロゴ

LATeX 関連のロゴを作り直します。

[2016-07-14] ロゴの定義は jslogo パッケージに移転しました。後方互換のため, jsclasses ではデフォルトでこれを読み込みます。nojslogo オプションが指定されている場合は読み込みません。

BXJS クラスでも jslogo オプション指定の場合に jslogo パッケージを読み込むように

した。ただし JS クラスと異なり、既定では読み込まない。 ※ \小、\上小の制御綴は定義しない。

```
3131 \if@jslogo
3132
      \IfFileExists{jslogo.sty}{%
        \RequirePackage{jslogo}%
     }{%
3134
        \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
3135
         {The package 'jslogo' is not installed.\MessageBreak
3136
3137
          It is included in the recent release of \MessageBreak
          the 'jsclasses' bundle}
3138
3139
3140 \fi
```

#### amsmath との衝突の回避 13

\ProvidesFile

\ltx@ifnextchar amsmath パッケージでは行列中で \@ifnextchar を再定義していますが、これが LATEX の \ProvidesFile で悪さをする例が FTeX で報告されています。これを避けるための tDB さ んのフィックスを挿入しておきます。副作用がありましたらお知らせください。

> この現象については私の TeX 掲示板 4273~、16058~ で議論がありました。なお、AMS 関係のパッケージを読み込む際に psamsfonts オプションを与えても回避できます (Thanks: しっぽ愛好家さん)。

> [2016-11-19] 本家の ltclass.dtx 2004/01/28 v1.1g で修正されているのでコメントアウト しました。

```
3141 %\let\ltx@ifnextchar\@ifnextchar
3142 %\def\ProvidesFile#1{%
3143 \% \setminus begingroup
3144 %
         \catcode`\ 10 %
3145 %
         \ifnum \endlinechar<256 %
3146 %
           \ifnum \endlinechar>\m@ne
3147 %
              \catcode\endlinechar 10 %
           \fi
3148 %
3149 %
         \fi
3150 %
         \@makeother\/%
3151 %
         \@makeother\&%
3152 %
         \ltx@ifnextchar[{\@providesfile{#1}}{\@providesfile{#1}[]}}
```

#### 初期設定 14

#### ■いろいろな語

```
\prepartname
```

\postsectionname

```
\postpartname 3153 \newcommand{\prepartname}{\if@english Part~\else 第\fi}
\prechaptername ^{3154} \newcommand{\postpartname}{\if@english\else 部\fi}
\postchaptername
                                                           111
 \presectionname
```

```
3155 %<book|report>\newcommand{\prechaptername}{\if@english Chapter~\else 第\fi}
               3156 % book | report > \newcommand {\postchaptername} {\if@english\else 章\fi}
               3157 \newcommand{\presectionname}{}% 第
               3158 \mbox{ newcommand{\postsectionname}{}} 
  \contentsname
\listfigurename 3159 \newcommand{\contentsname}{\if@english Contents\else 目次\fi}
\listtablename 3160 \newcommand{\listfigurename}{\if@english List of Figures\else 図目次\fi}
               3161 \newcommand{\listtablename}{\if@english List of Tables\else 表目次\fi}
       \refname
       \bibname 3162 \newcommand{\refname}{\if@english References\else 参考文献\fi}
     \indexname ^{3163} \newcommand{\bibname}{\if@english Bibliography\else 参考文献\fi}
               3164 \newcommand{\indexname}{\if@english Index\else 索引\fi}
    \figurename
     \tablename 3165 % ! jspf > \newcommand { \figurename } { \if@english Fig. ~ \else 図 \fi }
               3166 %<jspf>\newcommand{\figurename}{Fig.~}
               3167 \%!jspf>\newcommand{\tablename}{\if@english Table~\else 表\fi}
               3168 %<jspf>\newcommand{\tablename}{Table~}
  \appendixname
  \abstractname 3169 % \newcommand{\appendixname}{\if@english Appendix~\else 付録\fi}
               3170 \newcommand{\appendixname}{\if@english \else 付録\fi}
               3171 %<!book>\newcommand{\abstractname}{\if@english Abstract\else 概要\fi}
```

■今日の日付 LATeX で処理した日付を出力します。jarticle などと違って、標準を西暦 にし、余分な空白が入らないように改良しました。和暦にするには \和暦 と書いてください。

環境変数 SOURCE\_DATE\_EPOCH / FORCE\_SOURCE\_DATE が設定されている場合は"今日"が過去・未来の日付になる可能性がある。BXJS クラスでは、和暦の扱いは bxwareki パッケージに任せることを原則とする。ただし、bxwareki が使えない場合は自前で処理する。

```
3172 \@onlypreamble\bxjs@decl@Seireki@cmds
3173 \@tempswafalse
3174 \if p\jsEngine \@tempswatrue \fi
3175 \if n\jsEngine \@tempswatrue \fi
3176 \if@tempswa \expandafter\@firstoftwo
3177 \else \expandafter\@secondoftwo
3178 \fi
3179 {%
3180 % 欧文 8bitTeX の場合
3181 \newif\ifjsSeireki \jsSeirekitrue
3182 \def\bxjs@decl@Seireki@cmds{%
3183 \def\mff{\jsSeirekitrue}%
3184 \def\和ff{\jsSeirekifalse}}
3185 \def\Seireki{\jsSeirekitrue}
```

```
3187 \def\bxjs@if@use@seireki{%
                                                               \ifjsSeireki \expandafter\@firstoftwo
                                                               \else \expandafter\@secondoftwo \fi}
                                                  3189
                                                  3190 }{%
                                                  3191 \newif\if 西暦 \西暦 true
                                                  3192 \def\bxjs@decl@Seireki@cmds{%
                                                               \def\西暦{\西暦 true}%
                                                               \def\和暦{\西暦 false}}
                                                  3195 \def\Seireki{\西暦 true}
                                                  3196 \def\Wareki{\西暦 false}
                                                  3197 \def\bxjs@if@use@seireki{%
                                                               \if 西暦 \expandafter\@firstoftwo
                                                                \else \expandafter\@secondoftwo \fi}
                                                  3199
                                                  3200 }
                                                  3201 \bxjs@decl@Seireki@cmds
                                                  3202 \verb|\label{letbxjsQunxp}| @first of one \verb|\label{letbxjsQunxp}| @first of one | let\bxjsQunxp\\| &first of one | let \bxjsQunxp\\| &first of one | let \bxjsQunxp
                                                  3203 \bxjs@test@engine\unexpanded{\let\bxjs@unxp\unexpanded
                                                               \def\bxjs@onxp{\unexpanded\expandafter}}
                                                  3205 \ \ f \ \ p\ F\ T
                                                             \def\bxjs@iai{\noexpand~}
                                                  3207 \else \def\bxjs@iai{}
                                                  3208 \fi
\ifbxjs@bxwareki@avail bxwareki パッケージが使用できるか。
                                                  3209 \newif\ifbxjs@bxwareki@avail
                                                  3210 \IfFileExists{bxwareki.sty}{%
                                                                \RequirePackage{bxwareki}[]%
                                                  3211
                                                               \bxjs@bxwareki@availtrue}{}
                                  \jayear 和暦における年の表記(元号 + 年数)。
                                  \heisei 年数を表す整数レジスタで、元号が「平成」である場合にのみ定義される。
                                                  3213 \ifbxjs@bxwareki@avail
                                                  3214
                                                               \let\jayear\warekiyear
                                                                \def\bxjs@tmpa{H}\ifx\bxjs@tmpa\warekigengoinitial
                                                  3215
                                                                    \newcount\heisei \heisei=\value{warekiyear}
                                                  3216
                                                  3217
                                                     bxwareki が使えない場合のフォールバック処理。平成のみに対応する。
                                                  3218 \ensuremath{\setminus} else
                                                  3219
                                                               \@tempcnta=\the\year\two@digits\month\two@digits\day\relax
                                                  3220
                                                                \ifnum\@tempcnta<19890108 \else \ifnum\@tempcnta<20190501
                                                                    \newcount\heisei \heisei\year \advance\heisei-1988\relax
                                                  3221
                                                                \fi\fi
                                                  3222
                                                  3223
                                                               \ifnum \ifx\heisei\@undefined\z@\else\heisei\fi >\@ne
                                                                    \ensuremath{\ensuremath{\mbox{edef}\space}}$\bxjs@iai \the\ensuremath{\mbox{heisei}\space}$
                                                  3224
                                                               \else \edef\jayear{\the\year \bxjs@iai}
                                                  3225
                                                  3226
                                                  3227 \fi
```

3186 \def\Wareki{\jsSeirekifalse}

```
\today 英語、西暦、和暦で場合分けをする。
      3228 \let\bxjs@next\relax
      3229 \ifbxjs@bxwareki@avail
            \ifx\warekigengo\@empty\else
      3230
      3231
              \def\bxjs@next{\bxjs@onxp{\warekitoday}}
      3232
      3233 \else\ifnum \ifx\heisei\@undefined\z@\else\heisei\fi >\@ne
            \def\bxjs@next{%
      3234
              \bxjs@unxp{平成}\bxjs@iai\number\heisei\bxjs@iai\bxjs@unxp{年}%
      3235
              \bxjs@iai\number\month\bxjs@iai\bxjs@unxp{月}%
      3236
      3237
              \bxjs@iai\number\day\bxjs@iai\bxjs@unxp{∃}}
      3238 \fi\fi
      3239 \edef\bxjs@today{%
            \if@english
      3240
      3241
              \ifcase\month\or
      3242
                January\or February\or March\or April\or May\or June\or
                July\or August\or September\or October\or November\or December\fi
      3243
      3244
                \space\number\day, \number\year
      3245
            \else
              \ifx\bxjs@next\relax \expandafter\@firstoftwo
      3246
              \else \noexpand\bxjs@if@use@seireki
      3247
      3248
              \fi {%
                \number\year\bxjs@iai\bxjs@unxp{年}%
      3249
      3250
                \bxjs@iai\number\month\bxjs@iai\bxjs@unxp{月}%
                \bxjs@iai\number\day\bxjs@iai\bxjs@unxp{∃}%
      3251
      3252
              }{\bxjs@next}%
      3253
           \fi}
      3254 \let\today\bxjs@today
          texjporg 版の日本語用 Babel 定義ファイル(japanese.ldf)が読み込まれた場合に影響
        を受けないようにする。
      3255 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
            \ifx\bbl@jpn@Seirekitrue\@undefined\else
      3256
              \bxjs@decl@Seireki@cmds
      3257
              \g@addto@macro\datejapanese{%
      3258
                \let\today\bxjs@today}%
      3259
           fi
      3260
```

**■ハイフネーション例外**  $T_{EX}$  のハイフネーションルールの補足です(ペンディング: eng-lish)

 $3261\hyphenation{ado-be post-script ghost-script phe-nom-e-no-log-i-cal man-u-script}$ 

■ページ設定 ページ設定の初期化です。

3262 %<slide>\pagestyle{empty}%

```
3263\ \%\ article|report>\pagestyle{plain}%
3264 \mbox{\sc sc} pagestyle{headings}\mbox{\sc gradient}
3265 \pagenumbering{arabic}
3266 \setminus if@twocolumn
3267
      \twocolumn
3268 \sloppy
3269 \flushbottom
3270 \ensuremath{\setminus} \texttt{else}
3271 \onecolumn
3272 \raggedbottom
3273 \fi
3274 %<*slide>
3275 \qquad \verb|\renewcommand| family default{\sfdefault}|
3276 \raggedright
3277 %</slide>
```

## ■BXJS 独自の追加処理 彎

フックを実行する。

3278 \bxjs@pre@jadriver@hook

和文ドライバのファイルを読み込む。

3279 \input{bxjsja-\bxjs@jadriver.def}

おしまい。

3280 %</cls>

以上です。

# 付録 A 和文ドライバの仕様 湾

次の命令が BXJS クラス本体と和文ドライバの連携のために用意されている。このうち、 ★印を付けたものは"書込"が許されるものである。

• \jsDocClass [文字トークンの let] 文書クラスの種類を示し、次のいずれかと一致 する (\if で判定可能)。

\jsArticle bxjsarticle クラス

\jsBook bxjsbook クラス

\jsReport bxjsreport クラス

\jsSlide bxjsslide クラス

- \jsEngine [文字トークンの let] 使用されているエンジンの種別。(\if で判定 可能)。
  - p pdfT<sub>F</sub>X (DVI モードも含む)
  - 1  $\text{LuaT}_{FX}(")$
  - x X7TFX
  - j pT<sub>F</sub>X または upT<sub>F</sub>X
  - n 以上の何れでもない
- \ifjsWithupTeX [スイッチ] 使用されているエンジンが upTpX であるか。
- \ifjsWitheTeX [スイッチ] 使用されているエンジンが  $\varepsilon$ -TeX 拡張であるか。
- \ifjsInPdfMode [スイッチ] 使用されているエンジンが (pdfT<sub>E</sub>X・LuaT<sub>E</sub>X の) PDF モードであるか。
- \jsUnusualPtSize [整数定数を表す文字列のマクロ] 基底フォントサイズが 10pt、 11pt、12pt のいずれでもない場合の \@ptsize の値。(\@ptsize 自体があまり有用でないと思われる。)
- \jsScale [実数を表す文字列のマクロ] 和文フォントサイズの要求サイズに対する スケール。クラスオプション scale で指定される。(既定値は 0.924715。)
- \jsJaFont [マクロ] 和文フォント設定を表す文字列。クラスオプション jafont で指定された値。
- \jsJaParam [マクロ] 和文モジュールに渡すパラメタを表す文字列。この値が何を表すかは決まってなくて、各々の和文モジュールが独自に解釈する。クラスオプション japaram で指定された値。
- \jsInhibitGlue [マクロ] \inhibitglue という命令が定義されていればそれを 実行し、そうでなければ何もしない。JS クラスで \inhibitglue を用いている箇所 は全て \jsInhibitGlue に置き換えられている。従って、\inhibitglue は未定義 でも動作するが、その実装がある場合は BXJS クラスはそれを活用する。
- \jsInhibitGlueAtParTop [マクロ] ★ 段落先頭におけるカギ括弧の位置調整を行うマクロ。全ての段落先頭で呼び出される。
- \jsZw [内部寸法値] 「現在の全角幅」を表す変数。JS クラスで zw 単位で設定されている長さパラメタはこの変数を単位として設定されている。この変数の値は実際に

用いられる「和文フォント」のメトリックに基づくのではなく、機械的に \jsScale  $\times$  (フォントサイズ) であると定められている(フォントサイズ変更の度に再設定される)。従って、「和文コンポーネント」はこの設定と辻褄が合うように和文フォントサイズを調整する必要がある。ほとんどの場合、和文フォントを NFSS で規定する際に \jsScale の値をスケール値として与えれば上手くいく。

- \jsFontSizeChanged [マクロ] フォントサイズが変更された時に必ず呼び出されるマクロ。
- \jsResetDimen [マクロ]★ 上記 \jsFontSizeChanged の中で呼び出される、ユーザ (和文モジュール) 用のフック。フォントサイズに依存するパラメタをここで設定することができる。既定の定義は空。

以下で標準で用意されている和文ドライバの実装を示す。

3281 %<\*drv>

# 付録 B 和文ドライバ: minimal 🕾

jadriver の指定が無い場合に適用されるドライバ。また、standard ドライバはまずこのドライバファイルを読み込んでいる。

このドライバでは、各エンジンについての必要最低限の処理だけを行っている。日本語処理のためのパッケージ(xeCJK や  $LuaT_EX$ -ja 等)を自分で読み込んで適切な設定を行うという使用状況を想定している。

ただし、 $(u)pT_EX$  エンジンについては例外で、和文処理機構の選択の余地がないため、このドライバにおいて、「JS クラスと同等の指定」を完成させるためのコードを記述する。

## B.1 補助マクロ

3282 %<\*minimal>

3283 %% このファイルは日本語文字を含みます

\DeclareJaTextFontCommand 和文書体のための、「余計なこと」をしない \DeclareTextFontCommand。

3284 \def\DeclareJaTextFontCommand#1#2{%

3285 \DeclareRobustCommand#1[1]{%

3286 \relax

3287 \ifmmode \expandafter\nfss@text \fi

3288 {#2##1}}%

3289 }

\DeclareJaMathFontCommand 和文数式フォントが無効な場合に、それをエミュレートするもの。

 $3290\ensuremath{\mbox{\sc Number}}\$ 

 $3291 \quad \texttt{\ \ } \texttt{DeclareRobustCommand\#1[1]\{\%\}}$ 

3292 \relax

3294 \nfss@text{\fontfamily\familydefault

3295 \fontseries{m}\fontshape{n}\selectfont\relax

3296 #2##1}%

```
3297 }%
                 3298 }
\bxjs@if@sf@default \familydefault の定義が "\sfdefault" である場合に引数のコードを実行する。
                 3299 \long\def\bxjs@@CSsfdefault{\sfdefault}%
                 3300 \@onlypreamble\bxjs@if@sf@default
                 3301 \def\bxjs@if@sf@default#1{%
                      \ifx\familydefault\bxjs@@CSsfdefault#1\fi
                      \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                 3303
                        \ifx\familydefault\bxjs@@CSsfdefault#1\fi}%
                 3304
                 3305 }
   \jsInverseScale \jsScale の逆数。
                  ※\CS=\jsInverseScale\CS は \bxjs@invscale\CS\jsScale よりも精度が劣るが処理
                 3306 \@tempdima\p@ \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
                 3307 \edef\jsInverseScale{\strip@pt\@tempdima}
    \jsLetHeadChar \jsLetHeadChar\CS{(トークン列)}: トークン列の先頭の文字を抽出し、\CS をその文
                  字トークン (に展開されるマクロ) として定義する。
                  ※先頭にあるのが制御綴やグループである場合は \CS は \relax に等置される。
                  ※文字トークンは"\the-文字列"のカテゴリコードをもつ。
                  ※非 Unicode エンジンの場合は文字列が UTF-8 で符号化されていると見なし、先頭が高位
                  バイトの場合は1文字分のバイト列(のトークン列)を抽出する。この場合は元のカテゴリ
                  コードが保持される。
                 3308 \def\jsLetHeadChar#1#2{%}
                     \begingroup
                 3309
                 3310
                        \escapechar=`\\ %
                        \let\bxjs@tmpa={% brace-match-hack
                 3311
                        \bxjs@let@hchar@exp#2}%
                 3312
                 3313
                     \endgroup
                 3314
                      \let#1\bxjs@g@tmpa}
                 3315 \def\bxjs@let@hchar@exp{%
                      \futurelet\@let@token\bxjs@let@hchar@exp@a}
                 3317 \def\bxjs@let@hchar@exp@a{%
                      \bxjs@cond\ifcat\noexpand\@let@token\bgroup\fi{% 波括弧
                 3318
                 3319
                        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
                     }{\bxjs@cond\ifcat\noexpand\@let@token\@sptoken\fi{% 空白
                 3320
                        \bxjs@let@hchar@out\let\space%
                 3321
                     }{\bxjs@cond\if\noexpand\@let@token\@backslashchar\fi{% バックスラッシュ
                 3322
                        \bxjs@let@hchar@out\let\@backslashchar
                 3323
                      }{\bxjs@let@hchar@exp@b}}}}
                 3324
                 3325 \def\bxjs@let@hchar@exp@b#1{%
                      \expandafter\bxjs@let@hchar@exp@c\string#1?\@nil#1}
                 3327 \def\bxjs@let@hchar@exp@c#1#2\@nil{%
                 3328 %\message{<#1#2>}%
```

3329 \bxjs@cond\if#1\@backslashchar\fi{% 制御綴

```
3330
        \bxjs@cond\expandafter\ifx\noexpand\@let@token\@let@token\fi{%
3331
          \bxjs@let@hchar@out\let\relax
3332
        }{%else
          \expandafter\bxjs@let@hchar@exp
3333
3334
3335
      }{%else
        \bxjs@let@hchar@chr#1%
3336
3337
3338 \def\bxjs@let@hchar@chr#1{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}
3339
3340 \def\bxjs@let@hchar@out#1#2{%
      \global#1\bxjs@g@tmpa#2\relax
3341
      \toks@\bgroup}% skip to right brace
 UTF-8 のバイト列を扱うコード。
3343 \chardef\bxjs@let@hchar@csta=128
3344 \chardef\bxjs@let@hchar@cstb=192
3345 \chardef\bxjs@let@hchar@cstc=224
3346 \chardef\bxjs@let@hchar@cstd=240
3347 \chardef\bxjs@let@hchar@cste=248
3348 \verb|\let\bxjs@let@hchar@chr@ue@a\bxjs@let@hchar@chr\\
3349 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue#1{%
      \@tempcnta=`#1\relax
3351 %\message{\the\@tempcnta}%
      \bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@csta\fi{%
3352
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@a#1%
3353
3354
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstb\fi{%
3355
        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstc\fi{%
3356
3357
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@b
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstd\fi{%
3358
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@c
3359
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cste\fi{%
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@d
3361
3362
      }{%else
        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
3363
      }}}}}
3364
3365 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@a#1{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}
3367 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@b#1#2{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2}}}
3369 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@c#1#2#3{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2#3}}}
3371 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@d#1#2#3#4{%
      \bxjs@let@hchar@out\\def{{#1#2#3#4}}}
```

## B.2 (u)pTFX 用の設定

3373 \ifx j\jsEngine

基本的に、JS クラスのコードの中で、「和文コンポーネントの管轄」として BXJS クラス で除外されている部分に相当するが、若干の変更が加えられている。

■補助マクロ \jsLetHeadChar を和文文字トークンに対応させる。

```
3374 \def\bxjs@let@hchar@chr@pp#1#2{%
3375 \expandafter\bxjs@let@hchar@chr@pp@a\meaning#2\relax#1#2}
3376 \def\bxjs@let@hchar@chr@pp@a#1#2\relax#3#4{%
3377 %\message{(\meaning#3:\meaning#4)}%
3378 \bxjs@cond\if#1k\fi{%
3379 \bxjs@let@hchar@out\def{{#4}}%
3380 }{%else
3381 \bxjs@let@hchar@chr@ue#3#4%
3382 }}
3383 \let\bxjs@let@hchar@chr\bxjs@let@hchar@chr@pp
```

■エンジン依存の定義 最初にエンジン(pTeX か upTeX か)に依存する定義を行う。 \ifjsWithupTeX は BXJS において定義されているスイッチで、エンジンが upTeX であるかを表す。

\jsc@JYn および \jsc@JTn は標準の和文横書きおよび縦書き用エンコーディングを表す。

```
3384 \edgf\sc@JYn{\ifjsWithupTeX JY2\else JY1\fi} \\ 3385 \edgf\sc@JTn{\ifjsWithupTeX JT2\else JT1\fi} \\ 3386 \edgf\sc@pfx@{\ifjsWithupTeX u\fi}
```

\bxjs@declarefontshape は標準の和文フォント宣言である。後で \bxjs@scale を求めるため一旦マクロにしておく。\bxjs@sizereference は全角幅を測定する時に参照するフォント。

まず  $\operatorname{upT}_{EX}$  の場合の定義を示す。 $\operatorname{JS}$  クラスの  $\operatorname{uplatex}$  オプション指定時の定義と同じである。

```
3387 \@onlypreamble\bxjs@declarefontshape
3388 \ifjsWithupTeX
3389 \def\bxjs@declarefontshape{%
3390 \DeclareFontShape{JY2}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpnrm-h}{}%
3391 \DeclareFontShape{JY2}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpngt-h}{}%
3392 \DeclareFontShape{JT2}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpnrm-v}{}%
3393 \DeclareFontShape{JT2}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpngt-v}{}%
3394 }
3395 \def\bxjs@sizereference{upjisr-h}
```

 $pT_EX$  の場合の定義を示す。JS クラスのフォント種別オプション非指定時の定義と同じである。

```
3396 \else
3397 \def\bxjs@declarefontshape{%
3398 \DeclareFontShape{JY1}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]jis}{}%
3399 \DeclareFontShape{JY1}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]jisg}{}%
3400 \DeclareFontShape{JT1}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]tmin10}{}%
```

```
3401 \end{areFontShape} \fill{\end{areFontShape} IT1} \fill{\end{areFontShape} \fill{\end{areFontShape} IT1} \fill{\end{areFontShape} \fill{\end{areFontShape} IT1} \fill{\end{areFontShape} \fill{\end{areFontShape} \fill{\end{areFontShape} IT1} \fill{\end{areFontShape} \fill} \fill{\end{areFontShape} \fill} \fill{\end{
3402 }
3403 \def\bxjs@sizereference{jis}
3404 \fi
                既に使用されている標準和文フォント定義がもしあれば取り消す。
3405 \def\bxjs@next#1/#2/#3/#4/#5\relax{%
3406 \ \def\bxjs@tmpb{#5}}
3407 \ifjsWithpTeXng \def\bxjs@tmpb{10}%
3408 \ensuremath{\setminus} else
3409 \expandafter\expandafter\bxjs@next
3410 \expandafter\string\the\jfont\relax
3411 \fi
3412 \@for\bxjs@tmpa:={\jsc@JYn/mc/m/n,\jsc@JYn/gt/m/n,%
3413
                                                                                \jsc@JTn/mc/m/n,\jsc@JTn/gt/m/n}\do
                         {\expandafter\let\csname\bxjs@tmpa/10\endcsname=\@undefined
3414
3415
                             \expandafter\let\csname\bxjs@tmpa/\bxjs@tmpb\endcsname=\@undefined}
```

■和文フォントスケールの補正 実は、pTpX の標準的な和文フォント(JFM のこと、例え ば jis) では、指定された  $\$  isScale (この値を s とする) をそのまま使って定義すると期 待通りの大きさにならない。これらの JFM では 1 zw の大きさが指定されたサイズではなく 既にスケール(この値を f とする; jis では 0.962216 倍)が掛けられた値になっているか らである。そのため、ここでは s/f を求めてその値をマクロ bxis content cont

```
3416 \begingroup
3417 % 参照用フォント (\bxjs@sizereference) の全角空白の幅を取得
      \font\bxjs@tmpa=\bxjs@sizereference\space at 10pt
     \setbox\z@\hbox{\bxjs@tmpa\char\jis"2121\relax}
3420 % 幅が丁度 10pt なら補正は不要
3421 \quad \text{ifdim}\ \text{wd}\ \text{z} = 10pt
3422
        \global\let\bxjs@scale\jsScale
3423 \else
3424 % (10*s)/(10*f) として計算、\bxjs@invscale は BXJS で定義
        \edef\bxjs@tmpa{\strip@pt\wd\z@}
3425
3426
        \@tempdima=10pt \@tempdima=\jsScale\@tempdima
        \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa
3427
        \xdef\bxjs@scale{\strip@pt\@tempdima}
3428
3429
     \fi
3430 \endgroup
3431 %\typeout{\string\bxjs@scale : \bxjs@scale}
```

■和文フォント関連定義 \bxjs@scale が決まったので先に保存した標準和文フォント宣 言を実行する。

```
3432 \bxjs@declarefontshape
```

フォント代替の明示的定義。

 $3433 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} \{ -> ssub*mc/m/n \} \{ \}$  $3434 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{$1$}}} <-> ssub*mc/m/n}{\ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}}}$ 

 $3435 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} {\mbox{\mbox{$1$}}} \ensuremath{\mbox{$1$}} \ensuremath{\mbox{$1$}} {\mbox{\mbox{$1$}}} \ensuremath{\mbox{$1$}} \ensuremath{\mbox{$1$}} {\mbox{\mbox{$1$}}} \ensuremath{\mbox{$1$}} \ensuremath{\mbox{$1$}} {\mbox{\mbox{$1$}}} \ensuremath{\mbox{$1$}} \ensuremath{\mbo$ 

```
3437 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{s1}} <-> sub*gt/m/n}{}
3438 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} {\mbox{\mbox{$1$}}} it} {\mbox{\mbox{$1$}}} it} {\mbox{\mbox{$1$}}} it) {\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}}} it) {\mbox{\mbox{$1$}}} it) {\mbox{\mbox{$1$}}} it) {\mbox{\mbox{$1$}}} it) {\mbox{\mbox{$1$}}} it) {\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}}} it) {\mbox{\mbox{$1$}}} it) {\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}}} it) {\mbox{\mbox{$1$}}}
3439 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} \ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}}{c}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} \ensuremath{\mbox{$1$}}{c} \ensuremath{
3440 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{gt}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
3441 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}{\cspace{1.5c@JYn}{gt}{bx}{sl}{\cspace{1.5c@JYn}{gt}{bx}{sl}}}} \label{thm:continuous} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}{\cspace{1.5c@JYn}{gt}{bx}}}} \ensuremath{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\mbox{$1$}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1.5cm}{\cspace{1
3442 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} {n}{\->} ssub*mc/bx/n}{}
3443 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{it}} <-> ssub*mc/bx/n}{}
3444 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}} {s1}{<->ssub*mc/bx/n}{}} \label{lem:sub*mc/bx/n} $$
3446 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{gt}{b}{it}{<->ssub*gt/bx/n}{}
3447 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} {s1}{c-} ssub*gt/bx/n}{}
3449 \end{Tr} {mc}{m}{sl}{<->ssub*mc/m/n}{}
3450 \end{areFontShape{\jsc0JTn}{mc}{m}{sc}{<->ssub*mc/m/n}{}}
3451 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} f(t) $$ \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} f(t) $$ \ensuremath{\mbox{$1$}} f(t) $$ \ensurema
3452 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}{\mbox{$1$}{\mbox{$1$}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}} \ensuremath{\mbox{$1$}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}} \ensuremath{\mbox{$1$}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}} \ensuremath{\mbox{$1$}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\mbox{$1$}}{\
3453 \DeclareFontShape{\jsc@JTn}{mc}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
3454 \ensuremath{\texttt{Shape}}\footshape{\jsc@JTn}{mc}{bx}{sl}{<->ssub*gt/m/n}{}
3455 \ensuremath{\mbox{\sc 0JTn}{gt}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}}
3457 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{n}} {\ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}}}{n}} {\ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}}{n}} {\ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}}{n}} {\ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}}{n}} {\ensuremath{\mbox{$1$}}} {\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\ensuremath{\mbox{$1$}}}{\e
3458 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{it}} <-> ssub*mc/bx/n}{}
3459 \end{areFontShape} \gray \gra
3460 \ensuremath{\mbox{\sc 0JTn}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{}
3461 \ensuremath{\mbox{DeclareFontShape}\jsc@JTn}{gt}{b}{it}{<->ssub*gt/bx/n}{}
3462 \ensuremath{\mbox{\mbox{$>$}} f(s)_{s1}{<->} ssub*gt/bx/n}{}
                         欧文総称フォント命令で和文フォントが連動するように修正する。その他の和文フォント
          関係の定義を行う。
3463 \DeclareRobustCommand\rmfamily
                                       {\not@math@alphabet\rmfamily\mathrm
3464
                                            \romanfamily\rmdefault\kanjifamily\mcdefault\selectfont}
3466 \DeclareRobustCommand\sffamily
3467
                                       {\not@math@alphabet\sffamily\mathsf
                                            \romanfamily\sfdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
3469 \DeclareRobustCommand\ttfamilv
                                      {\not@math@alphabet\ttfamily\mathtt
                                             \verb|\common family \ttdefault \anjifamily \gtdefault \select font| |
3471
3472 \ifx\DeclareFixJFMCJKTextFontCommand\@undefined
3473 \DeclareJaTextFontCommand{\textmc}{\mcfamily}
3474 \DeclareJaTextFontCommand{\textgt}{\gtfamily}
3476 \bxjs@if@sf@default{%
3477 \renewcommand\kanjifamilydefault{\gtdefault}}
                         念のため。
3478 \selectfont
                         \bxjs@parse@qh の処理は pTrX 系では不要になるので無効化する(つまり
```

```
3479 \def\bxjs@parse@qh#1{\let\bxjs@tmpb\relax}
                               3480 \let\bxjs@parse@qh@a\@undefined
                               3481 \let\bxjs@parse@qh@b\@undefined
                                   ■パラメタの設定
                               3482 \prebreakpenalty\jis"2147=10000
                               3483 \postbreakpenalty\jis"2148=10000
                               3484 \prebreakpenalty\jis"2149=10000
                               3485 \inhibitxspcode`!=1
                               3486 \in \mp=2
                               3487 \xspcode \ += 3
                               3488 \xspcode \\ =3
                                        "80~"FF の範囲の \spcode を 3 に変更。
                               3489 \@tempcnta="80 \@whilenum\@tempcnta<"100 \do{\%
                               3490 \xspcode\@tempcnta=3\advance\@tempcnta\@ne}
                                       \jsInhibitGlueAtParTop の定義。「JS クラスでの定義」を利用する。
                               3491 \let\jsInhibitGlueAtParTop\@inhibitglue
                                       \jsResetDimen は空のままでよい。
                                   ■組方向依存の処理 組方向判定の if-トークン(\if?dir) は pTpX 以外では未定義である
                                   ため、そのまま if 文に入れることができない。これを回避するため部分的に!をエスケープ
                                   文字に使う。
                               3492 \begingroup
                               3493 \catcode`\!=0
\bxjs@ptex@dir 現在の組方向: t=縦、y=横、?=その他。
                               3494 \gdef\bxjs@ptex@dir{%
                               3495 !iftdir t%
                               3496 !else!ifydir y%
                               3497 !else ?%
                                          !fi!fi}
                                       新版の pTFX で脚注番号の周囲の空きが過大になる現象への対処。
                                   ※現在のpIATpX カーネルでは対処が既に行われている。ここでは、\@makefnmark の定義
                                   が古いものであった場合に、新しいものに置き換える。
                               3499 % 古い \@makefnmark の定義
                               3500 \long\def\bxjs@tmpa{\hbox{%}}
                                            !ifydir \@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}%
                                            !else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}!fi}}
                               3503 \ifx\@makefnmark\bxjs@tmpa
                               3504 \long\gdef\@makefnmark{%
                                            ! ify dir \hbox{\hbox{\textsuperscript{\normalfont\0thefnmark}} \hbox{\} % if y dir \hbox{\textsuperscript{\normalfont\0thefnmark}} \hbox{\textsuperscript{\normalfont\textsuperscript}} \hbox{\normalfont\textsuperscript{\normalfont\textsuperscript}} \hbox{\normalfont\textsuperscript{\normalfont\textsuperscript}} \hbox{\normalfont\textsuperscript{\normalfont\textsuperscript}} \hbox{\normalfont\textsuperscript{\normalfont\textsuperscript}} \hbox{\normalfont\textsuperscript{\normalfont\textsuperscript{\normalfont\textsuperscript{\normalfont\textsuperscript{\normalfont\textsuperscript{\normalfont\textsuperscript{\normalfont\textsuperscript{\normalfont\textsuperscript{\normalfont\textsuperscript{\normalfont\textsuperscript{\normalfont\textsuperscript{\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\normalfont\nor
                                            !else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}!fi}
                               3507 \fi
                               3508 \endgroup
```

\jsSetQHLength は \setlength と等価になる)。

# B.3 pdfT<sub>E</sub>X 用の処理

```
3509 \else\ifx p\jsEngine
3510 \let\bxjs@let@hchar@chr\bxjs@let@hchar@chr@ue
3511 \@onlypreamble\bxjs@cjk@loaded
3512 \def\bxjs@cjk@loaded{%
                          \def\@footnotemark{%
3513
3514
                                    \leavevmode
3515
                                    \ifhmode
                                             \end{conditions} $$ \end
3516
3517
                                             \ifdim\lastkern>\z@\ifdim\lastkern<5sp\relax
3518
                                                           \unkern\unkern
                                                           \ifdim\lastskip>\z@ \unskip \fi
3519
3520
                                             \nobreak
3521
3522
                                    \fi
                                     \@makefnmark
3523
3524
                                    \ifhmode \spacefactor\@x@sf \fi
                                    \relax}%
3525
3526
                          \let\bxjs@cjk@loaded\relax
3527 }
3528 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                          \@ifpackageloaded{CJK}{%
3529
3530
                                    \bxjs@cjk@loaded
3531
                        }{}%
3532 }
                             X<sub>3</sub>T<sub>E</sub>X 用の処理
        B.4
```

3533 \else\ifx x\jsEngine

\bxjs@let@hchar@chr について、「BMP 外の文字の文字トークンに対して \string を 適用するとサロゲートペアに分解される」という問題に対する応急措置を施す。

```
3534 \def\bxjs@let@hchar@chr#1{%
                    3535
                          \@tempcnta`#1\relax \divide\@tempcnta"800\relax
                    3536
                          \bxjs@cond\ifnum\@tempcnta=27 \fi{%
                    3537
                            \bxjs@let@hchar@chr@xe
                         }{\bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}}
                    3539 \def\bxjs@let@hchar@chr@xe#1{%
                          \lccode`0=`#1\relax
                    3540
                    3541
                          \lowercase{\bxjs@let@hchar@out\def{{0}}}}
\bxjs@do@precisetext precisetext オプションの処理。
                    3542 \@onlypreamble\bxjs@do@precisetext
                    3543 \ifx\XeTeXgenerateactualtext\Qundefined\else
                          \def\bxjs@do@precisetext{%
                            \XeTeXgenerateactualtext=\@ne}
                    3545
                    3546 \fi
```

```
\bxjs@do@simplejasetup simplejasetup オプションの処理。
                                                     3547 \@onlypreamble\bxjs@do@simplejasetup
                                                     3548 \def\bxjs@do@simplejasetup{%
                                                     3549
                                                                   \ifnum\XeTeXinterchartokenstate>\z@
                                                                   \ensuremath{\verb| line| TeXline| the \ensuremath{\verb| z0} = \ensuremath{\| 
                                                     3550
                                                     3551
                                                                        \jsSimpleJaSetup
                                                                        \ClassInfo\bxjs@clsname
                                                     3552
                                                                          {'\string\jsSimpleJaSetup' is applied\@gobble}%
                                                     3553
                                                                   \fi\fi}
                                                     3554
              \jsSimpleJaSetup 日本語出力用の超簡易的な設定。
                                                     3555 \newcommand*{\jsSimpleJaSetup}{%
                                                     3556
                                                                   \XeTeXlinebreaklocale "ja"\relax
                                                                   \XeTeXlinebreakskip=Opt plus 1pt minus 0.1pt\relax
                                                     3557
                                                     3558
                                                                   \XeTeXlinebreakpenalty=0\relax}
                                                         B.5
                                                                       後処理(エンジン共通)
                                                     3559 \fi\fi\fi
                                                              simplejasetup オプションの処理。
                                                     3560 \ifx\bxjs@do@simplejasetup\@undefined\else
                                                                   \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                                                                        \ifbxjs@simplejasetup
                                                     3562
                                                     3563
                                                                             \bxjs@do@simplejasetup
                                                     3564
                                                                        fi
                                                     3565 \fi
                                                             precisetext オプションの処理。
                                                     \ifx\bxjs@do@precisetext\@undefined
                                                     3567
                                                                        \ClassWarning\bxjs@clsname
                                                     3568
                                                     3569
                                                                          {The current engine does not support the\MessageBreak
                                                                             'precise-text' option\@gobble}
                                                     3570
                                                     3571
                                                                   \else
                                                                        \bxjs@do@precisetext
                                                     3572
                                                                  \fi
                                                     3573
                                                     3574\fi
                                                         ■段落頭でのグルー挿入禁止 本体開始時において \everyparhook を検査して、"結局何
                                                         もしない"ことになっている場合は、副作用を完全に無くすために \everyparhook を空に
                                                         する。
                                                     3575 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                                                                   \ifx\jsInhibitGlueAtParTop\@empty
                                                     3577
                                                                        \def\bxjs@tmpa{\jsInhibitGlueAtParTop}%
                                                                        \ifx\everyparhook\bxjs@tmpa
                                                     3578
                                                                             \let\everyparhook\@empty
                                                                        \fi
                                                     3580
```

\fi}

3581

everyparhook=modern の場合の、\everyparhook の有効化の実装。

- ※本体開始時ではなく最初から有効化していることに注意。
- 3582 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@modern

まず \everypar を "乗っ取る" 処理を行う。

- 3583 \let\bxjs@everypar\everypar
- 3584 \newtoks\everypar
- 3585 \everypar\bxjs@everypar

そして本物の \everypar では、最後で常に \everyparhook が実行されるようにする。

- 3586 \bxjs@everypar{\the\expandafter\everypar\everyparhook}% 3587 \fi
  - ■fancyhdr 対策 fancyhdr オプションの値が true であり、かつ fancyhdr が使用された場合に以下の対策を行う。
    - デフォルトの書式設定に含まれる"二文字フォント命令"を除去する。
    - bxjsbook において、ヘッダ・フッタの横幅を \fullwidth に変える。

3588 \ifbxjs@fancyhdr

\bxjs@adjust@fancyhdr fancyhdr の初期設定に関する改変の処理。fancyhdr 読込完了と \pagestyle{fancy} 実行の間で実行されるべき。

3589 \@onlypreamble\bxjs@adjust@fancyhdr

3590 \def\bxjs@adjust@fancyhdr{%

ヘッダ・フッタの要素の書式について、それが既定のままであれば、"二文字フォント命令" を除去したものに置き換える。

※和文なので \sl は無い方がよいはず。

- 3591 \def\bxjs@tmpa{\fancyplain{}{\sl\rightmark}\strut}%
- $3592 $$ \def\bxjs@tmpb{\fancyplain{}{\rightmark}\strut},$
- 3593 \ifx\f@ncyelh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyelh\bxjs@tmpb \fi
- 3594 \ifx\f@ncyerh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyerh\bxjs@tmpb \fi
- 3595 \ifx\f@ncyolh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyolh\bxjs@tmpb \fi
- 3596 \ifx\f@ncyorh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyorh\bxjs@tmpb \fi
- 3597 \def\bxjs@tmpa{\fancyplain{}{\sl\leftmark}\strut}%
- 3598 \def\bxjs@tmpb{\fancyplain{}{\leftmark}\strut}%
- 3599 \ifx\f@ncyelh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyelh\bxjs@tmpb \fi
- $3600 \verb| \ifx\f@ncyerh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyerh\bxjs@tmpb \fi$
- 3601 \ifx\f@ncyolh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyolh\bxjs@tmpb \fi
- 3602 \ifx\f@ncyorh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyorh\bxjs@tmpb \fi
- $3603 \ \def\bxjs@tmpa{\rm\thepage\strut}%$
- 3604 \def\bxjs@tmpb{\thepage\strut}%
- $3605 \ \footnote{10} \ \foot$
- 3606 \ifx\f@ncyocf\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyocf\bxjs@tmpb \fi

\fullwidth が(定義済で)\textwidth よりも大きい場合、ヘッダ・フッタの横幅を \fullwidth に合わせる。

3607 \ifx\fullwidth\@undefined\else \ifdim\textwidth<\fullwidth

```
\setlength{\Otempdima}{\fullwidth-\textwidth}%
                   3608
                   3609
                           \edef\bxjs@tmpa{\noexpand\fancyhfoffset[EL,OR]{\the\@tempdima}%
                   3610
                           }\bxjs@tmpa
                         \fi\fi
                   3611
                         \PackageInfo\bxjs@clsname
                   3612
                          {Patch to fancyhdr is applied\@gobble}}
                   3613
\bxjs@pagestyle@hook \pagestyle へのフックの本体。
                   3614 \def\bxjs@pagestyle@hook{%
                        \@ifpackageloaded{fancyhdr}{%
                           \bxjs@adjust@fancyhdr
                   3616
                           \global\let\bxjs@adjust@fancyhdr\relax
                   3617
                   3618
                        }{}}
                       \pagestyle にフックを入れ込む。
                   3619 \let\bxjs@org@pagestyle\pagestyle
                   3620 \def\pagestyle{%
                        \bxjs@pagestyle@hook \bxjs@org@pagestyle}
                       begin-document フック。
                     ※これ以降に fancyhdr が読み込まれることはあり得ない。
                   3622 \verb|\g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%}|
                         \bxjs@pagestyle@hook
                         \global\let\bxjs@pagestyle@hook\relax}
                   3624
                     ■和文空白命令
                   3625 \ifbxjs@jaspace@cmd
         \jaenspace 半角幅の水平空き。
                         \def\jaenspace{\hskip.5\jsZw\relax}
       \jathinspace 和欧文間空白を入れるユーザ命令。
                     ※ minimal ではダミー定義。
                        \def\jathinspace{\hskip\z@skip}
                \_ 全角空白文字 1 つからなる名前の制御綴。\zwspace と等価になる。
                   3628
                        \def\ {\zwspace}
           \jaspace jlreq クラスと互換の命令。
                   3629
                         \DeclareRobustCommand*{\jaspace}[1]{%
                   3630
                           \expandafter\ifx\csname bxjs@jaspace@@#1\endcsname\relax
                   3631
                             \ClassError\bxjs@clsname
                   3632
                              {Unknown jaspace: #1}{\@eha}%
                   3633
                   3634
                             \csname bxjs@jaspace@@#1\endcsname
                           \fi}
                   3635
                         \def\bxjs@jaspace@@zenkaku{\hskip 1\jsZw\relax}
                   3636
                         \def\bxjs@jaspace@@nibu{\hskip .5\jsZw\relax}
                   3637
                         \def\bxjs@jaspace@@shibu{\hskip .25\jsZw\relax}
                   3638
```

3639 \fi

終わり。

3640 \fi

以上で終わり。

3641 %</minimal>

# 付録 C 和文ドライバ: standard 🕸

標準のドライバ。

- \rmfamily/\sffamily/\ttfamily での和文ファミリ連動
- \mcfamily/\gtfamily
- \textmc/\textgt
- \zw
- \jQ/\jH
- \trueQ/\trueH/\ascQ
- \setkanjiskip/\getkanjiskip
- \setxkanjiskip/\getxkanjiskip
- \autospacing/\noautospacing
- \autoxspacing/\noautoxspacing
- ■和文フォント指定の扱い standard 和文ドライバでは \jsJaFont の値を和文フォントの "プリセット" の指定として用いる。プリセットの値は、 $T_{EX}$  Live の kanji-configupdmap コマンドで使う "ファミリ"と同じにすることを想定する。特別な値として、autoは kanji-config-updmap で現在指定されているファミリを表す。

## C.1 共通処理 (1)

まず minimal ドライバを読み込む。

3642 **%<\*standard>** 

3643 %% このファイルは日本語文字を含みます

 $3644 \verb|\input{bxjsja-minimal.def}|$ 

simplejasetup は standard では無効になる。

 $3645 \bxjs@simplejasetupfalse$ 

■japaram オプションの処理 japaram の値を key-value リストとして解釈する。keyval のファミリは bxjsStd とする。

\ifbxjs@jp@jismmiv 2004JIS 字形を優先させるか。

 $3646 \newif\ifbxjs@jp@jismmiv$ 

jis2004 オプションの処理。

```
3647 \bxjs@cslet{bxjs@kv@jis2004@true}\bxjs@jp@jismmivtrue
              3648 \bxjs@cslet{bxjs@kv@jis2004@false}\bxjs@jp@jismmivfalse
              3649 \define@key{bxjsStd}{jis2004}[true]{%
                   \bxjs@set@keyval{jis2004}{#1}{}}
\ifbxjs@jp@units 和文用単位(zw、zh、(true)Q、(true)H)を使えるようにするか。
              3651 \neq 150
                  units オプションの処理。
              3652 \let\bxjs@kv@units@true\bxjs@jp@unitstrue
              3653 \let\bxjs@kv@units@false\bxjs@jp@unitsfalse
              3654 \define@key{bxjsStd}{units}[true]{%
                   \bxjs@set@keyval{units}{#1}{}}
  \bxjs@jp@font フォントパッケージの追加オプション。
              3656 \let\bxjs@jp@font\@empty
                  font オプションの処理。
              3657 \define@key{bxjsStd}{font}{%
                   \edef\bxjs@jp@font{#1}}
                  実際の japaram の値を適用する。
              3659 \def\bxjs@next#1{\bxjs@safe@setkeys{bxjsStd}{#1}}
              3660 \verb|\expandafter\bxjs@next\expandafter{\jsJaParam}|
                ■jis2004 パラメタ jis2004 パラメタが有効の場合は、グローバルオプションに jis2004
                を追加する。
                ※otf や luatexja-preset 等のパッケージがこのオプションを利用する。
              3661 \ifbxjs@jp@jismmiv
                   \g@addto@macro\@classoptionslist{,jis2004}
              3663 % \@ifpackagewith 判定への対策
              3664 \PassOptionsToPackage{jis2004}{otf}
              3665 \fi
                ■和文用単位のサポート エンジンが (u)pT<sub>F</sub>X の場合は units を無効にする。
              3666 \if j\jsEngine
              3667 \bxjs@jp@unitsfalse
              3668 \fi
                  units パラメタが有効の場合は、bxcalc パッケージの \usepTeXunits 命令を実行して
                和文用単位を有効化する。
              3669 \ifbxjs@jp@units
                   \IfFileExists{bxcalc.sty}{%
              3670
                     \RequirePackage{bxcalc}[2018/01/28]%v1.0a
              3671
                     \ifx\usepTeXunits\@undefined
              3672
                       \PackageWarningNoLine\bxjs@clsname
              3673
              3674
                        {Cannot support pTeX units (zw etc.), since\MessageBreak
                         the package 'bxcalc' is too old}%
              3675
```

```
\bxjs@jp@unitsfalse
               3676
               3677
                      \else \usepTeXunits
               3678
                      \fi
                    }{%else
               3679
                      \PackageWarningNoLine\bxjs@clsname
               3680
                       {Cannot support pTeX units (zw etc.), since\MessageBreak
               3681
                        the package 'bxcalc' is unavailable}%
               3682
                      \bxjs@jp@unitsfalse
                    }
               3684
               3685 \fi
                   bxcalc で和文用単位をサポートした場合は、\bxjs@parse@qh の処理は不要になるので
                 無効化する。
               3686 \ifbxjs@jp@units
               3687 \def\bxjs@parse@qh#1{\let\bxjs@tmpb\relax}
               3688 \let\bxjs@parse@qh@a\@undefined
               3689 \let\bxjs@parse@qh@b\@undefined
               3690 \fi
\bxjs@let@lenexpr \bxjs@let@lenexpr\CS{〈長さ式〉}: 長さ式に bxcalc の展開を適用した結果のトーク
                 ン列を \CS に代入する。
               3691 \ifbxjs@jp@units
               3692
                    \def\bxjs@let@lenexpr#1#2{%
               3693
                      \ensuremath{\mbox{edef#1{#2}}\%}
                      \expandafter\CUXParseExpr\expandafter#1\expandafter{#1}}
               3694
               3695 \else
                    \def\bxjs@let@lenexpr{\edef}
               3696
               3697 \fi
                 検査する。
               3698 \ifjsWitheTeX
                 使える場合は、「\dimexpr 外部寸法表記\relax」の形式(これは内部値なので単位として
                 使える)で各命令定義する。
            \jQ \jQ と \jH はともに 0.25\,\mathrm{mm} に等しい。
            \jH3699
                     \@tempdima=0.25mm
                     \protected\edef\jQ{\dimexpr\the\@tempdima\relax}
               3700
               3701
                    \let\jH\jQ
         \trueQ \trueQ と \trueH はともに 0.25 true mm に等しい。
                    \ifjsc@mag
         \trueH3702
               3703
                      \@tempdimb=\jsBaseFontSize\relax
               3704
                      \edef\bxjs@tmpa{\strip@pt\@tempdimb}%
               3705
                      \@tempdima=2.5mm
               3706
                      \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa
                      \protected\edef\trueQ{\dimexpr\the\@tempdima\relax}
               3707
```

```
3708 \@tempdima=10pt
```

- 3709 \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa
- 3710 \protected\edef\bxjs@truept{\dimexpr\the\@tempdima\relax}
- 3711 \else \let\trueQ\jQ \let\bxjs@truept\p@
- 3712 \fi
- 3713 \let\trueH\trueQ

\ascQ \ascQ は\trueQ を和文スケール値で割った値。例えば、\fontsize{12\ascQ}{16\trueH} \ascpt とすると、和文が 12Q になる。

同様に、\ascpt は truept を和文スケールで割った値。

- 3714 \@tempdima\trueQ \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
- 3715 \protected\edef\ascQ{\dimexpr\the\@tempdima\relax}
- ${\tt 3716} \quad \verb{\tt \footnote{\tt \$
- 3717 \protected\edef\ascpt{\dimexpr\the\@tempdima\relax}

3718 \fi

\jafontsize \jafontsize{ $\langle$ フォントサイズ $\rangle$ }{ $\langle$ 行送り $\rangle$ }: 和文フォント規準で、すなわち、1 zw が  $\langle$ フォントサイズ $\rangle$  に等しくなるようにフォントサイズを指定する。この命令の引数では、 $\mathbb{Q}/\mathbb{H}$  の単位が使用できる。

 $3719 \def \jafontsize#1#2{%}$ 

- 3720 \begingroup
- 3721 \bxjs@jafontsize@a{#1}%
- 3722 \@tempdimb\jsInverseScale\@tempdima
- 3723 \bxjs@jafontsize@a{#2}%
- 3724 \xdef\bxjs@g@tmpa{%
- 3725 \noexpand\fontsize{\the\@tempdimb}{\the\@tempdima}}%
- 3726 \endgroup\bxjs@g@tmpa}
- 3727 \def\bxjs@jafontsize@a#1{%
- 3728 \bxjs@parse@qh{#1}%
- $3729 \qquad \verb|\ifx\bxjs@tmpb\relax \def\bxjs@tmpb{#1}\fi$
- 3730 \@defaultunits\@tempdima\bxjs@tmpb pt\relax\@nnil}

続いて、和文間空白・和欧文間空白関連の命令を実装する。(エンジン依存のコード。)

\bxjs@kanjiskip 和文間空白の量を表すテキスト。

3731 \def\bxjs@kanjiskip{0pt}

\setkanjiskip 和文間空白の量を設定する。

- 3732 \newcommand\*\setkanjiskip[1] {%
- 3733 \bxjs@let@lenexpr\bxjs@kanjiskip{#1}%
- 3734 \bxjs@reset@kanjiskip}

\getkanjiskip 和文間空白の量を表すテキストに展開する。

- 3735 \newcommand\*\getkanjiskip{%
- 3736 \bxjs@kanjiskip}

\ifbxjs@kanjiskip@enabled 和文間空白の挿入が有効か。ただし pT<sub>E</sub>X では自身の \(no)autospacing での制御を用いるのでこの変数は常に真とする。

3737 \newif\ifbxjs@kanjiskip@enabled \bxjs@kanjiskip@enabledtrue

```
\bxjs@enable@kanjiskip 和文間空白の挿入を有効/無効にする。(pTFX 以外)
          \verb|\bxjs@disable@kanjiskip| 3738 \verb|\bxjs@robust@def\bxjs@enable@kanjiskip| {\% }
                                                                                                                \bxjs@kanjiskip@enabledtrue
                                                                                           3739
                                                                                                               \bxjs@reset@kanjiskip}
                                                                                           3740
                                                                                           3741 \bxjs@robust@def\bxjs@disable@kanjiskip{%
                                                                                                                \bxjs@kanjiskip@enabledfalse
                                                                                           3743
                                                                                                               \bxjs@reset@kanjiskip}
                 \bxjs@reset@kanjiskip 現在の和文間空白の設定を実際にエンジンに反映させる。
                                                                                           3744 \bxjs@robust@def\bxjs@reset@kanjiskip{%
                                                                                                                \ifbxjs@kanjiskip@enabled
                                                                                                                       \setlength{\@tempskipa}{\bxjs@kanjiskip}%
                                                                                           3746
                                                                                           3747
                                                                                                             \else \@tempskipa\z@
                                                                                           3748
                                                                                                               \fi
                                                                                                              \bxjs@apply@kanjiskip}
                                                                                           3749
                                   \bxjs@xkanjiskip 和欧文間空白について同様のものを用意する。
                                          \setxkanjiskip3750 \def\bxjs@xkanjiskip{0pt}
                                         \label{eq:command*setxkanjiskip} $$ $$ \operatorname{$a_{3751} \newcommand*\setxkanjiskip[1]}_{.} $$
                                                                                                                \bxjs@let@lenexpr\bxjs@xkanjiskip{#1}%
\ifbxjs@xkanjiskip@enabled _{3753}
                                                                                                               \bxjs@reset@xkanjiskip}
          \verb|\bxjs@enable@xkanjiskip| 3754 \verb|\newcommand*| getxkanjiskip{% | States a states of the command of the comma
      \verb|\bxjs@disable@xkanjiskip||^{3755}
                                                                                                                \bxjs@xkanjiskip}
                                                                                           3756 \newif\ifbxjs@xkanjiskip@enabled \bxjs@xkanjiskip@enabledtrue
             \verb|\bxjs@reset@xkanjiskip| 3757 \verb|\bxjs@robust@def\bxjs@enable@xkanjiskip{% | line | 
                                                                                                               \bxjs@xkanjiskip@enabledtrue
                                                                                                               \bxjs@reset@xkanjiskip}
                                                                                           3759
                                                                                           3760 \bxjs@robust@def\bxjs@disable@xkanjiskip{%
                                                                                                                \bxjs@xkanjiskip@enabledfalse
                                                                                                                \bxjs@reset@xkanjiskip}
                                                                                           3762
                                                                                           3763 \bxjs@robust@def\bxjs@reset@xkanjiskip{%
                                                                                                                \ifbxjs@xkanjiskip@enabled
                                                                                           3764
                                                                                                                      \setlength{\@tempskipa}{\bxjs@xkanjiskip}%
                                                                                                               \else \@tempskipa\z@
                                                                                           3766
                                                                                           3767
                                                                                                                \fi
                                                                                                                \bxjs@apply@xkanjiskip}
                                                                                           3768
                                                                                                        \jsResetDimen を用いて、フォントサイズが変更された時に空白の量が追随するように
                                                                                                 する。
                                                                                           3769 \g@addto@macro\jsResetDimen{%
                                                                                           3770 \bxjs@reset@kanjiskip
                                                                                                                \bxjs@reset@xkanjiskip}
                                                                                           3772 \let\bxjs@apply@kanjiskip\relax
                                                                                           3773 \let\bxjs@apply@xkanjiskip\relax
```

#### ■和文フォント指定の扱い

\bxjs@adjust@jafont \jsJaFont に入っている和文フォント設定の値を"調整"して、その結果を \bxjs@tmpa に返す。#1 が f の場合は"非埋込 (noEmbed)"の設定が禁止される。この禁止の場合も含

```
め、何か異常がある場合は \bxjs@tmpa は空になる。
                    3774 \@onlypreamble\bxjs@adjust@jafont
                    3775 \def\bxjs@adjust@jafont#1{%
                    3776
                          \ifx\jsJaFont\bxjs@@auto
                    3777
                            \bxjs@get@kanjiEmbed
                            \ifx\bxjs@kanjiEmbed\relax
                    3778
                    3779
                              \let\bxjs@tmpa\@empty
                            \else
                    3780
                    3781
                              \let\bxjs@tmpa\bxjs@kanjiEmbed
                            \fi
                    3782
                          \else
                    3783
                            \let\bxjs@tmpa\jsJaFont
                    3784
                    3785
                          \if f#1\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
                    3786
                            \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
                    3787
                             {Option 'jafont=noEmbed' is ignored, because it is\MessageBreak
                    3788
                    3789
                              not available on the current situation}%
                    3790
                            \let\bxjs@tmpa\@empty
                    3791
                          \fi\fi
                    3792 }
                    3793 \def\bxjs@@auto{auto}
                    3794 \def\bxjs@@noEmbed{noEmbed}
    \bxjs@kanjiEmbed 現在の updmap の kanjiEmbed パラメタの値。\bxjs@get@kanjiEmbed により実際の設定
                     値が取得されてここに設定される。
                    3795 \let\bxjs@kanjiEmbed\relax
\bxjs@get@kanjiEmbed 現在の updmap の kanjiEmbed パラメタの値を取得する。
                    3796 \@onlypreamble\bxjs@get@kanjiEmbed
                    3797 \def\bxjs@get@kanjiEmbed{%
                          \begingroup\setbox\z@=\hbox{%
                    3798
                            \global\let\bxjs@g@tmpa\relax
                    3799
                            \endlinechar\m@ne
                    3800
                    3801
                            \let\do\@makeother\dospecials
                            \catcode32=10 \catcode12=10 %form-feed
                    3802
                    3803
                            \let\bxjs@tmpa\@empty
                    3804
                            \openin\@inputcheck="|kpsewhich updmap.cfg"\relax
                            \ifeof\@inputcheck\else
                    3805
                              \read\@inputcheck to\bxjs@tmpa
                    3806
                              \closein\@inputcheck
                    3807
                    3808
                    3809
                            \ifx\bxjs@tmpa\@empty\else
                              \openin\@inputcheck="\bxjs@tmpa"\relax
                    3810
                              \@tempswatrue
                    3811
                    3812
                              \loop\if@tempswa
                                \read\@inputcheck to\bxjs@tmpa
                    3813
                                \expandafter\bxjs@get@ke@a\bxjs@tmpa\@nil kanjiEmbed \@nil\@nnil
                    3814
                                \ifx\bxjs@tmpb\relax\else
                    3815
                                  \global\let\bxjs@g@tmpa\bxjs@tmpb
                    3816
```

```
3817
                    \@tempswafalse
       3818
       3819
                   \expandafter\bxjs@get@ke@b\bxjs@tmpa\@nil jaEmbed \@nil\@nnil
                   \ifx\bxjs@tmpb\relax\else
       3820
                     \global\let\bxjs@g@tmpa\bxjs@tmpb
       3821
                    \@tempswafalse
       3822
       3823
       3824
                   \ifeof\@inputcheck \@tempswafalse \fi
                 \repeat
       3825
               \fi
       3826
       3827
             }\endgroup
             \verb|\label{lem:lembed|bxjs@g@tmpa|} \\
       3828
       3829 }
       3830 \@onlypreamble\bxjs@get@ke@a
       3831 \def\bxjs@get@ke@a#1kanjiEmbed #2\@nil#3\@nnil{%
             \fine $$1$\def\bxjs@tmpb{#2}%
             \else \let\bxjs@tmpb\relax
       3833
             fi
       3834
       3835 \@onlypreamble\bxjs@get@ke@b
       3836 \def\bxjs@get@ke@b#1jaEmbed #2\@nil#3\@nnil{%
       3837
             \fine $$1$\def\bxjs@tmpb{#2}%
             \else \let\bxjs@tmpb\relax
       3838
       3839
            \fi}
\jachar \jachar{(文字)}: 和文文字として出力する。
       3840 \newcommand*\jachar[1]{%
            \begingroup
       3841
        \jsLetHeadChar で先頭の"文字"を拾ってそれを \bxjs@jachar に渡す。
               \jsLetHeadChar\bxjs@tmpa{#1}%
       3842
       3843
               \ifx\bxjs@tmpa\relax
       3844
                 \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
                   {Illegal argument given to \string\jachar}%
       3845
       3846
       3847
                 \expandafter\bxjs@jachar\expandafter{\bxjs@tmpa}%
               \fi
       3848
       3849
             \endgroup}
        \jsJaChar を \jachar と等価にする。
       3850 \left| \text{jsJaChar} \right|
         下請けの \bxjs@jachar の実装はエンジンにより異なる。
       3851 \let\bxjs@jachar\@firstofone
        ■hyperref 対策 出力ページサイズに館する処理は geometry パッケージが行うので、
```

\bxjs@fix@hyperref@unicode hyperref の unicode オプションの値を固定する。

hyperref 側の処理は無効にしておく。

3852 \PassOptionsToPackage{setpagesize=false}{hyperref}

```
3854 \def\bxjs@fix@hyperref@unicode#1{%
                                                                            \PassOptionsToPackage{bxjs/hook=#1}{hyperref}%
                                                                            \@namedef{KV@Hyp@bxjs/hook}##1{%
                                                              3856
                                                                                 \KV@Hyp@unicode{##1}%
                                                              3857
                                                                                \def\KV@Hyp@unicode####1{%
                                                              3858
                                                                                     \expandafter\ifx\csname if##1\expandafter\endcsname
                                                              3859
                                                              3860
                                                                                            \csname if####1\endcsname\else
                                                                                          \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
                                                              3861
                                                                                          {Blcoked hyperref option 'unicode=####1'}%
                                                              3862
                                                              3863
                                                                                     \fi
                                                                                }%
                                                              3864
                                                                            }%
                                                              3865
                                                              3866 }
                                                                 「hyperref の unicode オプションの値を検証する」ための本体開始時のフック。
          \jsCheckHyperrefUnicode
                                                              3867 \@onlypreamble\jsCheckHyperrefUnicode
                                                              3868 \let\jsCheckHyperrefUnicode\@empty
                                                              3869 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{\jsCheckHyperrefUnicode}
\bxjs@check@hyperref@unicode hyperref の unicode オプションの値を本体開始時に検証する。
                                                              3870 \@onlypreamble\bxjs@check@hyperref@unicode
                                                              3871 \def\bxjs@check@hyperref@unicode#1{%
                                                                            \g@addto@macro\jsCheckHyperrefUnicode{%
                                                              3872
                                                                                 \@tempswafalse
                                                              3873
                                                                                 \begingroup
                                                              3874
                                                                                     \expandafter\ifx\csname ifHy@unicode\endcsname\relax
                                                              3875
                                                              3876
                                                                                          \aftergroup\@tempswatrue \fi
                                                              3877
                                                                                     \expandafter\ifx\csname ifHy@unicode\expandafter\endcsname
                                                                                              \csname if#1\endcsname
                                                              3878
                                                                                          \aftergroup\@tempswatrue \fi
                                                              3879
                                                              3880
                                                                                 \endgroup
                                                                                 \if@tempswa\else
                                                              3881
                                                                                     \ClassError\bxjs@clsname
                                                                                       {The value of hyperref 'unicode' key is not suitable\MessageBreak
                                                              3883
                                                              3884
                                                                                         for the present engine (must be #1)}%
                                                                                       {\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\en
                                                              3885
                                                                                 \fi}}
                                                              3886
                 \bxjs@urgent@special DVI のなるべく早い位置に special を出力する。
                                                              3887 \@onlypreamble\bxjs@urgent@special
                                                              3888 \def\bxjs@urgent@special#1{%
                                                                            \AtBeginDvi{\special{#1}}%
                                                              3889
                                                                            \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                                                              3890
                                                              3891
                                                                                \@ifpackageloaded{atbegshi}{%
                                                                                     \begingroup
                                                              3892
                                                                                          \toks\z@{\special{#1}}%
                                                              3893
                                                                                          \toks\tw@\expandafter{\AtBegShi@HookFirst}%
                                                              3894
                                                              3895
                                                                                          \xdef\AtBegShi@HookFirst{\the\toks@\the\toks\tw@}%
```

3853 \Conlypreamble\bxjsCfixChyperrefCunicode

```
3896
                                  \endgroup
                         3897
                                }{}%
                         3898
                              }%
                         3899 }
\bxjs@resolve@jafont@paren jafont パラメタ値内の()を解決する。\bxjs@resolve@jafont@paren\CS で、\CS の内
                          容中の (...) を \bxjs@jafont@paren{...} に置き換える。
                         3900 \@onlypreamble\bxjs@resolve@jafont@paren
                         3901 \def\bxjs@resolve@jafont@paren#1{%
                              \def\bxjs@tmpb{\let#1}%
                         3902
                              \expandafter\bxjs@resolve@jafont@paren@a#1\@nil()\@nil\relax}
                         3903
                         3904 \verb|\conlypreamble\bxjs@resolve@jafont@paren@a|
                         3905 \def\bxjs@resolve@jafont@paren@a#1(#2)#3\@nil#4\relax{%
                              \ifx\relax#4\relax \bxjs@tmpb\jsJaFont
                         3906
                         3907
                                \edef\bxjs@tmpa{#1\bxjs@jafont@paren{#2}#3}%
                                \bxjs@tmpb\bxjs@tmpa
                         3909
                         3910
                              \fi}
                                pTFX 用設定
                          C.2
                         3911 \if j\jsEngine
                          ■共通命令の実装
                         3912 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
                              \kanjiskip\@tempskipa}
                         3914 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
                              \xkanjiskip\@tempskipa}
                            \jaJaChar のサブマクロ。
                         3916 \def\bxjs@jachar#1{%}
                             \bxjs@jachar@a#1....\@nil}
                         3918 \def\bxjs@jachar@a#1#2#3#4#5\@nil{%
                          引数が単一トークンなら和文文字トークンが得られたと見なしてそれをそのまま出力する。
                          引数が複数トークンの場合は、UTF-8 のバイト列であると見なし、そのスカラー値を
                          \@tempcnta に代入する。
                              \left( x, \#3 \right)
                         3920
                         3921
                                \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
                                \advance\@tempcnta`#2 \advance\@tempcnta-"3080
                         3922
                         3923
                                \bxjs@jachar@b
                              \left\langle x\right\rangle = 1.00
                         3924
                                \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
                         3925
                         3926
                                \advance\@tempcnta`#2 \multiply\@tempcnta64
                                \advance\@tempcnta`#3 \advance\@tempcnta-"E2080
                         3927
```

3928

3929

\else

\bxjs@jachar@b

```
\@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
3930
3931
       \advance\@tempcnta`#2 \multiply\@tempcnta64
3932
       \advance\@tempcnta`#3 \multiply\@tempcnta64
       \advance\@tempcnta`#4 \advance\@tempcnta-"3C82080
3933
       \bxjs@jachar@b
     \fi\fi\fi}
3935
 符号値が \@tempcnta の和文文字を出力する処理。
3936 \ifjsWithupTeX
     \def\bxjs@jachar@b{\kchar\@tempcnta}
3938 \else
     \def\bxjs@jachar@b{%
3939
       \ifx\bxUInt\@undefined\else
3940
3941
         \bxUInt{\@tempcnta}%
3942
       fi
3943 \fi
   和欧文間空白の命令 \jathinspace の実装。
3944 \ifbxjs@jaspace@cmd
3945 \def\jathinspace{\hskip\xkanjiskip}
3946 \fi
 ■jis2004 パラメタ pxchfon と pxbabel では 2004JIS を指定するオプションの名が
 prefer2004jis である。
3947 \ifbxjs@jp@jismmiv
     \PassOptionsToPackage{prefer2004jis}{pxchfon}
3949
     \PassOptionsToPackage{prefer2004jis}{pxbabel}
3950 \fi
 ■和文フォント指定の扱い pTFX は既定で kanji-config-updmap の設定に従うため、
 \isJaFont が auto の場合は何もする必要がない。無指定でも auto でもない場合は、
 \jsJaFont をオプションにして pxchfon パッケージを読み込む。ここで、和文ドライバパ
 ラメタ font が指定されいる場合は、その値を pxchfon のオプションに追加する。
3951 \let\bxjs@jafont@paren\@firstofone
3952 \let\bxjs@tmpa\jsJaFont
3953 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@auto
     \let\bxjs@tmpa\@empty
3955 \else\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
3956 \def\bxjs@tmpa{noembed}
3957 \fi\fi
3958 \bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa
3959 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
3960 \ifx\bxjs@tmpa\empty\else
     \edef\bxjs@next{%
3961
       \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{pxchfon}[2010/05/12]% v0.5
    }\bxjs@next
3963
3964 \fi
```

```
応している場合は scale=(\jsScale の値) を事前に otf に渡す。
 ※scale 対応は 1.7b6 版 [2013/11/17] から。
 ※ otf.sty の中に「\RequirePackage{keyval}」の行が存在するかにより判定している。
 (もっといい方法はないのか……。)
3965 \begingroup
     \verb|\global| let\bxjs@g@tmpa\relax| \\
3966
3967
      \catcode`\|=0 \catcode`\\=12
      |def|bxjs@tmpdo#1|@nil{%
3968
        |bxjs@tmpdo@a#1|@nil\RequirePackage|@nnil}%
3969
      |def|bxjs@tmpdo@a#1\RequirePackage#2|@nnil{%
3970
3971
        |ifx$#1$|bxjs@tmpdo@b#2|@nil keyval|@nnil |fi}%
      |catcode`|\=0 \catcode`\|=12
3972
      \def\bxjs@tmpdo@b#1keyval#2\@nnil{%
3973
       ifx$#2$\epsilon
3974
          \xdef\bxjs@g@tmpa{%
3975
            \noexpand\PassOptionsToPackage{scale=\jsScale}{otf}}%
3976
        \fi}
3977
3978 \Offirstofone{%
     \catcode10=12 \endlinechar\m@ne
3979
3980
      \let\do\@makeother \dospecials \catcode32=10
      \openin\@inputcheck=otf.sty\relax
3981
3982
      \@tempswatrue
      \loop\if@tempswa
3983
       \ifeof\@inputcheck \@tempswafalse \fi
3984
3985
       \if@tempswa
          \read\@inputcheck to\bxjs@next
3986
          \expandafter\bxjs@tmpdo\bxjs@next\@nil
3987
       \fi
3988
      \repeat
3989
3990
     \closein\@inputcheck
3991 \endgroup}
3992 \bxjs@g@tmpa
 ■hyperref 対策 unicode にしてはいけない。
3993 \ifbxjs@hyperref@enc
3994 \bxjs@check@hyperref@unicode{false}
3995 \fi
   tounicode special 命令を出力する。
3996 \if \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx T%
        \else\ifjsWithpTeXng T\else F\fi\fi T%
3997
      \ifnum\jis"2121="A1A1 %euc
3998
3999
       \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode EUC-UCS2}
4000
     \left| \right| = 121 = 8140 %sjis
       \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode 90ms-RKSJ-UCS2}
4001
      \else\ifnum\jis"2121="3000 %uptex
4002
```

■otf パッケージ対策 インストールされている otf パッケージが scale オプションに対

```
\ifbxjs@bigcode
4003
          \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode UTF8-UTF16}
4004
4005
          \PassOptionsToPackage{bigcode}{pxjahyper}
4006
          \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode UTF8-UCS2}
4007
4008
        \fi
      \fi\fi\fi
4009
      \let\bxToUnicodeSpecialDone=t
4011 \fi
 ■和文数式ファミリ 和文数式ファミリは既定で有効とする。 すなわち enable jfam=false
 以外の場合は Qenablejfam を真にする。
4012 \ifx f\bxjs@enablejfam\else
4013 \@enablejfamtrue
4014 \fi
   実際に和文用の数式ファミリの設定を行う。
4015 \if@enablejfam
      \DeclareSymbolFont{mincho}{\jsc@JYn}{mc}{m}{n}
      \DeclareSymbolFontAlphabet{\mathmc}{mincho}
4017
      4018
4019
      \jfam\symmincho
      \DeclareMathAlphabet{\mathgt}{\jsc@JYn}{gt}{m}{n}
4020
      \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
4021
4022
        \ifx\reDeclareMathAlphabet\@undefined\else
          \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\@mathrm}{\@mathrm}{\
4023
4024
          \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\@mathbf}{\@mathbf}}%
          \label{$$\operatorname{\mathbb{L}}_{\mathbb{R}}(\mathbb{R})_{\Omega}} $$ \operatorname{\mathbb{L}}_{\Omega}(\mathbb{R}^{n}) $$ is $\mathbb{R}^{n}. $$
4025
        \fi}
4026
4027 \fi
```

## C.3 pdfTFX 用設定: CJK + bxcjkjatype

 $4028 \le if p\jsEngine$ 

- ■bxcjkjatype パッケージの読込 \jsJaFont が指定されている場合は、その値を bxcjkjatype のオプション(プリセット指定)に渡す。(auto ならば \bxjs@get@kanjiEmbed を実行する。) スケール値 (\jsScale) の反映は bxcjkjatype の側で行われる。
- ※ Pandoc モードでは autotilde を指定しない。

```
4029 \verb|\bxjs@adjust@jafont{f}|
```

- $4030 \verb|\let\bxjs@jafont@paren\@firstofone|$
- $4031 \verb|\bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa|$
- $4032 \verb|\def|\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}|$
- $4033 \verb|\edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa{\whole}}|$
- 4034 \def\bxjs@tmpb{pandoc}\ifx\bxjs@tmpb\bxjs@jadriver\else
- 4035 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa{autotilde}}

4036 \fi

```
4037 \edef\bxjs@next{%
                \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{bxcjkjatype}[2013/10/15]% v0.2c
4038
4039 }\bxjs@next
4040 \bxjs@cjk@loaded
     ■hyperref 対策 bxcjkjatype 使用時は unicode にするべき。
    ※取りあえず固定はしない。
4041 \ifbxjs@hyperref@enc
4042 \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}
4043 \fi
          \hypersetup 命令で(CJK* 環境に入れなくても)日本語文字を含む文書情報を設定でき
     るようにするための細工。
     ※ bxcjkjatype を whole 付きで使っていることが前提。
     ※パッケージオプションでの指定に対応するのは、「アクティブな高位バイトトークンがそ
    の場で展開されてしまう」ため困難である。
4044 \verb|\lifx\bxcjkjatypeHyperrefPatchDone\@undefined|
4045 \begingroup
4046 \CJK@input{UTF8.bdg}
4047 \endgroup
4048 \g@addto@macro\pdfstringdefPreHook{%
                \@nameuse{CJK@UTF8Binding}%
4050 }
4051 \fi
          ~ が和欧文間空白である場合は PDF 文字列中で空白文字でなく空に展開させる。
4052 \ifx\bxcjkjatypeHyperrefPatchDone\@undefined
4053 \g@addto@macro\pdfstringdefPreHook{\%}
4054
                \ifx~\bxjs@@CJKtilde
                      \let\bxjs@org@LetUnexpandableSpace\HyPsd@LetUnexpandableSpace
4055
4056
                      \let\HyPsd@LetUnexpandableSpace\bxjs@LetUnexpandableSpace
                      \let~\@empty
4057
4058
               \fi
4059 }
4060 \def\bxjs@@CJKtilde{\CJKecglue\ignorespaces}
4061 \ensuremath{$\setminus$} 4061 \ensuremath{$\setminus$} 4061 \ensuremath{$\setminus$} 3000 \ensuremath{$\setminus$
4062 \def\bxjs@LetUnexpandableSpace#1{%
                 \def\bxjs@tmpa{#1}\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@tildecmd\else
4063
                      \bxjs@org@LetUnexpandableSpace#1%
4064
               \fi}
4065
4066 \fi
     ■共通命令の実装
4067 \newskip\jsKanjiSkip
4068 \newskip\jsXKanjiSkip
4069 \ifx\CJKecglue\@undefined
4070 $$ \def\CJKtilde{\CJK@global\def~{\CJKecglue\ignorespaces}}
```

4071 \fi

```
4072 \let\autospacing\bxjs@enable@kanjiskip
4073 \let\noautospacing\bxjs@disable@kanjiskip
4074 \protected\def\bxjs@CJKglue{\hskip\jsKanjiSkip}
4075 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
     \jsKanjiSkip\@tempskipa
     \let\CJKglue\bxjs@CJKglue}
4077
4078 \let\autoxspacing\bxjs@enable@xkanjiskip
4079 \let\noautoxspacing\bxjs@disable@xkanjiskip
4080 \protected\def\bxjs@CJKecglue{\hskip\jsXKanjiSkip}
4081 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
     \jsXKanjiSkip\@tempskipa
4082
     \let\CJKecglue\bxjs@CJKecglue}
   \jachar のサブマクロの実装。
4084 \def\bxjs@jachar#1{%
4085 \CJKforced{#1}}
   和欧文間空白の命令 \jathinspace の実装。
4086 \ifbxjs@jaspace@cmd
4087 \protected\def\jathinspace{\CJKecglue}
4088 \fi
 ■和文数式ファミリ CJK パッケージは(恐らく)数式文字として CJK 文字をサポートし
 ていない。従って @enablejfam は常に偽になる。
4089 \ifx t\bxjs@enablejfam
     \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
      {You cannot use 'enablejfam=true', since the\MessageBreak
4091
4092
       CJK package does not support Japanese math}
4093 \fi
 C.4 X<sub>3</sub>T<sub>E</sub>X 用設定: xeCJK + zxjatype
4094 \le x \le x
 ■zxjatype パッケージの読込 スケール値(\jsScale)の反映は zxjatype の側で行われる。
4095 \RequirePackage{zxjatype}
4096 \PassOptionsToPackage{no-math}{fontspec}%!
4097 \PassOptionsToPackage{xetex}{graphicx}%!
4098 \PassOptionsToPackage{xetex}{graphics}%!
4099 \ifx\zxJaFamilyName\Qundefined
    \ClassError\bxjs@clsname
4101
     {xeCJK or zxjatype is too old}\@ehc
4102 \fi
```

141

■和文フォント定義 \jsJaFont が指定された場合は、その値をオプションとして

zxjafont を読み込む。非指定の場合は IPAex フォントを使用する。

4103 \bxjs@adjust@jafont{f}

4104 \let\bxjs@jafont@paren\@gobble

```
4105 \bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa
4106 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
4107 \ifx\bxjs@tmpa\@empty
4108 \setCJKmainfont[BoldFont=ipaexg.ttf]{ipaexm.ttf}
4109 \setCJKsansfont[BoldFont=ipaexg.ttf]{ipaexg.ttf}
4110 \else
4111 \edef\bxjs@next{%
4112 \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{zxjafont}[2013/01/28]% v0.2a
4113 }\bxjs@next
4114 \fi
```

■hyperref 対策 unicode オプションの指定に関する話。

 $X_{
m TE}X$  の場合は、xdvipdfmx が UTF-8  $\rightarrow$  UTF-16 の変換を行う機能を持っているため、本来は special 命令の文字列の文字コード変換は不要である。ところが、xhyperref での方針としては、xhyperref での方針としては、xhyperref での方針としては、xhyperref での方の場合にもパッケージ側で文字コード変換を行う方が望ましいと考えている。実際、xhyperref でのると警告が出て強制的に有効化される。一方で、過去(xhyperref での方式を使した状態で与えるのは不正と見なしていて警告が発生する。

これを踏まえて、ここでは、「 $X_{\overline{1}}T_{\overline{1}}X$  のバージョンが 0.99992 以上の場合に unicode を 既定で有効にする」ことにする。

※取りあえず固定はしない。

```
4115 \ifnum\strcmp{\the\XeTeXversion\XeTeXrevision}{0.99992}>\m@ne
4116 \ifbxjs@hyperref@enc
4117 \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}
4118 \fi
4119 \fi
```

■段落頭でのグルー挿入禁止 どうやら、zxjatype の \inhibitglue の実装が極めて杜撰なため、1.0 版での実装では全く期待通りの動作をしていないし、そもそも(少なくとも現状の)xeCJK では、段落頭での \inhibitglue は実行しないほうが JS クラスの出力に近いものが得られるらしい。

従って、 $\sl jsInhibitGlueAtParTop$  は結局何もしないことにする。 強制改行直後のグルー禁止処理、のような怪しげな何か。

```
4120 \AtEndOfPackage{%
4121 \def\@gnewline #1{%
4122 \ifvmode \@nolnerr
4123 \else
4124 \unskip \reserved@e {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
4125 \nobreak \hskip-1sp\hskip1sp\relax
4126 \ignorespaces
4127 \fi}
4128 }
```

#### ■共通命令の実装

 $4129 \verb|\newskip\jsKanjiSkip||$ 

```
4130 \newskip\jsXKanjiSkip
4131 \ifx\CJKecglue\@undefined
4132 $$ \def\CJK\cglobal\def^{\CJKecglue\ignorespaces}$
4133 \fi
4134 \let\autospacing\bxjs@enable@kanjiskip
4135 \let\noautospacing\bxjs@disable@kanjiskip
4136 \protected\def\bxjs@CJKglue{\hskip\jsKanjiSkip}
4137 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
     \jsKanjiSkip\@tempskipa
    \xeCJKsetup{CJKglue={\bxjs@CJKglue}}}
4140 \let\autoxspacing\bxjs@enable@xkanjiskip
4141 \let\noautoxspacing\bxjs@disable@xkanjiskip
4142 \protected\def\bxjs@CJKecglue{\hskip\jsXKanjiSkip}
4143 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
4144 \jsXKanjiSkip\@tempskipa
4145 \xeCJKsetup{CJKecglue={\bxjs@CJKecglue}}}
   \mcfamily、\gtfamily は本来は zxjatype の方で定義すべきであろうが、現状は暫定的
 にここで定義する。
4146 \ifx\mcfamily\@undefined
4147 \protected\def\mcfamily{\CJKfamily{\CJKrmdefault}}
    \protected\def\gtfamily{\CJKsfdefault}}
4149 \fi
   \jachar のサブマクロの実装。
4150 \def\bxjs@jachar#1{%
4151 \xeCJKDeclareCharClass{CJK}{`#1}\relax
4152 #1}
   \jathinspace の実装。
4153 \ifbxjs@jaspace@cmd
4154 \protected\def\jathinspace{\CJKecglue}
4155 \fi
 ■和文数式ファミリ 和文数式ファミリは既定で無効とする。すなわち enablejfam=true
 の場合にのみ @enablejfam を真にする。
4156 \ \text{t}\ \text{bxjs@enablejfam}
4157 \@enablejfamtrue
4158 \fi
   実際に和文用の数式ファミリの設定を行う。
 ※ FIXME: 要検討。
4159 \if@enablejfam
4160 \xeCJKsetup{CJKmath=true}
4161 \fi
 C.5 LuaTFX 用設定: LuaTFX-ja
```

4162 \else\if l\jsEngine

■LuaT<sub>E</sub>X-ja パッケージの読込 luatexja とともに luatexja-fontspec パッケージを読み込む。

luatexja は自前の \zw (これは実際の現在和文フォントに基づく値を返す)を定義するので、\zw の定義を消しておく。なお、レイアウト定義の「全角幅」は「規定」に基づく \jsZw であることに注意が必要。

 $\times$  1.0b 版から「graphics パッケージに pdftex オプションを渡す」処理を行っていたが、 1.4 版で廃止された。

```
4163 \let\zw\@undefined
```

- 4164 \RequirePackage{luatexja}
- 4165 \edef\bxjs@next{%
- 4166 \noexpand\RequirePackage[scale=\jsScale]{luatexja-fontspec}[2015/08/26]%
- 4167 }\bxjs@next

フォント代替の明示的定義。

```
4168 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox
4169 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}}} \{mc} \{m\} \{sl\} \{<->ssub*mc/m/n\} \{\} \}
4170 \end{areFontShape} \gray \gra
4171 \ensuremath{\mbox{\sc M}} \{gt\}\{m\}\{it\}\{<->ssub*gt/m/n\}\{\}\}
4172 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{gt\} \{m\} \{sl\} \{<-> ssub*gt/m/n\} \{\}
4173 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\{\mbox{$1$} \ensuremath{\mbox{$1$}} for $$\mbox{$1$} for $$\mbox{$1$} \ensuremath{\mbox{$1$}} for $$\mbox{$1$} for $$\mbox{$1$} for $\mbox{$1$} for $
4174 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\{bx\} $$\sl} {<->} sub*gt/m/n} {}
4175 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{JY3\} \{gt\} \{bx\} \{it\} \{<->ssub*gt/m/n\} \{\}\}
4176 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{JY3\} \{gt\} \{bx\} \{s1\} \{<-> ssub*gt/m/n\} \{\}
4177 \end{areFontShape} \{JY3\} \{mc\} \{b\} \{n\} \{<-> ssub*mc/bx/n\} \{\} \}
4178 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\{b\}\{it\}\{<->ssub*mc/bx/n\}\{\}$
4179 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} {mc}{b}{sl}{<->ssub*mc/bx/n}{}
4180 \end{areFontShape} \gt{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{}
4181 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{JY3\} \{gt\} \{b\} \{it\} \{<-> ssub*gt/bx/n\} \{\}\}
4182 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{JY3\} \{gt\} \{b\} \{s1\} \{<-> ssub*gt/bx/n\} \{\}
4183 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}} \{mc}{m}{it}{<->ssub*mc/m/n}{}
4184 \ensuremath{\mbox{\sc M}} \{sl\} \{<-> ssub*mc/m/n\} \{\}
4185 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox
4186 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{gt\}\{m\}\{it\}\{<->ssub*gt/m/n\}\{\}
4187 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{gt\}\{m\}\{sl\}\{\->ssub*gt/m/n\}\{\}
4188 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox
4189 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{\mbox{\mbox{$1$}}} <-> ssub*gt/m/n}{\mbox{\mbox{$1$}}} <-> ssub*g
4190 \ensuremath{\mbox{\sc hape{JT3}{gt}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{{\}}}} \label{fight}
4191 \ensuremath{\mbox{\sc hape{JT3}{gt}{bx}{sl}{<->ssub*gt/m/n}{}} \label{lem:schape}
4192 \DeclareFontShape{JT3}{mc}{b}{n}{<->ssub*mc/bx/n}{}
4193 \DeclareFontShape{JT3}{mc}{b}{it}{<->ssub*mc/bx/n}{}
4194 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} \{mc} \{b\} \{sl} {\mbox{\mbox{\mbox{$-$}}}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$-$}}} \}
4195 \ensuremath{\mbox{\sc hape{JT3}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{}} \\
4196 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}}} \{gt}{b}{it}{<->} ssub*gt/bx/n}{}
4197 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{gt\}\{b\}\{sl\}\{<->ssub*gt/bx/n\}\{\}
```

■和文フォント定義 \jsJaFont が指定された場合は、その値をオプションとして luatexja-preset を読み込む。非指定の場合は、luatexja-preset パッケージの ipaex

```
オプション(IPAex フォント使用)と等価な設定を用いる(luatexja-preset は読み込ま
 ない)。
4198 \bxjs@adjust@jafont{t}
4199 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
4200
     \def\bxjs@tmpa{noembed}
4201 \fi
4202 \let\bxjs@jafont@paren\@gobble
4203 \bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa
4204 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
4205 \ifx\bxjs@tmpa\@empty
     \defaultjfontfeatures{ Kerning=Off }
     \setmainjfont[BoldFont=IPAexGothic,JFM=ujis]{IPAexMincho}
4207
     \setsansjfont[BoldFont=IPAexGothic,JFM=ujis]{IPAexGothic}
4208
4209 \else
     \edef\bxjs@next{%
4210
       \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{luatexja-preset}%
4212 }\bxjs@next
4213 \fi
   欧文総称フォント命令で和文フォントが連動するように修正する。その他の和文フォント
 関係の定義を行う。
4214 \DeclareRobustCommand\rmfamily
     {\not@math@alphabet\rmfamily\mathrm
      \romanfamily\rmdefault\kanjifamily\mcdefault\selectfont}
4216
4217 \DeclareRobustCommand\sffamily
     {\not@math@alphabet\sffamily\mathsf
      \romanfamily\sfdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
4219
4220 \DeclareRobustCommand\ttfamily
     {\not@math@alphabet\ttfamily\mathtt
4221
      \romanfamily\ttdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
4222
4223 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
     \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\mathrm}{\mathrm}{\mathrm}
     \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\mathbf}{\mathbf}{\mathbf}}
     \reDeclareMathAlphabet{\mathsf}{\mathsf}{\mathsf}}%
4226
4227 \bxjs@if@sf@default{%
     \renewcommand\kanjifamilydefault{\gtdefault}}
 ■和文パラメタの設定
4229%次の3つは既定値の通り
4230 %\ltjsetparameter{prebreakpenalty={`',10000}}
4231 %\ltjsetparameter{postbreakpenalty={\ ",10000}}
4232 %\ltjsetparameter{prebreakpenalty={\",10000}}
4233 \ltjsetparameter{jaxspmode={\`!,1}}
4234 \ltjsetparameter{jaxspmode={`\,\tau},2}}
4235 \ltjsetparameter{alxspmode={`+,3}}
4236 \ltjsetparameter{alxspmode={`\%,3}}
```

■段落頭でのグルー挿入禁止 基本的に現状の ltjs\* クラスの処理に合わせる。

※\jsInhibitGlueAtParTop は使わない。

\ltjfakeparbegin 現在の LuaT<sub>E</sub>X-ja で定義されているマクロで、段落中で段落冒頭用の処理を発動する。未 定義である場合にに備えて同等のものを用意する。

```
4237 \ifx\ltjfakeparbegin\@undefined
     \protected\def\ltjfakeparbegin{%
4239
       \ifhmode
4240
         \relax\directlua{%
4241
           luatexja.jfmglue.create_beginpar_node()}}
4242
        \fi}
4243 \fi
   ltjs* クラスの定義と同等になるようにパッチを当てる。
4244 \unless\ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@none
4245 \begingroup
     \let\%\@percentchar \def\@#1{[[\detokenize{#1}]]}
4246
     \@gobble\if\def\bxjs@tmpa{\@{\everypar{}\fi}}
4247
     \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat
       \label{lem:condition} $$ \end{\everypar} \fi } \fi
4249
     \directlua{
4250
4251
       local function patchcmd(cs, code, from, to)
         tex.sprint(code:gsub(from:gsub("\%W", "\%\%\%0"), "\%0"..to)
4252
            :gsub("macro:", \@\gdef..cs, 1):gsub("->", "{", 1).."}")
4254
       patchcmd(\@\@xsect, [[\meaning\@xsect]],
4255
4256
         \@{\hskip-\@tempskipa}, \@\ltjfakeparbegin)
       patchcmd(\@\@item, [[\meaning\@item]],
4257
4258
         \bxjs@tmpa, \@\ltjfakeparbegin)}
4259 \endgroup
4260 \fi
 ■hyperref 対策 unicode にするべき。
 ※ 1.6c 版より、固定ではなく既定設定+検証に切り替えた。
4261 \ifbxjs@hyperref@enc
     \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}
     \bxjs@check@hyperref@unicode{true}
4263
4264 \fi
 ■共通命令の実装
4265 \protected\def\autospacing{%}
     \ltjsetparameter{autospacing=true}}
4267 \protected\def\noautospacing{%
     \ltjsetparameter{autospacing=false}}
4269 \protected\def\autoxspacing{%
     \ltjsetparameter{autoxspacing=true}}
4271 \protected\def\noautoxspacing{%
4272 \ltjsetparameter{autoxspacing=false}}
```

4273 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%

```
\ltjsetparameter{kanjiskip={\@tempskipa}}}
      4275 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
           \ltjsetparameter{xkanjiskip={\@tempskipa}}}
          \jachar のサブマクロの実装。
      4277 \def\bxjs@jachar#1{%
      4278 \ltjjachar`#1\relax}
          \jathinspace の実装。
      4279 \ifbxjs@jaspace@cmd
           \protected\def\jathinspace{%
             \hskip\ltjgetparameter{xkanjiskip}\relax}
      4282 \fi
        ■和文数式ファミリ LuaTeX-ja では和文数式ファミリは常に有効で、既にこの時点で必要
        な設定は済んでいる。従って @enablejfam は常に真になる。
      4283 \ifx f\bxjs@enablejfam
           \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
            {\tt \{You\ cannot\ use\ 'enablejfam=false',\ since\ the\tt \MessageBreak}
      4285
      4286
             LuaTeX-ja always provides Japanese math families}
      4287 \fi
            共通処理 (2)
      4288 \fi\fi\fi\fi
        ■共通命令の実装
\textmc minimal ドライバ実装中で定義した \DeclareJaTextFontCommand を利用する。
\textgt 4289 \ifx\DeclareFixJFMCJKTextFontCommand\@undefined
      4290 \DeclareJaTextFontCommand{\textmc}{\mcfamily}
      4291 \DeclareJaTextFontCommand{\textgt}{\gtfamily}
      4292 \fi
\mathmc この時点で未定義である場合に限り、\DeclareJaMathFontCommand を利用したフォール
\mathgt バックの定義を行う。
      4293 \ifx\model{limit} undefined
           \DeclareJaMathFontCommand{\mathmc}{\mcfamily}
           \DeclareJaMathFontCommand{\mathgt}{\gtfamily}
      4296 \fi
        ■和文空白命令
    \> 非数式中では \jathinspace と等価になるように再定義する。
        ※数式中では従来通り(\:と等価)。
      4297 \ifbxjs@jaspace@cmd
           \bxjs@protected\def\bxjs@choice@jathinspace{%
             \relax\ifmmode \mskip\medmuskip
      4299
```

```
4300 \else \jathinspace\ignorespaces
4301 \fi}
4302 \jsAtEndOfClass{%
4303 \ifjsWitheTeX \let\>\bxjs@choice@jathinspace
4304 \else \def\>{\protect\bxjs@choice@jathinspace}%
4305 \fi}
4306 \fi
```

#### ■和文・和欧文間空白の初期値

```
4307 \setkanjiskip{Opt plus.1\jsZw minus.01\jsZw}
4308 \ifx\jsDocClass\jsSlide \setxkanjiskip{0.1em}
4309 \else \setxkanjiskip{0.25em plus 0.15em minus 0.06em}
4310 \fi
以上で終わり。
```

4311 %</standard>

### 付録 D 和文ドライバ: modern 🕾

モダーンな設定。

standard ドライバの設定を引き継ぐ。

4312 %<\*modern>

 $4313 \verb|\input{bxjsja-standard.def}|$ 

### D.1 フォント設定

```
T1 エンコーディングに変更する。
```

```
※以下のコードは \usepackage [T1] {fontenc} と同等。
```

```
4314 \in x\ x\jsEngine1\fi\\if 1\jsEngine1\fi=\z0
```

- 4315 \def\encodingdefault{T1}%
- 4316 \input{t1enc.def}%
- $4317 \verb|\fontencoding| encoding default\\ \verb|\selectfont|$
- 4318 \fi

基本フォントを Latin Modern フォントファミリに変更する。

※以下は \usepackage [noamth] {lmodern} と同じ。ユーザは後で lmodern を好きなオプションを付けて読み込むことができる。

- 4319 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi=\z0
- $4320 \mbox{ } \mbox{renewcommand{\mbox{mdefault}{lmr}}$
- 4321 \renewcommand{\sfdefault}{lmss}
- $4322 \mbox{ } \mbox{lmtt}{1mtt}$
- 4323 \fi

大型演算子用の数式フォントの設定。

※amsfonts パッケージと同等にする。

4324 \DeclareFontShape{OMX}{cmex}{m}{n}{%

4325 <-7.5>cmex7<7.5-8.5>cmex8%

4326 <8.5-9.5>cmex9<9.5->cmex10}{}%

4327 \expandafter\let\csname  $OMX/cmex/m/n/10\endcsname\relax$ 

amsmath 読込時に上書きされるのを防ぐ。

4328 \def\cmex@opt{10}

### D.2 fixltx2e 読込

※fixltx2e 廃止前の IATFX カーネルの場合。

4329 \ifx\@IncludeInRelease\@undefined

4330 \RequirePackage{fixltx2e}

4331 \fi

### D.3 和文カテゴリコード

和文カテゴリコード設定のための補助パッケージを読みこむ。 4332 \RequirePackage{bxjscjkcat}

### D.4 完了

おしまい。

4333 %</modern>

### 付録 E 和文ドライバ: pandoc 🕾

Pandoc 用の何か。

standard ドライバの設定を引き継ぐ。

4334 **%<\*pandoc>** 

 $4335 \verb|\input{bxjsja-standard.def}|$ 

bxjspandoc パッケージを読み込む。

4336 \RequirePackage{bxjspandoc}

\bxjs@endpreamble@hook etoolbox の \AtEndPreamble で実行される BXJS クラス用のフック。

 $% \varepsilon$ -T<sub>F</sub>X 以外では無効になる。(将来 pandoc の外に出す可能性あり。)

4337 \@onlypreamble\bxjs@endpreamble@hook

4338 \let\bxjs@endpreamble@hook\@empty

4339 \ifjsWitheTeX

1340 \RequirePackage{etoolbox}[2010/08/21]% v2.0

4341 \AtEndPreamble{\bxjs@endpreamble@hook}

4342 \fi

### E.1 dupload システム

パッケージが重複して読み込まれたときに"option clash"の検査をスキップする。この時に何らかのコードを実行させることができる。

#### \bxjs@set@dupload@proc

- $4343 \verb|\conlypreamble\bxjs@set@dupload@proc|$
- 4344 \def\bxjs@set@dupload@proc#1{%
- 4345 \expandafter\bxjs@set@dupload@proc@a\csname bxjs@dlp/#1\endcsname}
- 4346 \@onlypreamble\bxjs@set@dupload@proc@a
- 4347 \def\bxjs@set@dupload@proc@a#1{%
- 4348 \@onlypreamble#1\def#1##1}
- 4349 \def\bxjs@unset@dupload@proc#1{%
- 4350 \expandafter\let\csname bxjs@dlp/#1\endcsname\@undefined}

#### \@if@ptions \@if@ptions の再定義。

- 4351 \@onlypreamble\bxjs@org@if@ptions
- 4352 \let\bxjs@org@if@ptions\@if@ptions
- 4353 \@onlypreamble\bxjs@org@reset@ptions
- 4354 \let\bxjs@org@reset@ptions\relax
- $4355 \ensuremath{\mbox{\sc def}\mbox{\sc qif Qptions}\#1\#2\#3\{\%\ensuremath{\mbox{\sc def}\mbox{\sc d$
- 4356 \let\bxjs@next\@secondoftwo
- 4357 \def\bxjs@tmpa{#1}\def\bxjs@tmpb{\@currext}%
- 4358 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb
- 4359 \expandafter\ifx\csname bxjs@dlp/#2.#1\endcsname\relax\else
- 4360 \let\bxjs@next\@firstoftwo \fi
- 4361 \fi
- 4362 \bxjs@next\bxjs@do@dupload@proc\bxjs@org@if@ptions{#1}{#2}{#3}}
- 4363 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
- 4364 \let\@if@ptions\bxjs@org@if@ptions}
- 4365 \@onlypreamble\bxjs@do@dupload@proc
- 4366 \def\bxjs@do@dupload@proc#1#2#3{%
- 4367 \ifx\bxjs@org@reset@ptions\relax
- 4368 \let\bxjs@org@reset@ptions\@reset@ptions
- 4369 \fi
- 4370 \bxjs@csletcs{bxjs@next}{bxjs@dlp/#2.#1}%
- 4371 \def\@reset@ptions{%
- 4372 \let\@reset@ptions\bxjs@org@reset@ptions
- 4373 \@reset@ptions
- 4374 \bxjs@next{#3}}%
- 4375 \@firstoftwo}

### E.2 lang 変数

lang=ja という言語指定が行われると、Pandoc はこれに対応していないため不完全な Babel や Polyglossia の設定を出力してしまう。これを防ぐための対策を行う。

\bxjs@polyglossia@options Polyglossia のオプション列のテキスト。"実際には読み込まれていない"場合は \relax になる。

4376 \let\bxjs@polyglossia@options\relax

\bxjs@babel@options Babel のオプション列のテキスト。"実際には読み込まれていない"場合は \relax になる。
4377 \let\bxjs@babel@options\relax

■Polyglossia について つまり X¬T¬X · LuaT¬X の場合。

※この場合 etoolbox が使用可能になっている。

 $4378 \in x\$  x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi>0

パッケージの読込を検知するため読込済のマークを付けて dupload の処理を仕込む。

- 4379 \pandocSkipLoadPackage{polyglossia}
- 4380 \bxjs@set@dupload@proc{polyglossia.sty}{%
- 4381 \bxjs@unset@dupload@proc{polyglossia.sty}%
- 4382 \ClassWarning\bxjs@clsname
- 4383 {Package polyglossia is required}%
- 4384 \def\bxjs@polyglossia@options{#1}%

polyglossia の読込が指示された場合、直後に \setmainlanguage が実行されることを 想定して、フック用の \setmainlanguage を定義する。

- ※先に \setmainlanguage 以外が実行された場合はエラーになる。
- 4385 \newcommand\*\setmainlanguage[2][]{%

もし、言語名が空の \setmainlanguage{} が実行された場合は、lang=ja が指定されたと見なす。

- 4386 \ifblank{##2}{%
- 4387 \ClassWarning\bxjs@clsname
- 4389 definitions will be employed}%
- 4390 \bxjs@pandoc@polyglossia@ja

言語名が非空ならば、本来の polyglossia の処理を実行する。

- 4391 }{%else
- 4392 \ClassWarning\bxjs@clsname
- 4393 {Main language is valid (##2),\MessageBreak
- thus polyglossia will be loaded}%
- 4396 \edef\bxjs@next{%
- 4397 \noexpand\RequirePackage[\bxjs@polyglossia@options]{polyglossia}[]%
- 4398 }\bxjs@next
- 4399 \setmainlanguage[##1]{##2}%
- 4400 }}}

プレアンブルで polyglossia の読込が指示されなかった場合、Polyglossia と連携するパッケージの誤動作を防ぐため、読込済マークを外す。

- 4401 \g@addto@macro\bxjs@endpreamble@hook{%
- 4402 \ifx\bxjs@polyglossia@options\relax
- 4403 \csundef{ver@polyglossia.sty}%
- 4404 \fi}

\bxjs@pandoc@polyglossia@ja Pandoc 側で lang=ja が指定されていた場合の処理。この場合は Polyglossia の処理を無効化するためにダミーの定義を行う。その時点でダミーの \setotherlanguage(s) を定義する.

- 4405 \@onlypreamble\bxjs@pandoc@polyglossia@ja
- 4406 \def\bxjs@pandoc@polyglossia@ja{%
- 4407 \renewcommand\*\setmainlanguage[2][]{}%
- 4408 \newcommand\*\setotherlanguage[2][]{%
- 4409 \ifblank{##2}{}{%else
- 4410 \cslet{##2}\@empty \cslet{end##2}\@empty
- 4411 \cslet{text##2}\@firstofone}}%
- 4412 \newcommand\*\setotherlanguages[2][]{%
- 4413 \@for\bxjs@tmpa:={##2}\do{%
- 4414 \setotherlangauge{\bxjs@tmpa}}}%

Polyglossia の読込済マークは外れるようにしておく。

4415 \let\bxjs@polyglossia@options\relax}%

4416 \fi

### ■Babel について X<sub>F</sub>T<sub>F</sub>X 以外の場合。

※ Pandoc 2.6 版において、LuaT<sub>E</sub>X で用いられる多言語パッケージが Polyglossia から Babel に変更された。

4417 \if x\jsEngine\else

パッケージの読込を検知するため読込済のマークを付けて dupload の処理を仕込む。

- $4418 \verb|\pandocSkipLoadPackage{babel}|$
- 4420 \bxjs@unset@dupload@proc{babel.sty}%
- $4421 \quad \verb|\ClassWarning\bxjs@clsname| \\$
- 4422 {Package babel is required}%

パッケージオプションに言語名が空の main= があるかを調べる。ある場合は lang=ja 対策 を実行する。

※\bxjs@babel@options には main= を除いたオプション列を格納する。

- 4423 \@tempswafalse \let\bxjs@babel@options\@empty
- 4424  $\def\bxjs@tmpb{main=}%$
- 4425 \@for\bxjs@tmpa:=#1\do{%
- 4426 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb \@tempswatrue
- 4427 \else \edef\bxjs@babel@options{\bxjs@babel@options,\bxjs@tmpa}%
- 4428 \fi}%
- 4429 \if@tempswa

```
4431
                              {Main language is invalid, so fallback\MessageBreak
                     4432
                               definitions will be employed}%
                             \bxjs@pandoc@polyglossia@ja
                     4433
                       ない場合は、本来の babel の処理を実行する。
                     4434
                           \else
                             \ClassWarning\bxjs@clsname
                     4435
                              {Main language is valid, \MessageBreak
                     4436
                               thus babel will be loaded}%
                     4437
                             \expandafter\let\csname ver@babel.sty\endcsname\@undefined
                     4438
                             \RequirePackage[#1]{babel}[]%
                     4439
                          \fi}
                     4440
                         プレアンブルで babel の読込が指示されなかった場合、読込済マークを外す。
                     4441 \g@addto@macro\bxjs@endpreamble@hook{%
                           \ifx\bxjs@babel@options\relax
                     4443
                             \expandafter\let\csname ver@babel.sty\endcsname\@undefined
                     4444
\bxjs@pandoc@babel@ja Pandoc 側で lang=ja が指定されていた場合の処理。
                     4445 \@onlypreamble\bxjs@pandoc@babel@ja
                     4446 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjs@pandoc@babel@ja}{\%}}
                           \expandafter\let\csname ver@babel.sty\endcsname\@undefined
                           \edef\bxjs@next{%
                     4448
                     4449
                             \noexpand\RequirePackage[\bxjs@babel@options,english]{babel}[]%
                          }\bxjs@next
                     4450
                     4451
                           \if j\jsEngine
                             \RequirePackage[main=japanese]{pxbabel}[]%
                     4453
                             \RequirePackage{bxorigcapt}[]%
                     4454
                     4455
                          \fi}
                        lang 対策はこれで終わり。
                     4456 \fi
```

\ClassWarning\bxjs@clsname

### E.3 geometry 変数

4430

geometry を "再度読み込んだ"場合に、そのパラメタで \setpagelayout\* が呼ばれるようにする。

```
4457 \bxjs@set@dupload@proc{geometry.sty}{% 4458 \setpagelayout*{#1}}
```

### E.4 CJKmainfont 変数

LuaT<sub>E</sub>X(+ LuaTeX-ja)の場合に CJKmainfont 変数が指定された場合は \setmainjfont の指定にまわす。

```
4459 \if l\jsEngine
4460 \pandocSkipLoadPackage{xeCJK}
4461 \providecommand*{\setCJKmainfont}{\setmainjfont}
4462 \fi

ムニャムニャムニャ。
4463 \if x\jsEngine
4464 \expandafter\g@addto@macro\csname opt@xeCJK.sty\endcsname{%
4465 ,space}
4466 \fi
```

### E.5 paragraph のマーク

BXJS クラスでは \paragraph の見出しの前に \jsParagraphMark で指定したマークが付加され、既定ではこれは "■"である。しかし、この規定は \paragraph が本来のレイアウトを保っている、すなわち「行内見出しである」「節番号が付かない」ことが前提になっていると考えられる。Pandoc はこの規定を変更することがある(特に既定で \paragraphを別行見出しに再定義する)ため、変更された場合は \jsParagraphMark の既定値を空にする。

Pandoc がプレアンブルで行う再定義の結果を調べるため、begin-document フックを利用する。

```
4467 \verb|\g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%}|
```

4468 \Otempswafalse

まず、マーク変更が必要かを調べる。\oldparagraph という制御綴が定義済の場合、Pandocが \paragraph の様式を変更したということなので、マーク変更が必要である。

```
4469 \ifx\oldparagraph\@undefined\else
```

4470 \@tempswatrue

4471 \fi

\paragraph が番号付きの場合は、マーク変更が必要である。

```
4472 \ifnum\c@secnumdepth>3
```

4473 \@tempswatrue

4474 \fi

「マーク変更が必要」である場合、\jsParagraphMark が既定値のままであれば空に変更する。

```
4475 \if@tempswa\ifx\jsParagraphMark\bxjs@org@paragraph@mark
```

4476 \let\jsParagraphMark\@empty

4477 \fi\fi}

### E.6 全角空白文字

```
4478 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi>\z@

4479 \catcode"3000=\active

4480 \begingroup \catcode`\!=7

4481 \protected\gdef!!!!3000{\zwspace}
```

```
4482
      \endgroup
4483 \verb|\else| ifx\DeclareUnicodeCharacter\\ @undefined\else
     \DeclareUnicodeCharacter{3000}{\bxjs@zsp@char}
4485 \bxjs@protected\def\bxjs@zsp@char{\zwspace}
4486 \fi\fi
```

■hyperref 対策 hyperref の unicode オプションの固定を行う。

```
4487 \if j\jsEngine
      \bxjs@fix@hyperref@unicode{false}
4489 \ensuremath{\setminus} \texttt{else}
4490
       \bxjs@fix@hyperref@unicode{true}
4491 \fi
```

#### E.7 完了

おしまい。

4492 %</pandoc>

和文ドライバ実装はここまで。

4493 %</drv>

#### 補助パッケージー覧 🕸 付録F

BXJS クラスの機能を実現するために用意されたものだが、他のクラスの文書で読み込ん で利用することもできる。

• bxjscompat:  $\Delta = \tau \Delta = \tau \Delta = \tau$ .

• bxjscjkcat: modern ドライバ用の和文カテゴリを適用する。

• bxjspandoc: Pandoc 用のナニカ。

4494 %<\*anc>

# 補助パッケージ:bxjscompat 🕾

ムニャムニャムニャ……。

### G.1 準備

```
4495 %<*compat>
            4496 \def\bxac@pkgname{bxjscompat}
\bxjx@engine エンジンの種別。
            4497 \let\bxac@engine=n
            4498 \ensuremath{\mbox{\sc 0do#1#2}}\
                  \edef\bxac@tmpa{\string#1}%
                  \edef\bxac@tmpb{\meaning#1}%
            4500
                  \ifx\bxac@tmpa\bxac@tmpb #2\fi}
```

```
4502 \bxac@do\XeTeXversion{\let\bxac@engine=x}
4503 \bxac@do\luatexversion{\let\bxac@engine=1}

\bxac@delayed@if@bxjs もし BXJS クラスの読込中でこのパッケージが読み込まれているならば、BXJS のクラスの終わりまで実行を遅延する。

4504 \ifx\jsAtEndOfClass\@undefined
4505 \let\bxac@delayed@if@bxjs\@firstofone
4506 \else \let\bxac@delayed@if@bxjs\jsAtEndOfClass
4507 \fi
```

# G.2 X<sub>T</sub>T<sub>E</sub>X 部分

 $4509 \verb|\lambda| 1509 \end{LuaTeXBehavior} $$ 4510 \end{LuaTeXBehavior} $$ 160 \end{L$ 

 $\verb|\RevokeOldLuaTeXBehavior| 4508 \verb|\newif\ifbxac@in@old@behavior| \\$ 

4511 \ifx x\bxac@engine

```
XFTFX 文字クラスのムニャムニャ。
4512 \@onlypreamble\bxac@adjust@charclass
4513 \bxac@delayed@if@bxjs{%
      \@ifpackageloaded{xeCJK}{}{\%else
4514
        \ifx\xe@alloc@intercharclass\@undefined\else
4515
4516
             \ifnum\xe@alloc@intercharclass=\z@
4517
          \PackageInfo\bxac@pkgname
             {Setting up interchar class for CJK...\@gobble}%
4518
          \InputIfFileExists{load-unicode-xetex-classes.tex}{%
            \xe@alloc@intercharclass=3
4520
          }{%else
4521
4522
            \PackageWarning\bxac@pkgname
              {Cannot find file 'load-unicode-xetex-classes.tex'%
4523
                \@gobble}%
4524
          }%
4525
        \fi\fi
4526
        \ifnum\XeTeXcharclass"3041=\z@
4527
4528
          \PackageInfo\bxac@pkgname
4529
             {Adjusting interchar class for CJK...\@gobble}%
4530
          \ensuremath{\texttt{Qfor\bxac@x:=\{\%\ }}
            3041,3043,3045,3047,3049,3063,3083,3085,3087,308E,%
4531
             3095,3096,30A1,30A3,30A5,30A7,30A9,30C3,30E3,30E5,%
4532
            30E7,30EE,30F5,30F6,30FC,31F0,31F1,31F2,31F3,31F4,%
4533
4534
            31F5,31F6,31F7,31F8,31F9,31FA,31FB,31FC,31FD,31FE,%
4535
          }\do{\XeTeXcharclass"\bxac@x=\@ne}%
4536
4537
        \fi
     }%
4538
4539 }
```

```
4540 \fi
                                                         G.3 LuaTFX 部分
                                                     4541 \ifx 1\bxac@engine
                                                              ムニャムニャ。
                                                     4542 \unless\ifnum\luatexversion<80 \ifnum\luatexversion<85
                                                                   \chardef\pdftexversion=200
                                                                   \def\pdftexrevision{0}
                                                                   \let\pdftexbanner\luatexbanner
                                                     4545
                                                     4546 \fi\fi
\ImposeOldLuaTeXBehavior ムニャムニャ。
\verb|\RevokeOldLuaTeXBehavior| 4547 \verb|\begingroup\expandafter\expandafter\expandafter| expandafter \verb|\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter| expandafter \verb|\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandafter\expandaft
                                                     4548 \exp \text{andafter} \ output mode \endcsname \relax \else
                                                     4549 \def\bxac@ob@list{%
                                                                   \do{\let}\pdfoutput{\outputmode}%
                                                     4550
                                                     4551
                                                                   \do{\let}\pdfpageheight{\pageheight}%
                                                     4552
                                                     4553
                                                                   \do{\protected\edef}\pdfhorigin{{\pdfvariable horigin}}%
                                                                   \do{\protected\edef}\pdfvorigin{{\pdfvariable vorigin}}}
                                                     4554
                                                     4555 \def\bxac@ob@do#1#2{\begingroup
                                                                   4557 \def\bxac@ob@do@a#1#2#3#4{\endgroup
                                                                   \ifbxac@in@old@behavior \let#1#3\relax #2#3#4\relax
                                                                   \ensuremath{\verb||left||} \textbf{lef#1} \textbf{undefined}
                                                     4559
                                                     4560
                                                     4561 \protected\def\ImposeOldLuaTeXBehavior{%
                                                                  \unless\ifbxac@in@old@behavior
                                                     4562
                                                                        \bxac@in@old@behaviortrue
                                                     4563
                                                     4564
                                                                       \let\do\bxac@ob@do \bxac@ob@list
                                                                  \fi}
                                                     4565
                                                     4566 \protected\def\RevokeOldLuaTeXBehavior{%
                                                                   \ifbxac@in@old@behavior
                                                     4567
                                                                        \bxac@in@old@behaviorfalse
                                                     4568
                                                                       \let\do\bxac@ob@do \bxac@ob@list
                                                     4569
                                                                  \fi}
                                                     4570
                                                     4571 \fi
                                                              漢字および完成形ハングルのカテゴリコードのムニャムニャ。
                                                     4572
                                                                  \ifnum\luatexversion>64 \directlua{
                                                     4573
                                                                       local function range(cs, ce, cc, ff)
                                                                            if ff or not tex.getcatcode(cs) == cc then
                                                     4574
                                                                                local setcc = tex.setcatcode
                                                     4575
                                                     4576
                                                                                for c = cs, ce do setcc(c, cc) end
                                                     4577
                                                                            end
                                                                        end
                                                     4578
                                                                       range(0x3400, 0x4DB5, 11, false)
                                                     4579
                                                                       range(0x4DB5, 0x4DBF, 11, true)
                                                     4580
```

以上。

```
range(0x4E00, 0x9FCC, 11, false)
4581
4582
        range(0x9FCD, 0x9FFF, 11, true)
4583
        range(0xAC00, 0xD7A3, 11, false)
        range(0x20000, 0x2A6D6, 11, false)
4584
        range(0x2A6D7, 0x2A6FF, 11, true)
4585
        range(0x2A700, 0x2B734, 11, false)
4586
        range(0x2B735, 0x2B73F, 11, true)
4587
        range(0x2B740, 0x2B81D, 11, false)
        range(0x2B81E, 0x2B81F, 11, true)
4589
        range(0x2B820, 0x2CEA1, 11, false)
4590
        range(0x2CEA2, 0x2FFFD, 11, true)
4591
     }\fi
4592
    以上。
4593 \fi
```

### G.4 完了

おしまい。

4594 %</compat>

### 付録 H 補助パッケージ:bxjscjkcat 🚳

modern ドライバ用の和文カテゴリを適用する。

### H.1 準備

```
4595 %<*cjkcat>
           4596 \def\bxjx@pkgname{bxjscjkcat}
           4597 \newcount\bxjx@cnta
           4598 \@onlypreamble\bxjx@tmpdo
           4599 \@onlypreamble\bxjx@tmpdo@a
           4600 \@onlypreamble\bxjx@tmpdo@b
\bxjx@engine エンジンの種別。
           4601 \let\bxjx@engine=n
           \edef\bxjx@tmpa{\string#1}%
           4603
                \edef\bxjx@tmpb{\meaning#1}%
                \ifx\bxjx@tmpa\bxjx@tmpb #2\fi}
           4605
           4607 \bxjx@tmpdo\enablecjktoken{\let\bxjx@engine=u}
           4608 \bxjx@tmpdo\XeTeXversion{\let\bxjx@engine=x}
           4609 \bxjx@tmpdo\pdftexversion{\let\bxjx@engine=p}
           4610 \bxjx@tmpdo\luatexversion{\let\bxjx@engine=l}
```

それぞれのエンジンで、前提となる日本語処理パッケージが実際に読み込まれているかを 検査する。

```
4611 \def\bxjx@tmpdo#1#2{%
4612
                                \if#1\bxjx@engine
                                            \@ifpackageloaded{#2}{}{%else
4613
                                                        \PackageError\bxjx@pkgname
4614
4615
                                                               {Package '#2' must be loaded}%
                                                              {Package loading is aborted.\MessageBreak\@ehc}%
4616
                                                        \endinput}
4617
4618
                                 fi
4619 \bxjx@tmpdo{p}{bxcjkjatype}
4620 \txive 0 \txiv
4621 \bxjx@tmpdo{l}{luatexja}
                     古い LATFX の場合、\TextOrMath は fixltx2e パッケージで提供される。
4622 \text{TextOrMath}\
4623 \RequirePackage{fixltx2e}
4624 \fi
```

### H.2 和文カテゴリコードの設定

upIAT<sub>E</sub>X の場合、和文カテゴリコードの設定を LuaT<sub>E</sub>X-ja と(ほぼ)等価なものに変更する。

```
※ LuaT<sub>F</sub>X-ja との相違点: A830、A960、1B000。
4625 \if u\bxjx@engine
4626 \@for\bxjx@tmpa:={%
4627 0080,0100,0180,0250,02B0,0300,0500,0530,0590,0600,%
4628 0700,0750,0780,0700,0800,0840,0860,08A0,0900,0980,%
4629 OAOO, OA8O, OBOO, OB8O, OCOO, OC8O, ODOO, OD8O, OEOO, OE8O, %
4630 OFOO, 1000, 10A0, 1200, 1380, 13A0, 1400, 1680, 16A0, 1700, %
4631 1720,1740,1760,1780,1800,18B0,1900,1950,1980,19E0,%
4632 1A00, 1A20, 1AB0, 1B00, 1B80, 1BC0, 1C00, 1C50, 1C80, 1CC0, %
4633 1CD0, 1D00, 1D80, 1DC0, 1E00, 1F00, 2440, 27C0, 27F0, 2800, %
4634 2A00, 2C00, 2C60, 2C80, 2D00, 2D30, 2D80, 2DE0, 2E00, 4DC0, %
4635 A4D0, A500, A640, A6A0, A700, A720, A800, A830, A840, A880, %
4636 A8EO, A900, A930, A980, A9EO, AA00, AA60, AA80, AAEO, AB00, %
4637 AB30, AB70, ABC0, D800, DB80, DC00, E000, FB00, FB50, FE00, %
4638 FE70, FFF0, %
4639\ 10000, 10080, 10100, 10140, 10190, 101D0, 10280, 102A0, \%
4640 102E0,10300,10330,10350,10380,103A0,10400,10450,%
4641 10480,104B0,10500,10530,10600,10800,10840,10860,%
4642 10880,108E0,10900,10920,10980,109A0,10A00,10A60,%
4643 10A80,10AC0,10B00,10B40,10B60,10B80,10C00,10C80,%
4644 10E60,11000,11080,110D0,11100,11150,11180,111E0,%
4645 11200,11280,112B0,11300,11400,11480,11580,11600,%
4646 11660,11680,11700,118A0,11A00,11A50,11AC0,11C00,%
4647 11C70,11D00,12000,12400,12480,13000,14400,16800,%
4648 16A40,16AD0,16B00,16F00,1BC00,1BCA0,1D000,1D100,%
4649 1D200,1D300,1D360,1D400,1D800,1E000,1E800,1E900,%
4650 1EE00, 1F000, 1F030, 1F0A0, 1F300, 1F600, 1F650, 1F680, %
```

```
4651 1F700,1F780,1F800,1F900,E0000,E0100,F0000,100000,%
4652 00C0%
4653 }\do{%
4654 \@tempcnta="\bxjx@tmpa\relax
4655 \@tempcntb\@tempcnta \advance\@tempcntb\m@ne
4656 \chardef\bxjx@tmpb\kcatcode\@tempcntb
4657 \kcatcode\@tempcnta=15 \kcatcode\@tempcntb\bxjx@tmpb}
4658 \fi
```

### H.3 ギリシャ・キリル文字の扱い

「特定 CJK 曖昧文字」について、和文・欧文扱いを制御できるようにする。ここで「特定 CJK 曖昧文字」とは以下に該当する文字の集合を指す:

- Unicode と JIS X 0213 に共通して含まれるギリシャ文字・キリル文字。
- Latin-1 の上位部分と JIS X 0208 に共通して含まれる文字 (LuaT<sub>E</sub>X-ja の定める "範囲 8")。

\bxjx@grkcyr@list 「特定 CJK 曖昧文字」に関する情報をもつ \do-リスト。各項目の形式は以下の通り: \do{\Unicode 符号値}}{\対象 fontenc\}}{\( テキスト LICR\)}{\( 数式 LICR\)}
※数式で使わない文字は \( 数式 LICR\) を空にする。

 $4667 \do{0397}{LGR}{\text{LExtEta}{H}}$ % GR. C. L. ETA  $4668 \do{0398}{LGR}{\text{Theta}}$ % GR. C. L. THETA % GR. C. L. IOTA  $4669 \do{0399}{LGR}{\text{textIota}{I}}%$ % GR. C. L. KAPPA  $4670 \do{039A}{LGR}{\text{k}}%$  $4671 \do{039B}{LGR}{\text{Lambda}}{\text{Lambda}}$ % GR. C. L. LAMDA  $4672 \do{039C}{LGR}{\text{LCR}}{\text{M}}%$ % GR. C. L. MU  $4673 \do{039D}{LGR}{\text{LCR}}{\text{N}}%$ % GR. C. L. NU % GR. C. L. XI  $4674 \do{039E}{LGR}{\text{xtXi}}{Xi}$ % GR. C. L. OMICRON 4675 \do{039F}{LGR}{\textOmicron}{0}% 4676 \do{03A0}{LGR}{\textPi}{\Pi}% % GR. C. L. PI  $4677 \do{03A1}{LGR}{\text{textRho}}{P}\%$ % GR. C. L. RHO 4678 \do{03A3}{LGR}{\textSigma}{\Sigma}% % GR. C. L. SIGMA  $4679 \do{03A4}{LGR}{\text{textTau}}{T}%$ % GR. C. L. TAU 

```
4685 \do{03B1}{LGR}{\text{xtalpha}}{\alpha}
                                                                                                             % GR. S. L. ALPHA
4686 \do{03B2}{LGR}{\text{textbeta}}{\text{beta}}
                                                                                                             % GR. S. L. BETA
4687 \do{03B3}{LGR}{\text{textgamma}}{\text{gamma}}%
                                                                                                             % GR. S. L. GAMMA
4688 \do{03B4}{LGR}{\text{textdelta}}{\delta}%
                                                                                                             % GR. S. L. DELTA
4689 \do{03B5}{LGR}{\textepsilon}{\epsilon}%
                                                                                                             % GR. S. L. EPSILON
                                                                                                             % GR. S. L. ZETA
4690 \do{03B6}{LGR}{\text{xtzeta}}{\text{zeta}}
4691 \do{03B7}{LGR}{\text{texteta}}{\text{ca}}
                                                                                                             % GR. S. L. ETA
4692 \do{03B8}{LGR}{\text{texttheta}}{\text{theta}},
                                                                                                             % GR. S. L. THETA
                                                                                                             % GR. S. L. IOTA
4693 \do{03B9}{LGR}{\text{textiota}}{\iota}%
                                                                                                             % GR. S. L. KAPPA
4694 \do{03BA}{LGR}{\text{kappa}}%
4695 \do{03BB}{LGR}{\text{lambda}}{\lambda}%
                                                                                                             % GR. S. L. LAMDA
4696 \do{03BC}{LGR}{\text{mu}}%
                                                                                                             % GR. S. L. MU
4697 \do{03BD}{LGR}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text{nu}}{\text
                                                                                                             % GR. S. L. NU
4698 \do{03BE}{LGR}{\text{xi}}%
                                                                                                             % GR. S. L. XI
4699 \do{03BF}{LGR}{\text{textomicron}}{0}%
                                                                                                             % GR. S. L. OMICRON
4700 \do{03C0}{LGR}{\text{textpi}}{\pi}
                                                                                                             % GR. S. L. PI
                                                                                                             % GR. S. L. RHO
4701 \do{03C1}{LGR}{\textrho}{\rho}%
4702 \do{03C2}{LGR}{\textvarsigma}{\varsigma}% % GR. S. L. FINAL SIGMA
4703 \do{03C3}{LGR}{\text{textsigma}}{\text{sigma}}
                                                                                                             % GR. S. L. SIGMA
4704 \do{03C4}{LGR}{\text{texttau}}{\text{tau}}%
                                                                                                             % GR. S. L. TAU
4705 \do{03C5}{LGR}{\text{\constraint}}
                                                                                                             % GR. S. L. UPSILON
4706 \do{03C6}{LGR}{\text{textphi}}{\phi}
                                                                                                             % GR. S. L. PHI
4707 \do{03C7}{LGR}{\text{chi}}%
                                                                                                             % GR. S. L. CHI
                                                                                                             % GR. S. L. PSI
4708 \do{03C8}{LGR}{\text{textpsi}}{\psi}%
4709 \do{03C9}{LGR}{\text{cmega}}{\text{cmega}}%
                                                                                                             % GR. S. L. OMEGA
4710 \do{0401}{T2A}{\CYRYO}{}%
                                                                                                             % CY. C. L. IO
                                                                                                             % CY. C. L. A
4711 \do{0410}{T2A}{\CYRA}{}%
4712 \do{0411}{T2A}{\CYRB}{}%
                                                                                                             % CY. C. L. BE
4713 \do{0412}{T2A}{\CYRV}{}%
                                                                                                             % CY. C. L. VE
                                                                                                             % CY. C. L. GHE
4714 \do{0413}{T2A}{\CYRG}{}%
                                                                                                             % CY. C. L. DE
4715 \do{0414}{T2A}{\CYRD}{}%
4716 \do{0415}{T2A}{\CYRE}{}%
                                                                                                             % CY. C. L. IE
4717 \do{0416}{T2A}{\CYRZH}{}%
                                                                                                             % CY. C. L. ZHE
4718 \do{0417}{T2A}{\CYRZ}{}%
                                                                                                             % CY. C. L. ZE
                                                                                                             % CY. C. L. I
4719 \do{0418}{T2A}{\CYRI}{}%
                                                                                                             % CY. C. L. SHORT I
4720 \do{0419}{T2A}{\CYRISHRT}{}%
                                                                                                             % CY. C. L. KA
4721 \do{041A}{T2A}{\CYRK}{}%
                                                                                                             % CY. C. L. EL
4722 \do{041B}{T2A}{\CYRL}{}%
4723 \do{041C}{T2A}{\CYRM}{}%
                                                                                                             % CY. C. L. EM
                                                                                                             % CY. C. L. EN
4724 \do{041D}{T2A}{\CYRN}{}%
4725 \do{041E}{T2A}{\CYRO}{}%
                                                                                                             % CY. C. L. O
4726 \do{041F}{T2A}{\CYRP}{}%
                                                                                                             % CY. C. L. PE
                                                                                                             % CY. C. L. ER
4727 \do{0420}{T2A}{\CYRR}{}%
4728 \do{0421}{T2A}{\CYRS}{}%
                                                                                                             % CY. C. L. ES
4729 \do{0422}{T2A}{\CYRT}{}%
                                                                                                             % CY. C. L. TE
4730 \do{0423}{T2A}{\CYRU}{}%
                                                                                                             % CY. C. L. U
4731 \do{0424}{T2A}{\CYRF}{}%
                                                                                                             % CY. C. L. EF
                                                                                                             % CY. C. L. HA
4732 \do{0425}{T2A}{\CYRH}{}%
4733 \do{0426}{T2A}{\CYRC}{}%
                                                                                                             % CY. C. L. TSE
```

```
% CY. C. L. CHE
4734 \do{0427}{T2A}{\CYRCH}{}%
4735 \do{0428}{T2A}{\CYRSH}{}%
                                                % CY. C. L. SHA
4736 \do{0429}{T2A}{\CYRSHCH}{}%
                                                % CY. C. L. SHCHA
4737 \do{042A}{T2A}{\CYRHRDSN}{}%
                                                % CY. C. L. HARD SIGN
                                                % CY. C. L. YERU
4738 \do{042B}{T2A}{\CYRERY}{}%
                                                % CY. C. L. SOFT SIGN
4739 \do{042C}{T2A}{\CYRSFTSN}{}%
                                                % CY. C. L. E
4740 \do{042D}{T2A}{\CYREREV}{}%
4741 \do{042E}{T2A}{\CYRYU}{}%
                                                % CY. C. L. YU
                                                % CY. C. L. YA
4742 \do{042F}{T2A}{\CYRYA}{}%
                                                % CY. S. L. A
4743 \do{0430}{T2A}{\cyra}{}%
                                                % CY. S. L. BE
4744 \do{0431}{T2A}{\cyrb}{}%
                                                % CY. S. L. VE
4745 \do{0432}{T2A}{\cyrv}{}%
                                                % CY. S. L. GHE
4746 \do{0433}{T2A}{\cyrg}{}%
                                                % CY. S. L. DE
4747 \do{0434}{T2A}{\cyrd}{}%
4748 \do{0435}{T2A}{\cyre}{}%
                                                % CY. S. L. IE
4749 \do{0436}{T2A}{\cyrzh}{}%
                                                % CY. S. L. ZHE
                                                % CY. S. L. ZE
4750 \do{0437}{T2A}{\cyrz}{}%
4751 \do{0438}{T2A}{\cyri}{}%
                                                % CY. S. L. I
4752 \do{0439}{T2A}{\cyrishrt}{}%
                                                % CY. S. L. SHORT I
                                                % CY. S. L. KA
4753 \do{043A}{T2A}{\cyrk}{}%
4754 \do{043B}{T2A}{\cyrl}{}%
                                                % CY. S. L. EL
                                                % CY. S. L. EM
4755 \do{043C}{T2A}{\cyrm}{}%
4756 \do{043D}{T2A}{\cyrn}{}%
                                                % CY. S. L. EN
                                                % CY. S. L. O
4757 \do{043E}{T2A}{\cyro}{}%
                                                % CY. S. L. PE
4758 \do{043F}{T2A}{\cyrp}{}%
                                                % CY. S. L. ER
4759 \do{0440}{T2A}{\cyrr}{}%
                                                % CY. S. L. ES
4760 \do{0441}{T2A}{\cyrs}{}%
4761 \do{0442}{T2A}{\cyrt}{}%
                                                % CY. S. L. TE
4762 \do{0443}{T2A}{\cyru}{}%
                                                % CY. S. L. U
                                                % CY. S. L. EF
4763 \do{0444}{T2A}{\cyrf}{}%
                                                % CY. S. L. HA
4764 \do{0445}{T2A}{\cyrh}{}%
4765 \do{0446}{T2A}{\cyrc}{}%
                                                % CY. S. L. TSE
                                                % CY. S. L. CHE
4766 \do{0447}{T2A}{\cyrch}{}%
4767 \do{0448}{T2A}{\cyrsh}{}%
                                                % CY. S. L. SHA
                                                % CY. S. L. SHCHA
4768 \do{0449}{T2A}{\cyrshch}{}%
4769 \do{044A}{T2A}{\cyrhrdsn}{}%
                                                % CY. S. L. HARD SIGN
                                                % CY. S. L. YERU
4770 \do{044B}{T2A}{\cyrery}{}%
                                                % CY. S. L. SOFT SIGN
4771 \do{044C}{T2A}{\cyrsftsn}{}%
                                                % CY. S. L. E
4772 \do{044D}{T2A}{\cyrerev}{}%
                                                % CY. S. L. YU
4773 \do{044E}{T2A}{\cyryu}{}%
4774 \do{044F}{T2A}{\cyrya}{}%
                                                % CY. S. L. YA
4775 \do{0451}{T2A}{\cyryo}{}%
                                                % CY. S. L. IO
4776\do{00A7}{TS1}{\text{\mathsection}}\% SECTION SYMBOL
4777 \do{00A8}{TS1}{\text{textasciidieresis}}%
                                                 % DIAERESIS
4778 \do{00B0}{TS1}{\textdegree}{\mathdegree}% % DEGREE SIGN
4779 \do{00B1}{TS1}{\text{textpm}}{\pm}%
                                                % PLUS-MINUS SIGN
4780 \do{00B4}{TS1}{\text{textasciiacute}}}
                                                % ACUTE ACCENT
4781 \do{00B6}{TS1}{\text{\colored}}{\text{\colored}}  PILCROW SIGN
4782 \do{00D7}{TS1}{\text{texttimes}}{\text{times}}
                                                % MULTIPLICATION SIGN
```

```
4783 \do{00F7}{TS1}{\textdiv}{\div}% % DIVISION SIGN 4784 }
```

\mathdegree 面倒なので補っておく。

4785 \providecommand\*{\mathdegree}{{}^{\circ}}

\ifbxjx@gcc@cjk 〔スイッチ〕「特定 CJK 曖昧文字」を和文扱いにするか。

 $4786 \neq 150$ 

\greekasCJK [公開命令]「特定 CJK 曖昧文字」を和文扱いにする。

4787 \newcommand\*\greekasCJK{%

4788 \bxjx@gcc@cjktrue}

\nogreekasCJK 〔公開命令〕「特定 CJK 曖昧文字」を欧文扱いにする。

4789 \newcommand\*\nogreekasCJK{%

4790 \bxjx@gcc@cjkfalse}

\bxjx@fake@grk \bxjx@fake@grk{(出力文字)}{(基準文字)}: ラテン文字で代用される数式ギリシャ文字の出力を行う。(基準文字) (mathchardefの制御綴)の数式クラスと数式ファミリを引き継いで、(出力文字) (ASCII 文字トークン)の文字コードの数式文字を出力する。例えば、\Piの意味が \mathchar"7005 である場合、\bxjx@fake@grk{B}{\Pi} は \mathchar"7042を実行する。

※フォントパッケージ使用時の再定義を考慮して、〈基準文字〉が mathchardef であるかを 検査し、そうでない場合はフォールバックとして単に〈出力文字〉を実行する。

4791 \def\bxjx@tmpdo#1\relax{%

4792 \def\bxjx@fake@grk##1##2{%

 $\label{eq:condition} $$ \operatorname{\ensuremath{}} \exp \operatorname{\ens$ 

4794 \def\bxjx@fake@grk@a##1#1##2\@nil##3##4{%

4795 \ifx\\##1\\%

4796 \bxjx@cnta##4\divide\bxjx@cnta\@cclvi

4797 \multiply\bxjx@cnta\@cclvi \advance\bxjx@cnta`##3\relax

4798 \mathchar\bxjx@cnta

4799 \else ##3\fi}

### ■pdfT<sub>F</sub>X・upT<sub>F</sub>X の場合

• \[bxjx@KC/〈符号値〉]: その文字が「特定曖昧 CJK 文字」に該当する場合に定義済 になる。

まず inputenc を読み込んで入力エンコーディングを utf8 に変更する。

※「既定 UTF-8 化」後の IATEX においても、必ず「inputenc が明示的に読み込まれた」 状態になる。

 $4802 \verb|\difpackageloaded{inputenc}{}{\wedge loaded{inputenc}}{\wedge}$ 

 $4803 \qquad \verb|\RequirePackage[utf8]{inputenc}| \\$ 

```
4804 \def\bxjx@tmpa{utf8}
4805 \ifx\bxjx@tmpa\inputencdoingname
          \PackageWarningNoLine\bxjx@pkgname
              {Input encoding changed to utf8}%
4807
           \inputencoding{utf8}%
4808
4809 \fi
       upTrX の場合に、「特定曖昧 CJK 文字」を含むブロックの和文カテゴリコードを変更
   する。
4810 \if u\bxjx@engine
4811 \kcatcode"0370=15
4812 \kcatcode"0400=15
4813 \kcatcode"0500=15
4814 \fi
   各文字について \DeclareUnicodeCharacter を実行する。
4815 \def\bxjx@tmpdo#1{%
           \@tempcnta="#1\relax
           \expandafter\bxjx@tmpdo@a\csname bxjx@KC/\the\@tempcnta\endcsname{#1}}
4818 \def\bxjx@tmpdo@a#1#2#3#4#5{%}
   引数 = \[ bx jx@KC/(符号値) \] \{(符号値) \} \{(fontenc)\} \{(LICR)\} \} \{(数式 LICR)\} \}
       "数式中の動作"を決定する。(数式 LICR) が空(数式非対応) なら警告を出す。
          \ifx\\#5\\%
4819
                \def\bxjx@tmpa{\@inmathwarn#4}%
4820
   〈数式 LICR〉 が英字である場合は \bxjx@fake@grk で出力する。大文字なら \Pi、小文字
   なら \pi を基準文字にする。
          \else\ifcat A\noexpand#5%
                \edef\bxjx@tmpa{\noexpand\bxjx@fake@grk{#5}%
                    {\inv (\inv (\in
4823
   それ以外は〈数式 LICR〉をそのまま実行する。
4824
           \else \def\bxjx@tmpa{#5}%
           \fi\fi
4825
           \def\bxjx@tmpb{\bxjx@tmpdo@b{#1}{#2}{#3}{#4}}%
4826
           \expandafter\bxjx@tmpb\expandafter{\bxjx@tmpa}}
   以降はエンジン種別で分岐する。upTeX の場合。
4828 \if u\bxjx@engine
4829 \def\bxjx@tmpdo@b#1#2#3#4#5{%
   引数 = \[bxjx@KC/〈符号値〉]{〈符号値〉}{〈fontenc〉}{〈LICR〉}{〈数式中の動作〉}
       当該の Unicode 文字の動作は「テキストでは (LICR)、数式では (数式中の動作)」となる。
   LICR は現在エンコーディングで有効な定義がある場合はそれが実行されるはずである。(つ
    まり、現在が LGR である場合はギリシャ文字は常に欧文扱いになる。)それ以外の場合は
   LICR を \bxjx@ja@or@not に帰着させる。この際に、和文用の定義として当該の kchardef
   を使用し、その制御綴として \[bxjx@KC/...] を流用している。
```

4830 \kchardef#1=\@tempcnta

- 4832 \DeclareUnicodeCharacter{#2}{\TextOrMath{#4}{#5}}}

 $pdfT_{E}X$  の場合も処理はほとんど同じ。ただし、和文用の定義として  $\UTF\{\langle \text{符号値} \rangle\}$  を使う  $\UTF\{ \text{ bxcjkjatype } \text{の命令} \}$  、 $\[\text{bxjx@KC}/\dots]$  は使わないが定義済にする必要がある。

- 4833 \else\if p\bxjx@engine
- 4834 \def\bxjx@tmpdo@b#1#2#3#4#5{%
- 4835 \mathchardef#1=\@tempcnta
- 4837 \DeclareUnicodeCharacter{#2}{\TextOrMath{#4}{#5}}}
- 4838 \fi\fi

以上の処理を「特定 CJK 曖昧文字」の各々に適用する。

4839 \let\do\bxjx@tmpdo \bxjx@grkcyr@list

\bxjx@DeclareUnicodeCharacter \bxjx@DeclareUnicodeCharacter を改変して、「特定 CJK 曖昧文字」の場合に再定義を 抑止したもの。

- $4840 \verb|\colored]{Conlypreamble\bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter}$
- 4841 \let\bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter\DeclareUnicodeCharacter
- $4842 \verb|\donlypreamble\bxjx@DeclareUnicodeCharacter|$
- 4843 \def\bxjx@DeclareUnicodeCharacter#1#2{%
- 4844 \count@="#1\relax
- 4845 \expandafter\ifx\csname bxjx@KC/\the\count@\endcsname\relax
- 4846 \bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter{#1}{#2}%
- 4847 \else
- 4848 \wlog{\space\space skipped defining Unicode char U+#1}%
- 4849 \fi}

\bxjx@ja@or@not \bxjx@ja@or@not{\和文用定義\}{\対象 fontenc\}}{\LICR\}: \[no]greekasCJK の状態に応じて和文または欧文で文字を出力する。

 $4850 \ensuremath{\mbox{def\bxjx@ja@or@not#1#2#3{\%}}$ 

\greekasCJK の場合は、無条件に 〈和文用定義〉 を実行する。

4851 \ifbxjx@gcc@cjk #1%

\nogreekasCJK の場合は、対象のエンコーディングに変更して LICR を実行するが、その エンコーディングが未定義の場合は(フォールバックとして)和文用定義を使う。

- 4852 \else\expandafter\ifx\csname T@#2\endcsname\relax #1%
- $4853 \quad \texttt{\lose \loseTextSymbol{#2}{\#3}\%}$
- 4854 \fi\fi}

\DeclareFontEncoding@ \DeclareFontEncoding@ にパッチを当てて、\DeclareFontEncoding の実行中だけ改変 後の \DeclareUnicodeCharacter が使われるようにする。

- 4855 \begingroup
- $4856 \verb+\toks@expandafter{\DeclareFontEncoding@{#1}{#2}{#3}}$
- $4857 \texttt{\next{\def}noexpand\DeclareFontEncoding@##1##2##3{\%}}$
- 4858 \noexpand\bxjx@swap@DUC@cmd
- 4859 \the\toks@
- 4860 \noexpand\bxjx@swap@DUC@cmd}}

```
4861 \endgroup\next
4862 \def\bxjx@swap@DUC@cmd{%
4863 \let\bxjx@tmpa\DeclareUnicodeCharacter
4864 \let\DeclareUnicodeCharacter\bxjx@DeclareUnicodeCharacter
4865 \let\bxjx@DeclareUnicodeCharacter\bxjx@tmpa
4866 \let\bxjx@tmpa\relax}
```

以上。

### ■X¬TFX・LuaTFX の場合

 $4867 \le \inf 0 if x\bxjx@engine1\fi\if 1\bxjx@engine1\fi>0$ 

各文字について、数式中の動作を定義する。

```
4868 \def\bxjx@tmpdo#1{%

4869 \bxjx@cnta="#1\relax

4870 \begingroup

4871 \lccode`~=\bxjx@cnta

4872 \lowercase{\endgroup

4873 \bxjx@tmpdo@a{~}}{#1}}

4874 \def\bxjx@tmpdo@a#1#2#3#4#5{%
```

〈数式 LICR〉が空なら何もしない。空でない場合、upIeTeX の場合と同じ方法で"数式中の動作"を決定し、当該の文字を math active にしてその動作を設定する。

```
\ifx\\#5\\\let\bxjx@tmpa\relax
4875
4876
      \else\ifcat A\noexpand#5%
        \edef\bxjx@tmpa{\noexpand\bxjx@fake@grk{#5}%
4877
4878
          {\ifnum\uccode`#5=`#5\noexpand\Pi\else\noexpand\pi\fi}}%
4879
      \else \def\bxjx@tmpa{#5}%
      \fi\fi
4880
      \ifx\bxjx@tmpa\relax\else
4881
        \mathcode\bxjx@cnta"8000 \let#1\bxjx@tmpa
4882
4883
```

「Unicode な数式」の設定が行われているかを(簡易的に)検査して、そうでない場合にの み、以上の処理を「特定 CJK 曖昧文字」の各々に適用する。

```
4884 \mathchardef\bxjx@tmpa="119
```

 $4885 \verb|\ifx\bxjx@tmpa\pi \let\do\bxjx@tmpdo \bxjx@grkcyr@list \fi$ 

次に、テキストにおいて「特定 CJK 曖昧文字」の扱いが  $\[ [no] \]$  greekasCJK で切り替わるようにする。

LuaTeX の場合は、LuaTeX-ja の jacharrange の設定を変更する。

※ "範囲 2" がギリシャ・キリル文字、"範囲 8" が Latin-1 の記号。

```
4886 \if l\bxjx@engine
```

- 4888 \bxjx@gcc@cjktrue
- 4889  $\t 1tjsetparameter{jacharrange={+2, +8}}}$
- 4891 \bxjx@gcc@cjkfalse
- 4892 \ltjsetparameter{jacharrange={-2, -8}}}

#### 4893 \fi

XeTeX の場合、xeCJK は XeTeX の文字クラス定義を参照しているので、対象文字の文字クラスを変更する。

```
4894 \if x\bxjx@engine
      \let\bxjx@gcc@cjk@list\@empty
      \def\do#1#2#3#4{%
4896
        \edef\bxjx@gcc@cjk@list{\bxjx@gcc@cjk@list
4897
4898
          \noexpand\XeTeXcharclass"#1\bxjx@cnta}}
     \bxjx@grkcyr@list
4899
      \protected\def\greekasCJK{%
4900
        \bxjx@gcc@cjktrue
4901
        \bxjx@cnta=\@ne \bxjx@gcc@cjk@list}
4902
      \protected\def\nogreekasCJK{%
4903
        \bxjx@gcc@cjkfalse
4904
4905
        \bxjx@cnta=\z@ \bxjx@gcc@cjk@list}
4906 \fi
   以上。
4907 \fi\fi
```

### H.4 初期設定

「特定 CJK 曖昧文字」を欧文扱いにする。 4908 \nogreekasCJK

### H.5 完了

おしまい。 4909 %</cjkcat>

## 付録I 補助パッケージ:bxjspandoc 🕾

Pandoc の IATEX 用標準テンプレートをより幸せに使うための設定。BXJS クラスの pandoc ドライバのコードの中の、"汎用的"に使える部分を切り出したもの。つまり現在の pandoc ドライバはこのパッケージを読みこむ。

%テンプレートの  $T_{EX}$  コードより前に読み込む必要があるため、専ら文書クラス内での読込に限られる。

### I.1 準備

4910 %<\*ancpandoc>
4911 %% このファイルは日本語文字を含みます.
4912 \def\bxjsp@pkgname{bxjscjkcat}

\bxjsp@engine エンジンの種別。

```
4913 \let\bxjsp@engine=n
4914 \@onlypreamble\bxjsp@do
4915 \def\bxjsp@do#1#2{%
4916 \edef\bxjsp@tmpa{\string#1}%
4917 \edef\bxjsp@tmpb{\meaning#1}%
4918 \ifx\bxjsp@tmpa\bxjsp@tmpb #2\fi}
4919 \bxjsp@do\kanjiskip{\let\bxjsp@engine=j}
4920 \bxjsp@do\XeTeXversion{\let\bxjsp@engine=x}
4921 \bxjsp@do\pdftexversion{\let\bxjsp@engine=p}
4922 \bxjsp@do\luatexversion{\let\bxjsp@engine=1}
```

### I.2 パッケージオプション

english オプションが指定されている場合、\ldots の調整を抑止する。

※つまり、「グローバルの english オプション」が指定されている場合も抑止の対象になる。BXJS クラスの英語モードを想定しているが、それ以外の場合でも、一般的な  $\LaTeX$  の習慣として、グローバルの english は「その文書の基底言語が英語である」ことを示す。

```
4923 \newif\ifbxjsp@english
4924 \DeclareOption{english}{\bxjsp@englishtrue}
オプション定義はおしまい。
```

1.3 パッケージ読込の阻止

4925 \ProcessOptions\*

\pandocSkipLoadFile \pandocSkipLoadFile{⟨ファイル名⟩}: 特定のファイルを(\@filewithoptions の処 理に関して)読込済であるとマークする。

```
4926 \@onlypreamble\pandocSkipLoadFile
4927 \newcommand*\pandocSkipLoadFile[1]{%
4928 \expandafter\bxjsp@skip@load@file@a\csname ver@#1\endcsname{#1}}
4929 \def\bxjsp@skip@load@file@a#1#2{%
4930 \ifx#1\relax
4931 \def#1{2001/01/01}%
4932 \PackageInfo\bxjsp@pkgname
4933 {File '#2' marked as loaded\@gobble}%
4934 \fi}
```

\pandocSkipLoadPackage \pandocSkipLoadPackage{⟨パッケージ名⟩}: \pandocSkipLoadFile の機能を用いて パッケージの読込を阻止する。

```
4935 \@onlypreamble\pandocSkipLoadPackage
4936 \newcommand*\pandocSkipLoadPackage[1]{%
4937 \pandocSkipLoadFile{#1.sty}}
```

### I.4 fixltx2e パッケージ

テンプレートでは fixltx2e パッケージを読み込むが、最近(2015 年版以降)の  $\LaTeX$  ではこれで警告が出る。これを抑止する。

LATFX カーネルが新しい場合は fixltx2e を読込済にする。

### 1.5 cmap パッケージ

エンジンが (u)pIFTEX のときに cmap パッケージが読み込まれるのを阻止する。(実際は警告が出るだけで無害であるが。)

4941 \if j\bxjsp@engine 4942 \pandocSkipLoadPackage{cmap} 4943 \fi

### I.6 microtype パッケージ

警告が多すぎなので消す。

エンジンが (u)pI $\not$ TEX のときに microtype パッケージが読み込まれるのを阻止し、さらにテンプレートで使われている命令を通すためにダミーの定義を行う。

※昔は standard ドライバでこの処理を行っていたが、元来は Pandoc 用の処理なので、1.5 版で pandoc に移動。

4947 \if j\bxjsp@engine

4948 \pandocSkipLoadPackage{microtype}

4949 \newcommand\*\UseMicrotypeSet[2][]{}

4950 \fi

### I.7 Unicode 文字変換対策

Pandoc で IATeX 形式に書き出す場合は、元データ中の一部の Unicode 文字を「IATeX の表記」に置き換える。その中には日本語文書で問題になるものが含まれる。

```
\cdots \rightarrow \texttt{\ } \texttt{\ }
```

日本語  $\LaTeX$  では「 $\LaTeX$  の表記」は欧文扱い、Unicode 文字は和文扱いとして使い分ける 習慣があるので、このような置換が行われるのは好ましくない。

これらの置換のうち、後の4つはPandocの--no-tex-ligatures オプションを指定すれば抑止できるが、「…」の置換を抑止する機能はないようである。そこで、「\ldots を『…』

に戻す」という処置を行う。

\pandocLdots Pandoc 用の \ldots の実装。非数式である場合は代わりに … を実行する。

※以前は「Pandoc が必ず \ldots{} の形で書き出す」ことを利用して後続に {} があるかで「元が … であるか」を判断していた。ところが、Pandoc 2.7 版で {} を必ずしも付けなくなったため、1.9f 版で非数式の \ldots を全て … に戻す動作に変更した。

- 4951 \DeclareRobustCommand{\pandocLdots}{%
- 4952 \relax\ifmmode \expandafter\bxjsp@org@ldots
- 4953 \else \expandafter\bxjsp@ja@ellipsis
- 4954 \fi}
- 4955 \def\bxjsp@ja@ellipsis{...}
- 4956 \let\bxjsp@org@ldots\ldots

\ldots の実装を置き換える。

- ※ Benglish オプション指定時は置き換えない。
- 4957 \AtBeginDocument{%
- 4958 \let\bxjsp@org@ldots\ldots
- 4959 \ifbxjsp@english\else \let\ldots\pandocLdots \fi}

\ldots の直後の文字が非英字の場合、Pandoc は「\ldots。」のように空白を入れずに並べて出力する。「Pandoc は非英字と見なすが XfTeX・LuaTeX は英字と見なす(または将来その可能性がある)」文字で、特に日本語文書に現れるものについて、非英字扱いにしておく。

- ※ Pandoc は「Unicode 7.0 で GC が Letter」な文字を英字と判定している。
- $4960 \ensuremath{\mbox \mbox{hardef\bxjsp@cc@other=12}}$
- 4961 \@onlypreamble\bxjsp@makeother@range
- $4962 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjsp@makeother@range}$#1#2{%}}$
- 4963 \@tempcnta"#1\relax \@tempcntb"#2\relax
- 4964 \loop\ifnum\@tempcnta<\@tempcntb
- 4965 \catcode\@tempcnta\bxjsp@cc@other
- 4966 \advance\@tempcnta\@ne
- 4967 \repeat}
- 4968 \ifnum0\if x\bxjsp@engine1\fi\if 1\bxjsp@engine1\fi>0
- 4969 \catcode"1F23B=\bxjsp@cc@other
- 4970 \bxjsp@makeother@range{9FCD}{A000}
- 4971 \bxjsp@makeother@range{1B002}{1B170}
- 4972 \bxjsp@makeother@range{2B820}{2EBF0}
- 4973 \fi

### I.8 PandoLa モジュール

インストール済であれば読み込む。

- 4974 \IfFileExists{bxpandola.sty}{%
- 4975 \RequirePackage{bxpandola}\relax
- 4976 \PackageInfo\bxjsp@pkgname
- 4977 {PandoLa module is loaded\@gobble}

4978 }{}

### I.9 完了

おしまい。

4979 %</ancpandoc>

補助パッケージ実装はここまで。

4980 %</anc>